

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第98集

大 平 遺 跡

平成7・8年度東駿河湾環状道路工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1998

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第98集

大 平 遺 跡

平成7・8年度東駿河湾環状道路工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1998

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所



遺跡全景（南東から）



2-1区・2-3区 7層上面全景（空中写真）

序

静岡県の東部、駿東・沼津・三島地区は、古くから東西交通の要所として栄えたとともに、富士・箱根・伊豆といった観光地への入り口として賑わってきた。しかし本地域における道路の渋滞は慢性的であり、これを緩和するために計画されたのが東駿河湾環状道路である。大平遺跡は、この東駿河湾環状道路建設工事に伴う一連の埋蔵文化財発掘調査の中の一つである。当研究所では、平成3年度より東駿河湾環状道路建設に伴う発掘調査を実施し、平成8年度末までに、本遺跡を含めて7遺跡にわたる現地調査が終了し、三島市下原遺跡（I期・II期）、加茂ノ洞B遺跡、焼場遺跡（A地点・B地点）、八田原遺跡、上ノ池遺跡、徳倉B遺跡など、箱根西麓地域で多くの貴重な発見や成果を得ている。

大平遺跡は、平成7年度に現地調査に着手し、平成8年度に現地調査を終了した後、平成9年度に資料整理を実施した。

今回の調査では、中世後半～近世までの遺構・遺物を中心としている。昭和55年に本遺跡よりもやや北側で行われた国道246号裾野バイパス建設に伴う発掘調査では、中近世の墳墓と思われる土坑が検出されているが、本遺跡でも黄瀬川の河道跡を中心に同様の土坑が多数検出されており、遺構のつながりが確認できた。また、黄瀬川の礫塊帯が広がる段丘面では、集石墓を中心とした中世後半の墳墓が27基検出された。埋葬方法は火葬を中心としており、黄瀬川河岸に近い部分や一番高い段丘面などで検出されている。その他、江戸時代後半に構築された道路状の石敷遺構や石積み遺構なども検出された。本遺跡は、中世後半から近世にかけて営まれた墓地として位置づけが可能であると思われる。

なお、本報告書作成にあたっては、建設省中部地方建設局沼津工事事務所、静岡県教育委員会及び良泉町教育委員会をはじめとする関係機関各位に多大な援助・協力を得ている。この場をかりて深くお礼申し上げる次第である。また、作業に關係した研究所職員や多くの方々に心から謝意を表したい。

平成10年3月

財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 斎藤 忠

例　　言

1. 本書は、静岡県駿東郡長泉町南一色に所在する大平遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、平成7年度（9月～11月）に行った確認調査の結果を受け、東駿河湾環状道路建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、建設省中部建設局沼津工事事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が、平成7年11月から平成8年12月まで現地調査を行い、整理作業は、平成9年4月から平成10年1月まで実施した。
3. 調査体制は以下の通りである
平成7年度
所長 斎藤忠 副所長 池谷和三 常務理事 三村田昌昭 調査研究部長 小崎章男
調査研究部四課長 橋本敬之 調査研究員 濑戸俊昭 小川正夫 後藤正人（確認調査）
平成8年度
所長 斎藤忠 副所長 池谷和三 常務理事 三村田昌昭 調査研究部長 石垣英夫
調査研究部四課長 橋本敬之 調査研究員 中鉢賢治 鈴木謙 飯塚晴夫 宮崎覚
平成9年度
所長 斎藤忠 副所長 池谷和三 常務理事 三村田昌昭 調査研究部長 石垣英夫
調査研究部次長兼一課長 栗野克己 調査研究員 鈴木謙
4. 本書は、調査研究員鈴木謙が執筆した。
5. 発掘調査にあたり、動物遺体の鑑定を早稲田大学の金子浩昌先生に、出土歯牙の鑑定を浜松医科大学法医学教室に、炭化材の樹種同定を古環境研究所に委託し、その結果を付編として掲載した。
6. 石器・石製品の石材鑑定は、静岡大学名誉教授伊藤通玄先生に委託した。
7. 金属製品（キセル・鉄砲玉）の成分分析と黒耀石の原産地分析は、沼津工業高等専門学校望月明彦先生に委託した。
8. 本書の遺物写真的撮影は、楠華堂（楠本真紀子氏）に委託した。なお動物遺存体・出土歯牙の撮影については静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。
9. 本書の編集は、静岡県埋蔵文化財調査研究所が行い、調査、分析に関する資料は同研究所が保管している。

凡　　例

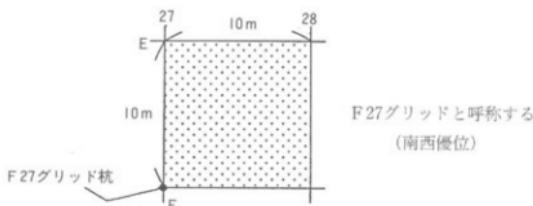
本書の記載については、以下の基準に従い統一をはかった。

1. グリッドは、建設予定道路のセンター杭、No.286杭（調査区東側、黄瀬川側）からNo.298杭（調査区外西側、国道246号線バイパス側）を見通したラインを基準に南西優位に10mグリッドを設定した。

No.286杭（調査区内、F-27杭） X=-94.581.391, Y=+36.383.964, H=77.969m (杭高)
北緯35度8分48秒、東経138度53分58秒

No.298杭（調査区外、F-3杭） X=-94.475.233, Y=+36.168.719, H=77.667m (杭高)
北緯35度8分52秒、東経138度53分49秒

2. グリッド杭とグリッドのそれぞれ名称については、下記のように設定した。



3. 本報告書の遺構・遺物の表記（略号）は以下の通りである。

《遺構》

S F…土坑 S D…溝状遺構 S P…ピット・小穴 S X…その他
《遺物》

P…土器・陶磁器 P T…土製品 S…石器・石製品 M…金属製品
N B…動物遺存体 N…炭化物

4. 遺構実測図の中でのスクリーントーンの表現は下記の通りである。



.....骨



.....炭化物・灰の分布



.....焼土



.....地山

5. 2-1区の調査については、便宜上調査区を段丘面、段丘崖、河道跡に分け、さらに6ブロックに細分して説明した。

- ・段丘面 第1段丘面・第2段丘面・第3段丘面
- ・段丘崖 段丘崖
- ・河道跡 第1河道路・第2河道路

目 次

巻頭カラー

序

例 言

凡 例

目 次

第Ⅰ章 調査の概要	1	
第1節 調査に至る経緯	1	
第2節 調査の方法	1	
第3節 調査の経過	3	
第4節 基本土層について	7	
第Ⅱ章 位置と環境	8	
第1節 地理的環境と遺跡の位置	8	
第2節 歴史的環境	9	
第Ⅲ章 各地区の調査	15	
第1節 1区の調査	15	
第2節 2-1区の調査	39	
第3節 2-3区の調査	82	
第4節 3区の調査	88	
第Ⅳ章 遺 物	113	
第1節 土器・陶磁器	113	
第2節 土製品	129	
第3節 金属製品	131	
第4節 銭貨	138	
第5節 石器・石製品	144	
第Ⅴ章 まとめ	156	
引用・参考文献	159	
付編1. 大平遺跡出土の動物遺体について	金子浩昌	162
付編2. 大平遺跡出土の歯牙について	浜松医科大学法医学教室	164
付編3. 大平遺跡出土炭化材の樹種同定	古環境研究所	166

挿図目次

第1図 グリッド配置図.....	1
第2図 調査区周辺地形図.....	2
第3図 大平遺跡Ⅷ層上面遺構分布図.....	5・6
第4図 基本土層図.....	7
第5図 周辺遺跡分布図.....	10
第6図 遺跡周辺地籍図.....	13
第7図 1区土層断面図.....	16
第8図 1区IV・V層上面遺構全体図.....	17
第9図 土坑S F 1012・1013・1014・1103実測図.....	18
第10図 土坑S F 1002・1003・1015・1016実測図.....	20
第11図 土坑S F 1004・1006・1007・1008・1009実測図.....	21
第12図 土坑S F 1088・1090・1091実測図.....	22
第13図 溝状遺構S D 1065・1096実測図.....	23
第14図 1区Ⅷ層上面遺構全体図.....	24
第15図 土坑S F 1024・1047・1074・1079・1082実測図.....	29
第16図 土坑S F 1027・1045・1049・1067・1070・1071・1094実測図.....	30
第17図 土坑S F 1029・1037・1040・1061実測図.....	31
第18図 土坑S F 1025・1026・1044・1092実測図.....	32
第19図 土坑S F 1073・1075・1084・1085・1086実測図.....	33
第20図 土坑S F 1076・1077・1083・1087・1095実測図.....	34
第21図 溝状遺構S D 1093・1100・1101・1104実測図.....	35
第22図 溝状遺構S D 1097・1102実測図.....	36
第23図 2-1区土層断面図(西壁).....	40
第24図 2-1区土層断面図(南壁).....	41
第25図 中世墓S X 21011・21361実測図.....	44
第26図 中世墓S X 21016・21378・21382実測図.....	45
第27図 中世墓S X 21344・21345・21385・21387実測図.....	46
第28図 中世墓S X 21010・21013・21021実測図.....	47
第29図 中世墓S X 21007・21356・21357実測図.....	48
第30図 中世墓S X 21031・21038・21350・21351実測図.....	50
第31図 中世墓S X 21040・21366実測図.....	51
第32図 不明遺構S X 21029実測図.....	52
第33図 土坑S F 21024・21027・21028・21030・21034実測図.....	53
第34図 土坑S F 21035実測図 溝状遺構S D 21346実測図.....	54
第35図 土坑S F 21022・21106実測図.....	56
第36図 不明遺構S X 21123実測図.....	57
第37図 土坑S F 21079・21104実測図.....	58
第38図 中世墓S X 21375実測図 土坑S F 21059・21060・21065実測図.....	59

第39図 土坑S F 21054・21070・21084・21205実測図	61
第40図 溝状遺構S D21198・21342実測図	62
第41図 溝状遺構S D21268実測図	63
第42図 不明遺構S X21196・21197実測図 土坑S F 21246・21247・21248実測図	64
第43図 土坑S F 21249・21251・21252・21255実測図	66
第44図 土坑S F 21235・21244・21250・21267実測図	67
第45図 土坑S F 21223・21225・21236・21253・21271実測図	69
第46図 土坑S F 21187・21190・21192・21216実測図	70
第47図 不明遺構S X21381実測図 土坑S F 21290・21291・21312実測図	72
第48図 2-3区土層断面図	83
第49図 溝状遺構S D23002・23009実測図	85・86
第50図 土坑S F 23003・23004・23005・23006・23007実測図	87
第51図 3区土層断面図	89
第52図 3区IV層上面遺構図	91・92
第53図 石敷遺構実測図	93
第54図 石積み遺構実測図	94
第55図 集石墓S X 3043実測図	96
第56図 集石墓S X 3191実測図 陶器片集中遺構S X 3194実測図 不明遺構S X 3002・3003実測図	97
第57図 土坑S F 3004・3019実測図	98
第58図 中世墓S X 3001・3192実測図	99
第59図 中世墓S X 3026・3037実測図	101
第60図 中世墓S X 3195実測図 火葬施設S X 3188実測図	102
第61図 不明遺構S X 3041・3193実測図	103
第62図 土坑S F 3042・3143・3145・3173・3174実測図	106
第63図 土坑S F 3016・3190・3197実測図 小穴S P 3011・3018・3157実測図	107
第64図 土坑S F 3035・3044・3045実測図 溝状遺構S D3196実測図	108
第65図 かわらけ法景図	114
第66図 土器実測図1	121
第67図 土器実測図2	122
第68図 土器実測図3	123
第69図 土器実測図4	124
第70図 土器実測図5	125
第71図 土器実測図6	126
第72図 土器実測図7	127
第73図 上製品実測図	130
第74図 金属製品実測図1	134
第75図 金属製品実測図2	135
第76図 金属製品実測図3	136
第77図 銭貨拓影図1	140
第78図 銭貨拓影図2	141

第79図	銭貨拓影図 3	142
第80図	石器・石製品実測図 1	148
第81図	石器・石製品実測図 2	149
第82図	石器・石製品実測図 3	150
第83図	石器・石製品実測図 4	151
第84図	石器・石製品実測図 5	152
第85図	石器・石製品実測図 6	153
第86図	石器・石製品実測図 7	154
付図 1	2区遺構全体図(2-1区・2-3区Ⅷ層上面遺構全体図)	
付図 2	3区遺構全体図	

挿表目次

第1表	作業工程表	4
第2表	周辺遺跡一覧表	11
第3表	一色村田畠屋敷構成表	14
第4表	1区土坑計測表	37
第5表	1区小穴計測表	38
第6表	2-1区S X計測表	73
第7表	2-1区土坑計測表	73
第8表	2-1区小穴計測表	76
第9表	2-3区土坑計測表	84
第10表	3区S X計測表	109
第11表	3区土坑計測表	109
第12表	3区小穴計測表	109
第13表	土器一覧表	127
第14表	陶磁器一覧表	128
第15表	土製品一覧表	130
第16表	井上流玉割一覧表	133
第17表	鉄製品一覧表	137
第18表	釘類一覧表	137
第19表	キセル一覧表	137
第20表	その他の金属製品一覧表	138
第21表	鉄砲玉一覧表	138
第22表	銭貨一覧表	143
第23表	石器・石製品一覧表	155

図版目次

巻頭カラー 遺跡全景（南東から）

2-1区・2-3区VII層上面全景（空中写真）

- | | | | | |
|------|---|-----------------------------------|---|--------------------------|
| 図版1 | 1 | 2-1区調査前風景（東から） | 2 | 3区調査前風景（南から） |
| 図版2 | 1 | 1区IV層上面土坑群（北から） | 2 | 1区IV層出土状況 |
| | 3 | 土坑S F 1012完掘状況（北西から） | 4 | 土坑S F 1008検出状況（北から） |
| | 5 | 土坑S F 1008完掘状況（北東から） | 6 | 土坑S F 1024完掘状況（南から） |
| | 7 | 土坑S F 1079完掘状況（南から） | | |
| 図版3 | 1 | 1区V層上面全景（南西から） | 2 | 土坑S F 1047完掘状況（南西から） |
| | 3 | 土坑S F 1082完掘状況（北西から） | 4 | 土坑S F 1044・1092完掘状況（北から） |
| | 5 | 土坑S F 1087完掘状況（東から） | 2 | 溝状遺構S D1102完掘状況 |
| 図版4 | 1 | 溝状遺構S D1065完掘状況 | | |
| 図版5 | 1 | 1区VII層上面全景（南西から） | 2 | 1区VII層上面（南東部） |
| 図版6 | 1 | 2-1区VII層上面全景（南東から） | 2 | 2-1区第1段丘面（北から） |
| 図版7 | 1 | 中世墓S X21011検出状況（東から） | 2 | 中世墓S X21011内歯出土状況 |
| 図版8 | 1 | 中世墓S X21016・21378・21382検出状況（北東から） | | |
| | 2 | 中世墓S X21016・21378・21382完掘状況（東から） | | |
| 図版9 | 1 | 中世墓S X21016内人骨出土状況 | 2 | 中世墓S X21361検出状況（東から） |
| | 3 | 中世墓S X21361内人骨出土状況 | 4 | 中世墓S X21361完掘状況（西から） |
| | 5 | 中世墓S X21344検出状況（東から） | 6 | 中世墓S X21344内錢貨出土状況 |
| | 7 | 中世墓S X21344内人骨出土状況 | 8 | 中世墓S X21385内人骨出土状況 |
| 図版10 | 1 | S F 21022完掘状況（北東から） | 2 | S F 21104完掘状況（東から） |
| | 3 | S F 21059完掘状況（北東から） | 4 | 第1河道跡土坑・小穴群（空中写真） |
| | 5 | 不明遺構S X21123検出状況（南西から） | | |
| | 6 | 不明遺構S X21123完掘状況（西から） | | |
| 図版11 | 1 | 不明遺構S X21196完掘状況（南から） | 2 | S F 21190完掘状況（南東から） |
| | 3 | S F 21223完掘状況（南から） | 4 | S F 21235完掘状況（南東から） |
| | 5 | S F 21271完掘状況（南東から） | 6 | S F 21248完掘状況（南東から） |
| | 7 | S F 21246・21247完掘状況（東から） | 8 | S F 21249完掘状況（南から） |
| 図版12 | 1 | 第2河道跡土坑群その1（空中写真） | 2 | 第2河道跡土坑群その2（空中写真） |
| | 3 | 不明遺構S X21381検出状況（北西から） | | |
| | 4 | 不明遺構S X21381完掘状況（北西から） | | |
| | 5 | 溝状遺構S D23002完掘状況（西から） | 6 | 溝状遺構S D23009完掘状況（東から） |
| 図版13 | 1 | 石敷遺構検出状況（空中写真） | 2 | 石敷遺構完掘状況（南から） |
| | 3 | 石積み遺構検出状況その1（空中写真） | 4 | 石積み遺構検出状況その2（南から） |
| 図版14 | 1 | 石積み遺構検出状況その3（南から） | 2 | 石積み遺構検出状況その4（南から） |
| | 3 | 石積み遺構完掘状況その1（南から） | 4 | 石積み遺構完掘状況その2（北から） |
| 図版15 | 1 | 集石墓S X3191検出状況（東から） | | |
| | 2 | 陶器片集中遺構S X3194検出状況（南から） | | |

- 図版16 1 不明遺構 S X3002・3003検出状況(北から)
2 石積み遺構内陶器出土状況
4 不明遺構 S X3002内炭化物検出状況
- 3 不明遺構 S X3002内土器・陶器出土状況
5 不明遺構 S X3002内陶器出土状況
- 図版17 1 集石墓 S X3043検出状況(北から)
2 集石墓 S X3043完掘状況(南東から)
- 図版18 1 3 区VII層上面全景(北から)
2 不明遺構 S X3041検出状況(南西から)
- 図版19 1 中世墓 S X3192完掘状況(石除去前)
2 中世墓 S X3192完掘状況(石除去後)
- 図版20 1 中世墓 S X3026・3037・3195 火葬施設 S X3188検出状況(東から)
2 S X3188内土器出土状況
4 小穴 S P3018内錢貨出土状況
- 3 中世墓 S X3001内土器出土状況
5 小穴 S P3011内錢貨出土状況
- 図版21 出土土器(1)
- 図版22 出土土器(2)
- 図版23 出土土器(3)
- 図版24 出土陶磁器(1)
- 図版25 出土陶磁器(2)
- 図版26 出土陶磁器(3)
- 図版27 出土陶磁器(4)
- 図版28 出土陶磁器(5)
- 図版29 出土陶磁器(6)
- 図版30 出土陶磁器(7) 出土土器(4) 出土土製品
- 図版31 出土鉄製品
- 図版32 出土銅製品・鉛製品
- 図版33 出土錢貨
- 図版34 出土石器・石製品(1)
- 図版35 出土石器・石製品(2)
- 図版36 出土石器・石製品(3)
- 図版37 出土動物遺存体
- 図版38 出土歯牙

第Ⅰ章 調査の概要

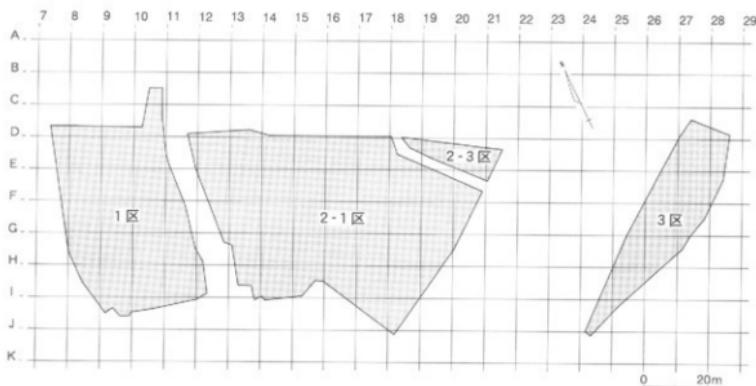
第1節 調査に至る経緯

東駿河湾環状道路は、静岡県東部の交通施設の一貫として、当地域を環状的に迂回し、通過交通の排除、地域内外交通の整理、環状道路周辺地域の開発を図ると同時に、地震発生時等非常時における緊急輸送路等の役割も期待されて、昭和62年に企画化された。特に慢性的な渋滞を引き起こしている沼津インター線や国道1号線、国道136号線の渋滞緩和に大きな期待が寄せられている。路線としては、東名高速道路沼津I.Cの南西側沼津市岡宮から愛鷹山麓、長泉町から黄瀬川を越えて箱根山西麓の三島市に入り、国道1号線を横断した後、函南町平井の熱涵道路に到達し、国道136号線バイパスの伊豆中央道に合流する総延長26.1kmの片側2車線の広規格道路である。そして将来的には、函南大仁バイパスや修善寺バイパスと連結して、伊豆縦貫自動車道となる予定である。用地買収は平成元年度から開始された。そして、用地買収の完了した地点より、埋蔵文化財包蔵地の路線内調査依頼が行われ、30ヶ所の周知の遺跡および遺跡の可能性がある地点がリストアップされた。このうち長泉町内には大平遺跡を含めて7ヶ所があげられた。

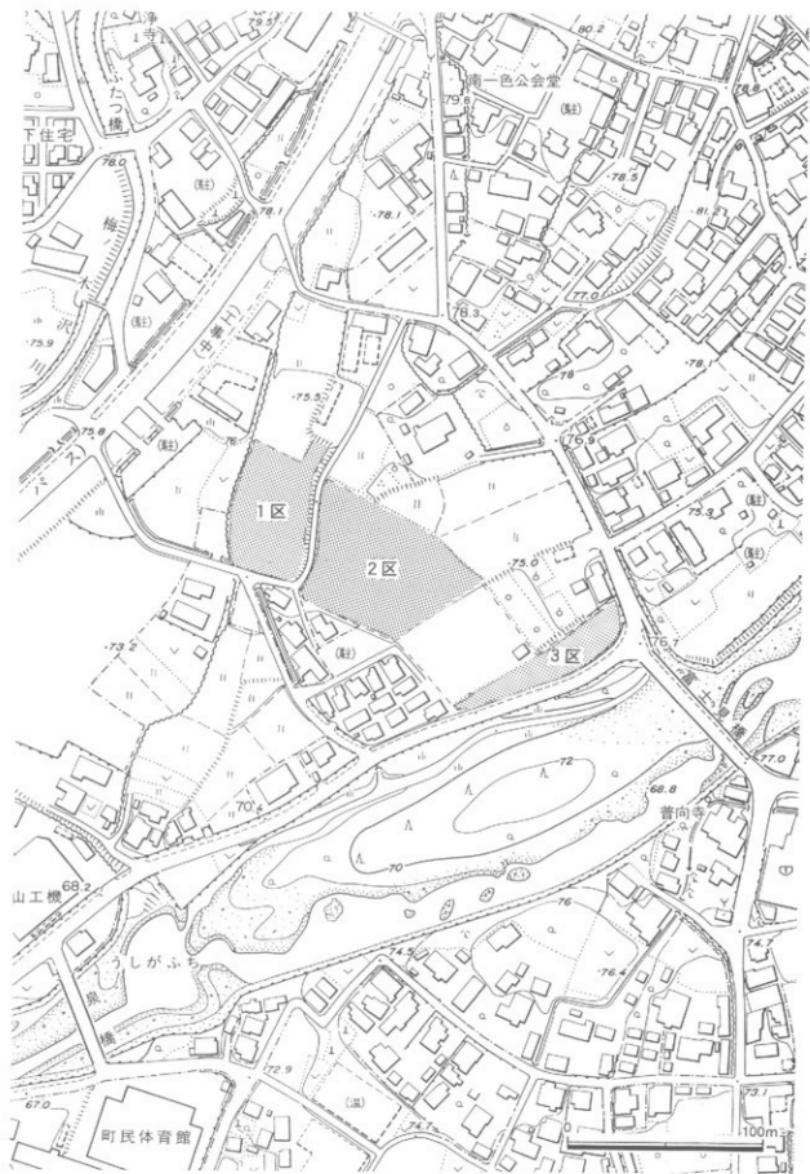
大平遺跡に最初に調査に入ったのが、平成7年9月であった。2ヶ月の確認調査の結果中世の遺物の検出をみたため、本調査の必要を委託者である建設省中部建設局沼津工事事務所、指導機関である静岡県教育委員会に回答し、すぐに本調査対応に入ることとなった。

第2節 調査の方法

今回の発掘調査では、調査区内を走る町道と、もと地主の地境に70cm程度の段差があったので、これらを境にして、便宜的に調査区全体を3区に分割し、さらに一番面積の広い2区は、調査区内を流れる水路（U字溝）でさらに3区画に分けた。また、建設予定道路のセンターラインを中心軸（Fライン）



第1図 グリッド配置図



第2図 調査区周辺地形図

として、10m×10mのグリッドを設定し（第1図）、グリッドは北西隅を起点に、北から南へA B C……のアルファベット、西から東へ1 2 3……の数字を付した。この組み合わせによりグリッド杭の北東の面をA-1のように表記した。表土の除去にはバックホウを用い、各遺構面は作業員の手作業で発掘し、土砂の運搬はベルトコンベアを使用した。ただし2-1区については、調査期間短縮の必要から、第2遺構面の直上までバックホウを用いて土砂を除去した。

発掘調査は、層位別に行い、遺構検出面ごとに遺構、遺物出土状況の実測図作成と写真撮影を行った。遺構平面図・土層断面図は、1:20縮尺図を基本とし、必要に応じて一部1:10縮尺図を作成した。遺構平面図は、簡易通り方測量を原則としたが、2-1区と2-3区では、ラジコンヘリコプターを使用した空中写真測量を実施した。出土遺物は、グリッドごとに、層位別、遺構別に取り上げ、土器・石器・金属製品等に分けて台帳に登録した。写真撮影は、6×7判白黒と35mm（カラースライド、白黒、カラーネガ）の組み合わせで記録を行い、調査区全般は、適宜高所作業車、ローリングタワーを使用して4×5判（白黒、カラースライド）も撮影した。

なお2-2区については、今回は調査期間短縮のため本調査を行わず、未買収地域と1区と2-1区との間にある町道とあわせて、今後用地買収後調査を行う予定である。

第3節 調査の経過

（1）確認調査…平成7年9月11日～平成7年11月8日

東駿河湾環状道路センター杭を基準にグリッド設定を行った後、トレンチ3本、試掘坑23ヵ所を設定した。I層・II層については、後世の擾乱を受けており、III層～VII層で遺物、遺構の検出をみた。また遺跡の範囲は、23～25ライン付近は後世の削平を受けて、表土直下より黄瀬川が運んだ砂礫層が堆積しているので、この地域を除いた範囲でIV層～VII層の調査が必要ということになった。

（2）本調査（第1次調査=平成7年11月13日～平成8年3月31日、第2次調査=平成8年4月1日～平成8年12月5日）

1 区…平成8年1月22日～平成8年8月19日

1月22日より調査準備に入り、翌日より表土除去を開始し、重機でIII層上面まで掘削した後、手掘りでIV層まで掘り下げた。排土置場は、同じ調査区内の南半分に設定した。

IV層（暗褐色土）では4基の土坑を検出した。この面は遺物の残りが密で、遺物の分布状況の実測を行い、その後V層（赤褐色土）上面まで掘り下げた。V層では、径5cm程度の小穴、土坑、溝状遺構を検出したが、遺物の出土量は少なく、遺構に絡んで出土しなかった。この後V層上面で地形測量を行った。5月第3週に、第1遺構面の全景写真撮影を行った後、第1遺構面の作業効率をあげるために、調査区の半分近くを占拠していた排土を2-1区に移動し、調査面積を拡幅した。そして5月第4週より、第1遺構面の地形測量終了箇所からV層・VI層（黒褐色土）の掘り下げを行い、VII層（黄褐色土）上面での遺構検出作業に入りながら、拡幅部分もIII層から順次層位ごとに掘り下げ、V層上面での遺構検出を行った。第2遺構面であるVII層上面では、南北方向の3～4条の縄・砂からなる中洲状の高まりが認められ、遺構は土坑、溝状遺構などを検出したが、中央を走る谷状の落ち込みの中に土坑が2基検出されたほかは、概ね東西の中洲状の高まりからの検出が多い。7月第3週に第2遺構面での全景写真撮影を行い、7月第4週から調査区南東部（H-10・11、I-10・11グリッド）の排土を調査終了箇所に移し、第1遺構面検出後地形測量を行って、VI層を掘り下げてVII層上面で遺構検出作業に入った。ここでも他グリッドと同様な土坑、溝状遺構を検出したが、遺物が絡んでこなかった。8月第4週に第2遺構面の地形測量を行い、1区の全調査を終了した。

2-1区…平成8年7月26日～平成8年12月5日

7月第4週から重機による表土除去を開始した。調査期間短縮のため、VI層上面まで重機で掘削した。調査区内には3列ほどの大がかりな石垣が作られていて、その解体に手間がかかり、VI層の掘り下げは8月第2週より行った。9月第1週からは作業員も増員して、9月末までに調査区内のVI層掘り下げ、VII層上面での遺構検出を行った。その結果、350近くの遺構を検出した。特に一番高い段丘面から、中世墓と思われる集石土坑を21基検出した。また河道跡からは、火葬施設と思われる遺構や1区で検出したものと同規模の土坑が20基近く検出された。10月18日にラジコンヘリコプターによる空中写真測量を実施し、その後新たに検出した集石土坑の実測作業と調査区周辺の西壁、南壁、北壁の土層断面図を実測して、11月28日に全景写真撮影を行い、12月5日に調査の全工程を終了した。

2-3区…平成8年5月14日～平成8年11月28日

5月第3週に、2m×2mのテストピットを2ヶ所設定し、手掘りでVII層上面まで調査したが、遺構・遺物の出方はやや薄かった。そして7月第2週より、手掘りでVII層上面まで掘り下げを開始し、VII層上面で5基の土坑と東西方向の溝状遺構を検出した。溝状遺構の中には、拳大～人頭大の礫が多量に廃棄されたような状態が確認できた。その後8月第4週までにVII層上面遺構検出作業を終了し、10月18日にラジコンヘリコプターによる空中写真測量を実施した。11月第2週に溝状遺構を完掘したところ、溝は1本ではなくて、2本が切りあう形であることが確認でき、かわらけなどを検出した。11月第5週に地形測量終了後、全景写真撮影を行って、2-3区の全調査を終了した。

3区…平成7年11月13日～平成8年9月27日

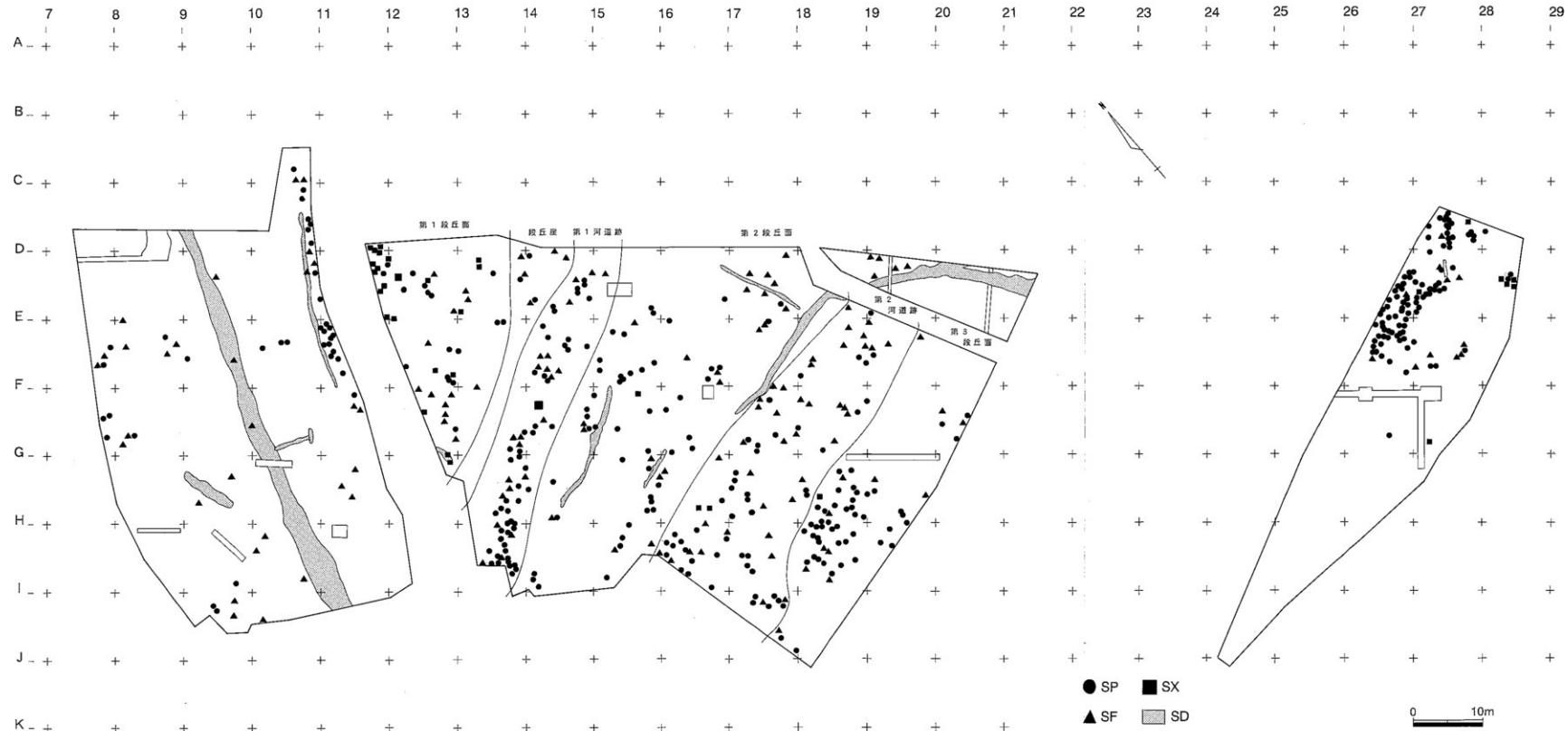
試掘調査の結果から、平成8年度に全面的な本調査の必要があることが判明し、その際、3区が県道から調査区への進入の便が最も良い場所にあたり、先行調査を行って埋め戻した後、平成8年度の全面的な調査に備えて駐車場・プレハブ建設用地とすることが、県教育委員会文化課・建設省沼津工事事務所との協議の上決定した。

平成7年11月13日から重機によりI・II層を除去し、III層上面から手掘りで掘り下げていった。IV層（黒褐色土）より、石敷遺構、石積み遺構や錢貨、かわらけ、陶器などが検出された。その後、VII層（黄褐色土）上面で小穴、土坑、溝状遺構などが検出された。平成8年1月31日に、石敷遺構、石積み遺構のラジコンヘリコプターによる空中写真測量を行った。2月より、石積み遺構の立面実測を始め、南側部分を残して、平成7年度の調査を終了した。

平成8年4月の第2週より、石積み遺構の南側部分の立面実測を行い、終了後石積みを解体し、VII層上面での遺構検出作業を再開した。その結果新たに、土坑、小穴、墳墓などの遺構を43検出した。5月第5週より地形測量を始め、6月第1週で終了し、7月第4週に第2遺構面（VII層上面）での全景写真撮影を行った。そして、9月第4週にSX3043の平面実測図を作成して、3区の全調査を終了した。

第1表 作業工程表

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
平成7年度							←試掘調査→			3区現地調査	→	←1区現地調査→
平成8年度	←		I区現地調査		→					←	3区現地調査	→
	←		3区現地調査		→					←	2-3区現地調査	→
		←	2-3区現地調査		→					←	2-1区現地調査	→



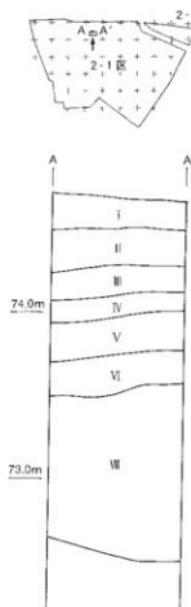
第3図 大平遺跡VII層上面造構分布図

第4節 基本土層について

1 基本土層の把握

今回の大半遺跡では、本遺跡のやや北側で行われた国道246号裾野バイパス建設時の発掘調査の基本土層と、1区・2区・3区でFラインにあたる試掘坑の北壁の土層断面と2-1区のトレンチ北壁土層断面（E-15グリッド）を対象として検討した。調査区は梅ノ木沢川と黄瀬川の侵食を受け、2-1区西侧から3区に向けて河岸段丘上に下る地形で、有史以来洪水・旧河川等の変動があったようで、その層位に局部的な相違があり、調査区全体で認められた土層は一部だけであった。また国道246号裾野バイパス建設時の発掘調査の結果、梅ノ木沢川と黄瀬川に挟まれた中間地帯を中心に、ほぼ河川に並行したような状態で疊塊帶が認められると報告されており、本遺跡でも1区9ラインよりも西側と2-1区のD-H-12グリッドなどで、大型の河原石を含めて疊が顕著に認められた。そこで最も堆積が安定していて、国道246号裾野バイパス建設時の発掘調査の基本土層と類似していると考えられる2-1区のトレンチ北壁土層断面（E-15グリッド）を標準として、I-VII層に分層し、他地点との対応関係を導き出すことによって、V層・VII層で造構検出作業を行った。

土層の状況を見ると、I層、II層については水田として利用した後、搅乱を受けたため所々点在するか、混在するといった具合であるが、III層～VII層は広範囲での分布が確認された。ただし、23～25ライン付近（2-2区相当）は、II層直下より、黄瀬川の運んだ砂礫層が堆積していた。以下、基本土層について説明する。なお、各調査区の土層の状況については、局部的に相違がみられるので、各地区的調査のところで説明していきたい。



第4図 基本土層図

I層 黒褐色土 有機物が堆積した水田耕作土である。1区および3区では、ほとんど検出されず、2-1区でも中央部のみで検出された。

II層 灰色粘土 粘性の強い土で、旧水田耕作土である。2-1区から3区にかけては、I層が混入している部分がある。

III層 赤褐色土 鉄分を多く含んで酸化しており、赤味を帯びている。締まり・粘性ともほとんどない。遺物包含層である。

IV層 暗褐色土～黒褐色土 全体的に締まり・粘性ともに弱い。遺物包含層である。

V層 赤褐色土～黒褐色土 色調的にはIII層と類似するが、やや赤味が弱い。粘性はないが締まりがあり、硬化している。下位に黄褐色土粒子をわずかに含む。疊を少量含む。一部で黒味が強まり、橙色スコリアを含む所がある。

VI層 黒褐色土～暗褐色土 締まり・粘性ともにやや弱く、疊をわずかに含む。下位には黄褐色土（VII層）をわずかに含む。一部で黒味が弱まり、暗褐色を呈する所がある。遺物包含層である。

VII層 黄褐色土 黄色味がやや強い。粘性は普通であるが、やや締まりあり。部分的に疊の混入が多い所がある。

第II章 位置と環境

第1節 地理的環境と遺跡の位置

富士山の南に位置する愛鷹山は富士火山帯に属し、その発生は古く地質時代第四紀洪積世前半代の火山活動によるものといわれ、具体的には今からおよそ百万年以上前である。南東麓では、山頂から派出した尾根は背後部が平坦部に移行して、やがて末端部に近づくと、広くかつ平坦な山麓丘陵地帯を形成している。このあたりは、傾斜も愛鷹山麓で最も緩やかな地域で、愛鷹ロームが最も厚く堆積する地域でもある。複雑に入り組んだ開析谷は、それぞれ細い渓流をもって東流し、やがて谷底平野の黄瀬川に合流している。

箱根山も愛鷹山と同時期の火山活動によるもので、二重の外輪山をもつことで知られている。分水嶺をなす外輪山が、約1,000mの低い峠であること、峠から谷への距離が短いために放射谷の水量が乏しく、浸食はあまり進んでいないので、老年期に似た地形が発達している。西麓地域は、今から5万年前頃、火碎流の流下や火山灰の堆積によって、東麓や他の山麓と比べて緩やかな斜面が形成されている。一つ一つの台地の規模は、愛鷹山南東麓の台地に比べるとかなり広い。

黄瀬川は御殿場市に源を発し、多少の迂曲はあるが、ほぼ直線的に南に向かって流出し、狩野川に合流するまでの流路は約30kmである。谷合は、北に高く南に低い緩やかな斜面になっている。その上を黄瀬川が乱流して、平らな斜面を作った。その後、地殻の隆起によって、谷は深くなり、元の川底であった段丘上に、集落や畑・水田などが発達した。黄瀬川はそのまま大半が富士火山噴出物の砂礫層を浸食して流れているが、その下に堅い富士溶岩流があるので河底は一般に浅い。

大平遺跡は、愛鷹山の尾根が張り出している南東麓の裾の、黄瀬川が南下して形成した細長く平坦な河岸段丘上に位置する。黄瀬川は、大平遺跡周辺においては南下する過程で、西側から東側へ流心が移動し、河岸段丘を形成しながら外湾していく、滑走斜面が段丘群で構成されているように思われる⁽¹⁾。等高線図を追ってみると、等高線が疎い部分と密な部分が認められ、段丘面と段差（段丘崖）が形成されている様子がわかる。また、段差直下に流心があって、そこの砂礫を押し流したために、段差直下の礫群の分布が段丘面に比べて少ない。これらのことから大平遺跡の地形は人工的に形成されたものではなくて、河川活動に伴って形成されたものと思われる。大平遺跡の南側は、黄瀬川が開けて河床は高く、富士山の溶岩流が露出して河中には中洲も形成されている。この北岸には一段の低い河岸段丘崖があつて、段丘上は北方に向かって大きく開けていて、このことから大平という地名が名付けられたようである。大平は、小字地名で広く長泉町南一色に包括される。一色という地名は、シキつまり砂礫の広がる所、または河川に沿う所とか、山麓の開拓地という意味で、未だ一毛作しかできない生産性の低い土地を指して一色（イシキ）といふとされている⁽²⁾。また、一種類の租税だけとることを、「ひ」というの税をとる」という意味の一色であらわしたものとされている。ただし一色の地名の中には、中世において何か一種類の特定の産物を得るために、追加開墾した土地を「一色別納」と言ったところからできたものがある⁽³⁾。黄瀬川は、南一色からさらに下ると牛ヶ渕という小瀑布が掛かり、これより先は渓谷となって桃沢川が合流して鮎瀬ノ滝に至るが、この滝上で两岸が開け徒渉可能となる。鮎瀬ノ滝より下流は再び両岸の岬立する渓谷となるが、長泉町本宿地先でやや開けてくる。このあたりが三島に至る徒渉地点であるとされている。

現在大平遺跡の東側は黄瀬川に、西側は国道246号裾野バイパスに隣接していて、黄瀬川に並行する形でJR御殿場線が走る。現在周辺は宅地となっているが、元来は全て水田であった。

第2節 歴史的環境

1 旧石器時代～古代

愛鷹山南東麓の丘陵上や箱根山西麓地域の尾根筋・丘陵上のいたるところに旧石器時代から縄文時代の遺跡が確認されており、磐田原台地とともに県内における該期遺跡の代表的な地域となっている。この地域の旧石器時代の遺跡は、縄文時代の遺跡と重複するか、僅かにずれる位置に存在し、また層位は、旧石器包含層上部が縄文時代遺物包含層と重なるか、または一部交叉する。

愛鷹山南東麓の旧石器時代遺跡は海拔300～50mの丘陵上で、開析があまり進まず、扇形を呈していて、あたかも扇状地のような形状を呈しているところに36遺跡が分布する。旧石器時代の遺跡はナイフ形石器が盛行する時期の遺物が多いのが特色で、上野B遺跡などが著名である。縄文時代の遺跡は早期から晩期まで確認されているが、縄文早期としては押型土器を伴う集石土坑を発見した上野A遺跡、縄文中期初頭の標式遺跡として柏塚遺跡などが著名である。

箱根山西麓地域では、旧石器時代遺跡は境川～沢地川間の丘陵に10遺跡（片平山遺跡群）、沢地川～山田川間に13遺跡分布する。遺跡後背地の広さは愛鷹山南東麓以上といわれている。代表的な遺跡として初音ヶ原遺跡群がある。縄文時代の遺跡は概ね渓谷に向かって突き出た小舌状台地の尖端に位置する。そこは、当時の住居が水と日当たりと見晴らしとを立地条件としているからと思われる。縄文後期から晩期にかけて、集落位置は平野部及び丘陵縁辺部に移行していく。旧石器から縄文時代にかけての著名な遺跡としては、片山遺跡群や下原遺跡がある。

弥生時代の遺跡は、黄瀬川の谷底平野に3遺跡が分布する。特に本遺跡南西200m程の位置で、芝蔵機械株式会社建設時（1969年）に水神平系の条痕文式の壺と弥生前期の遠賀川式の壺がセットで出土している。愛鷹山南東麓では、弥生後期の遺跡として上野A～C遺跡が著名である。箱根山西麓地域では十数遺跡が確認されている。

古墳時代の遺跡は、黄瀬川とその支流である久保田川とに挟まれた地域が、三角州状の微高地を形成し、群集墳の密集地域になっている。特に下土狩西一号古墳は、横穴式石室を備えた径20mの円墳で、当地域の主座をなす古墳と考えられる。大平遺跡の近くには、古墳後期の円墳のあった石行塚古墳がある。また、箱根山西麓末端付近には、20基の横穴群が分布している。

奈良・平安時代の遺跡は少なく、古墳時代の遺跡に近接して分布し、長塚遺跡などがある。

2 中世

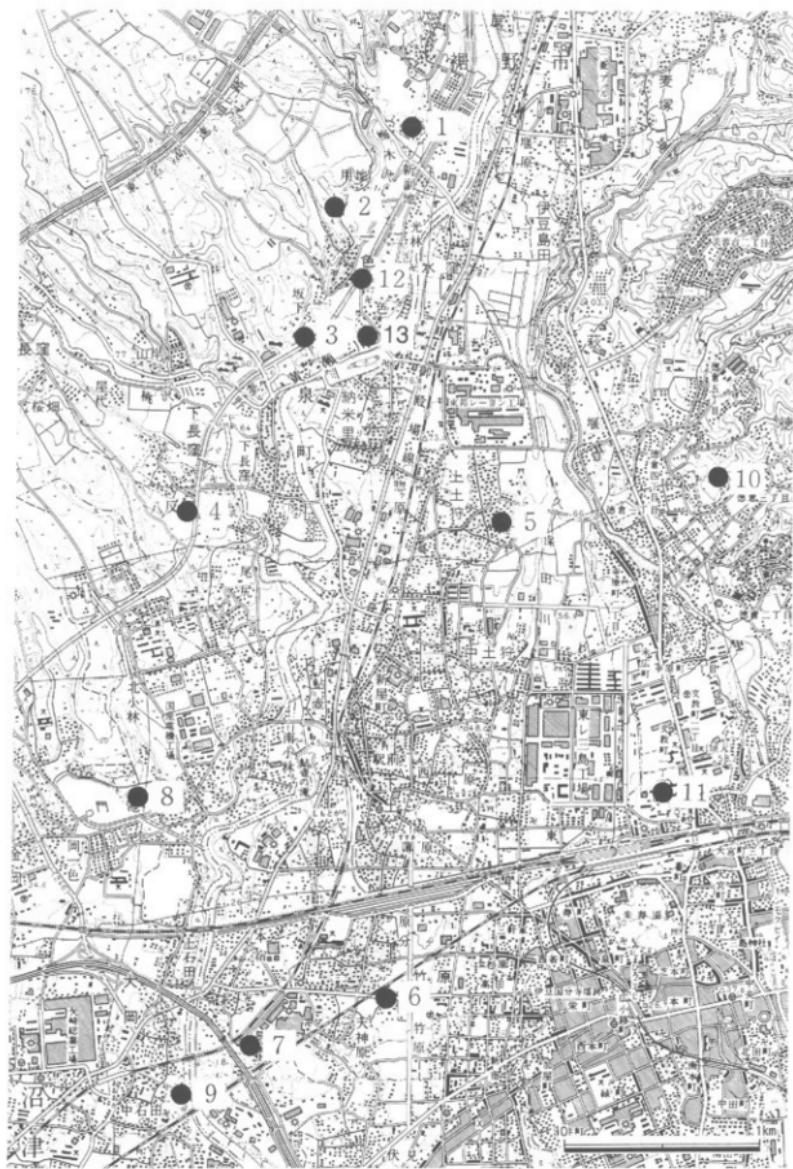
大平遺跡の周辺に位置する中世の遺跡は城館跡を中心に12ある⁽⁶⁾。この東駿の地は、古代から交通路として利用され、中世初頭には、木瀬川駅から北上し、北駿の駄沢駅（竹之下）を経て足柄峠を越え相模に下っていたが、一方で、駄沢川沿いに相模松田へ抜ける道もあったらしい。このため東駿地区は、関東と京都を結ぶ重要な交通路であったため、幾度かの戦場ともなった。

① 天神川古城（長泉町南一色字天神山）

愛鷹山東麓の丘陵末端で、標高115mの通称天神山に位置し、城域は長さ160m、幅100m、脚部の水田面からの比高23mである。武徳編年集成によれば、天正十年（1582）の築城である。本城一帯を「てじろ」といい、南南西1kmに位置する長久保城のいわゆる出城であったと考えられている。

② 南一色城（長泉町南一色字北村）

愛鷹山南東麓の北東から張り出した舌状の丘陵性台地の先端部、標高100mの通称城山に位置し、脚部よりの比高が15mある。城域は長さ350m、幅およそ130mあり、本郭、曲輪、空堀、土塙などが検出されたが、本城に関する伝承・記録等は何もない。南東500mに位置する長久保城の出城であるという説と、武徳編年集成にいふ「天神川砦」であろうという説がある。



第5図 周辺遺跡分布図

第2表 周辺遺跡一覧表

遺跡名	所在地	種別	備考
1 天神川古城	長泉町南一色字天神山	城館	消滅
2 南一色城	リ 南一色字北村	城館	良
3 長久保城	リ 下長窪字城山	城館	一部残、S 49~52、56年調査
4 平畠遺跡	リ 下長窪字平畠	散布地	一部残、S 48年調査
5 巨勢伊予守館	リ 上土狩小字東通り	城館	
6 竹原七豪屋敷	リ 竹原字西海道	城館	
7 高川屋敷	リ 本宿字下モ	城館	
8 三明寺経塚	沼津市大岡北小林字三明	経塚	
9 上附	沼津市大岡字中石田小字新小路	城館	
10 德倉城	三島市徳倉字中村	城館	良
11 頼塚経塚	三島市文教町	経塚	
12 大平遺跡(246号バイパス)	長泉町南一色	散布地	S 55年調査
13 大平遺跡	リ	散布地	H 7~8年調査

③ 長久保城（長泉町下長窪字城山）

黄瀬川が大きく「くの字」に迂曲する北西側の、愛廬山南東麓末端台地上小字「城山」に位置し、南駿から北駿に至る入口部を扼している。本城は背後の、脚部からの比高15~25mの丘陵台地へ樹枝状に食い込んだ沢谷を、空堀切で区切り、南端の黄瀬川に面した一郭を主郭とし、その北西側へII・IIIノ曲輪を梯形状に配している。東西550m、南北470mを確認した城域とし、大手曲輪南前面の下長窪を在番城士の根古屋集落に該当させている。本城は、源頼朝の家臣竹下孫八左衛門（大森）が築城し、その後文明14年（1482）葛山氏が沼津郷侵略のため、拠点にしたという。また駿河記等の文献によると、天文6年（1537）北条氏綱が今川氏の築いた古壁の跡を修復して城にしたと伝えている。天文14年（1548）今川氏は北条氏の侵攻に対し、本城を攻撃してこれを奪った。以後、再び北条氏の支配に移ったが、元龟年間（1570~73）から天正10年（1582）まで武田氏、天正10年以降から慶長9年（1604）の廃城まで徳川氏が支配したという。遺構では三島市山中城にみられる防空堀が頗著で畝に水門址が一部みられた。遺物の中で陶器類の99%は16世紀前半の美濃大窯のものであった。

④ 平畠遺跡（長泉町下長窪字平畠）

愛鷹山南東麓の放射状台地のひとつ、下長窪台地南辺に位置し、中世の土坑を25基、溝状遺構を20基検出している。その土坑の中で、長辺1m前後の隅丸長方形を呈した4基からは、六道鏡やかわらけが出土しており、室町時代中葉から江戸時代以前の土坑墓と確認されている。その他の21基の土坑についても、出土遺物はないが、土坑墓と考えられている。

⑤ 巨勢伊予守館（長泉町上土狩小字東通り）

居館は、通称「ヨーガフチ」という久保田川を東にひかえた場所に位置し、駿河志料に今川氏家臣巨勢（古瀬村）伊予守が居住したとされるが、遺構その他はほとんど不明である。

⑥ 竹原七豪屋敷（長泉町竹原字西海道）

高橋屋敷とも言われ、黄瀬川扇状地上の微高地に位置し、東側に久保川が流れる。伝承によれば、高橋氏は足利尊氏が建武元年（1334）三島神社に、土加利郷（土狩）のうち田畠四町歩を寄進した時、その政所侍としてこの地に土着したという。主部と土堤と水路が存在したらしい。

⑦ 高田屋敷（長泉町本宿字下モ）

黄瀬川の旧河道と現河道の間の自然堤防上に位置する。周囲に土塁をめぐらしていたようである。

⑧ 三明寺経塚（沼津市大岡北小林字三明）

愛鷹山南東麓の尾根の先端部に位置する。江戸時代の享保年間に大甕と経塚が発見され、再埋納し、その後1940年に発掘調査が行われた。鎌倉時代初頭と思われる経筒や外容器が出土している。

⑨ 土団（沼津市大岡字中石町小字新小路）

黄瀬川右岸の河岸段丘上に位置する。南北100m、東西50m程の規模で、西側が開口する土塁が周囲を巡っていたといわれ、その他曲輪や石垣が検出されている。

⑩ 徳倉城（三島市徳倉字中村）

箱根山西麓の山裾の標高80m、比高30m程の通称城山に位置する。増訂豆州志稿によれば、後北条時代駿河戸倉城主北条氏堯の家臣笠原新六郎の弟がこの城の城主であったと伝えており、16世紀には築城されたようである。主郭、土塁、空堀などの遺構が検出されており、東裾に下屋敷の地名がある。

⑪ 順塚経塚（三島市文教町）

現三島北高等学校敷地の西北隅に位置していて、1920年に開墾のために破壊された順塚と呼ばれる古墳の石室から、平安時代後期から鎌倉時代と考えられる経筒等が出土した。

⑫ 大平遺跡（長泉町南一色、国道246号バイパス路線建設に伴う発掘調査）

愛鷹山南東麓の台地上で、今回調査した地点より北に200mほどの所に位置する。遺構としては、中近世の墳墓と思われる円形皿状の土坑や杭列遺構が検出されている。この杭列遺構からの出土遺物は、かわらけなど長久保城址二の丸・同大水濠出土のものと共通することから、16世紀から17世紀の遺構とみられる。

3 近世

大平遺跡の近隣には2軒の寺院がある。1軒は3区の黄瀬川を挟んで対岸に位置する曹洞宗普向寺で、もう1軒は本遺跡より北へ300m程に位置する曹洞宗玉泉寺である。長泉町納米里にある普向寺は、境内の縁起によると、「本尊阿弥陀如来創建天正年間、曹洞宗開山、分翁宗存大和尚（1615年遷化）、寛永17年天災に逢い、悉く皆破、天下の人民飢餓に陥り、半死半生に至り、寺院・境内共に荒蕪の極に至る。当住第二世中興正外理宗大和尚（1652年遷化）20有余の道俗と心を合せ、門前の凹地（現在地）に、小伽藍を建立す。明和7年大鏡教圓和尚代に本堂再建……。」とあり、天正年間（1573～91年）の創建時は、現在地よりも北へ400m程の所に位置し、寛永17（1640）年の大水害で墓地が崩壊流失したため、明和7（1770）年に現在地に移転したようである。その後墓地が手狭になったため、昭和20年代に墓地のみを長泉町役場西側のJR御殿場線沿線に移転したことである。普向寺の現和尚への聞き取り調査では、大平遺跡が墓地であったという伝承は残存せず、普向寺と大平遺跡との関連を示す資料も入手できなかった。ただ墓地の移転まで、普向寺と対岸を結ぶ吊り橋が存在していたとのことである。残念ながら付近の聞き取り調査からは、この吊り橋の存続年代を確かめることはできなかった。一方南一色の玉泉寺は、創建弘仁2（811）年で、真言宗の寺院として弘法大師の弟子が開山したと言われる。昭和53年に本堂から、中国唐代作といわれる海獸葡萄鏡が発見されている。玉泉寺は慶長年間（1596～1614年）に曹洞宗へ宗派替えが行われている。江戸時代の玉泉寺は、28町歩の土地持ちで、一色村は玉泉寺村といわれるくらいの土地を所有していたようである。しかし、玉泉寺にも大平の地に墓地があったという伝承は残存しておらず、関連するような資料も入手できなかった。

次に文献史料から大平遺跡周辺の歴史を辿ると、本来なら現存する資料にあたるべきであるが、残念ながら一色村に関連する多くの資料を保有していた上杉家が、火災のためその資料の大半を焼失してしまったので、『長泉町史』から辿ってみたいと思う¹⁶⁾。まず、寛文12（1672）年の検地帳から、一色村の田畠屋敷別等級別の構成を数値にまとめたものが第3表である。田畠は16町7反余り、畠地は1町3反



第6図 遺跡周辺地籍図

第3表 一色村田畠屋敷構成表

	町	反	畝	歩
上 田	5	5	3	2
中 田	4	9	7	17
下 田	4	5	5	9
下田(山田)	1	6	5	13
小 計	16	7	11	
上 畑	1	4	6	20
中 畑	4	2	5	15
下 畑	6	1	6	27
下畑(新)	1	6	1	3
下々畑(新)	0	8	8	20
小 計	14	3	8	25
田 畑 計	31	1	0	6
屋 敷	1	0	0	26
田畠屋敷合計	32	1	1	2

※長泉町史上巻P239より

余り、屋敷地は1町余りで、田畠屋敷を合わせると32町余りになっている。寛文12(1672)年以前の史料がないので、土地開発がどのようになされたかを確かめることはできない。次に一色村の家数・人数との関係についてみてみると、宝曆11(1761)年の「主人 下人 切支丹宗門御改帳」の中で、「惣人數合式百六拾五人内男百三拾五人 女百廿七人 僧三人 家數合六拾軒内 百姓三拾軒 無田廿九軒 名主宅軒」とあるので、本百姓の比率は51%になっている。それが、安永6(1775)年作の「御尋ニ付書上帳」と一緒に整理されてある文化4(1807)年以降作成されたと思われる「覚」の中では、村入数二百四十人の内男百二十人、女百二十人と同数で、総家数五十二軒中本百姓は四十七軒と、宝曆8年に比較すると大幅に本百姓の比率が増加している。また、一色村の男子百二十人の内訳は、以下のとおりとなっており、一色村男子の姿を伺うことができる。

男百式拾人内	拾三人	老人之者但シ六十才以下
	三拾五人	若輩之者但シ十四才以下
	拾弐人	足弱病身
	四人	鄉簡之者
	拾弐人	御小人御奉公并出奉公仕候
	弐人	野丈打
	四人	村役人共
	三人	家出仕候者ニ御座候
残男	三十五人	

(この「覚」の中で僧二人は百二十人の内には入れていない)

4 近代

第6図は、明治9年以降の駿河国駿東郡南一色村字前ノ田及び石行塚の地籍図である。この図からは、2-1区で検出された墳墓も、3区で検出された道路状の石敷道構や石積み道構を捜すことは困難であり、調査区内に墓地が存在したことわからぬ。調査区北西にあたる32の墓地は、近世後期のものと思われる。この地籍図から調査区内についていえることは、明治9年以降の段階で水田として利用されていた状況が確認できるということである。

註

- (1) 佐藤久・町田洋編 1990 『総観 地理学講座6 地形学』 朝倉書店
- (2) 長泉町他編 1982 『長久保城址(八幡曲輪・上野南・大水濠) 大平遺跡』
- (3) 武光誠 1996 『地名の由来を知る事典』 東京堂出版
- (4) 小野真一 1970 『駿東郡長泉町南一色出土の弥生式土器』『駿豆考古』第10号 駿豆考古学会
- (5) 中世の遺跡の記述については、『静岡県の中世城館跡』(静岡県教育委員会1981年)に基づいて行った。
- (6) 長泉町・長泉町教育委員会 1992 『長泉町史』上巻

第Ⅲ章 各地区の調査

第1節 1区の調査

1 概要

1区は、近年まで水田として利用されていた。ここは、梅ノ木沢川の旧流路の攻撃斜面にあたり、長年の侵食で町道を挟んで隣接する2-1区とは、現地表面で最大2.7mの比高差を測る。遺構は、IV層、V層、VI層で検出された。IV層では、北東部で4基の土坑が検出された。V層では、土坑や溝状遺構、小穴が検出された。その他調査区の北東部を中心に、径5cm、深さ10cm程度の小穴が、800近く検出された。畦畔等は検出されていないので、何らかの植物の痕跡と思われるが、稲株の痕跡の可能性もあると考えられる。VI層では、土坑、溝状遺構、小穴が検出された。各遺構から遺物は検出されず、遺構の時期の特定はできなかった。そこで、各層の年代観を考える上で、包含層出土の主な遺物をあげてみると、まずIII層では、小破片なので図化しなかったが、古瀬戸後期の香炉や、16世紀末から17世紀初頭の瀬戸・美濃系志野丸皿、古窯水通寶（初鋲年代1628年）などが出土しているのに対して、IV層では陶器片も12世紀後半の常滑系のものから、19世紀代の志戸呂系の灯明受皿まで幅広い年代の遺物が出土している。二次的な堆積も考えられるので断定はできないが、III層とIV層では一部で遺物の年代観の逆転現象も起きている。V層では、出土陶磁器は小破片が多く、年代が確定できたものは14世紀後半代と思われる古瀬戸後期の折縁深皿だけであり、他に至道元寶（初鋲年代995年）と熙寧元寶（初鋲年代1068年）が出土している。VI層では、7世紀後半の須恵器が出土しているが、これは近接して存在した石行塚古墳からの混入も考えられる。他の陶磁器は小破片が多く、年代が推定できたものは、龍泉窯産と思われる青磁碗の口縁部であるが、これは、唐宋年代としては13世紀以降と思われるが断定はできない。他に紹聖元寶（初鋲年代1094年）と洪武通寶（初鋲年代1368年）が出土している。

2 土層の状況（第7図）

1区で確認された土層は現地表面（標高75.6m付近）から約2m下（標高73.6m付近）までである。基本土層に対応させると、I層に該当する部分はほとんど検出できず、基本的に6層に分けることができる。上位からII～VI層とした。

II層は、粘性の強い灰褐色土層で、水田耕作土である。部分的に黒褐色土（I層）と混ざりあっていところがある。

III層は、鉄分を多く含む部分が酸化して赤味を強く帯びる赤褐色土層である。粘性は弱く、縮まりにも欠け、部分的に小礫の混入が認められる。中世～近代の陶磁器の細片が出土した。

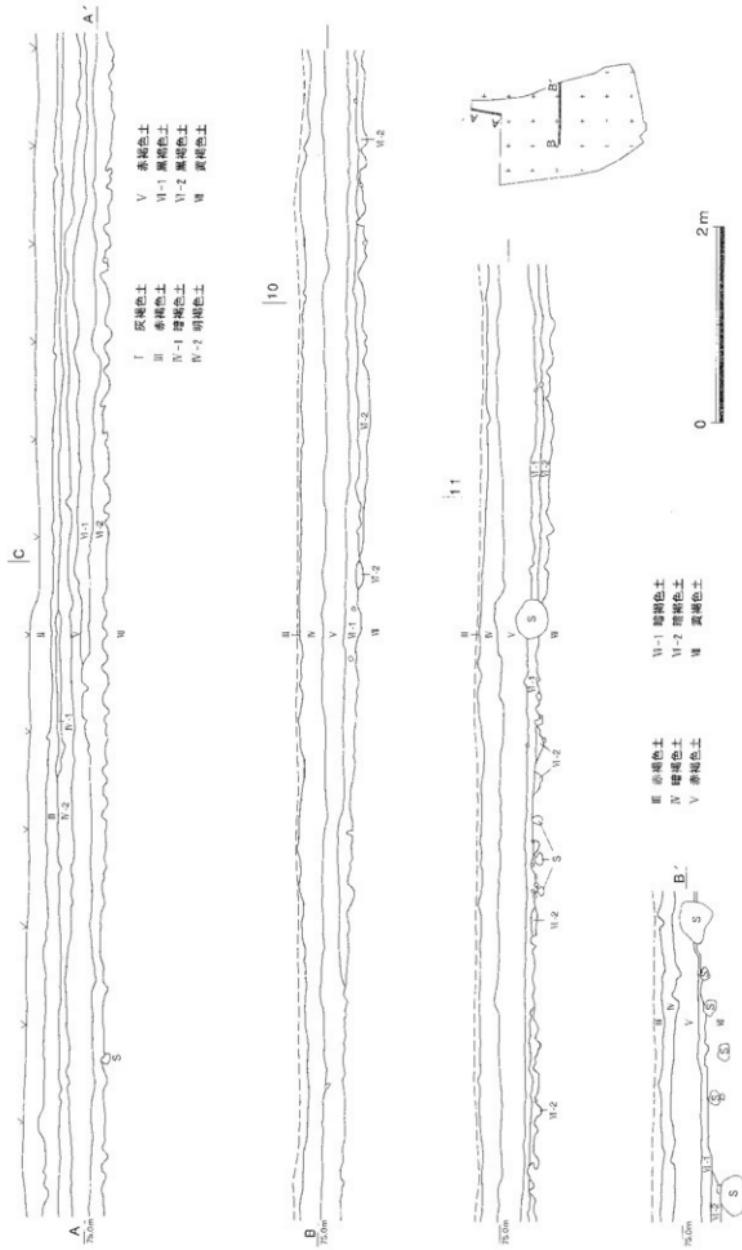
IV層は、全体的に縮まり、粘性とともに弱い暗褐色土層である。一部で明褐色を呈する部分がある。調査区北東部で4基の土坑を検出し、中世から近世の陶磁器の細片が出土した。

V層は、褐色をベースにして、鉄分を多く含んで酸化して赤味を帯びた赤褐色土層である。粘性は弱いが縮まりがあり、硬化している。スコリアを含み、下部では黄褐色土粒子（VI層）を含む。土坑、溝状遺構、小穴などを検出した。中世～近代の陶磁器の細片が出土した。

VI層は、縮まり・粘性とともに弱い暗褐色土層である。下部には黄褐色土粒子（V層）を含む。礫をわずかに含み、一部で黒味が強まり、黒褐色を呈する。遺物包含層である。

VII層は、粘性は普通であるが、やや縮まりのある黄褐色土層である。部分的に礫の混入が多いところがある。土坑、溝状遺構、小穴などを検出した。

第7图 1区土层断面图





第8図 1区IV・V層上面遺構全体図

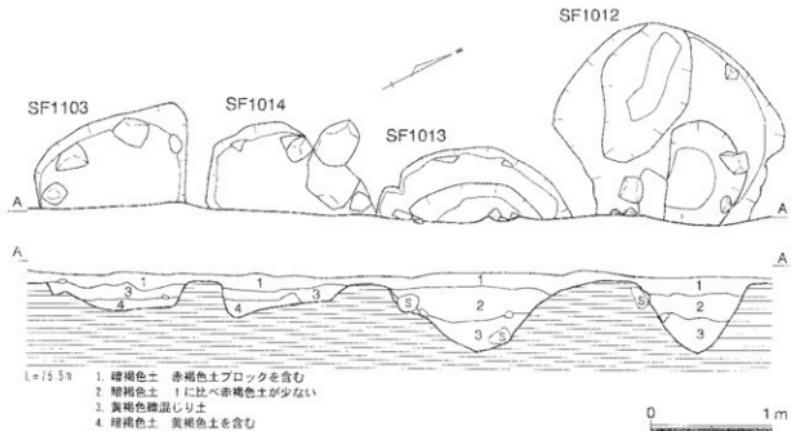
3 遺構

(1) IV層上面検出遺構

土坑

S F1012・1013・1014・1103（第9図 図版2-1・3）

C-10～D-10グリッドで検出された土坑で、南北方向に4つ並んでいる。大平遺跡では、調査区全般で土坑が検出されており、その多くは遺物が出土していない。S F1012は、一番北に位置し、平面形態は不整円形で、長軸176cm、短軸155cm、深さ74cmを測る。S F1013はS F1012の南に位置し、平面形態は半円形に近いと思われるが、東側は調査区外となっている。長軸160cm、短軸62cm、深さ55cmを測る。この2つの土坑は、断面が緩やかなV字形をなし、覆土は3層に分けられる。最下層は、粘性のややある黄褐色土が堆積し、上位と中位の2層は粘性の弱い暗褐色土である。覆土中に炭化物をわずかに含んでいる。遺物は全く出土せず、時期の特定はできないが、町道を挟んで隣接する2-1区で集石墓が検出されているので、土坑墓の可能性も考えたいが、断定はできないので今後の町道部分の調査によって性格が明らかになることを期待する。S F1014とS F1103は、平面形態はともに半円形に近いと思われるが、東側は調査区外くなっている。S F1014は、長軸135cm、短軸75cm、深さ34cmを測り、S F1103は、長軸120cm、短軸85cm、深さ34cmを測る。覆土はともに3層に分けられ、上位と最下層は粘性の弱い暗褐色土が堆積し、中位は、粘性の弱い黄褐色疊混じり土である。遺物の出土は全く認められず、時期の特定はできないが、覆土の関係から2つの土坑に時間差はないと思われる。



第9図 土坑S F1012・1013・1014・1103実測図

(2) V層上面検出遺構

土坑

調査区北西のE-7～E-8グリッドで7基、E-10～E-11グリッドで2基、調査区中央やや南側のH-10グリッドで3基の合計12基検出された。規模等は第4表の通りである。各土坑の平面形態は、橢円形が8基、隅丸形が2基、瓢箪形が1基、不整形が1基である。大きさは、最も大きい土坑で長

軸135cm、最小で長軸74cmを測り、長軸100cm～135cmをもつものが大部分である。土坑の方位はそれぞれ異なっているが、位置的に近接した土坑がほぼ同一方向を示す傾向がうかがわれる。いずれの土坑も遺物の出土は認められず、時期の特定や性格の把握はできなかった。

S F 1002・S F 1003・S F 1015・S F 1016（第10図）

S F 1002は、E-7グリッドから検出した楕円形を呈する土坑である。長軸130cm、短軸100cm、深さ33cmを測る。覆土は2層に分けられる。上位はやや縮まりのある暗褐色土で、下位は黄褐色土をベースにして赤褐色土をブロック状に含んでいる。下位には径60cm程度の礫を含む。遺物は出土しなかった。

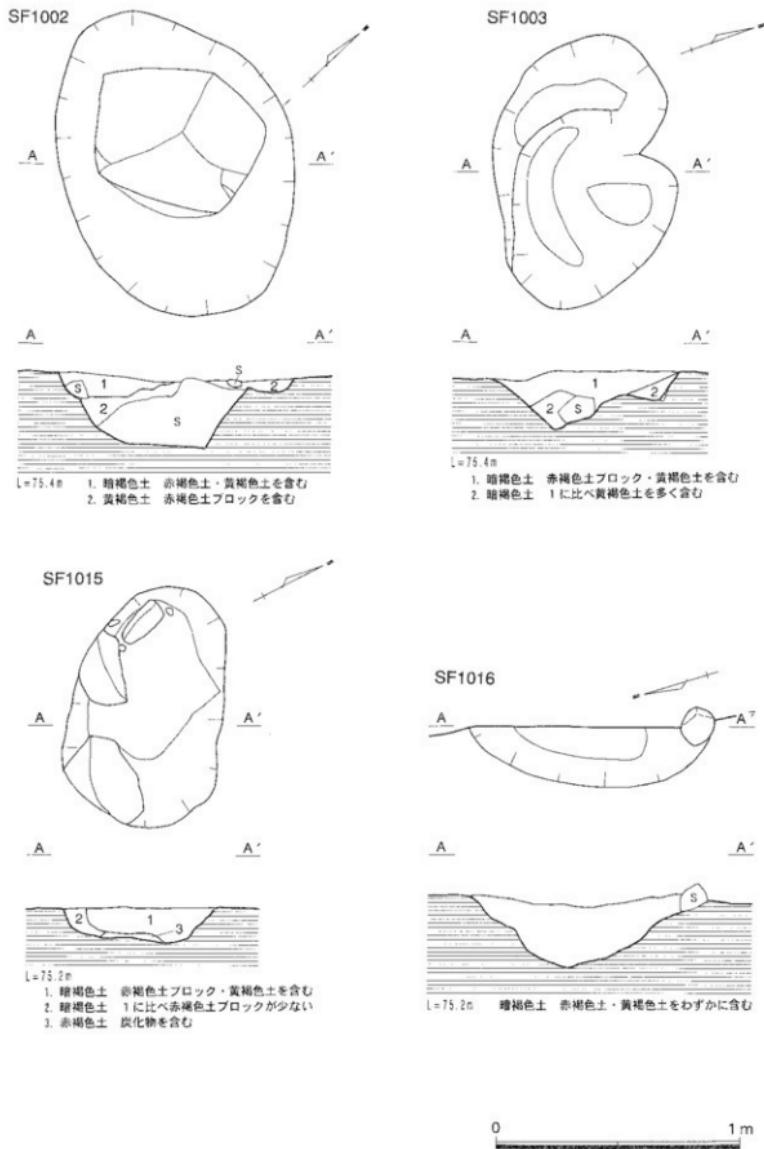
S F 1003は、E-7グリッドから検出した楕円形を呈する土坑である。長軸117cm、短軸76cm、深さ26cmを測る。覆土は2層に分けられるが、いずれも暗褐色土をベースにして赤褐色土と黄褐色土を含む。遺物は出土しなかった。S F 1015は、E-10グリッドから検出した楕円形を呈する土坑である。長軸97cm、短軸62cm、深さ15cmを測る。覆土は3層に分けられる。上位2層はやや縮まりのある暗褐色土に赤褐色土と黄褐色土を含んでいる。下位は赤褐色土で炭化物をわずかに含む。遺物は出土しなかった。S F 1016は、E-11グリッドから検出した楕円形を呈する土坑と思われるが、東側は調査区外となっている。長軸95cm、短軸19cm、深さ29cmを測る。覆土は粘性の弱い暗褐色土である。遺物は出土せず、炭化物の混入も認められなかった。

S F 1004・S F 1006・S F 1007・S F 1008・S F 1009（第11図 図版2-4・5）

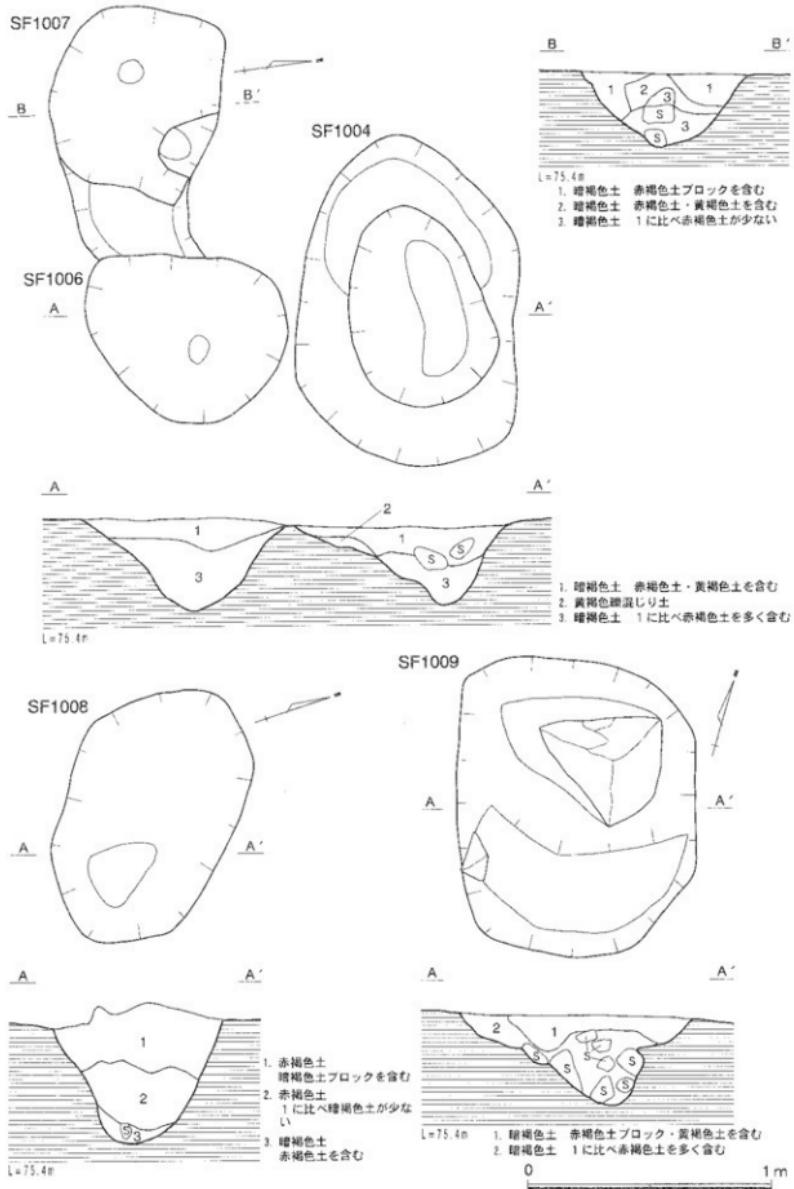
S F 1004は、E-8グリッドから検出した楕円形を呈する土坑である。長軸135cm、短軸90cm、深さ40cmを測る。覆土は3層に分けられる。上位と最下層は、粘性の弱い暗褐色土で、中位はやや縮まりのある黄褐色礫混じり土である。上位で炭化物が微量混入しているが、遺物は出土しなかった。S F 1006は、E-8グリッドから検出した楕円形を呈する土坑である。長軸85cm、短軸68cm、深さ47cmを測る。断面は緩やかなV字形を呈し、覆土は2層に分けられる。2層とも暗褐色土をベースにして黄褐色土を混入しているが、上位は赤褐色土をブロック状に含む。遺物は出土しなかった。S F 1007は、E-8グリッドから検出した隅丸方形を呈する土坑である。長軸100cm、短軸70cm、深さ38cmを測る。断面はV字形を呈し、覆土は3層に分けられる。3層とも暗褐色土をベースにして赤褐色土を混入している。下位ではわずかに炭化物を含む。遺物は出土しなかった。S F 1008は、E-8グリッドから検出した楕円形を呈する土坑である。長軸111cm、短軸68cm、深さ53cmを測る。覆土は3層に分けられ、上位と中位は酸化して硬化した赤褐色土が堆積している。これは、上層で何回かに分けて火を使用したか、もしくは焼いた土を投棄したものかわからない。最下層は、粘性の弱い暗褐色土である。遺物も出土せず、炭化物を微量含む程度なので、土坑の性格はわからない。S F 1009は、E-8グリッドからF-8グリッドにかけて検出した隅丸方形を呈する土坑である。長軸123cm、短軸98cm、深さ41cmを測る。覆土は2層に分けられる。2層とも暗褐色土をベースにして赤褐色土を混入している。下位には10～20cm程の大きさの礫を含む。遺物は出土しなかった。

S F 1088・S F 1090・S F 1091（第12図）

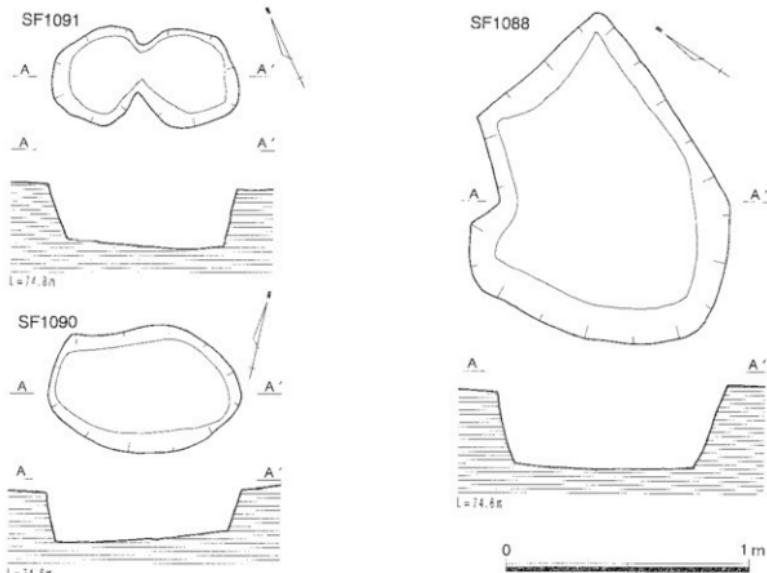
S F 1088は、H-10グリッドから検出した不整楕円形の土坑である。長軸135cm、短軸107cm、深さ37cmを測る。ほぼ垂直に掘り込まれ、覆土は粘性の弱い暗褐色土である。遺物は出土しなかった。S F 1090は、H-10グリッドから検出した楕円形を呈する土坑である。長軸80cm、短軸53cm、深さ24cmを測る。ほぼ垂直に近い掘り方をなし、底面は平らである。覆土はやや縮まりのある暗褐色土である。遺物は出土しなかった。S F 1091は、H-10グリッドから検出した瓢箪形を呈する土坑である。長軸74cm、短軸41cm、深さ27cmを測る。ほぼ垂直に近い掘り方をなし、底面は平らである。覆土はやや縮まりのある暗褐色土である。遺物は出土しなかった。



第10図 土坑SF1002・1003・1015・1016実測図



第11図 土坑 S F 1004・1006・1007・1008・1009実測図



第12図 S F 1088・1090・1091実測図

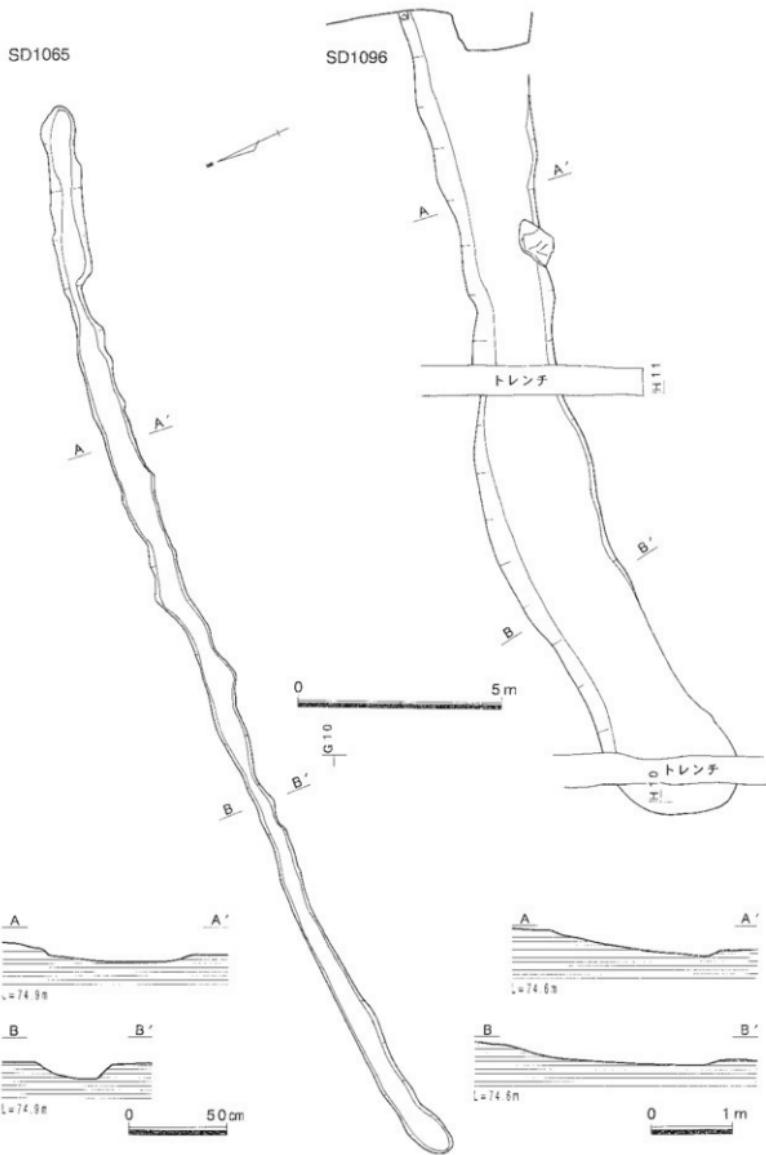
小穴（ピット）

調査区北西のE-8グリッドから3基、南西のH-8グリッドから3基の合計6基検出された。規模等は第5表にみるとおりであり、平面形態は円形、楕円形、隅丸方形、不整形と様々である。直線的に並ぶものもみられたが、小穴内からは柱根や礎石は出土せず、周囲には自然隙も多いので建物の認定はできなかった。また、遺物の出土もないでの性格や時期はわからない。

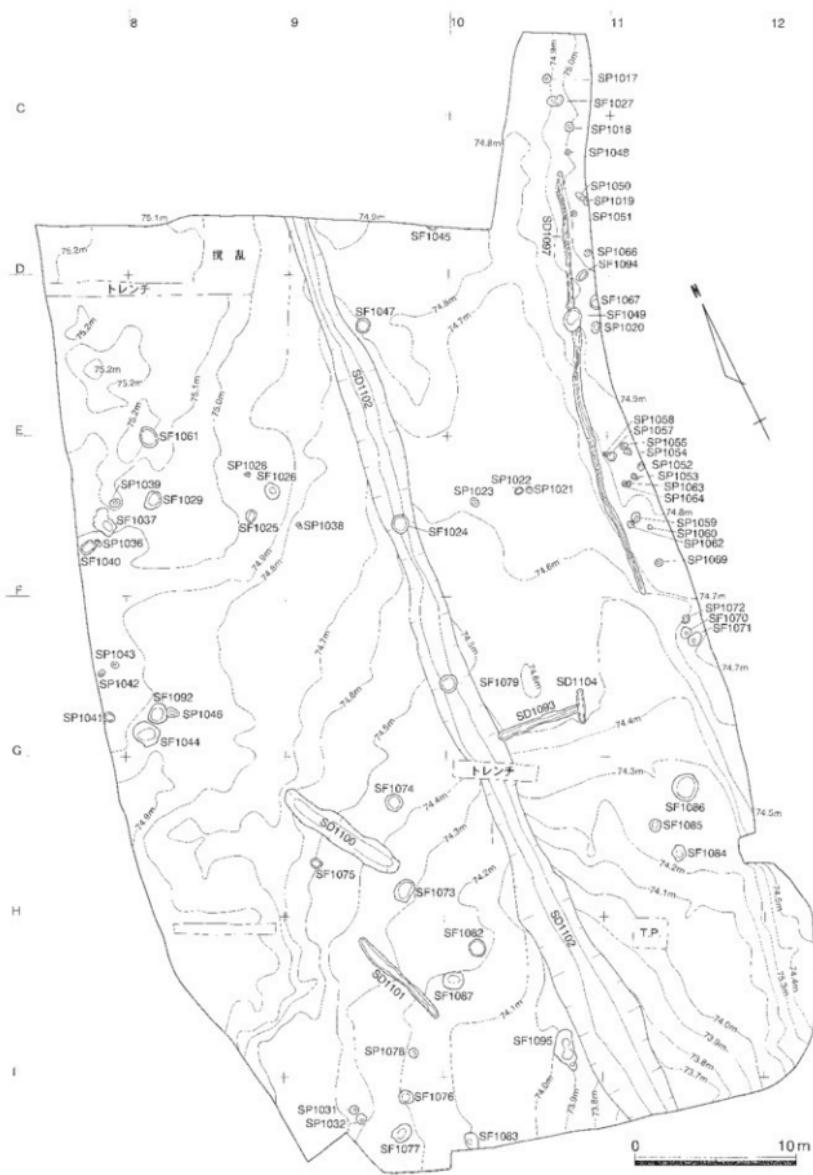
溝状遺構

S D1065・S D1096（第13図 図版4-1）

S D1065は、H-9グリッド～G-11グリッドにかけて検出した、ほぼ東西方向に延びる、断面がU字形の細長い溝状遺構である。長さ27.4m、幅28～84cm、深さ3.7～7.8cmを測る。覆土は粘性の弱い暗褐色土で、遺物は検出されなかつたので、時期の特定はできない。溝の流れの方向は、底面の高さからおよそ東から西に向かって流れているよう、排水用に造られたのではないかと思われるが、断定はできない。溝の底面および両側で、多数の径5cmほどの小穴が検出された。これは、概要のところでもふれたが、何らかの植物の痕跡か稻株の痕跡と思われるが、性格の把握はできなかつた。S D1096は、I-10～H-11グリッドにかけて検出された断面U字形の溝状遺構である。検出長20.5m、幅184cm～281cm、深さ24～30cmで、南側に緩やかなカーブを描きながら、ほぼ東西方向に延びていて、東側は調査区外となっている。覆土は粘性の弱い暗褐色土で、遺物は検出されなかつたので、時期の特定はできない。溝の流れの方向は、底面の高さからおよそ東から西に向かって流れているよう、排水用に造られたのではないかと思われるが、断定はできない。



第13図 構状遺構 S D 1065・1096実測図



第14図 1区VII層上面遺構全体図

(3) VII層上面検出遺構

土坑

全部で3基検出されたが、遺物は全く出土せず、その時期は特定できない。規模や形状等については第4表に示した。さてその中で、円形を呈して底面が平らに近いわゆる円形皿状土坑（100×100cm前後）が5基検出されている。いずれもS D1102内や、それに近接する河道路跡で検出されているのが特徴である。そして2-1区においても同様な土坑は河道路跡で検出されている。平畦遺跡では、それらの円形土坑は座棺を土葬するための墳墓ではないかと報告されており⁽¹⁾、246号バイパス建設に伴う大平遺跡の調査においても同様な報告がなされている⁽²⁾。一方、猪之頭窓跡場内遺跡では同様な土坑が、肥料や灌水用の「溜め」の施設ではないかと報告されている⁽³⁾。本遺跡における円形皿状土坑は、遺物が出土しない検出状況等から考えても、どちらとも判断できかねるので、墳墓（土坑墓）と農耕用施設の両方の可能性があると考える。

S F 1024・1047・1074・1079・1082（第15図 図版2-6・7 3-2・3）

S F 1024とS F 1079は、S D1102内で検出された円形土坑である。S F 1024はF-9グリッドに位置し、長軸108cm、短軸102cm、深さ23cmを測る。覆土は2層に分けられるが、2層とも質的には類似した暗褐色土で、下位のほうが黄褐色土を多く含んでいる。断面は緩やかに立ち上がり、底部は平坦である。S F 1079はG-9～10グリッドに位置し、長軸103cm、短軸100cm、深さ19cmを測る。西側は一部を除いてほぼ垂直に近い堀形をなし、底部も平坦である。覆土は2層に分けられるが、2層とも暗褐色土をベースとしており、下位には拳大～人頭大の丸礫が含まれている。2基とも遺物は出土しなかったが、切り合ひから2基の土坑の方がS D1102よりも後に掘り込まれたものと思われるが、時期は特定できない。S F 1047は、E-9グリッドのS D1102の脇から検出された円形土坑である。長軸94cm、短軸86cm、深さ20cmを測る。断面は緩やかに掘り込まれ、底部は平坦である。覆土は3層に分けられるが、3層とも暗褐色土をベースとして黄褐色土を混入している。中位が一番黄褐色土の混入が多く、上位にはわずかだが炭化物を含んでいるが遺物の出土はなかった。S F 1074は、II-9グリッドで検出された円形土坑で、長軸104cm、短軸100cm、深さ14cmを測る。断面は緩やかに掘り込まれているが、底部は平坦である。覆土は2層に分けられ、2層とも暗褐色土をベースにしていて、下位の方が黄褐色土の混入が多い。遺物は出土しなかった。S F 1082は、I-10グリッドで検出された円形皿状土坑で、長軸108cm、短軸100cm、深さ42cmを測る。ほぼ垂直に近い堀形をなし、底部も平坦である。覆土は3層に分けられる。上位と下位は暗褐色土で、中位は暗黒褐色土である。3層とも締まり・粘性は弱い。遺物は出土しなかった。

S F 1027・1045・1049・1067・1070・1071・1094（第16図）

S F 1027は、C-10グリッドで検出された不整形の土坑で、東側半分は梢円形に掘り込まれている。従って、その形状から2つの造構が重なっている可能性もある。長軸95cm、短軸60cm、深さ25cmを測る。覆土は2層に分かれ、上位は暗黒褐色土で、下位は黄褐色土である。遺物は出土しなかった。S F 1045は、D-9グリッドで検出された半円形の土坑で、北側は調査区外となっている。長軸は78cm、短軸は19cm、深さ34cmを測る。覆土は3層に分けられるが、3層とも暗褐色土をベースにしており、下位にいくほど黄褐色土の混入が多くなる。遺物は出土しなかった。S F 1049は、E-10グリッドで検出された梢円形を呈する浅い土坑である。S D1097を切って位置する。切り合ひからS F 1049の方が新しいようである。長軸148cm、短軸103cm、深さ14cmを測る。覆土は2層に分かれ、上位は暗褐色土で、下位は黄褐色土である。遺物は出土しなかった。S F 1067は、E-10グリッドで検出された半円形の土坑で、東側は調査区外となっている。長軸88cm、短軸48cm、深さ21cmを測る。覆土は2層に分けられるが、暗褐色土をベースとしていて、上位は赤褐色土を多く含んでいる。遺物は出土しなかった。S F 1070は、F-

11グリッドで検出された不整円形の土坑である。長軸71cm、短軸59cm、深さ28cmを測り、南側がやや深く掘り込まれている。覆土は2層とも暗褐色土をベースとしていて、下位の方が黄褐色土の混入が多い。遺物は出土しなかった。S F 1071は、G-11グリッドで検出された不整梢円形の土坑である。長軸91cm、短軸64cm、深さ31cmを測る。覆土は2層に分けられる。2層とも暗褐色土をベースにしているが、上位の方が黄褐色土の混入が多い。遺物は出土しなかった。S F 1094は、D-E-10グリッドで検出された梢円形を呈する土坑である。長軸78cm、短軸47cm、深さ18cmを測る。断面は緩やかに立ち上がり、覆土は粘性の弱い暗褐色土で、遺物は出土しなかった。

S F 1029・1037・1040・1061（第17図）

S F 1029は、F-8グリッドで検出された隅丸方形の土坑である。長軸117cm、短軸91cm、深さ40cmを測る。ほぼ垂直な堀形をなし、底部は平坦である。覆土は2層に分けられる。2層とも暗褐色土をベースとして、赤褐色土と黄褐色土を混入している。遺物は出土しなかった。S F 1037は、F-7グリッドで検出された集石土坑である。長軸182cm、短軸118cm、深さ36cmを測る。集石は、約10~50cm程の大きさの礫が、梢円形に近い形で積まれていた。その下に不整形な土坑が掘り込まれている。覆土は暗褐色土をベースとして、赤褐色土と黄褐色土を混入している。遺物は出土しなかった。S F 1040は、F-7グリッドで検出された隅丸方形の浅い土坑である。長軸98cm、短軸65cm、深さ17cmを測る。覆土は2層に分けられる。上位はやや締まりのある暗褐色土で、下位は暗褐色土をブロック状に含む黄褐色土である。遺物は出土しなかった。S F 1061は、E-F-8グリッドで検出されたほぼ梢円形を呈した土坑である。長軸130cm、短軸103cm、深さ40cmを測る。ほぼ垂直な堀形をなしており、覆土は2層に分けられる。上位は暗褐色土をベースとして黄褐色土をブロック状に含み、下位は暗褐色土である。遺物は出土しなかった。

S F 1025・1026・1044・1092（第18図 図版3-4）

S F 1025は、F-8グリッドで検出された梢円形を呈する土坑である。長軸80cm、短軸69cm、深さ12cmを測る。断面は緩やかに立ち上がる浅い土坑である。覆土は2層に分けられるが、2層とも暗褐色土をベースにして、黄褐色土を混入している。遺物は出土しなかった。S F 1026は、F-8グリッドで検出された梢円形を呈する土坑である。長軸100cm、短軸86cm、深さ40cmを測る。覆土は2層に分けられるが、2層とも暗褐色土をベースにして、黄褐色土を混入している。遺物は出土しなかった。S F 1044・1092は、G-8グリッドで検出された土坑で、南北に2つが並んでいる。S F 1092は北東に位置する梢円形を呈する土坑で、長軸125cm、短軸107cm、深さ53cmを測る。S F 1044は南西に位置する不整梢円形の土坑で、長軸170cm、短軸133cm、深さ45cmを測る。2つの土坑ともに覆土は2層に分けられるが、ともに暗褐色土をベースとして、下位に黄褐色土が混入している。覆土の関係から2つの土坑に時間差はないと思われる。遺物は2基とも出土しなかった。

S F 1073・1075・1084・1085・1086（第19図）

S F 1073は、H-9グリッドで検出されたほぼ梢円形を呈する土坑である。長軸143cm、短軸105cm、深さ23cmを測る。断面は緩やかに立ち上がり、覆土は暗褐色土である。遺物は出土しなかった。S F 1075は、H-9グリッドで検出されたほぼ梢円形を呈する土坑である。長軸71cm、短軸55cm、深さ15cmを測る。断面は緩やかに立ち上がる。覆土は2層に分けられるが、2層とも暗褐色土をベースとしており、下位は黄褐色土をブロック状に含んでいる。遺物は出土しなかった。S F 1084は、H-11グリッドで検出された不整形の土坑である。長軸94cm、短軸79cm、深さ14cmを測る。断面は緩やかに立ち上がり、覆土は2層に分けられるが、2層とも暗褐色土をベースにして、黄褐色土を含んでいる。遺物は出土しなかった。S F 1085は、H-11グリッドで検出されたやや歪んだ梢円形の土坑である。長軸73cm、短軸64cm、深さ15cmを測る。断面は緩やかに立ち上がり、覆土は2層に分けられるが、2層とも暗褐色土をベース

にして、黄褐色土を混入している。遺物は出土しなかった。S F 1086は、H-11グリッドで検出された不整円形の土坑である。長軸170cm、短軸158cm、深さ41cmを測る。断面は緩やかな立ち上がりで、覆土は5層に分けられるが、基本的には粘性の弱い暗褐色土をベースとして、黄褐色土が混入している部分が多い。遺物は出土しなかった。

S F 1076・1077・1083・1087・1095（第20図 図版3-5）

S F 1076は、J-9グリッドで検出されたやや歪んだ円形の土坑である。長軸93cm、短軸88cm、深さ17cmを測る。断面は緩やかな立ち上がりである。覆土は2層に分けられるが、2層とも暗褐色土をベースとして、黄褐色土をブロック状に含んでいる。遺物は出土しなかった。S F 1077は、J-9グリッドで検出されたほぼ椭円形を呈する土坑である。長軸124cm、短軸93cm、深さ23cmを測る。断面は緩やかに立ち上がり、覆土は2層に分けられる。2層とも暗褐色土をベースにして、黄褐色土を混入している。遺物は出土しなかった。S F 1083は、J-10グリッドで検出された椭円形を呈する土坑である。南側は調査区外となっている。長軸110cm、短軸78cm、深さ35cmを測る。西側がやや深く掘り込まれており、覆土は2層に分けられるが、2層とも暗褐色土をベースとしており、下位は黄褐色土をブロック状に含んでいる。遺物は出土しなかった。S F 1087は、I-10グリッドで検出された隅丸方形を呈する土坑で、東側がやや深く掘られている。長軸112cm、短軸104cm、深さ45cmを測る。覆土はやや締まりのある暗褐色土である。遺物は出土しなかった。S F 1095は、I-10グリッドで検出された不整形の土坑である。長軸257cm、短軸122cm、深さ40cmを測る。西側は緩やかに掘り込まれ、中央部に3ヵ所の窪地を造る。底面はほぼ平らである。東側はやや立ち上がりが急になる。S D 1102に近接し、ほぼ並行している。覆土は2層に分けられる。上位は締まり・粘性とともに弱い暗黒褐色疊混じり土で、多くの小礫を含んでいる。下位は暗赤褐色疊混じり土で、上位よりもやや大型の礫を含んでいる。遺物は出土しなかった。

小穴（ピット）

全部で36基検出され、規模等は第5表のとおりである。平面形態は円形、半円形、椭円形、隅丸方形、三角形、不整形に分けられる。そのうち調査区の北東部から20基検出されている。特にD-10～F-11グリッドにかけて、S D 1097に並行するように集中して位置しており、東側の町道にかけて何らかの建物が存在したかもしれないが、遺物も出土せず、推定の域をでないので、今後町道の調査を行うことによって明らかにされることを期待する。他の小穴も遺物は出土せず、並びが悪いうえに、周囲には自然礫が多く、検出状態も悪かったので建物等を認定することはできず、その性格や時期はわからなかった。

溝状遺構

S D 1093・1100・1101・1104（第21図）

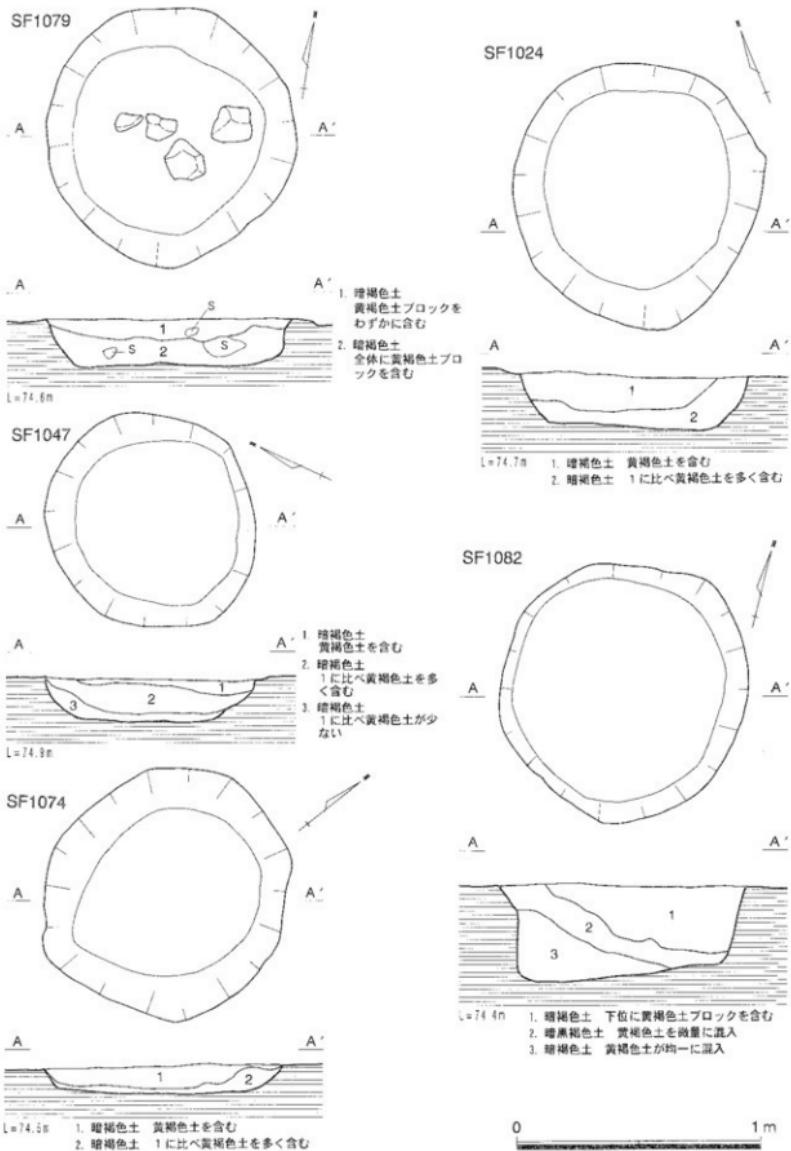
S D 1093・1104は、G-10グリッドで検出された断面U字形の浅い溝状遺構である。S D 1093は、検出長5.3m、幅35～59cm、深さ6.3～9.0cmを測り、N-83°-W方向に延びている。東端をS D 1104がN-19°-E方向に直交する形で延びている。覆土は粘性の弱い暗褐色土で、切り合い関係からは時期差を伺うことはできなかった。耕作に関わる何らかの痕跡とも思われるが、遺物も出土せず性格の把握はできなかった。S D 1100は、H-9グリッドで検出された溝状遺構である。N-31°-W方向に延びており、検出長8.5m、幅120～154cm、深さ3.4～9.2cmを測る。断面は緩やかに立ち上がり、覆土は、粘性の弱い暗褐色土である。遺物は出土せず、その性格や時期はわからない。S D 1101は、I-9グリッドで検出され、S D 1100とほぼ並行するよう、N-20°-W方向に延びる溝状遺構である。検出長7.0m、幅37.5～81cm、深さ7.3～12.3cmを測る。断面は緩やかに立ち上がり、覆土は、粘性の弱い暗褐色土である。遺物は出土せず、その性格や時期はわからない。

S D1097・1102（第22図 図版4-2）

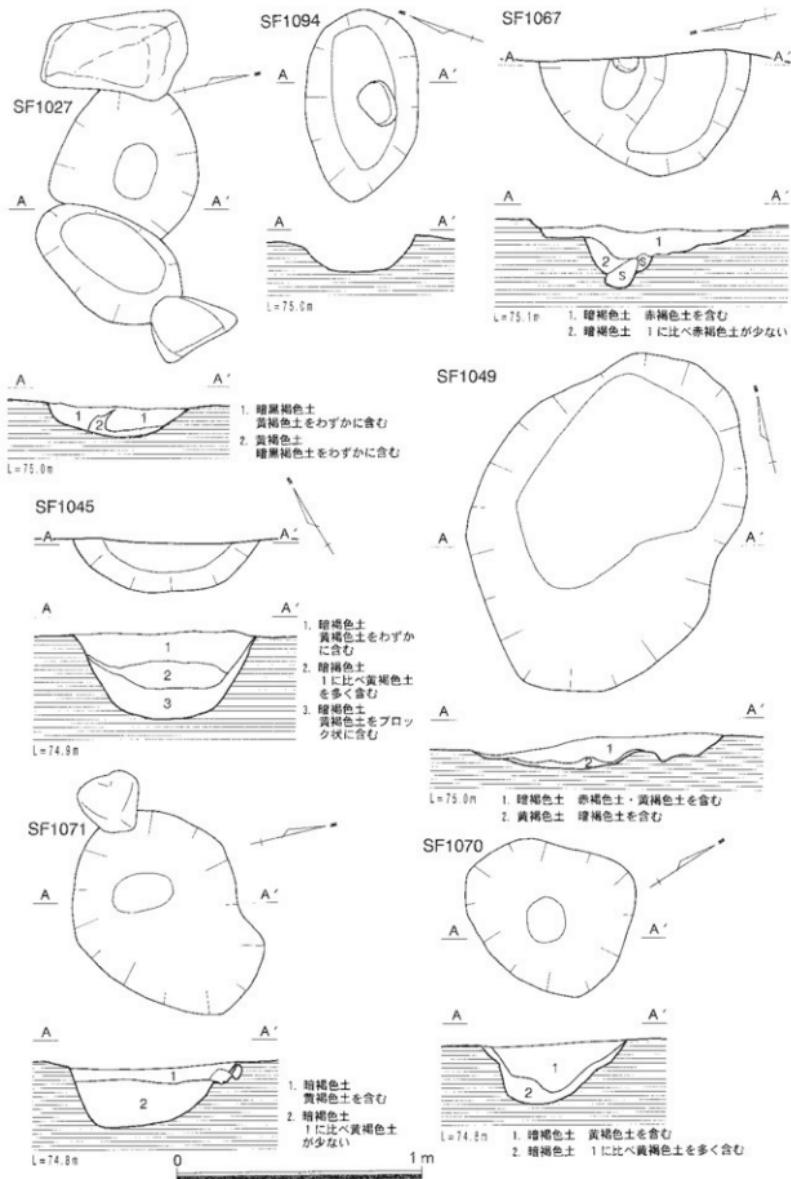
S D1097は、D・E・F-10、F-11グリッドで検出された細長く、浅い溝状遺構である。検出長26.3m、幅24~52cm、深さ1.2~6.6cmを測る。N-20°-E方向に延びて、F-10グリッドでS F1049が掘り込まれ、南部分は東側に緩やかなカーブを描いている。覆土は粘性の弱い暗褐色土である。排水の機能を有した溝か、耕作に関わる痕跡かは断定ができない。遺物は出土せず、時期は特定できなかった。S D1102は、調査区中央を南北方向に延びる長い溝状遺構で、北端と南端はいずれも調査区外へと続いている。検出長60.4m、幅130~424cm、深さ6.7~26.9cmを測る。溝の中央部付近のF-9、G-9グリッドでひとつずつ、ほぼ同規模の円形土坑（S F1024・S F1079）が掘り込まれている。遺物は出土せず、自然の谷地形とも考えられ、その性格や時期はわからない。

註

- (1) 長泉町他 1976 『陣場上・平畠遺跡』
- (2) 長泉町他 1982 『長久保城（八幡曲輪・上野南・大水濠） 大平遺跡』
- (3) 富士宮市教育委員会 1994 『猪之頭養鶏場内遺跡』

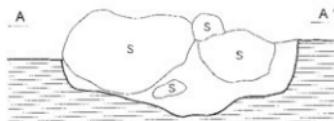
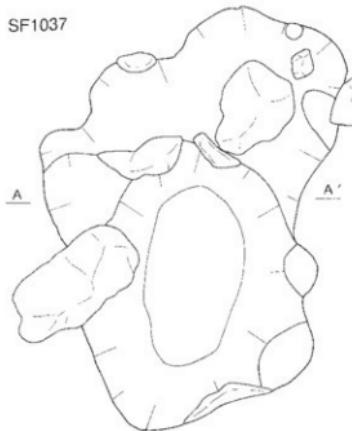


第15図 土坑 S F 1024・1047・1074・1079・1082実測図



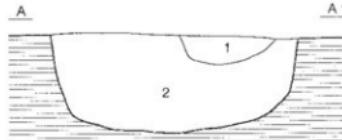
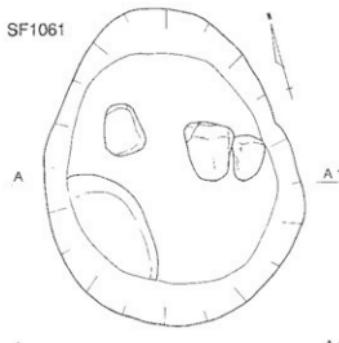
第16図 土坑S F 1027・1045・1049・1067・1070・1071・1094実測図

SF1037



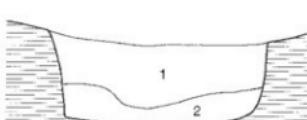
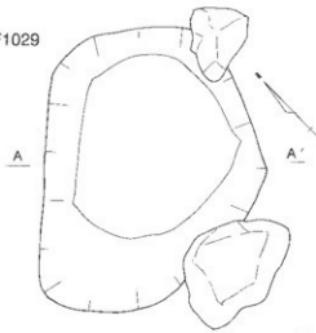
L=75.2m 1. 暗褐色土 赤褐色土・黄褐色土を含む
2. 黄褐色土 黄褐色土を含む

SF1061



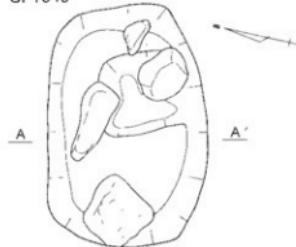
L=75.2m 1. 黄褐色土混じり暗褐色土
2. 暗褐色土 黄褐色土を含む

SF1029



L=75.2m 1. 暗褐色土 赤褐色土・黄褐色土を含む
2. 暗褐色土 1に比べ赤褐色土が少ない

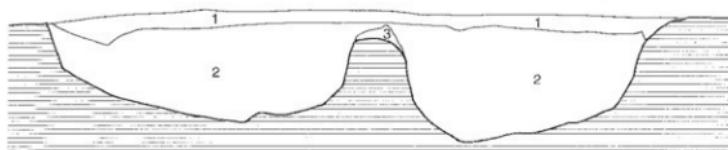
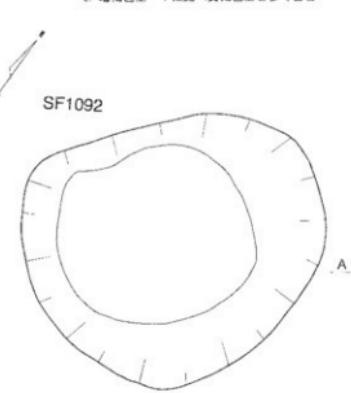
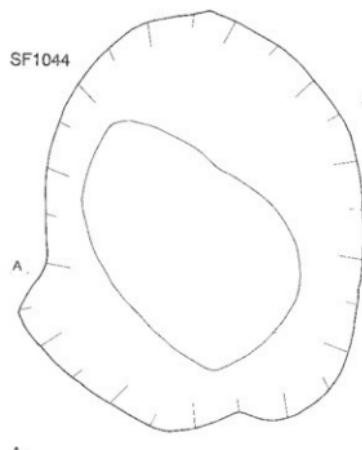
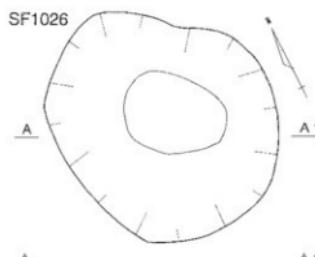
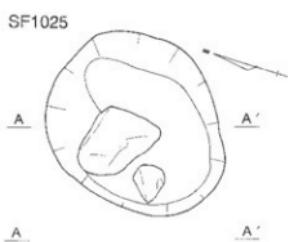
SF1040



L=75.0m 1. 銀褐色土 黄褐色土を含む
2. 黄褐色土 暗褐色土をわずかに含む

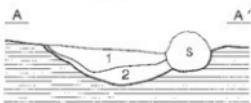
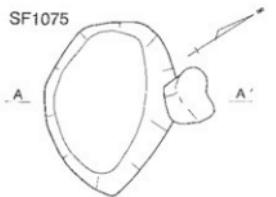
0 1 m

第17図 土坑SF1029・1037・1040・1061実測図

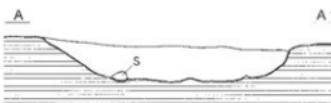
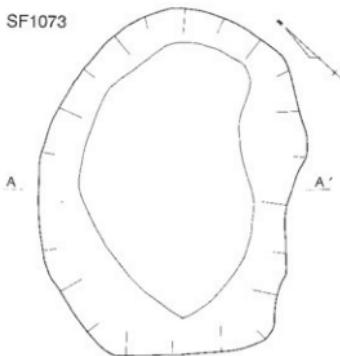


0 1 m

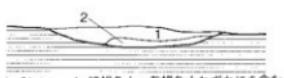
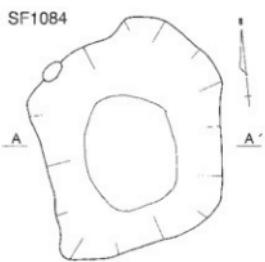
第18図 土坑SF1025・1026・1044・1092実測図



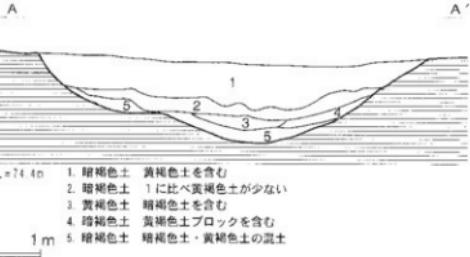
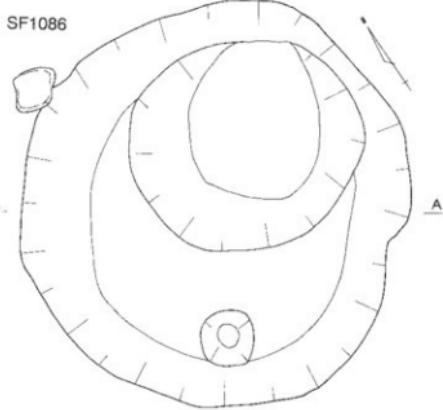
L=74.6m
1. 暗褐色土 白色・黄色の粒子を含む
2. 黄褐色土混じり暗褐色土



L=74.4m 1. 暗褐色土 黄褐色土を含む



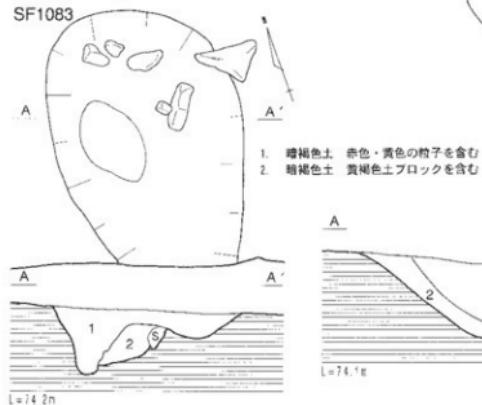
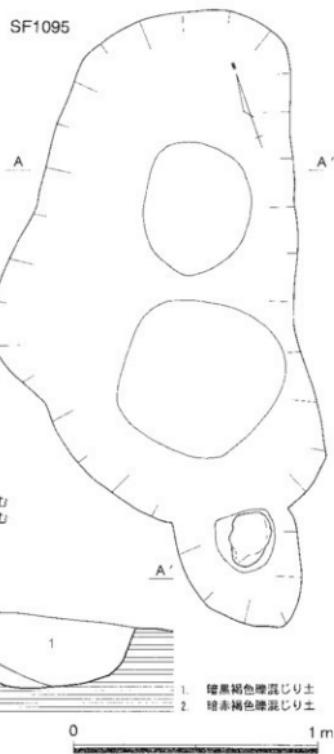
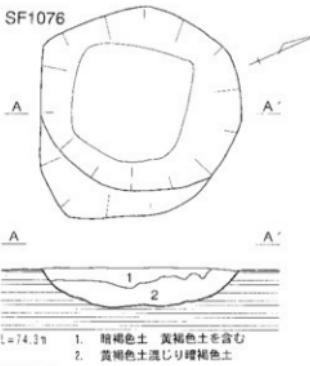
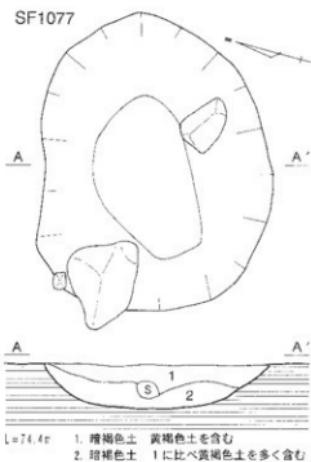
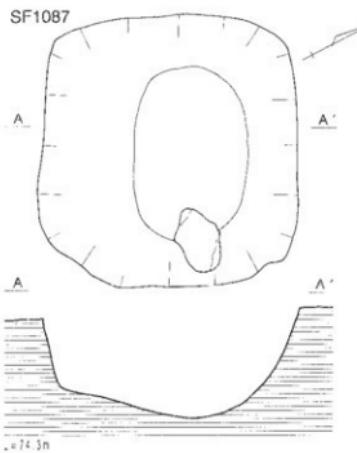
L=74.4m
1. 暗褐色土 黄褐色土わずかに含む
2. 暗黄褐色土



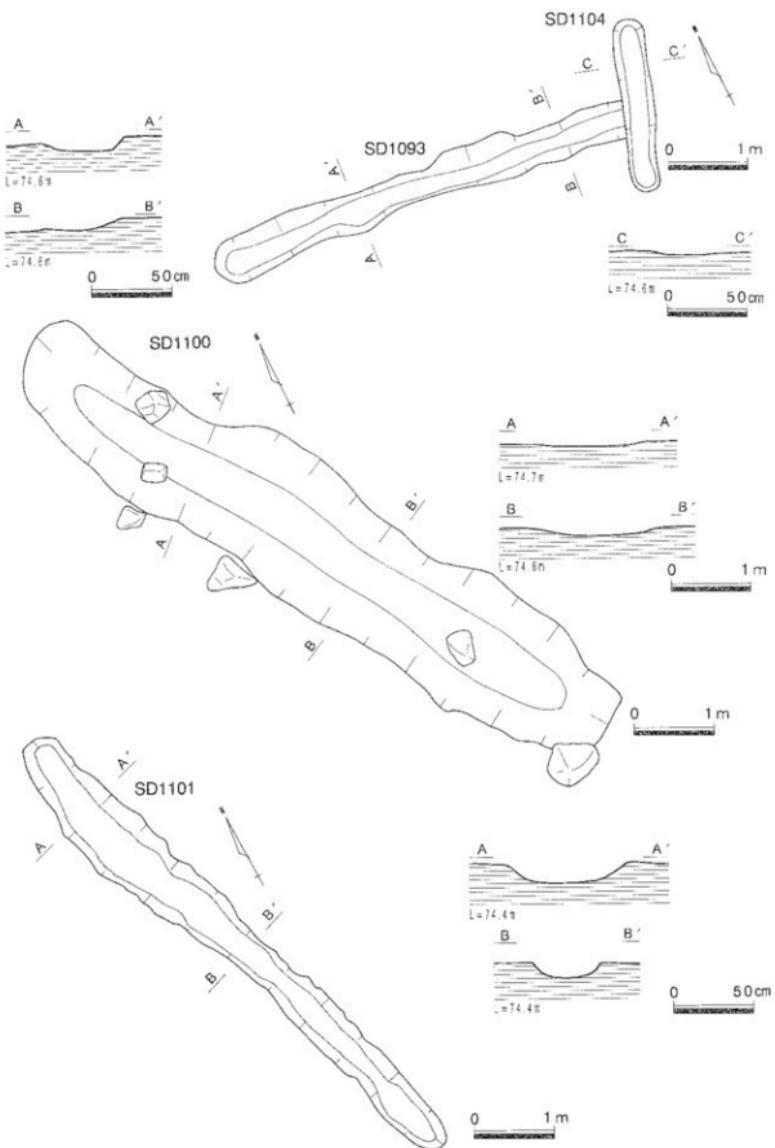
L=74.4m
1. 暗褐色土 黄褐色土を含む
2. 暗褐色土 1に比べ黄褐色土が少ない
3. 黄褐色土 暗褐色土を含む
4. 暗褐色土 黄褐色土ブロックを含む
5. 暗褐色土 暗褐色土・黄褐色土の混土

0

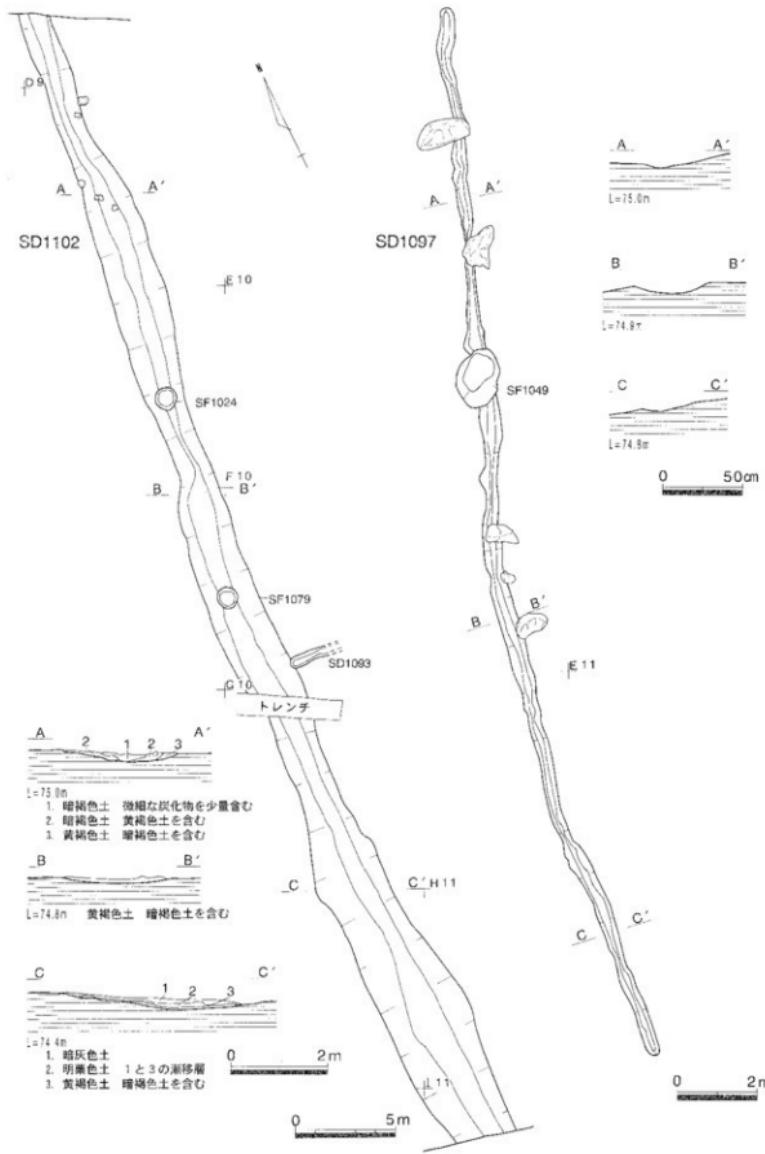
第19図 土坑 S F 1073・1075・1084・1085・1086実測図



第20図 土坑 S F 1076・1077・1083・1087・1095実測図



第21図 溝状遺構 S D1093・1103・1101・1104実測図



第22図 溝状遺構 S D 1097・1102実測図

第4表 1区土坑計測表

遺構名	グリッド	層位	形 状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	方 位
S F 1012	C - 10	IV層	不整円形	176	155	74	N - 64° - E
S F 1013	C・D - 10	IV層	半円形	160	(62)	55	-
S F 1014	D - 10	IV層	半円形	135	(75)	28	-
S F 1103	D - 10	IV層	隅丸方形	120	(85)	34	-
S F 1002	E - 7	V層	楕円形	130	100	33	N - 68° - W
S F 1003	E - 7	V層	楕円形	117	76	26	N - 71° - W
S F 1004	E - 8	V層	楕円形	135	90	40	N - 88° - E
S F 1006	E - 8	V層	楕円形	85	68	47	N - 40° - E
S F 1007	E - 8	V層	隅丸方形	100	70	38	N - 84° - W
S F 1008	E - 8	V層	楕円形	111	68	53	N - 47° - W
S F 1009	E・F - 8	V層	隅丸方形	123	98	41	N - 14° - W
S F 1015	E - 10	V層	楕円形	97	62	14	N - 49° - W
S F 1016	E - 11	V層	楕円形	(95)	(19)	29	-
S F 1088	H - 10	V層	不整楕円形	135	107	37	N - 58° - E
S F 1090	H - 10	V層	楕円形	80	53	24	N - 79° - E
S F 1091	H - 10	V層	瓢箪形	74	41	27	N - 61° - W
S F 1024	F - 9	VII層	円形	108	102	23	-
S F 1025	F - 8	VII層	楕円形	80	69	12	N - 28° - E
S F 1026	F - 8	VII層	楕円形	100	86	40	N - 15° - W
S F 1027	C - 10	VII層	不整形	95	60	25	N - 66° - W
S F 1029	F - 8	VII層	隅丸方形	117	91	40	N - 49° - E
S F 1037	F - 7	VII層	不整形	182	118	36	N - 8° - E
S F 1040	F - 7	VII層	隅丸方形	98	65	17	N - 77° - E
S F 1044	G - 8	VII層	不整楕円形	170	133	45	N - 25° - W
S F 1045	D - 9	VII層	半円形	(78)	(19)	34	-
S F 1047	E - 9	VII層	円形	94	86	20	-
S F 1049	E - 10	VII層	楕円形	148	103	14	N - 40° - E
S F 1061	E・F - 8	VII層	楕円形	130	103	40	N - 9° - E
S F 1067	E - 10	VII層	半円形	(88)	(48)	21	-
S F 1070	G - 11	VII層	不整円形	71	59	28	N - 58° - E
S F 1071	G - 11	VII層	不整楕円形	91	64	31	N - 61° - E
S F 1073	H - 9	VII層	楕円形	143	105	23	N - 48° - E
S F 1074	H - 9	VII層	円形	104	100	14	-
S F 1075	H - 9	VII層	楕円形	71	55	15	N - 52° - W
S F 1076	J - 9	VII層	歪んだ円形	93	88	17	N - 38° - W
S F 1077	J - 9	VII層	楕円形	124	93	23	N - 76° - E
S F 1079	G - 9・10	VII層	円形	103	100	19	-
S F 1082	I - 10	VII層	円形	108	100	42	-
S F 1083	J - 10	VII層	楕円形	(110)	78	35	N - 6° - E
S F 1084	H - 11	VII層	不整形	94	79	14	N - 5° - W
S F 1085	H - 11	VII層	歪んだ円形	73	64	15	N - 31° - E
S F 1086	H - 11	VII層	不整円形	170	158	41	N - 49° - E
S F 1087	I - 10	VII層	隅丸方形	112	104	45	-
S F 1092	G - 8	VII層	楕円形	125	107	53	N - 49° - E
S F 1094	D・E - 10	VII層	楕円形	78	47	18	N - 70° - E
S F 1095	I - 10	VII層	不整形	257	122	40	N - 10° - E

第5表 1区小穴計測表

遺構名	グリッド	層位	形状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)
S P1001	E - 8	V層	楕円形	63	53	10
S P1005	E - 8	V層	楕円形	64	34	34
S P1010	E - 8	V層	隅丸方形	71	55	19
S P1033	H - 8	V層	不整形	60	43	19
S P1034	H - 8	V層	楕円形	63	47	11
S P1035	H - 8	V層	隅丸方形	41	38	16
S P1017	C - 10	VII層	円形	51	47	16
S P1018	D - 10	VII層	隅丸方形	51	46	13
S P1019	D - 10	VII層	半円形	69	28	15
S P1020	E - 10	VII層	楕円形	67	50	15
S P1021	F - 10	VII層	円形	43	39	16
S P1022	F - 10	VII層	円形	51	36	8
S P1023	F - 10	VII層	楕円形	60	43	2
S P1028	F - 8	VII層	隅丸方形	34	21	9
S P1031	J - 9	VII層	円形	55	48	28
S P1032	J - 9	VII層	隅丸方形	65	57	18
S P1036	F - 7	VII層	隅丸方形	42	28	7
S P1038	F - 9	VII層	不整形	40	25	7
S P1039	F - 7	VII層	楕円形	60	48	18
S P1041	G - 7	VII層	隅丸方形	67	55	11
S P1042	G - 7	VII層	楕円形	44	26	16
S P1043	G - 7	VII層	楕円形	48	37	18
S P1046	G - 8	VII層	三角形	70	49	10
S P1048	D - 10	VII層	円形	28	28	8
S P1050	D - 10	VII層	楕円形	58	38	12
S P1051	D - 10	VII層	不整形	31	25	6
S P1052	F - 11	VII層	楕円形	48	35	9
S P1053	F - 11	VII層	楕円形	49	27	9
S P1054	F - 11	VII層	三角形	45	43	10
S P1055	F - 11	VII層	楕円形	49	37	16
S P1056	E - 11	VII層	半円形	32	17	17
S P1057	F - 11	VII層	楕円形	58	55	14
S P1058	F - 10	VII層	隅丸方形	28	24	7
S P1059	F - 11	VII層	楕円形	57	42	14
S P1060	F - 11	VII層	円形	24	22	10
S P1062	F - 11	VII層	隅丸方形	34	30	40
S P1063	F - 11	VII層	円形	36	29	9
S P1064	F - 11	VII層	円形	34	29	10
S P1066	D - 10	VII層	隅丸方形	40	35	17
S P1069	F - 11	VII層	円形	46	40	13
S P1072	G - 11	VII層	円形	50	44	8
S P1078	I - 9	VII層	円形	55	55	24

第2節 2-1区の調査

1 概要

最も広い調査区である2-1区は、黄瀬川が形成した河岸段丘上に位置し、3段の段丘面とその間の河道跡が確認できる。便宜上調査区内を、段丘面、段丘崖、河道跡に分け、さらに段丘面は西側から第1・第2・第3と分け、河道跡も西側から第1・第2と分けて呼称することにした。調査区内は現地表面で、一番高い段丘面（第1段丘面）と一番低い段丘面（第3段丘面）では比高差最大2mを測る。段丘面には黄瀬川の礫塊帶が認められ、礫塊帶に挟まれた部分が河道跡の砂土部分となっている。残念ながら調査期間短縮のため、VI層中までバックホウで土砂を除去したので、遺構はVII層上面でのみ検出した。第1段丘面の礫塊帶から20基の集石墓が検出された。伴出したかわらけや銭貨などから中世墓と思われる。この段丘面から下の河道跡にかけての段丘崖に、後世に石垣が形成されたため、多くの裏込めの石が混入し、また削平も受けている。また、河道跡の部分からは1区で検出されたものと同様な円形皿状土坑や、小穴、溝状遺構などを検出した。また、各遺構は黄瀬川の氾濫や後世の耕作などで上面が削平されている可能性も考えられる。2-1区全体で検出された遺構の内訳は、集石墓22基、不明遺構5基、土坑114基、小穴213基、溝状遺構4条である。遺構から出土した遺物は少なく、ほとんどの遺物がVI層中より出土している。主な遺物としては、古瀬戸後期の縁軸小皿、15世紀代の中国青磁腰折れ壺、15世紀後半から16世紀前半代の中国染付皿などがあり、遺物から年代を15世紀から16世紀前半代に比定することも可能かもしれない。

2 土層の状況（第23・24図）

2-1区で確認された土層は、現地地表面（標高76.4m付近）から約3.1m下（標高73.3m付近）までである。調査区西側の一一番高い段丘面と東側の段丘面では、少し堆積状況が異なるよう、調査区中央部のE-15グリッドが、確認調査の段階で標準堆積しているところから、基本土層（第4図参照）として把握して、I～VII層に分層し、他地点との対応関係を導き出した。しかし、I層は調査区中央部でしか検出されなかったので、掲載した土層断面図は、上位からII層～VII層とした。

II層は、粘性の強い灰褐色土で、旧水田耕作土である。部分的に黒褐色土（I層）と混土している。

III層は、鉄分を多く含む部分が酸化して赤味を強く帯びる赤褐色土層である。粘性は弱く、縮まりにも欠け、部分的に小礫の混入が認められる。

IV層は、全体的に縮まり・粘性ともに弱い暗褐色土で、一部で暗灰褐色を呈する部分がある。

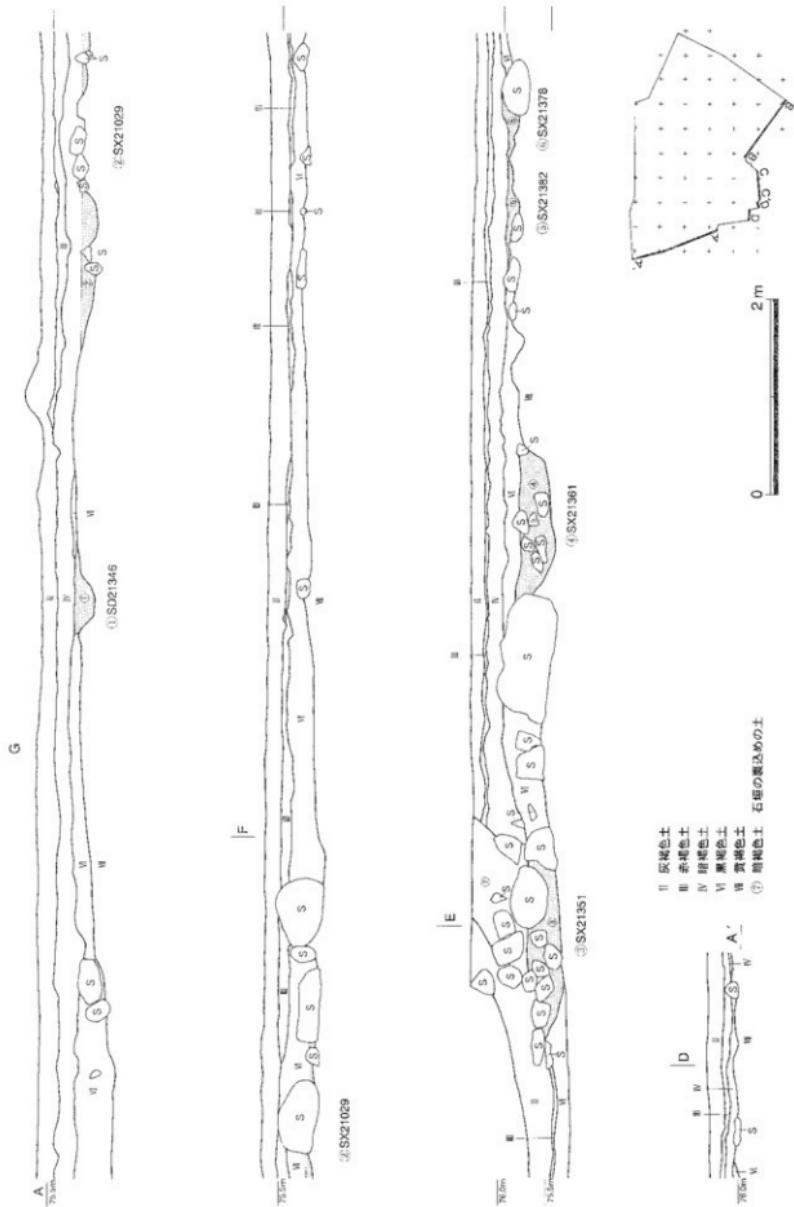
V層は、褐色をベースにして、鉄分を多く含んで酸化して赤味を帯びた赤褐色土層である。粘性は弱いが縮まりがあり、硬化している。スコリアを含み、下部では黄褐色土粒子を含む。

VI層は、縮まり・粘性ともに弱い黒褐色土層である。下部には黄褐色土粒子を含む。礫をわずかに含み、一部で暗褐色や暗茶黒褐色を呈する部分がある。遺物包含層である。

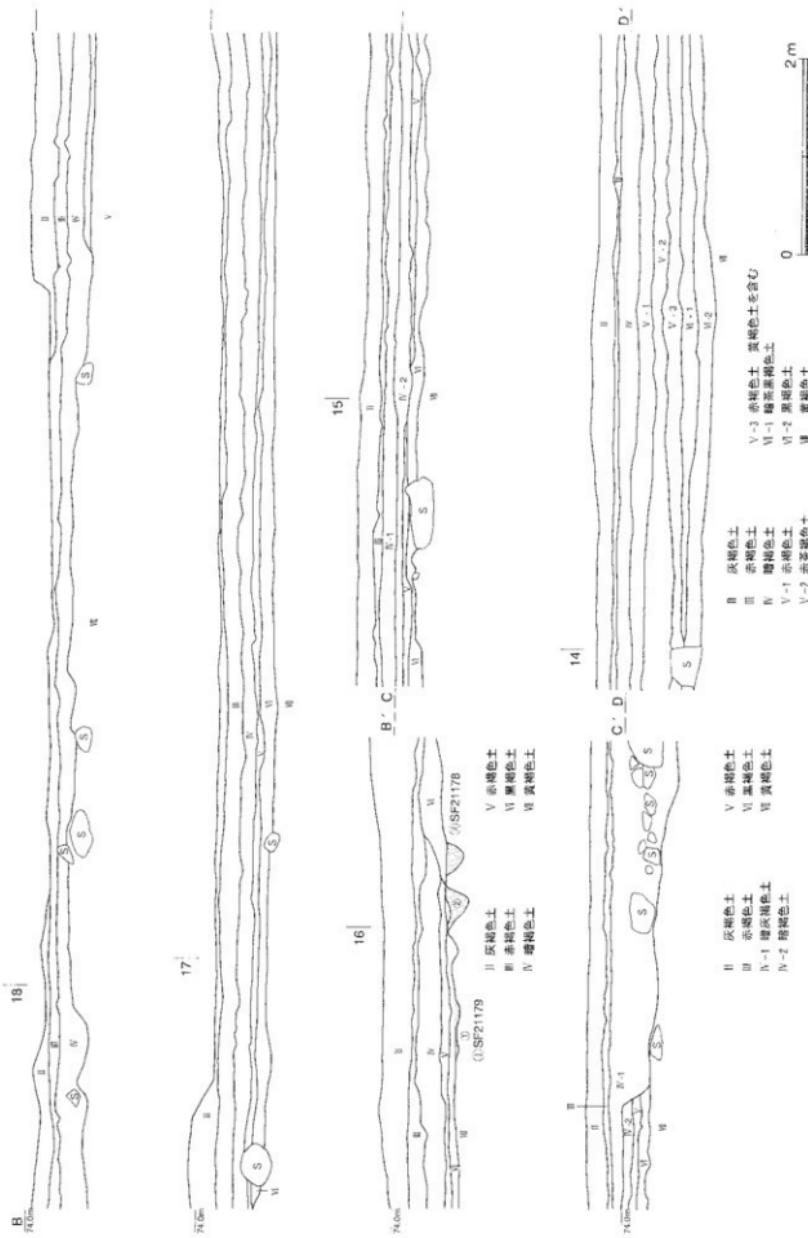
VII層は、粘性は普通であるが、やや縮まりのある黄褐色土層である。部分的に礫の混入が多いところがある。集石墓、土坑、小穴、溝状遺構などを検出した。

3 遺構（VII層上面検出遺構）

概要のところでも述べたが、調査区を段丘面・段丘崖・河道跡で6区画したので、それぞれの区画ごとに、調査区西側の第1段丘面から順に説明していく。なお、検出された遺構の規模等については、中世墓・不明遺構のS Xについては第6表、土坑については第7表、小穴については第8表を参照していただきたい。



第23図 2-1区土層断面図（西壁）



第24图 2-1区土壤断面图(南壁)

(1) 第1段丘面

D-11グリッドからH-13グリッドにあたる部分で、調査区の中で最も標高の高い部分であり、黄瀬川の礫塊帯が認められる。これらの礫を用いた集石土坑が22基検出された。形状や検出状況からほとんどが集石墓と思われ、伴出遺物から中世墓と推定した。そのうち人骨や歯牙を伴うものはD・E-11・12グリッドで9基検出された。なお人骨や歯牙については、付編1・2の鑑定結果を参照していただきたい。土坑は14基検出されたが、そのうち7基はG-12グリッドに集中している。このうち特徴的な土坑6基について説明を行いたい。小穴は17基検出され、配列を検討したが、特に建物の認定には至らず、礫石や柱根も出土しなかったので、その性格は不明である。溝状遺構はG・H-12グリッドから1条検出されている。

A 中世墓

大平遺跡における中世墓について、木村弘之氏の分類（木村弘之 1997）に従って考えていきたい⁽¹⁾。木村氏は一の谷中世墳墓群遺跡の分類を中心にして、大きく中世墓を6分類している。

①塚墓……盛土によって塚を築いた墓で、土葬を基本とするが、中心に火葬遺構も存在することがある。

②コの字形区画墓……丘陵地の斜面部に築かれ、コの字形の溝によって区画した墓。

③土坑墓……土葬墓といわれる形態で、地面向を掘り窪め、遺体を埋葬した墓。

④集石墓……石を集積してつくった火葬墓。

⑤地下式塚……地下に縦穴を掘り、この底面からさらに横に掘り広げて地下室を築いた墓。

⑥墓標をもつ墓……墓標を立て、この下部に遺体・遺骨を埋葬した墓

一の谷中世墳墓群遺跡では、総墓数888基の約半数の429基が集石墓であり、それらは外部施設の形態で5分類されている。分類の基準は以下の通りである⁽²⁾。

I類……縁石（区画石）を有し、平面形が方形または長方形をなす。

II類……縁石（区画石）はないが、方形または長方形をなす。

III類……縁石（区画石）はなく、形状も不整形で石が集積しただけのもの。

IV類……小穴を穿って骨蔵器を埋蔵しただけのもの。

V類……小穴に火葬骨を埋葬しただけのもので、上部集石が流失した可能性もあるもの。

そこで、2-1区で検出した集石墓を一の谷中世墳墓群遺跡の基準に従って分類してみると、III類とV類に限定できると思われる。ただし、V層上面まで重機で掘り下げたり、調査時に集石とわからず、石を取り除いた遺構も多いと考えられ、集石の状況については不確定要素が強いことをお断りしておきたい。

S X21011・21361（第25図 図版7・9-2～4）

S X21011は、E-11・12グリッドで検出された集石墓III類である。縁石はなく、径20～60cm程の礫を楕円形に近い形に配置しており、崩れた様子はない。長軸185cm、短軸120cm、深さ42cmを測る。集石をはずすと不整橿円形を呈する土坑となり、土坑内には床面上10cm近くまで行が陥没したように落ち込んでいた。覆土は2層に分けられるが、上位は粘性・締まりとともに弱い黒色土で、下位は粘性・締まりとともにない暗褐色土で人骨・炭化材を含む。この暗褐色土中から18片の歯牙、11個の歯および頭骨片を中心とした火葬骨が検出された。これらの人骨や歯牙は、鑑定結果から2個体分埋葬されていたようである。また検出状況からみると、土坑内の石は土葬した遺体上面に乗せたものが、その腐食によって陥没したようにもみえるので、S X21011は、土葬と火葬の両方が行われた可能性も考えられるが、断定はできない。出土遺物はない。S X21361は、E-11グリッドで検出された集石墓III類である。縁石はなく、

土坑上部に20~40cm程度の疊を不整形に配置してある。長軸190cm、短軸65cm、深さ20cmを測る。覆土は粘性が弱くて、縮まりのない黒色土で、火葬骨と炭化物が検出された。出土人骨は、細い桡骨が含まれており女性の可能性が考えられる。土師器の小破片が出土しているが、造構の時期を決定できるものではない。

S X21016・21378・21382（第26図 図版8・9-1）

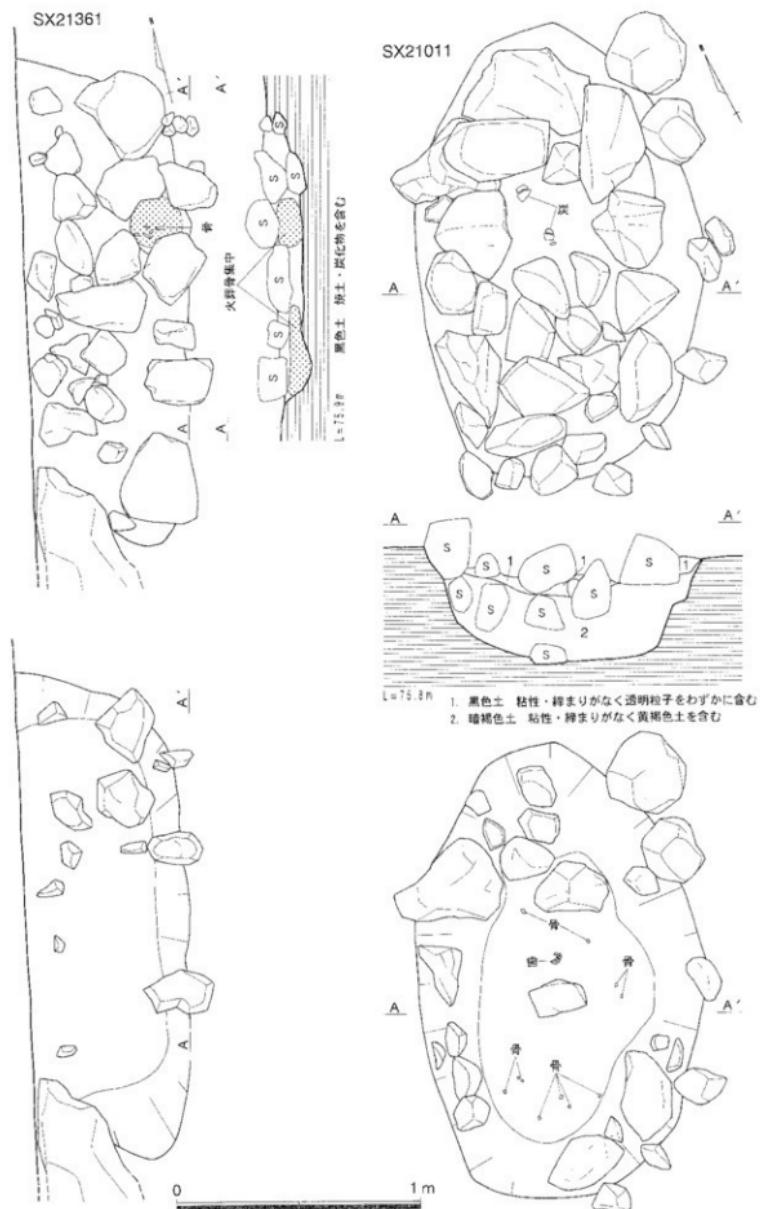
S X21016は、E・11グリッドで検出された集石墓V類である。検出時に掘り方がわからず、上部の集石を取り除いてしまったために、集石の形態はわからないが、下部の土坑は不整楕円形を呈し、長軸127cm、短軸85cm、深さ25cmを測る。覆土は3層に分けられる。上層は粘性は弱いが縮まりのややある暗褐色土で、中層と下層は粘性はないがやや縮まりのある黒褐色土で、火葬骨と炭化物を含む。出土遺物として、15世紀末から16世紀初頭に位置づけられるかわらけと北宋銭（熙寧元寶）が出土している。S X21378は、E・11グリッドで検出された集石墓V類である。S X21016の西側に隣接し、平面形態は半円形で、西側は調査区外となっている。長軸58cm、短軸35cm、深さ18cmを測る。覆土は2層に分けられるが、2層とも粘性は弱いがやや縮まりのある黒褐色土で、火葬骨片を含む。出土遺物は、15世紀末から16世紀初頭のかわらけが2点出土している。S X21382は、E・11グリッドで検出された集石墓V類である。S X21016の西側に隣接し、平面形態は楕円形を呈し、長軸100cm、短軸60cm、深さ30cmを測る。覆土は粘性は弱いがやや縮まりのある黒褐色土で、火葬骨と炭化物を含む。出土人骨は、四肢骨を中心とする火葬骨である。出土遺物は、小破片のため図化しなかったが、15世紀代と思われるかわらけが出土している。3基の中世墓は、切り合いから時間差はないと思われ、ほぼ同時に構築されたものと思われる。

S X21344・21345・21385・21387・（第27図 図版9-5~8）

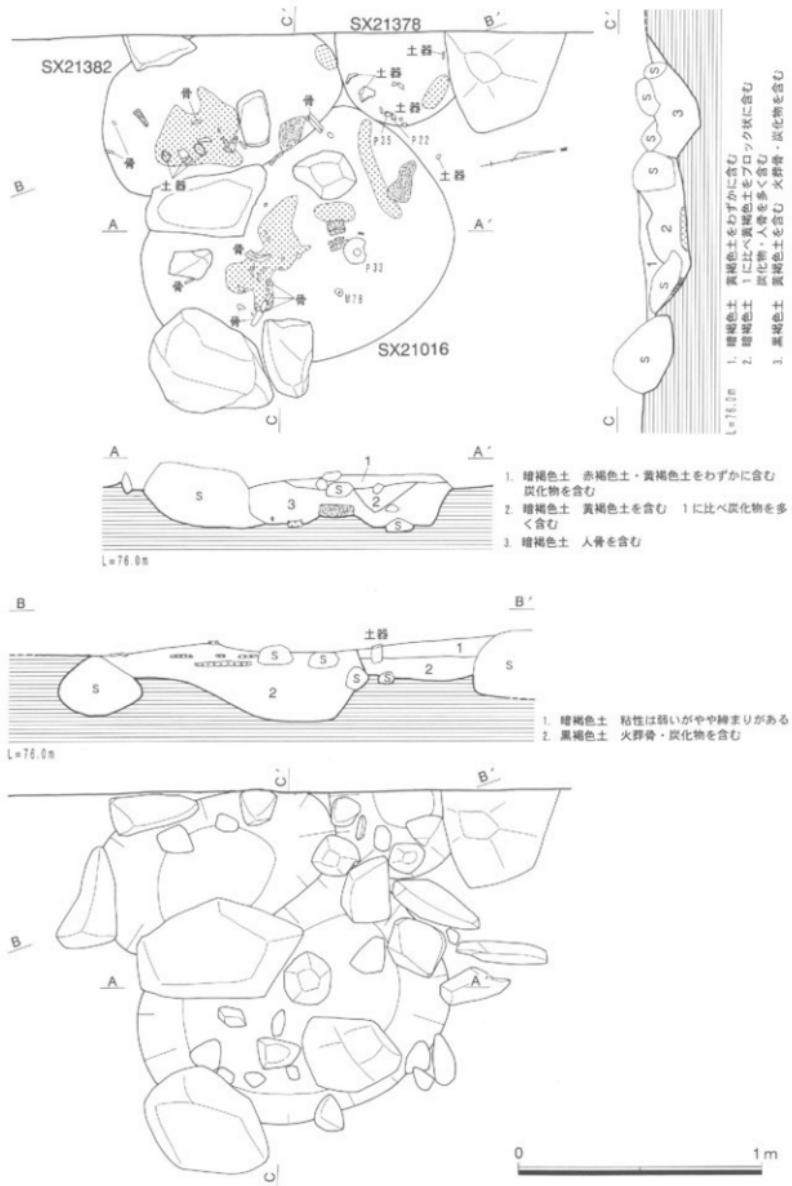
S X21344は、D・E・11グリッドで検出された集石墓V類である。S X21345の南側に位置しており、平面形態は不整形で、長軸100cm、短軸69cm、深さ13cmを測る。覆土は粘性は弱いが縮まりのややある暗褐色土で、四肢骨を主とした火葬骨片と炭化物を含む。出土遺物は、六道銭と思われる被熱した3枚の銭貨（元祐通寶、大觀通寶、永樂通寶）が锈着して検出されたほか、土器の小破片が出土しているが、出土土器からは時期を決定できない。S X21345は、D・E・11グリッドで検出された集石墓V類である。S X21344の北側に位置しており、平面形態は隅丸方形で、長軸55cm、短軸39cm、深さ13cmを測る。覆土は粘性・縮まりとともに弱い暗褐色土で、火葬骨と炭化物を含んでいる。火葬骨は四肢骨を主とした細片である。出土遺物はない。S X21385は、D・11グリッドで検出された集石墓V類で、S X21387の東側に位置する。上部集石は、流失した可能性が高く、石は残存していない。隅丸方形を呈した土坑は、長軸40cm、短軸35cm、深さ15cmを測る。覆土は粘性は弱いがやや縮まりのある暗褐色土で、火葬骨片と炭化物を含む。小破片なので図化しなかったが、かわらけが出土している。S X21387は、D・E・11グリッドで検出された集石墓V類である。S X21344の東側に隣接しており、集石は径10~20cm程の疊が7個並べられていたが、調査中に移動した可能性もあり、判然としない。その下に楕円形を呈した土坑があり、長軸140cm、短軸65cm、深さ15cmを測る。覆土は粘性は弱いがやや縮まりのある黒褐色土で、火葬骨片と炭化物を含む。出土遺物はない。

S X21010・21013・21021（第28図）

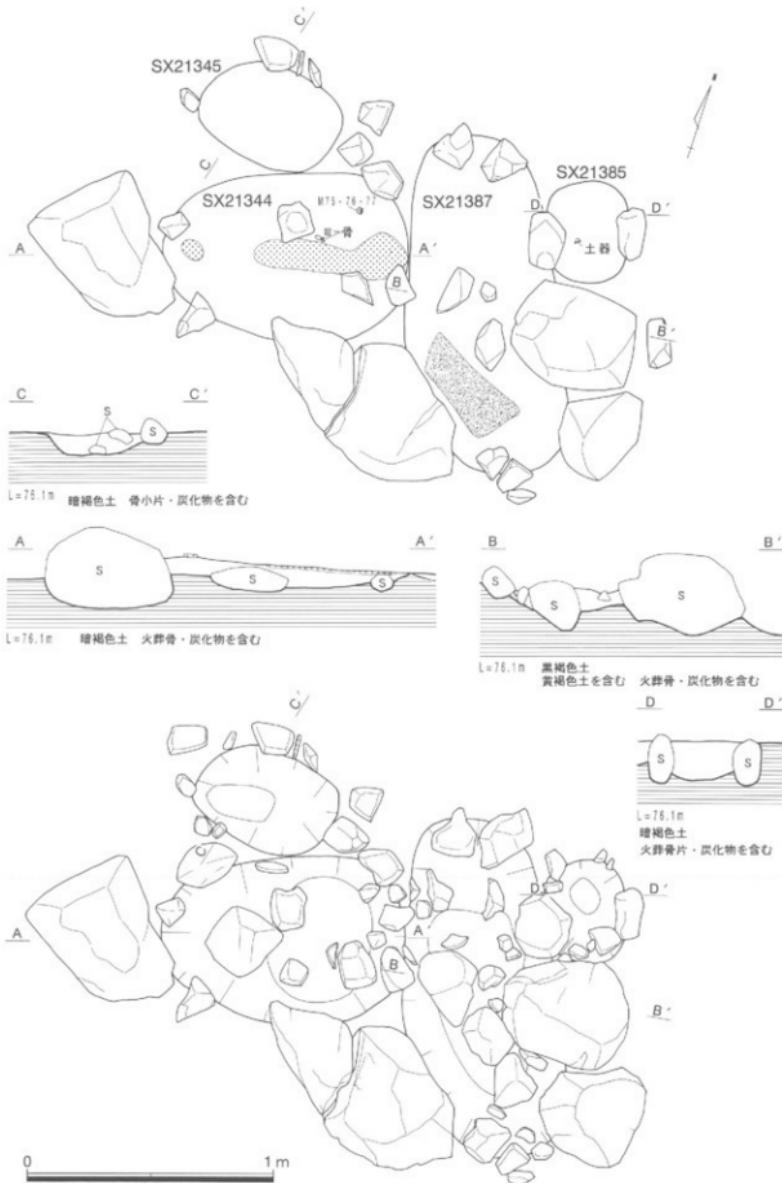
S X21010は、E・12グリッドで検出された集石土坑である。集石は、径10~60cm程度の疊が不整形に並んで、数は少ない。集石の下に隅丸方形の土坑をもち、長軸50cm、短軸45cm、深さ30cmを測る。覆土は、粘性・縮まりとともに弱い暗褐色土で、遺物は出土せず、骨片等も検出されなかったが、検出状況等から集石墓III類と考えた。S X21013は、E・11・12グリッドで検出された集石土坑である。調査時に掘り方がわからず、集石の一部を取り除いてしまったが、径20~80cm程度の疊を楕円形に近い形に並べて、その下に楕円形の土坑をもつ。長軸170cm、短軸120cm、深さ30cmを測る。覆土は、粘性・縮まりとともに



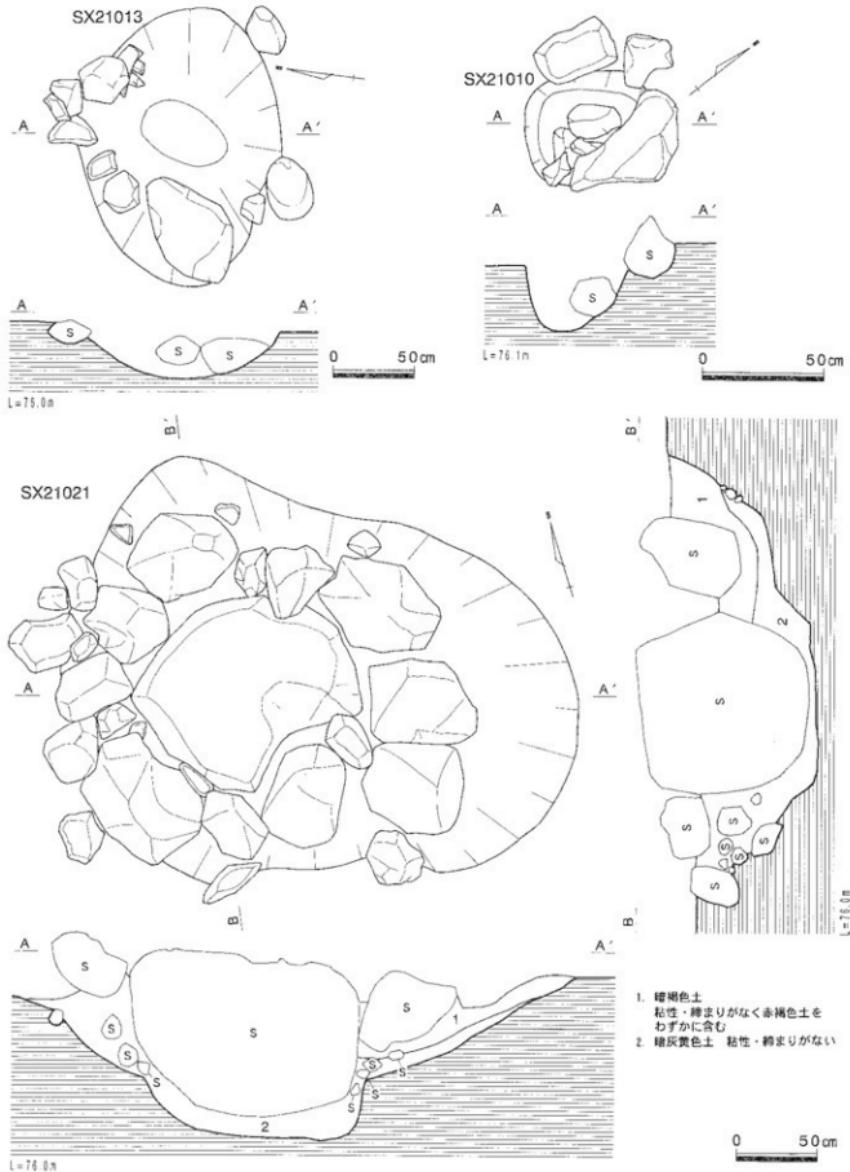
第25図 中世墓S X21011・21361実測図



第26図 中世墓 SX21016・21378・21382実測図



第27図 中世墓 S X21344・21345・21385・21387実測図

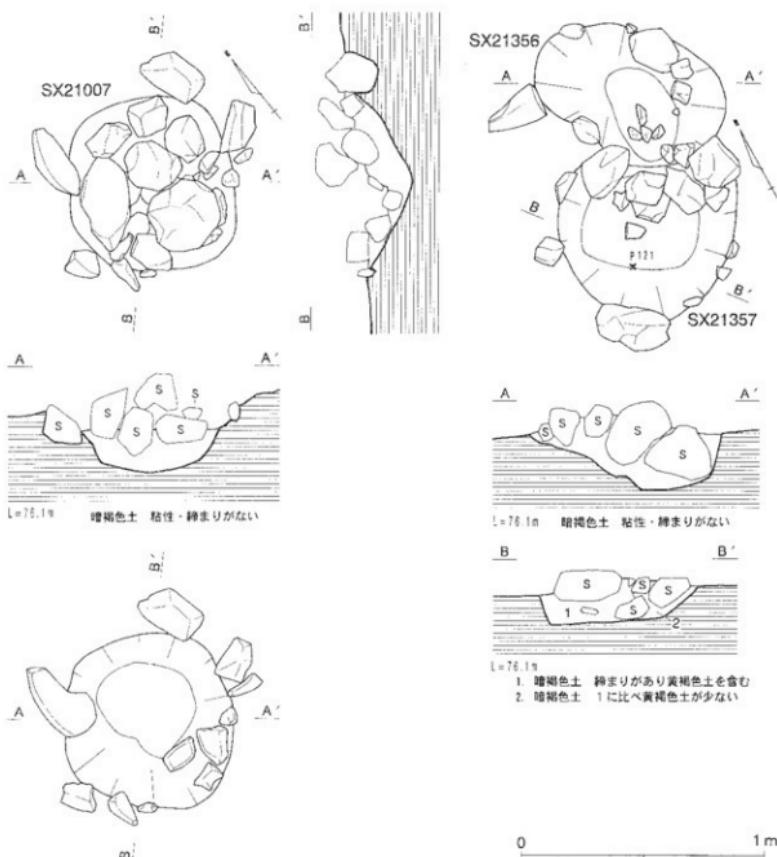


第28図 中世墓SX21010・21013・21021実測図

弱い暗褐色土で、遺物は出土せず、骨片等も検出されなかつたが、検出状況等から集石墓III類と考えた。SX21007は、E-12グリッドで検出された集石土坑である。集石は、径140cm程の礫（基標として使用したか？）を中心に径30~70cm程度の礫がその周辺に並んでいて、崩れた様子はない。集石の下に隅丸方形の土坑をもち、長軸305cm、短軸220cmを測る。覆土は2層に分かれ、上位は粘性・締まりとともに弱い暗褐色土で、下位は粘性はあるが締まりのない暗灰黄色土で、ともに遺物は出土せず、骨片等も検出されなかつたが、検出状況等から集石墓III類と考えた。

S X 21007・21356・21357(第29図)

S X 21007は、E-13グリッドで検出された集石土坑である。径10~40cm程度の礫が、長軸75cm、短軸



第29図 中世墓 S X 21007・21356・21357実測図

71cmの範囲に密集してほぼ円形を呈している。その下に楕円形の土坑をもつ。覆土は粘性・縮まりとともに弱い暗褐色土で、遺物は出土せず、集石および土坑から骨片等は出土していないが、検出状況等から集石墓III類と考えた。S X 21356は、E - 13グリッドでS X 21357に隣接して検出された集石土坑である。径20~30cm程の礫を不整形に並べて、その下に楕円形に近い形の土坑をもつ。長軸80cm、短軸45cm、深さ27cmを測る。覆土は粘性・縮まりとともにない暗褐色土で、遺物や骨片等は出土しなかつたが、検出状況等から集石墓III類と考えた。S X 21357は、E - 13グリッドでS X 21356に隣接して検出された集石土坑である。径10~30cm程の礫を不整形に並べて、その下に楕円形に近い形の土坑をもつ。長軸73cm、短軸65cm、深さ20cmを測る。覆土は粘性は弱いがやや縮まりのある暗褐色土で、炭化物をわずかに含んでいた。覆土中より19世紀代と思われる行平の小破片が出土しているが、後世の混入品と思われる所以、これでは構造の年代の決定はできない。骨片等は出土しなかつたが、検出状況等から集石墓III類と考えた。

S X 21031・21038・21350・21351（第30図）

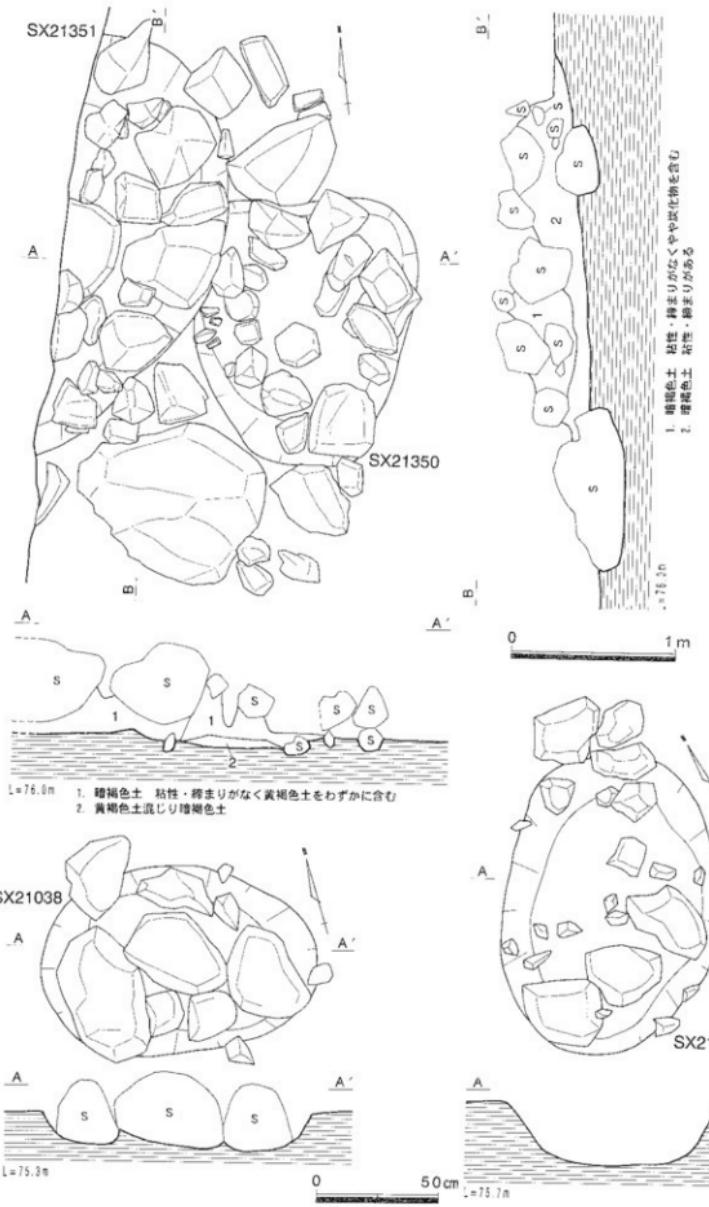
S X 21031は、F - 12グリッドで検出された集石土坑である。集石は、径10~30cm程の礫を不整形に並べて、その下に楕円形の土坑をもつ。長軸125cm、短軸84cm、深さ30cmを測る。覆土は、粘性・縮まりとともに弱い暗褐色土で、遺物は出土せず、骨片等も検出されなかつたが、検出状況等から集石墓III類と考えた。S X 21038は、F - 12グリッドで検出された集石土坑である。集石は、径10~60cm程の礫を不整形に並べて、その下に楕円形の土坑をもつ。長軸110cm、短軸80cm、深さ11cmを測る。覆土は、粘性・縮まりとともに弱い暗褐色土で、遺物は出土せず、骨片等も検出されなかつたが、形状等から集石墓III類と考えた。S X 21350とS X 21351は、E - 11・12-F - 11・12グリッドで検出された集石土坑である。S X 21350の集石は、径20~50cm程の礫を楕円形に並べて、その下に楕円形の土坑をもつ。長軸160cm、短軸140cm、深さ10cmを測る。覆土は粘性・縮まりとともにない暗褐色土で、炭化物をわずかに含む。西側に隣接するS X 21351の集石は、径20~60cm程の礫を不整形に並べてあり、その下に楕円形の土坑をもつが、西側は調査区外となつていて。長軸220cm、短軸100cm、深さ27cmを測る。覆土は2層に分かれ、上位は粘性・縮まりとともにない暗褐色土で、わずかに炭化物を含む。下位は黄褐色土混じり暗褐色土である。2基とも遺物や骨片等は出土しなかつたが、検出状況等から集石墓III類と考えた。

S X 21040・21366（第31図）

G・H - 12グリッドで隣接して検出された集石土坑である。S X 21040の集石は、径80cm程の礫を中心にしてその周囲に径10~60cm程の礫を並べてある。その下に楕円形の土坑をもつ。長軸145cm、短軸130cm、深さ50cmを測る。覆土は2層に分けられ、上位は粘性・縮まりとともにない暗褐色土で、下位は黄褐色土混じり暗褐色土である。南に隣接するS X 21366の集石は、径10~110cm程の礫を不整形に並べて、その下に楕円形の土坑をもつ。長軸195cm、短軸130cm、深さ44cmを測る。覆土は粘性・縮まりとともにない暗褐色土である。切り合いで、S X 21366の方が古いと思われる。2基とも遺物や骨片等の出土はなかつたが、検出状況等から集石墓III類と考えた。

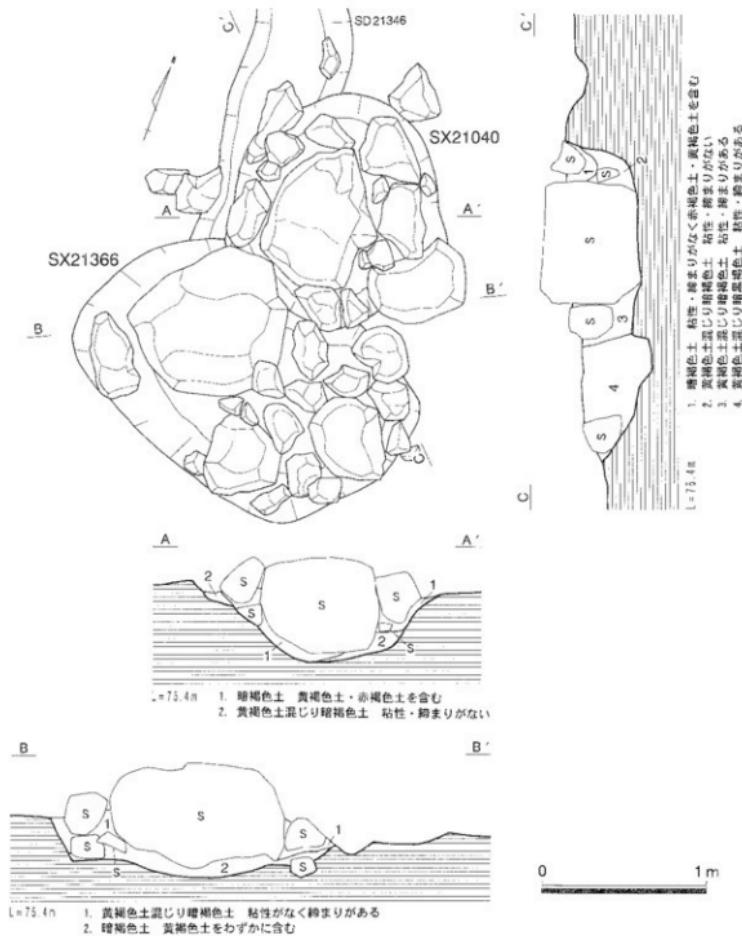
以上中世墓と思われる各遺構について述べたが、骨片等を伴う集石墓9基、骨片等は検出されなかつたが、礫がまとまって検出されている状況や、集石の配置が骨片を伴う集石墓と一連であることから、集石墓と推定したものが12基の合計21基の中世墓を検出した。しかし、これらの中世墓の中で藏骨器を伴う墳墓は検出されておらず、藏骨器として使用した可能性を考えられる陶磁器類も検出されなかつた。また、五輪塔などの石塔も検出されなかつた。

次に中世墓の年代について、出土遺物を中心に考えてみたい。S X 21016からかわらけ（第67図P33）、S X 21378からかわらけ（第66図P22・第67図P35）が出土している。これらは15世紀後半～16世紀初頭のものと思われる。また、S X 21016から熙寧元年（初飾年代1068年）、S X 21344から元祐通寶（初鑄年

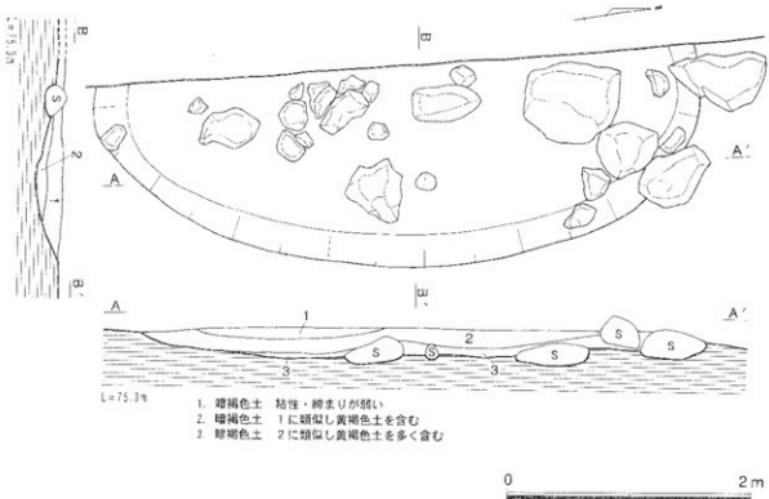


第30図 中世墓S X 21031・21038・21350・21351実測図

代1086年)、大觀通寶(初鑄年代1107年)、永樂通寶(初鑄年代1408年)が出土しているので、遺物のうえからは、中世墓は15世紀代から16世紀初頭にかけて墓造されたものと思われる。



第31図 中世墓SX21040・21366実測図



第32図 不明遺構 S X21029実測図

B 不明遺構

S X21029 (第32図)

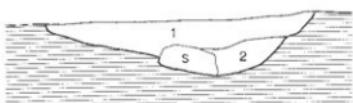
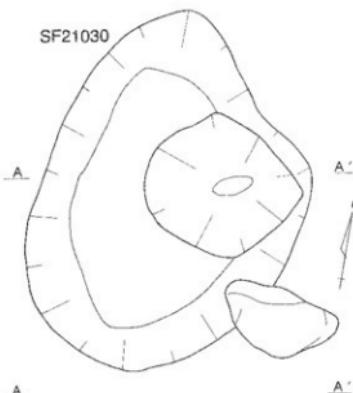
G-12グリッドで検出した集石土坑である。径10~50cm程の礫を不整形に並べてあり、その下に楕円形を呈した長軸486cm、短軸144cm、深さ24cmの土坑をもつ。覆土は3層に分けられるが、3層とも粘性・縮まりとともに弱い暗褐色土をベースにしている。遺物は出土せず、土坑の性格や年代はわからない。

C 土坑

S F21024・21027・21028・21030・21034 (第33図)

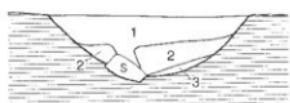
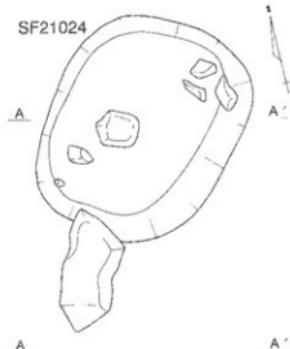
S F21024は、G-12グリッドで検出した隅丸方形を呈した土坑である。長軸94cm、短軸77cm、深さ24cmを測る。断面は緩やかに立ち上がり、覆土は3層に分けられる。上位2層は粘性・縮まりとともに弱い暗褐色土をベースにして黄褐色土を混入し、下位は黄褐色土をベースにして暗褐色土を混入している。遺物は出土しなかった。S F21027は、G-12グリッドで検出した楕円形を呈した土坑である。長軸81cm、短軸53cm、深さ11cmを測る浅い土坑である。断面は緩やかに立ち上がり、覆土は2層に分けられる。2層とも粘性・縮まりとともに弱い暗褐色土をベースにして黄褐色土を混入している。遺物は出土しなかった。S F21028は、G-12グリッドで検出した楕円形を呈した土坑である。長軸81cm、短軸60cm、深さ21cmを測る。北側はほぼ垂直に掘り込まれているが、南側は緩やかに掘り込まれている。覆土は3層に分けられるが、3層とも粘性・縮まりとともに弱い暗褐色土をベースにして黄褐色土を混入しており、下位にいくほど黄褐色土の混入が多くなる。遺物は出土しなかった。S F21030は、F-12グリッドで検出した不整楕円形を呈する土坑である。長軸133cm、短軸105cm、深さ31cmを測る。断面は緩やかに立ち上がり、覆土は2層に分けられる。上位は粘性・縮まりとともに弱い暗褐色土で、下位はやや粘性のある暗褐色土

SF21030



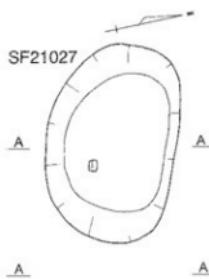
- L=75.4m
1. 暗褐色土 粘性・練まりがない
2. 緑褐色土 1に比べやや粘性がある

SF21024



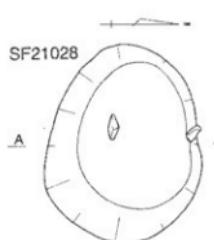
- L=75.4m
1. 暗褐色土 粘性はなくやや練まりがある
2. 黄褐色土混じり暗褐色土
3. 黄褐色土 2に類似し黄褐色土・暗褐色土を含む

SF21027



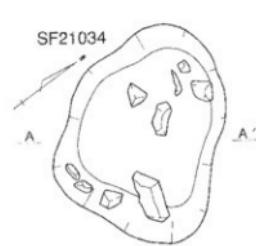
- L=75.4m
1. 暗褐色土 粘性・練まりがない
2. 緑褐色土 1に類似し黄褐色土を含む

SF21028



- L=75.4m
1. 暗褐色土 粘性・練まりがない
2. 黄褐色土混じり暗褐色土
3. 黄褐色土 混じり暗褐色土
4. 暗褐色土 暗褐色土ブロックを含む

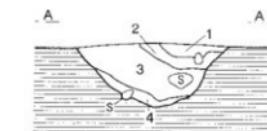
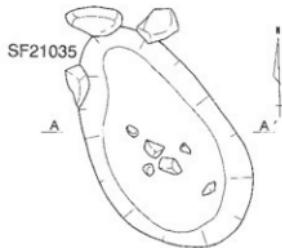
SF21034



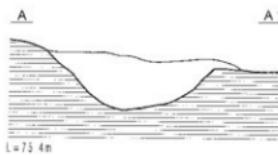
- L=75.2m
1. 黄褐色土混じり暗褐色土
2. 黄褐色土混じり暗褐色土 1に類似
3. 明黃褐色土 1・2に類似し黄褐色土
ブロックを含む

0 1 m

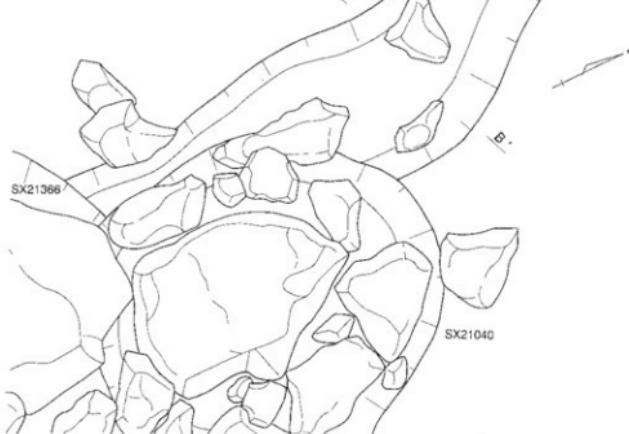
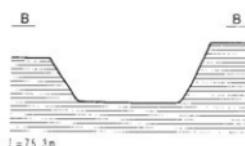
第33図 土坑S F 21024・21028・21030・21034実測図



1. 褐褐色土 やや砂質 粘性・締まりがある
2. 褐褐色土混じり黄褐色土 粘性・締まりがある
3. 褐褐色土 粘性・締まりがありやや灰色透し
4. 黄褐色土 3に類似しやや砂質



SD21346



0 1 m

第34図 土坑 S F 21035実測図 溝状造構 S D 21346実測図

である。遺物は出土しなかった。S F 21034は、G-12グリッドで検出した不整形の土坑である。長軸85cm、短軸61cm、深さ19cmを測る。ほぼ垂直に近い形で掘り込まれているが、南側はやや深く掘り込まれている。覆土は3層に分けられるが、3層とも粘性・締まりとともに弱い暗褐色土をベースにして黄褐色土を混入しており、下位は黄褐色土の混入が多く、明るい色調となっている。遺物は出土しなかった。

S F 21035（第34図）

G-12グリッドで検出した楕円形を呈する土坑である。長軸100cm、短軸59cm、深さ24cmを測る。断面は緩やかに立ち上がり、覆土は4層に分けられる。上位3層は粘性・締まりとともに普通の暗褐色土をベースにして黄褐色土を混入しており、最下層は黄褐色土をベースにして暗褐色土を混入していく砂質が強い。遺物は出土しなかった。

溝状遺構

S D 21346（第34図）

G-12～H-12グリッドにかけて検出された溝状遺構である。北側は調査区外となっていて、南側はS X 21040とS X 21366で切られている。検出長2.8m、幅46～65cm、深さ25cmを測り、東側に緩やかなカーブを描きながら、ほぼ南北方向に延びていて、断面は緩やかに立ち上がり、覆土は粘性・締まりとともにない暗褐色土で、黄褐色土を混入している。切り合いかからS D 21346の方がS X 21040・S X 21366よりも古いと思われる。遺物は出土しなかった。

（2）段丘崖

D-13グリッドからH-13グリッドにあたる部分で、後世に水田を造成する際につくられた3列ほどの大がかりな石垣のため、かなり遺構が削平を受けており、E-13・14グリッドでのみ遺構を検出した。検出した5基の土坑のうち、特徴的な2基の土坑について説明していきたい。なお小穴は3基検出されたが、遺物は出土せず、その性格はわからない。

A 土坑

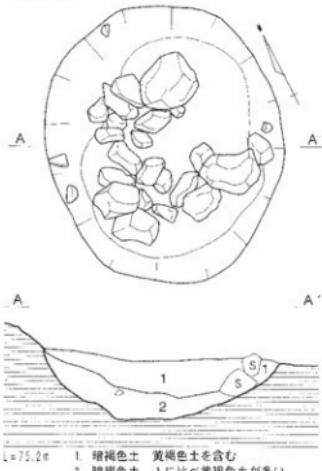
S F 21022・21106（第35図 図版10-1）

S F 21022は、E-13・14グリッドの斜面のテラス状の所で検出した楕円形を呈した土坑である。長軸115cm、短軸96cm、深さ30cmを測る。断面は緩やかに立ち上がり、覆土は2層に分けられる。2層とも粘性・締まりとともにない暗褐色土に黄褐色土が混入している。遺物は出土せず、土坑の年代や性格はわからない。S F 21106は、E-14グリッドで検出した隅丸方形を呈した土坑である。長軸104cm、短軸88cm、深さ27cmを測る。ほぼ垂直に近い形で掘り込まれていて、底面は比較的平らである。覆土は粘性はないがやや締まりのある暗褐色土をベースにして黄褐色土を混入している。遺物は出土しなかったが、検出状況等から土葬墓の可能性も考えられるが断定はできない。

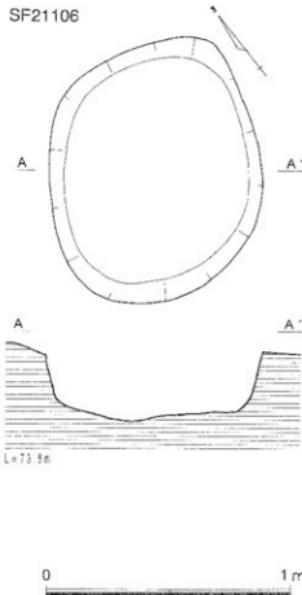
（3）第1河道路跡（図版10-4）

D-14グリッドからI-13グリッドにあたる部分で、1基の不明遺構と22基の土坑、そして51基の小穴が検出された。22基の土坑については、1区で検出された円形皿状土坑と類似するS F 21079とS F 21104について説明していきたい。51基の小穴については配列を検討すると、直線的に並ぶものもあるが、遺構内から遺物は出土せず、礎石や柱根も検出されなかったので、建物の認定はできなかった。

SF21022



SF21106



第35図 土坑 S F 21022・21106実測図

A 不明遺構

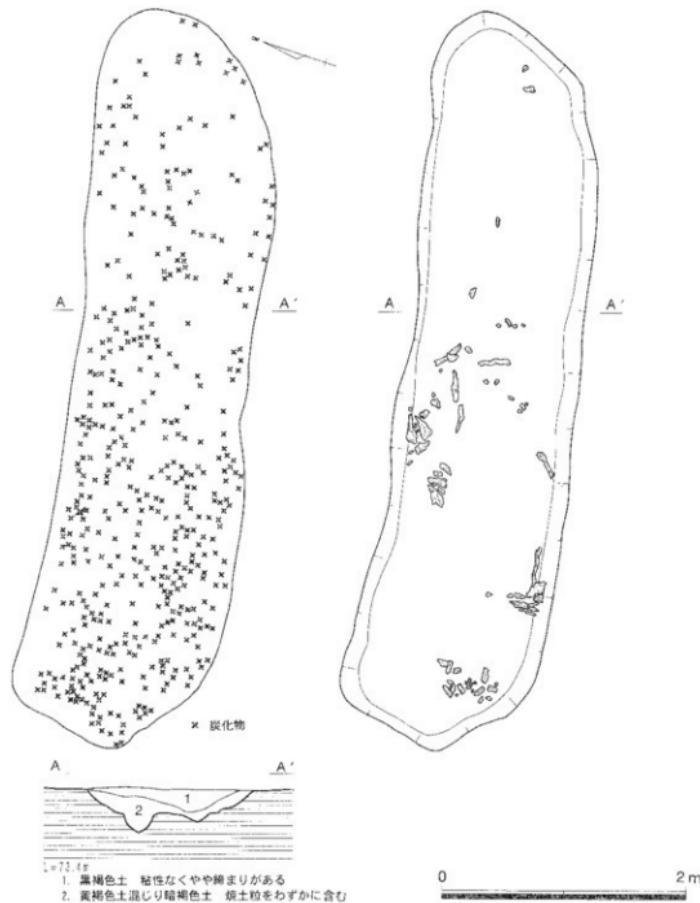
S X21123 (第36図 図版10-5・6)

G-13・14グリッドで検出された。平面形態は橢円形を呈し、長軸600cm、短軸150cm、深さ35cmを測る。検出面から底面まで、土坑内全体で炭化材が大量に残存しているが、焼痕や骨片は検出できなかつた。覆土は2層に分けられ、上位は粘性はないが縮まりのある黒褐色土で、下位は粘性はないが縮まりのある黄褐色土混じり暗褐色土で、焼上粒を微量含んでいる。遺物は出土せず、壁面や床面は焼けていなくて、焼土はほとんど検出されなかつたので、火葬施設とは断定できず、炭化材の廃棄場所の可能性が高いように思われる。また、出土遺物がないので年代の特定はできない。

B 土坑

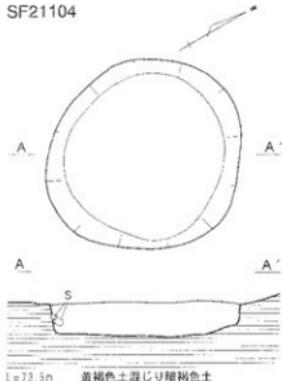
S F 21079・21104 (第37図 図版10-2)

S F 21079は、G-13グリッドで検出した円形皿状土坑である。長軸90cm、短軸85cm、深さ31cmを測る。ほぼ垂直に近い形で掘り込まれていて、底面は平らである。覆土は2層に分けられるが、2層とも粘性はないがやや縮まりのある暗褐色土をベースにして黄褐色土を混入している。遺物は出土しなかつたが、検出状況等から土葬墓の可能性も考えられる。S F 21104は、E-14グリッドで検出した円形皿状土坑である。長軸85cm、短軸78cm、深さ14cmを測る。ほぼ垂直に近い形で掘り込まれていて、底面は平らである。覆土は粘性はないがやや縮まりのある暗褐色土をベースにして黄褐色土を混入している。遺物は出土しなかつたが、検出状況等から土葬墓の可能性も考えられる。

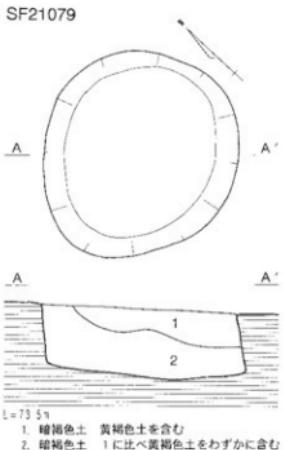


第36図 不明遺構 S X21123実測図

SF21104



SF21079



0 1 m

第37図 土坑 S F 21079・21104実測図

(4) 第2段丘面

D-15グリッドから1-15グリッドの範囲で、土層が比較的標準堆積している部分である。遺構は、G-15グリッドから集石墓と思われるS X21375を検出したが、第1段丘面からの遺構の連続性を考えるとやや疑問が残るが、検出状況から集石墓と推定した。土坑は22基検出されたが、そのうち6基はE-17グリッドのS D21198の両側から3基づつ検出されている。耕作に関わる痕跡かとも思われるが推定の域をでない。22基の土坑中特徴的な8基について説明したい。小穴は48基検出されたが、配列を検討すると直線的に並ぶものもあるが、鹿石や柱根は検出されず、建物の認定はできなかった。

A 中世墓

S X21375 (第38図)

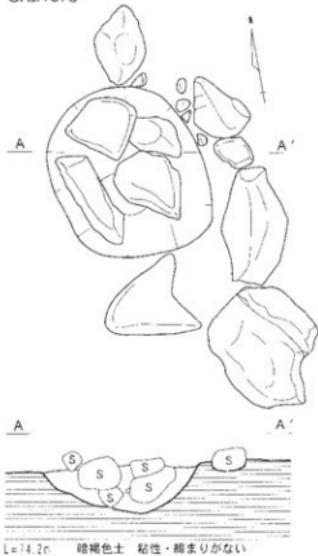
G-15グリッドで検出された集石土坑である。径30~50cm程の礫が環状に並べてある中に、長軸75cm、短軸69cm、深さ20cmを測る隅丸方形の土坑をもつ。覆土は粘性・締まりともにない暗褐色土で、径5~30程度の礫を多く含む。遺物や骨片等は出土しなかったが、形状等から集石墓Ⅲ類と考えた。

B 土坑

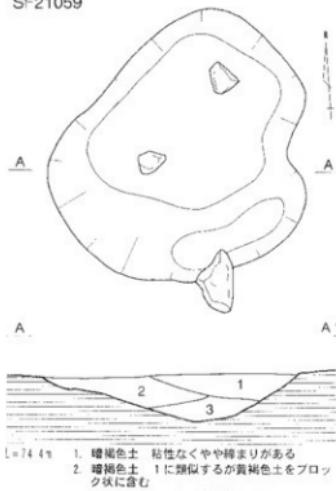
S F21059・21060・21065 (第38図 図版10-3)

S F21059は、E-17グリッドで検出した不整梢円形を呈する土坑である。長軸114cm、短軸96cm、深さ19cmを測る。断面は緩やかに立ち上がり、覆土は3層に分けられる。いずれも粘性はないがやや締まりのある暗褐色土に黄褐色土が混入している。遺物は出土しなかった。S F21060は、E-17グリッドで検出した不整形の土坑である。長軸100cm、短軸80cm、深さ34cmを測る。西側はほぼ垂直に掘り込まれて

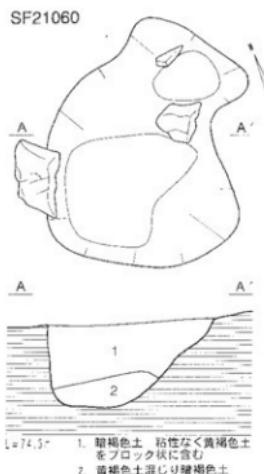
SX21375



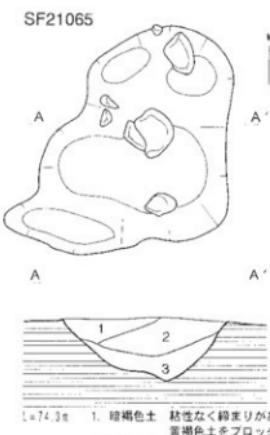
SF21059



SF21060



SF21065



第38図 中世墓 S X21375実測図 土坑 S F 21059・21060・21065実測図

いるが、東側は緩やかに掘り込まれている。覆土は2層に分けられるが、2層とも粘性はないがやや縮まりのある暗褐色土をベースにして黄褐色土が混入している。遺物は出土しなかった。S F 21065は、E-17グリッドで検出した不整形の土坑である。長軸100cm、短軸77cm、深さ26cmを測る。断面は緩やかに立ち上がり、覆土は3層に分けられるが、3層とも粘性はないがやや縮まりのある暗褐色土をベースにして黄褐色土が混入している。遺物は出土しなかった。

S F 21054・21070・21084・21205（第39図）

S F 21054は、F-16グリッドで検出した不整形の土坑である。長軸72cm、短軸42cm、深さ30cmを測る。断面はU字形に近い形で、覆土は2層に分けられる。2層とも粘性はないがやや縮まりのある暗褐色土である。遺物は出土しなかった。S F 21070は、E-17グリッドで検出した不整方形を呈する土坑である。長軸140cm、短軸100cm、深さ17cmを測る。底面には地山の径5~20cm程度の躰が多く検出された。覆土は2層に分けられるが、2層とも粘性はないがやや縮まりのある暗褐色土をベースにして黄褐色土が混入している。小破片のため図化しなかったが、14世紀末から15世紀前半に位置づけられる古瀬戸後期前半の灰釉陶器片が出土している。土坑の性格はわからない。S F 21084は、G-14グリッドで検出した椭円形を呈する土坑である。長軸132cm、短軸95cm、深さ18cmを測る。底面は平らに近いが、地山には径10~20cm程の躰が多数混入している。覆土は3層に分けられるが、3層とも粘性はないがやや縮まりのある暗褐色土をベースにして黄褐色土を混入している。遺物は出土しなかったが、検出状況等から土葬墓の可能性も考えられる。S F 21205は、I-15グリッドで検出した椭円形を呈する土坑である。長軸136cm、短軸97cm、深さ25cmを測る。断面は緩やかに立ち上がり、覆土は3層に分けられるが、3層とも粘性はないがやや縮まりのある暗褐色土をベースにして黄褐色土を混入している。遺物は出土しなかったが、検出状況等から土葬墓の可能性も考えられる。

C 溝状遺構

S D 21198・21342（第40図）

S D 21198は、H-14~G-15グリッドにかけて検出された溝状遺構である。検出長19.4m、幅32~132cm、深さ4.4~22.2cmを測り、やや東側に緩やかなカーブを描きながら、N-44°-Eの方向に延びる。溝の流れの方向は、底面の高さなどから推定すると北東から南西に向かって流れているようである。覆土は2層に分けられるが、2層とも粘性・縮まりとともに弱い暗褐色土に黄褐色土が混入している。遺物は古瀬戸後期後半の擂鉢の小破片が出土している。S D 21342は、E-16~18グリッドにかけて検出された溝状遺構である。検出長13.4m、幅22~78cm、深さ4.7~16.2cmを測り、北西から南東に向かって、2~3区より延びているS D 23009に接続するような形で延びている。覆土は2層に分けられるが、2層とも粘性・縮まりともに弱い暗褐色土に黄褐色土を混入している。遺物は出土しなかった。

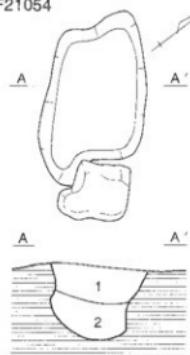
S D 21268（第41図）

H-15~G-16グリッドにかけて検出された溝状遺構である。検出長6.7m、幅36~76cm、深さ6.9~18.3cmを測り、N-56°-Eの方向に延びる。溝の流れの方向は、底面の高さなどから推定すると北東から南西に向かって流れているようである。覆土は粘性はないがやや縮まりのある暗褐色土に黄褐色土をプロック状に含んでいる。遺物は出土しなかった。

(5) 第2河道跡

E-18グリッドからJ-17グリッドの範囲で、2基の不明遺構と39基の土坑及び47基の小穴が検出された。39基の土坑については、1区で検出された円形皿状土坑と類似したものを中心に20基説明してみたい。47基の小穴について配列を検討すると、直線的に並ぶものもあるが、遺構内から遺物は出土せ

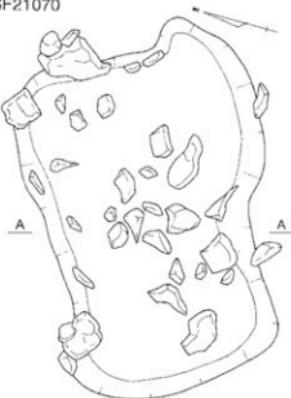
SF21054



L=74.3m

1. 緑褐色土 粘性なく觸りがある
黄褐色土をブロック状に含む
2. 緑褐色土 1に比べ黄褐色土を多く含む

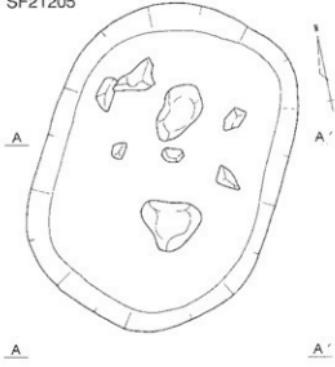
SF21070



L=74.3m

1. 緑褐色土 粘性なく黄褐色土をブロック状に含む
2. 緑褐色土 1に比べ黄褐色土が少ない

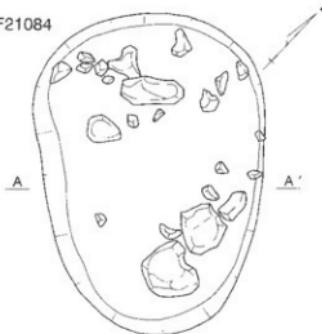
SF21205



L=75.0m

1. 緑褐色土 鮎まりあり黄褐色土をわずかに含む
2. 緑褐色土 黄褐色土をわずかに含む
3. 緑褐色土 1・2に比べ黄褐色土を多く含む

SF21084



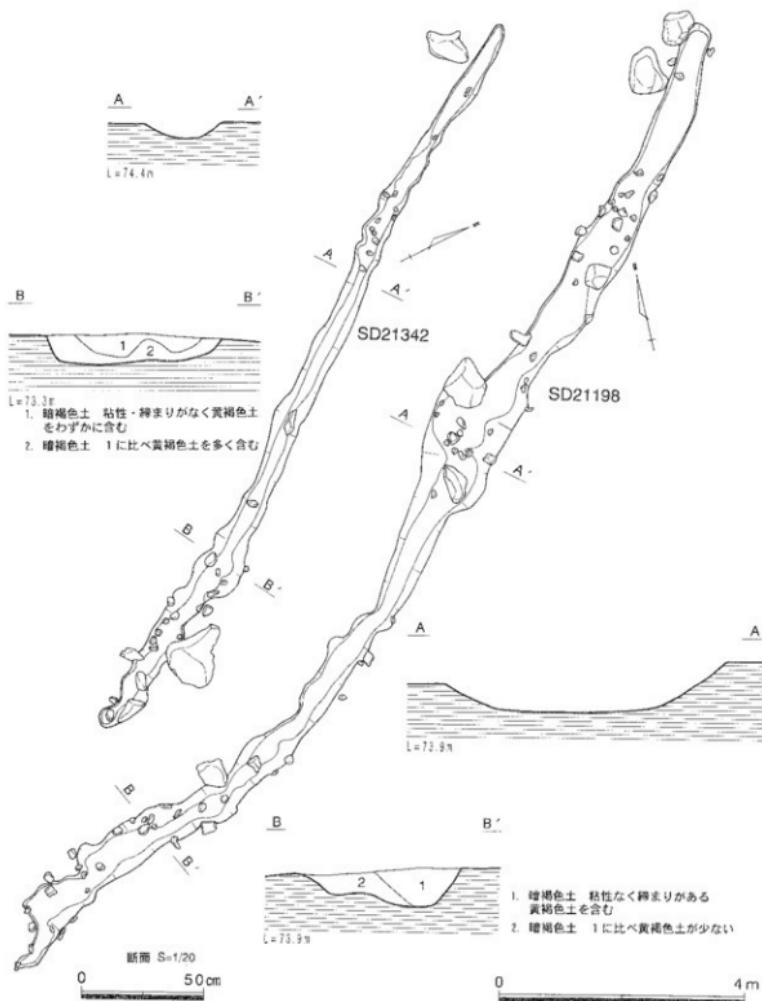
L=73.7m

1. 緑褐色土 黄褐色土をブロック状に含む
2. 黄褐色土混じり緑褐色土
3. 黄褐色土混じり緑褐色土 2に比べ黄褐色土が少ない

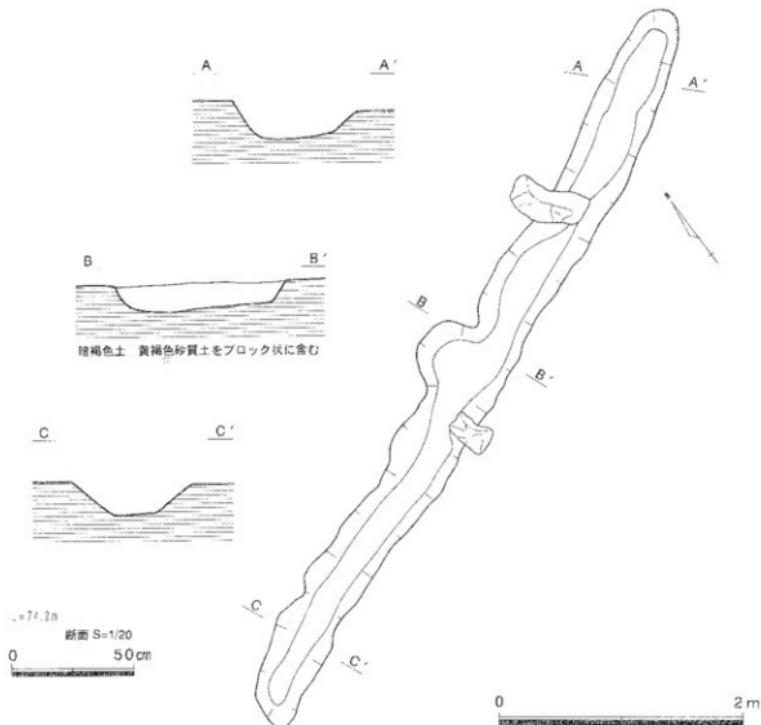
0

1m

第39図 土坑S F 21054・21070・21084・21205実測図



第40図 溝状遺構 S D21198・21342実測図



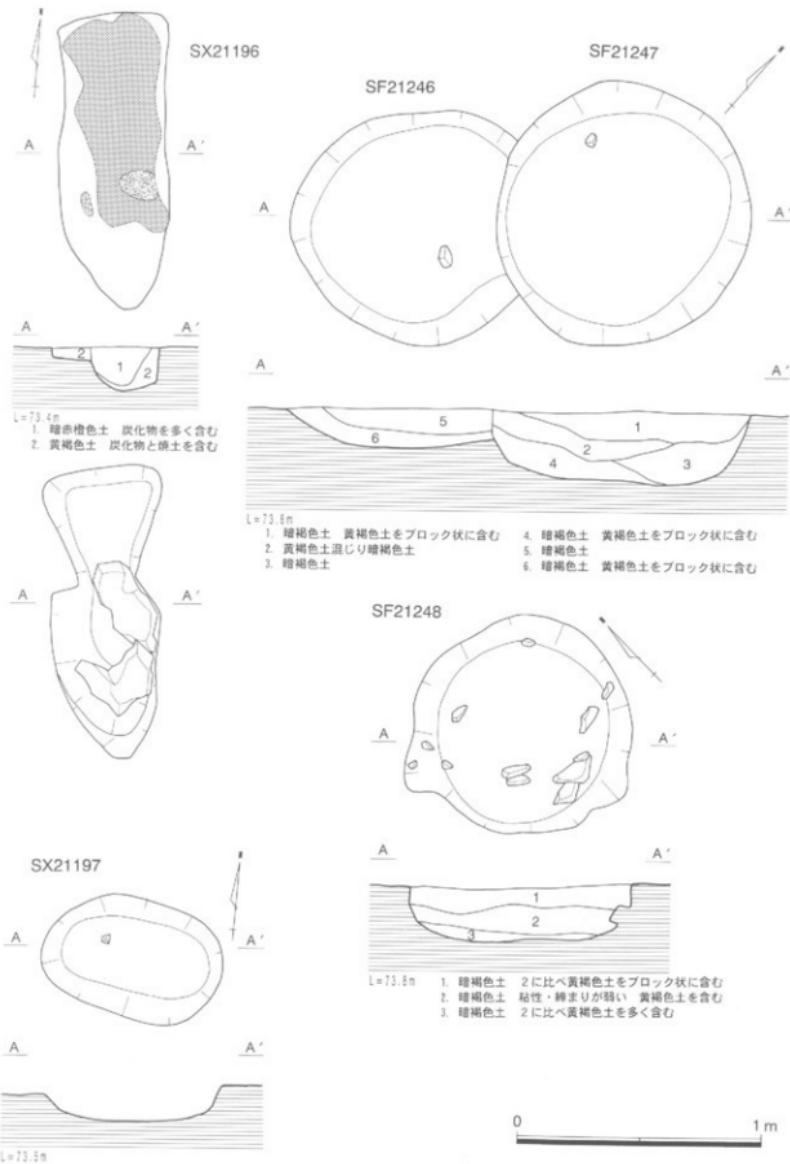
第41図 溝状遺構 S D 21268実測図

ず、礎石や柱根も検出されなかつたので、建物の認定はできず、小穴の性格も把握できなかつた。

A 不明遺構

S X21196・21197（第42図 図版11-1）

S X21196は、H-16グリッドで検出された。平面形態は不整形で、長軸123cm、短軸45cm、深さ18cmを測る。覆土は2層に分けられ、上位は粘性はないが締まりのある暗赤橙色土で、炭化物を大量に含んだ焼土と思われる。下位は粘性はないが締まりのある黄褐色土で、炭化物と焼土を含む。床面に径30cm程の礫が個置いてあるが、焼けておらず、壁面も焼けていないので、火葬施設とは断定できず、単なる焼却施設か、焼却物の廻叢場所の可能性も考えられる。出土遺物もないので年代の特定はできない。S X21197は、H-16グリッドで検出された。平面形態は梢円形で、長軸73cm、短軸48cm、深さ11cmを測る。覆土は粘性がないが締まりのある暗橙褐色土で、焼土と炭化物を含んでいる。骨片や遺物は出土せず、



第42図 不明遺構S X21196・21197実測図 土坑S F21246・21247・21248実測図

床面や壁面は焼けていないので、火葬施設とは断定できず、単なる焼却施設か焼却物の廃棄場所の可能性も考えられる。出土遺物もないので年代の特定はできない。

B 土坑（図版12-1・2）

S F 21246・21247・21248（第42図 図版11-6・7）

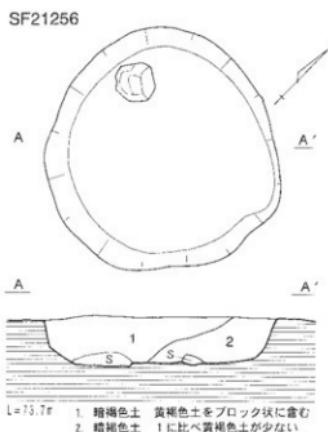
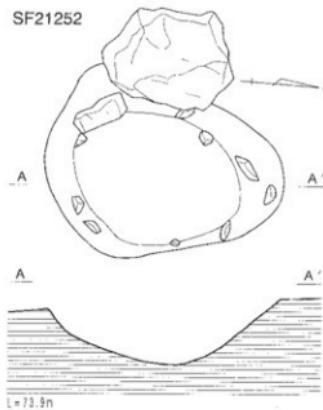
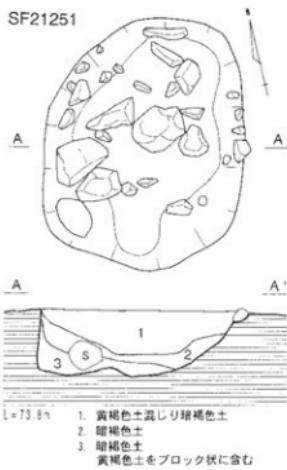
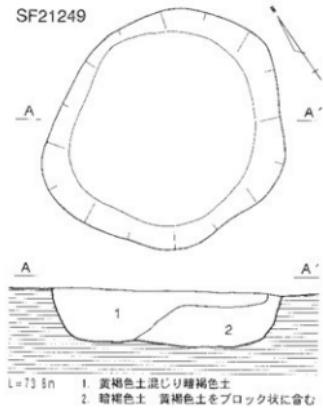
S F 21246とS F 21247は、F-17グリッドで隣接して検出した円形を呈する土坑である。切り合いからS F 21247の方が新しいと思われる。S F 21246は長軸94cm、短軸87cm、深さ16cmを測る。断面は緩やかに立ち上がり、覆土は2層に分けられるが、2層とも粘性・締まりとともに弱い暗褐色土をベースにして黄褐色土を混入している。S F 21247は長軸109cm、短軸104cm、深さ30cmを測る。ほぼ垂直に近い掘り方をなし、底面は平らでいわゆる円形皿状土坑である。覆土は4層に分けられるが、4層とも粘性・締まりとともに弱い暗褐色土をベースにして黄褐色土を混入している。2基とも遺物は出土しなかったが、検出状況等から土葬墓の可能性も考えられる。S F 21248は、F-18グリッドで検出した不整円形を呈する土坑である。長軸97cm、短軸90cm、深さ30cmを測る。断面はU字形を呈し、底面は平らである。覆土は3層に分けられるが、3層とも粘性・締まりとともに弱い暗褐色土をベースにして黄褐色土を混入している。遺物は出土しなかったが、検出状況等から土葬墓の可能性も考えられる。

S F 21249・21251・21252・21256（第43図 図版11-8）

S F 21249は、F-18グリッドで検出した不整円形を呈する土坑である。長軸100cm、短軸94cm、深さ22cmを測る。断面は平らに近い底面から直線的に立ち上げる。覆土は2層に分けられるが、2層とも粘性・締まりとともに弱い暗褐色土をベースにして黄褐色土を混入している。遺物は出土しなかったが、検出状況等から土葬墓の可能性も考えられる。S F 21251は、F-18グリッドで検出した梢円形を呈する土坑である。長軸103cm、短軸83cm、深さ27cmを測る。断面は西側は垂直に近い掘り方をなし、東側は緩やかな立ち上がりとなっている。覆土は3層に分けられるが、3層とも粘性・締まりとともに弱い暗褐色土をベースにして黄褐色土を混入している。遺物は出土しなかったが、検出状況等から土葬墓の可能性も考えられる。S F 21252は、F-18・19グリッドで検出した梢円形を呈する土坑である。長軸98cm、短軸76cm、深さ24cmを測る。断面は緩やかに立ち上がり、覆土は粘性・締まりとともに弱い暗褐色土である。遺物は出土せず、土坑の年代や性格はわからない。S F 21256は、G-18グリッドで検出した円形皿状土坑である。長軸100cm、短軸96cm、深さ20cmを測る。ほぼ垂直に近い形で掘り込まれていて、底面は平らである。覆土は2層に分けられるが、2層とも粘性・締まりとともに弱い暗褐色土をベースにして黄褐色土を混入している。遺物は出土しなかったが、検出状況等から土葬墓の可能性も考えられる。

S F 21235・21244・21250・21257（第44図 図版11-4）

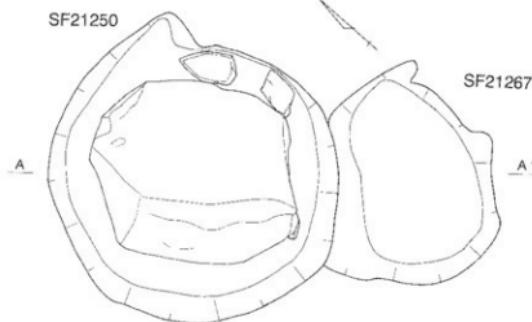
S F 21235は、G-17グリッドで検出した円形皿状土坑である。長軸110cm、短軸105cm、深さ28cmを測る。ほぼ垂直に近い形で掘り込まれていて、底面は平らである。覆土は3層に分けられるが、3層とも粘性・締まりとともに弱い暗褐色土をベースにして黄褐色土を混入している。遺物は出土しなかったが、検出状況等から土葬墓の可能性も考えられる。S F 21244は、G-17・18グリッドで検出した円形を呈する土坑である。長軸102cm、短軸92cm、深さ13cmを測る。断面は緩やかに掘り込まれ、底面は平らである。覆土は粘性・締まりとともに弱い暗褐色土である。遺物は出土せず、土坑の年代や性格はわからない。S F 21250とS F 21267は、F-18・19グリッドで隣接して検出した土坑である。切り合いからS F 21250の方が新しいと思われる。S F 21250は円形を呈し、長軸124cm、短軸118cm、深さ15cmを測る。中央部に径80cm程の礫が地山に食い込んで残存しており、その周囲が掘り込まれている。覆土は粘性・締まりとともにややある暗褐色土である。S F 21267は不整形の土坑で、長軸92cm、短軸68cm、深さ8cmを測る。ほぼ垂直に近い掘り方をなし、底面は平らである。覆土は粘性・締まりとともに弱い暗褐色土である。2基と



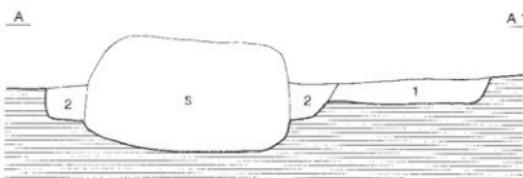
0 1 m

第43図 土坑SF21249・21251・21252・21256実測図

SF21250

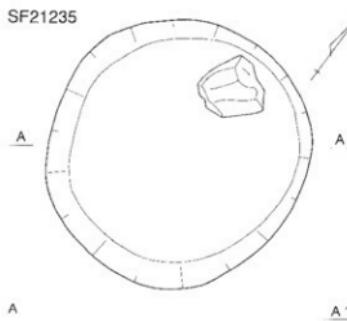


SF21267

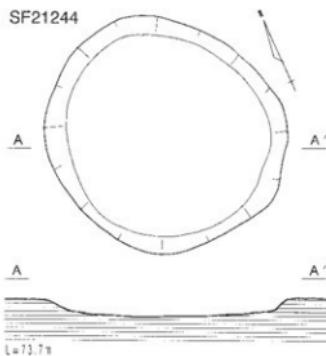


- L=74.0m
1. 褐褐色土 黄褐色粒子を多く含む
2. 褐褐色土 粘性・繩まりがある

SF21235



SF21244



L=73.6m

1. 黄褐色土混じり暗褐色土
2. 黄褐色土混じり暗褐色土 1に比べ黄褐色土を多く含む
3. 暗褐色土 黄褐色土をブロック状に含む

0 1m

第44図 土坑 S F 21235・21244・21250・21267実測図

も遺物は出土しなかったので、土坑の年代や性格はわからない。

S F 21223・21225・21236・21253・21271 (第45図 圖版11-3・5)

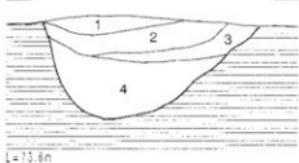
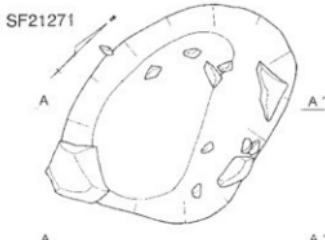
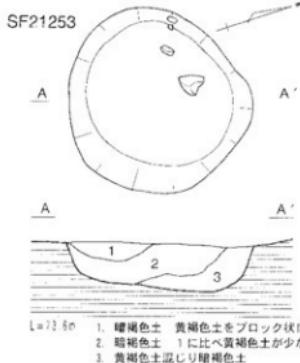
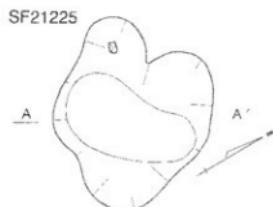
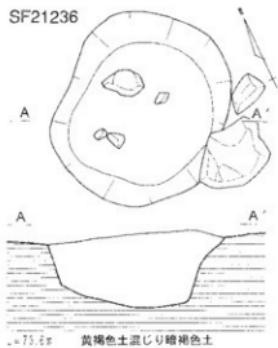
S F 21223は、H-17グリッドで検出した不整円形を呈した土坑である。長軸125cm、短軸118cm、深さ37cmを測る。ほぼ垂直に近い形で掘り込まれていて、底面は平らな皿状土坑である。覆土は粘性・縮まりとともに弱い暗褐色土である。遺物は出土しなかったが、検出状況等から土葬墓の可能性も考えられる。S F 21225は、H-17グリッドで検出した不整形の土坑である。長軸80cm、短軸65cm、深さ28cmを測る。断面はV字形に近い形をなし、覆土は3層に分けられる。3層とも粘性・縮まりとともに弱い暗褐色土をベースにして黄褐色土を混入している。遺物は出土せず、土坑の年代や性格はわからない。S F 21236は、G-17・18グリッドで検出した不整円形を呈する土坑である。長軸80cm、短軸65cm、深さ30cmを測る。断面は、平らに近い底面から直線的に立ち上げる。覆土は3層に分けられるが、3層とも粘性・縮まりとともに弱い暗褐色土をベースにして黄褐色土を混入している。遺物は出土しなかったが、検出状況等から土葬墓の可能性も考えられる。S F 21253は、G・H-16グリッドで検出した円形皿状土坑である。長軸75cm、短軸72cm、深さ20cmを測る。ほぼ垂直に近い形で掘り込まれていて、底面は平らである。覆土は3層に分けられるが、3層とも粘性はややあるが縮まりのない暗褐色土をベースにして黄褐色土を混入している。遺物は出土しなかったが、検出状況等から土葬墓の可能性も考えられる。S F 21271は、H-18グリッドで検出した楕円形を呈する土坑である。長軸95cm、短軸75cm、深さ41cmを測る。断面は、西側は垂直に近い掘り方をなし、東側は緩やかに掘り込まれている。覆土は4層に分けられるが、4層とも粘性・縮まりとともに弱い暗褐色土をベースにして黄褐色土を混入している。遺物は出土しなかったが、検出状況等から土葬墓の可能性も考えられる。

S F 21187・21190・21192・21216 (第46図 圖版11-1)

S F 21187は、I-16グリッドで検出した不整楕円形を呈した土坑である。長軸146cm、短軸93cm、深さ37cmを測る。北側は円形に近い形で掘り込まれており、南側がテラス状になっているので、2つの造構が重なっている可能性も考えられる。覆土は2層に分けられ、ともに粘性・縮まりとともに弱い暗褐色土をベースにして黄褐色土を混入している。遺物は出土しなかったが、検出状況等から土葬墓の可能性も考えられる。S F 21190は、I-16グリッドで検出した円形皿状土坑である。長軸100cm、短軸93cm、深さ31cmを測る。ほぼ垂直に近い形で掘り込まれていて、底面は平らである。覆土は2層に分けられるが、2層とも粘性・縮まりとともに弱い暗褐色土をベースにして黄褐色土を混入している。遺物は出土しなかったが、検出状況等から土葬墓の可能性も考えられる。S F 21192は、H・I-16グリッドで検出した楕円形を呈する土坑である。長軸104cm、短軸86cm、深さ25cmを測る。ほぼ垂直に近い形で掘り込まれていて、底面は平らである。覆土は粘性・縮まりとともに弱い暗褐色土をベースにしてわずかに黄褐色土を混入している。遺物は出土しなかったが、検出状況等から土葬墓の可能性も考えられる。S F 21216は、J-17グリッドで検出した楕円形を呈する土坑である。長軸143cm、短軸100cm、深さ26cmを測る。断面は緩やかなU字形をなし、底面は平らである。覆土は粘性・縮まりとともに弱い暗褐色土である。遺物は出土しなかったが、検出状況等から土葬墓の可能性も考えられる。

(6) 第3段丘面

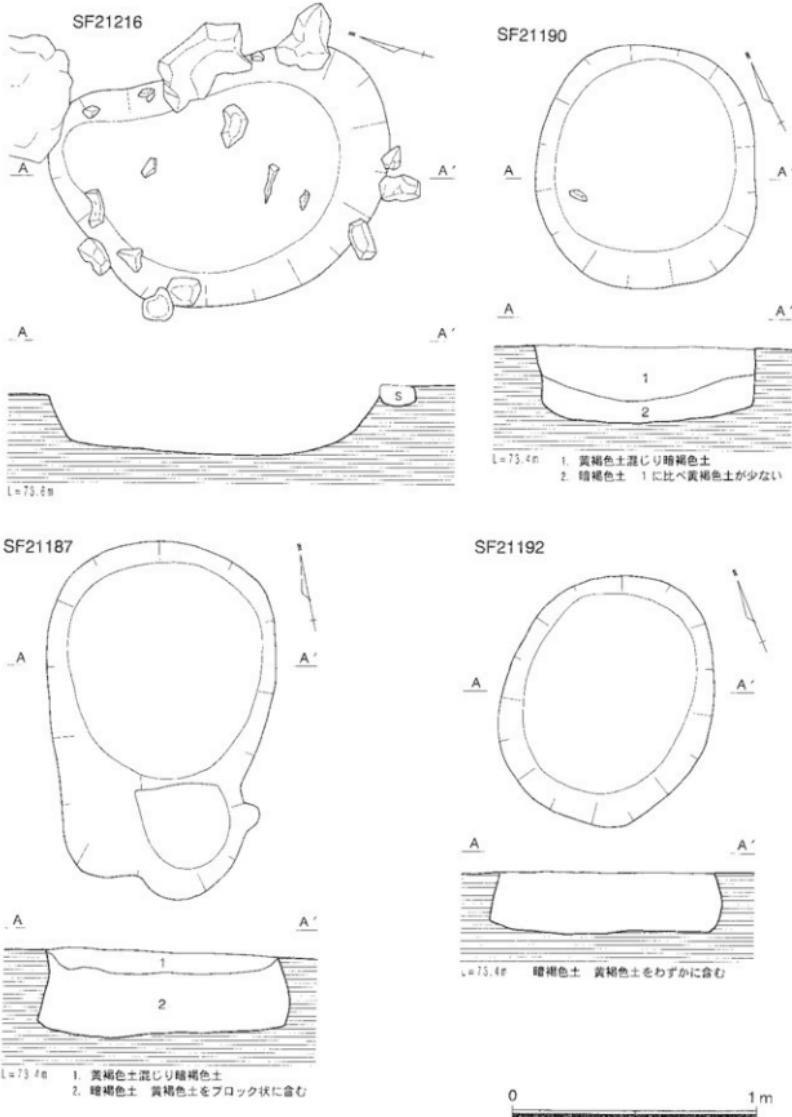
F-19グリッドからJ-18グリッドの範囲で、1基の不明遺構と12基の土坑および47基の小穴を検出した。遺構はH・I-18グリッドに集中している傾向がある。47基検出された小穴の配列を検討すると、直線的に並ぶものもあるが、遺物は出土せず、礫石や柱根は検出されなかつたので建物の認定には至らず、小穴の性格も把握できなかった。土坑については特徴的な3基について説明していきたい。



L=73.5m 暗褐色土 黄褐色土を含む

0 1m

第45図 土坑S F 21223・21225・21236・21253・21271実測図



第46図 土坑 S F 21187・21190・21192・21216実測図

A 不明遺構

S X 21381 (第47図 図版12-3・4)

H-18グリッドで検出した隅丸方形を呈した集石土坑である。長軸140cm、短軸136cm、深さ50cmを測る。径80cm程の礫を中心にして、径5～30cm程の礫を周囲に並べてあり、崩れた様子はない。覆土は2層に分けられ、上位は粘性・締まりともにない暗褐色土で、下位は粘性・締まりともにない黒褐色土である。遺物は出土せず、遺構の性格や年代はわからない。

B 土坑

S F 21290・21291・21312 (第47図)

S F 21290は、I-18グリッドで検出した不整円形を呈する土坑である。長軸75cm、短軸63cm、深さ20cmを測る。断面は緩やかに立ち上がり、覆土は2層に分けられる。2層とも粘性・締まりともに弱い暗褐色土である。下位は5～20cm程の礫を多く含む。遺物は出土せず、土坑の年代や性格はわからない。S F 21291は、I-18グリッドで検出した隅丸方形を呈する土坑である。長軸100cm、短軸73cm、深さ36cmを測る。断面は緩やかに立ち上がり、覆土は2層に分けられる。上位は粘性がややある暗灰褐色土で、下位は粘性・締まりともに弱い暗褐色土である。遺物は出土せず、土坑の年代や性格はわからない。S F 21312は、H-19グリッドで検出した不整椭円形を呈する土坑である。長軸140cm、短軸120cm、深さ30cmを測る。断面は、西側は緩やかに掘り込まれているが、東側は立ち上がりがやや急になる。覆土は3層に分けられるが、3層とも暗褐色土をベースにして、径1～20cm程度の礫を多く含んでいる。中下位に比較すると上位は粘性・締まりともによい。遺物は出土しなかったが、検出状況等から土葬墓の可能性も考えられる。

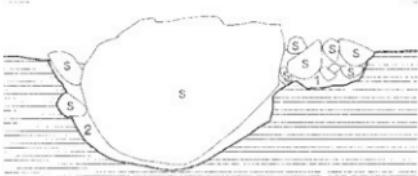
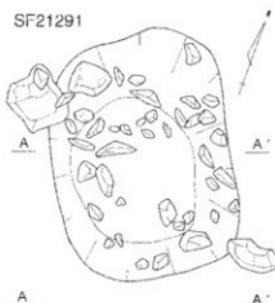
註

- (1) 木村弘之 1996 「中世墓の種類と変遷」 『静岡県における中世墓』 静岡県考古学会
- (2) 菅原市教育委員会 1993 『一の谷中世墳墓群遺跡』

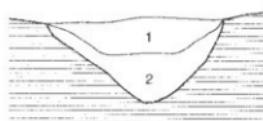
SX21381



SF21291

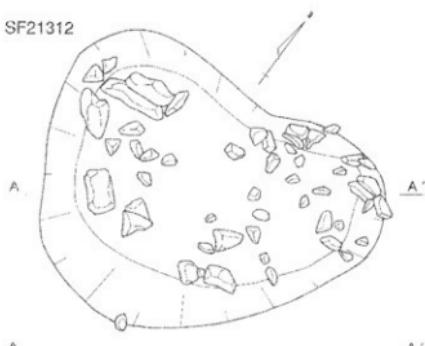


L=73.5m 1. 褐褐色土 粘性・持まりがない
2. 黒褐色土 粘性・持まりがない



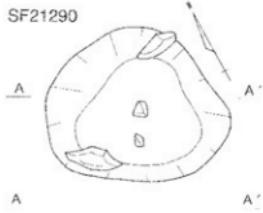
L=73.5m 1. 褐褐色土 粘性がややある
2. 黑褐色土 黄褐色土を多く含む

SF21312



L=73.5m 1. 褐褐色土 粘性がある
2. 褐褐色土 磷を多量に含む
3. 褐褐色土 黄褐色土下の暗褐色土を含む

SF21290



L=73.5m 1. 褐褐色土 粘性・持まりがない
2. 褐褐色土 黄褐色土をブロック状に含む

0 1m

第47図 不明遺構 SX21381実測図 土坑 SF21290・21291・21312実測図

第6表 2-1区SX計測表

遺構名	グリッド	層位	形 状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	方 位	備 考
S X 21007	E - 13	VII層	楕 丸 形	75	71	29	-	集石墓III類
S X 21010	E - 12	VII層	楕 丸 方 形	50	45	30	N - 32° - E	集石墓III類
S X 21011	E - 11・12	VII層	楕 円 形	185	120	42	N - 30° - E	集石墓III類、歯、人骨
S X 21013	E - 11・12	VII層	楕 円 形	170	120	30	N - 79° - E	集石墓III類
S X 21016	E - 11	VII層	不整楕円形	127	85	25	N - 5° - E	集石墓III類、人骨、銭貨、かわらけ
S X 21021	E - 12	VII層	楕 丸 方 形	305	220	90	N - 69° - W	集石墓III類
S X 21029	G - 12	VII層	楕 円 形	486	(144)	24	N - 5° - E	不明遺構
S X 21031	F - 12	VII層	楕 円 形	125	84	30	N - 34° - E	集石墓III類
S X 21038	F - 12	VII層	楕 円 形	110	80	11	N - 71° - W	集石墓III類
S X 21040	G - H - 12	VII層	楕 円 形	145	130	50	N - 20° - W	集石墓IV類
S X 21123	G - 13・14	VII層	楕 円 形	600	150	35	N - 78° - E	不明遺構、炭化物
S X 21196	H - 15	VII層	不 整 形	123	45	18	N - 7° - W	不明遺構、炭化物
S X 21197	H - 16	VII層	楕 円 形	73	48	11	N - 84° - W	不明遺構、炭化物
S X 21344	D - E - 11	VII層	不 整 形	100	69	13	N - 71° - E	集石墓V類、銭貨(3枚)、人骨
S X 21345	D - 11	VII層	楕 丸 方 形	55	39	13	N - 83° - E	集石墓V類、人骨
S X 21350	E - F - 12	VII層	不 整 形	160	146	10	N - 2° - E	集石墓III類
S X 21351	E - F - 11・12	VII層	不 整 形	220	(100)	26	-	集石墓III類
S X 21356	E - 13	VII層	不 整 形	80	45	27	N - 31° - W	集石墓III類
S X 21357	E - 13	VII層	不 整 形	73	65	20	-	集石墓III類、行平(19世紀代)
S X 21361	E - 11	VII層	不 整 形	190	(65)	20	-	集石墓III類、土師器の小破片、人骨
S X 21366	H - 12	VII層	楕 円 形	195	130	44	N - 52° - W	集石墓III類
S X 21375	G - 15	VII層	楕 丸 方 形	75	69	20	N - 12° - W	集石墓III類
S X 21378	E - 11	VII層	半 円 形	(45)	(35)	18	-	集石墓V類、かわらけ2点、人骨
S X 21381	H - 18	VII層	楕 丸 方 形	149	136	50	-	不明遺構
S X 21382	E - 11	VII層	楕 円 形	100	60	30	N - 1° - W	集石墓V類、かわらけ破片、人骨
S X 21385	D - 11	VII層	楕 丸 方 形	40	35	15	N - 19° - W	集石墓V類、人骨、かわらけ破片
S X 21387	D - E - 11	VII層	楕 円 形	140	65	15	N - 25° - W	集石墓III類、人骨

第7表 2-1区土坑計測表

遺構名	グリッド	層位	形 状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	方 位	備 考
S F 21004	E - 12	VII層	不 整 形	90	42	33	N - 55° - E	
S F 21006	E - 13	VII層	楕 円 形	117	60	20	N - 57° - E	
S F 21012	E - 12・13	VII層	不 整 形	130	80	30	N - 29° - W	
S F 21020	F - G - 13	VII層	楕 丸 方 形	126	70	13	N - 51° - W	
S F 21022	E - 13・14	VII層	楕 円 形	115	96	30	N - 10° - E	
S F 21024	G - 12	VII層	楕 丸 方 形	94	77	24	N - 58° - E	
S F 21025	F - G - 12	VII層	不 整 形	215	112	10	N - 54° - E	
S F 21027	G - 12	VII層	楕 円 形	81	53	11	N - 71° - W	
S F 21028	G - 12	VII層	楕 円 形	81	60	21	N - 87° - E	
S F 21030	F - 12	VII層	不整楕円形	133	105	31	N - 5° - W	
S F 21032	E - 13	VII層	楕 円 形	95	43	16	N - 6° - W	
S F 21034	G - 12	VII層	不 整 形	90	61	19	N - 32° - W	
S F 21035	G - 12	VII層	楕 円 形	100	59	24	N - 26° - W	
S F 21046	F - 17	VII層	不整楕円形	80	53	11	N - 66° - E	
S F 21047	F - 17	VII層	楕 丸 方 形	90	88	18	N - 87° - E	
S F 21054	F - 16	VII層	不 整 形	72	42	30	N - 46° - W	
S F 21056	F - 16	VII層	楕 円 形	116	73	19	N - 89° - E	
S F 21058	E - 17	VII層	不 整 形	72	57	28	N - 85° - W	
S F 21059	E - 17	VII層	不整楕円形	114	96	19	N - 41° - E	

遺構名	グリッド	層位	形狀	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	方位	備考
S F21060	E - 17	VII層	不整形	100	80	34	N - 46° - E	
S F21061	E - 17	VII層	隅丸台形	76	60	16	N - 74° - W	
S F21063	E - 17	VII層	不整橢円形	96	53	8	N - 15° - E	
S F21064	E - 17	VII層	橢円形	105	78	18	N - 10° - W	
S F21065	E - 17	VII層	不整形	100	77	26	N - 20° - E	
S F21067	H - 16	VII層	隅丸三角形	70	68	15	N - 30° - E	
S F21070	E - 17	VII層	不整方形	140	100	17	N - 65° - E	古瀬戸後期陶器片
S F21074	I - 13	VII層	半円形	(102)	(35)	44	—	
S F21076	H - 13	VII層	橢円形	82	35	14	N - 20° - E	
S F21077	H - 13	VII層	橢円形	72	46	10	N - 23° - W	
S F21078	G - 13	VII層	橢円形	82	40	50	N - 81° - E	
S F21079	G - 13	VII層	円形	90	85	31	—	
S F21080	G - 13	VII層	橢円形	76	33	17	N - 66° - E	
S F21081	H - 14	VII層	不整橢円形	92	55	9	N - 33° - W	
S F21083	G - 14	VII層	橢円形	76	50	19	N - 3° - W	
S F21084	G - 14	VII層	橢円形	132	95	18	N - 45° - W	
S F21086	F - 14	VII層	不整橢円形	90	65	18	N - 33° - E	
S F21088	F - 14	VII層	不整橢円形	81	48	12	N - 76° - E	
S F21089	F - 14	VII層	隅丸三角形	80	60	30	N - 62° - E	
S F21090	F - 14	VII層	不整形	100	92	33	—	
S F21091	F - 14	VII層	不整形	85	65	30	N - 1° - W	
S F21092	F - 14	VII層	不整形	82	50	19	N - 78° - W	
S F21094	E - 14	VII層	橢円形	90	65	31	N - 24° - E	
S F21101	E - 14	VII層	半円形	70	(22)	25		
S F21103	E - 14	VII層	瓢箪形	76	38	10	N - 13° - E	
S F21104	E - 14	VII層	円形	85	78	14		
S F21106	E - 14	VII層	隅丸方形	104	88	27	N - 30° - E	
S F21118	I - 13	VII層	不整形	74	39	26	N - 89° - W	
S F21128	I - 13	VII層	隅丸方形	76	40	15	N - 74° - W	
S F21133	H - 13	VII層	橢円形	114	46	16	N - 62° - E	
S F21140	H - 13	VII層	隅丸方形	100	95	15		
S F21141	H - 13・14	VII層	橢円形	76	36	6	N - 24° - E	
S F21149	G - 14	VII層	橢円形	100	55	20	N - 78° - E	
S F21151	E - 14・15	VII層	橢円形	82	67	33	N - 62° - E	
S F21152	E - 15	VII層	橢円形	70	60	19	N - 35° - E	
S F21171	F - 15	VII層	橢円形	115	75	30	N - 37° - E	
S F21178	I - 15・16	VII層	隅丸方形	91	(46)	26	N - 21° - W	
S F21179	I - 16	VII層	隅丸方形	70	(30)	14	N - 14° - W	
S F21187	I - 16	VII層	不整橢円形	146	93	37	N - 5° - E	
S F21190	I - 16	VII層	円形	100	93	31	N - 29° - E	
S F21192	H - I - 16	VII層	橢円形	104	86	25	N - 44° - E	
S F21193	I - 16	VII層	橢円形	78	43	13	N - 60° - E	
S F21205	I - 15	VII層	橢円形	136	97	25	N - 29° - E	
S F21208	I - 15	VII層	円形	100	93	30	N - 11° - W	
S F21212	J - 17	VII層	不整形	70	59	18	N - 49° - E	
S F21216	J - 17	VII層	橢円形	143	100	26	N - 31° - W	
S F21218	J - 17	VII層	橢円形	71	58	15	N - 32° - E	

遺構名	グリッド	層位	形狀	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	方位	備考
S F 21223	H - 17	VII層	不整円形	125	118	37	—	
S F 21224	H - 17	VII層	楕円形	100	70	7	N - 56° - E	
S F 21225	H - 17	VII層	不整形	80	65	28	—	
S F 21233	G - 17	VII層	楕円形	80	36	6	N - 64° - W	
S F 21235	G - 17	VII層	円形	110	105	28	—	
S F 21236	G - 17 • 18	VII層	不整円形	80	65	30	N - 44° - E	
S F 21239	G - 17	VII層	楕円形	97	73	10	N - 58° - W	
S F 21240	G - 17	VII層	楕円形	100	80	9	N - 62° - W	
S F 21242	F • G - 17	VII層	隅丸方形	80	69	13	N - 33° - E	
S F 21243	F • G - 17	VII層	楕円形	83	46	19	N - 41° - W	
S F 21244	G - 17 • 18	VII層	円形	102	92	13	N - 34° - W	
S F 21246	F - 18	VII層	円形	94	87	16	—	
S F 21247	F - 18	VII層	円形	109	104	30	—	
S F 21248	F - 18	VII層	不整円形	97	90	30	—	
S F 21249	F - 18	VII層	不整円形	100	94	22	—	
S F 21250	F - 18 • 19	VII層	円形	124	118	15	—	
S F 21251	F - 18	VII層	楕円形	103	83	27	N - 17° - E	
S F 21252	F - 18 • 19	VII層	楕円形	98	76	24	N - 1° - W	
S F 21253	G - H - 16	VII層	円形	75	72	20	N - 30° - E	
S F 21254	G - 17	VII層	不整円形	78	74	15	—	
S F 21255	E - 18	VII層	楕円形	89	83	13	N - 17° - E	
S F 21256	G - 18	VII層	円形	100	96	20	—	
S F 21258	G - 18	VII層	不整形	72	54	26	N - 72° - E	
S F 21260	F - 16	VII層	不整形	100	90	22	N - 15° - W	
S F 21262	H - 15 • 16	VII層	楕円形	80	65	15	N - 19° - W	
S F 21264	G - 18	VII層	不整形	102	80	14	N - 60° - W	
S F 21265	G - 18	VII層	楕円形	90	66	15	N - 42° - E	
S F 21266	G - 18	VII層	隅丸方形	73	63	8	N - 51° - E	
S F 21267	F - 18 • 19	VII層	不整形	92	68	8	—	
S F 21271	H - 18	VII層	楕円形	95	75	41	N - 11° - W	
S F 21276	I - 17	VII層	不整形	73	56	32	N - 70° - W	
S F 21277	I - 17	VII層	不整形	75	56	32	N - 9° - E	
S F 21278	I - 18	VII層	楕円形	90	64	13	N - 52° - W	
S F 21283	H - 18	VII層	楕円形	120	63	19	N - 43° - W	
S F 21287	I - 18	VII層	不整形	78	63	15	N - 18° - W	
S F 21290	I - 18	VII層	不整円形	75	63	20	N - 41° - W	
S F 21291	I - 18	VII層	隅丸方形	100	73	36	N - 28° - W	
S F 21312	H - 19	VII層	不整楕円形	140	120	30	N - 62° - E	
S F 21313	G - 20	VII層	楕円形	103	72	24	N - 34° - W	
S F 21316	H - 18	VII層	不整方形	80	74	20	N - 61° - E	
S F 21326	F - 19	VII層	楕円形	84	70	22	N - 60° - W	
S F 21327	F - 19	VII層	楕円形	90	75	7	N - 3° - E	
S F 21335	H - 19	VII層	不整隅丸台形	71	51	20	N - 36° - E	
S F 21338	G - 20	VII層	半円形	107	(65)	25	N - 54° - E	
S F 21343	H - 15	VII層	隅丸台形	77	65	37	—	
S F 21347	G - 12 • 13	VII層	隅丸方形	112	62	22	N - 83° - W	
S F 21358	E - 13	VII層	不整形	102	80	31	N - 72° - E	

第8表 2-1区小穴計測表

造構名	グリッド	層位	形 状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)
S P21002	E-12	VII層	楕円形	45	35	13
S P21003	E-13	VII層	楕円形	51	45	20
S P21005	E-12	VII層	楕円形	68	58	13
S P21008	F-12	VII層	楕円形	47	34	15
S P21009	F-12・13	VII層	楕円形	46	33	21
S P21014	E-11	VII層	楕円形	47	41	11
S P21015	E-11	VII層	楕円形	36	30	30
S P21017	E-12	VII層	楕円形	32	30	8
S P21018	E-12	VII層	楕円形	53	23	9
S P21019	E-12	VII層	楕円形	46	32	16
S P21023	E-13	VII層	楕円形	48	38	18
S P21033	E-14	VII層	楕円形	48	40	27
S P21036	F-12	VII層	楕円形	44	34	21
S P21037	F-12	VII層	楕円形	42	33	17
S P21039	F-12	VII層	楕円形	62	41	20
S P21041	F-13	VII層	楕円形	60	35	26
S P21042	F-13	VII層	楕円形	50	30	12
S P21043	G-15	VII層	楕円形	54	40	15
S P21045	F-17	VII層	円形	60	50	13
S P21048	G-16	VII層	円形	37	35	10
S P21049	G-16	VII層	楕円形	50	44	18
S P21050	G-16	VII層	円形	50	44	6
S P21051	G-16	VII層	不整形	40	24	9
S P21052	F-16	VII層	楕円形	44	19	30
S P21053	F-16	VII層	楕円形	52	32	16
S P21055	F-16	VII層	隅丸台形	52	36	18
S P21057	G-16	VII層	楕円形	69	55	26
S P21062	G-15	VII層	楕円形	66	60	24
S P21066	E-17	VII層	不整形	50	38	15
S P21068	H-15	VII層	不整楕円形	55	41	14
S P21069	H-15	VII層	楕円形	62	43	16
S P21071	E-16	VII層	円形	41	37	15
S P21072	H-15	VII層	楕円形	57	42	13
S P21073	G-13・14	VII層	楕円形	64	50	8
S P21075	H-13	VII層	楕円形	46	33	15
S P21082	H-14	VII層	不整形	64	41	8
S P21085	F-14	VII層	円形	55	45	25

遺構名	グリッド	層位	形 状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)
S P21087	F - 14	VII層	椭円形	47	25	7
S P21093	F - 14	VII層	不整形	52	37	13
S P21095	E - 14	VII層	円形	65	60	10
S P21096	E - 14	VII層	椭円形	35	21	12
S P21097	E - 14	VII層	椭丸三角形	33	32	15
S P21098	E - 14	VII層	隅丸方形	36	32	8
S P21099	E - 14	VII層	不整台形	60	35	18
S P21100	E - 14	VII層	隅丸方形	60	34	16
S P21102	E - 14	VII層	椭円形	39	29	10
S P21105	I - 13	VII層	不整形	64	33	12
S P21107	F - 14	VII層	椭円形	56	23	12
S P21109	F - 14	VII層	不整形	49	22	7
S P21110	F - 14	VII層	円形	31	18	21
S P21111	F - 14	VII層	椭円形	36	22	11
S P21112	I - 13	VII層	椭円形	47	35	21
S P21113	I - 13	VII層	椭円形	52	41	21
S P21114	I - 13	VII層	椭円形	44	36	12
S P21115	I - 13	VII層	椭円形	50	37	14
S P21116	I - 13	VII層	椭円形	36	17	10
S P21117	I - 13	VII層	椭円形	40	32	14
S P21119	I - 13	VII層	不整形	37	26	7
S P21120	I - 13	VII層	隅丸方形	47	36	11
S P21121	I - 13	VII層	半円形	35	17	26
S P21122	I - 13	VII層	円形	37	37	3
S P21124	I - 13	VII層	円形	28	26	12
S P21125	I - 13	VII層	椭円形	52	38	12
S P21126	I - 13	VII層	椭円形	46	19	10
S P21127	I - 13	VII層	不整形	52	39	8
S P21129	I - 13	VII層	不整形	61	48	16
S P21130	I - 13	VII層	不整形	63	45	20
S P21131	H・I - 13	VII層	円形	30	22	8
S P21132	H - 13	VII層	椭円形	42	28	6
S P21134	H - 13	VII層	隅丸三角形	38	36	8
S P21135	H - 13	VII層	椭円形	63	41	15
S P21136	H - 13	VII層	椭円形	38	25	13
S P21137	H - 13	VII層	不整椭円形	46	28	10
S P21138	E - 14	VII層	不整形	45	30	16

遺構名	グリッド	層位	形 状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)
S P21139	H - 13	VII層	楕円形	49	42	7
S P21142	H - 13	VII層	円形	30	28	16
S P21143	H - 13・14	VII層	楕円形	40	33	12
S P21144	G・H - 13	VII層	不整形	36	35	17
S P21145	G - 13	VII層	不整形	54	36	17
S P21146	G - 13	VII層	楕円形	64	41	22
S P21147	G - 14	VII層	隅丸三角形	32	31	13
S P21148	G - 14	VII層	楕円形	34	25	14
S P21150	G - 14	VII層	楕円形	55	40	10
S P21153	I - 14	VII層	楕円形	59	44	44
S P21154	I - 14	VII層	円形	40	38	19
S P21155	I - 14	VII層	楕円形	52	40	9
S P21156	H - 14	VII層	円形	55	45	11
S P21157	E - 15	VII層	楕円形	26	17	4
S P21158	E - 15	VII層	不整椭円形	42	28	8
S P21159	F - 15	VII層	楕円形	40	28	13
S P21160	F - 15	VII層	不整椭円形	50	39	17
S P21161	F - 15	VII層	楕円形	59	31	9
S P21162	F - 15	VII層	隅丸方形	54	43	13
S P21163	F - 15	VII層	円形	36	31	15
S P21164	F - 15	VII層	不整形	44	32	16
S P21165	F - 13	VII層	不整形	58	43	13
S P21166	G - 15	VII層	不整椭円形	52	40	10
S P21167	G - 15	VII層	楕円形	40	36	9
S P21168	G - 14	VII層	楕円形	26	16	10
S P21169	G - 14	VII層	楕円形	24	19	8
S P21170	G - 14	VII層	楕円形	34	29	11
S P21172	F - 15	VII層	楕円形	42	28	7
S P21173	E - 14	VII層	隅丸三角形	47	43	13
S P21174	F - 15	VII層	不整椭円形	47	24	5
S P21175	E・F - 16	VII層	楕円形	54	39	13
S P21176	F - 15	VII層	隅丸方形	54	38	10
S P21177	F - 15	VII層	楕円形	22	19	5
S P21180	I - 16	VII層	楕円形	46	35	15
S P21181	I - 16	VII層	瓢箪形	55	28	18
S P21182	I - 16	VII層	不整椭円形	67	44	15
S P21183	I - 16	VII層	楕円形	60	48	20

遺構名	グリッド	層位	形状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)
S P21184	I - 16	VII層	不整楕円形	50	40	12
S P21185	I - 16	VII層	隅丸方形	65	52	25
S P21186	I - 16	VII層	楕円形	66	33	14
S P21188	I - 16	VII層	不整隅丸方形	29	22	7
S P21189	I - 16	VII層	隅丸方形	45	32	12
S P21191	I - 16	VII層	隅丸台形	51	31	11
S P21194	I - 16	VII層	不整形	35	26	2
S P21195	I - 16	VII層	楕円形	34	25	8
S P21199	H - 15	VII層	楕円形	47	34	9
S P21200	H - 15	VII層	楕円形	30	24	7
S P21201	H - 16	VII層	隅丸三角形	55	42	21
S P21202	I - 15	VII層	楕円形	41	28	10
S P21203	I - 16	VII層	楕円形	43	28	10
S P21204	I - 15	VII層	楕円形	64	48	3
S P21206	I - 15	VII層	隅丸方形	29	28	19
S P21209	J - 17	VII層	楕円形	51	34	11
S P21210	I - 15	VII層	楕円形	32	29	7
S P21211	J - 17	VII層	円形	40	40	8
S P21213	J - 17	VII層	楕円形	45	30	15
S P21214	J - 17	VII層	楕円形	46	35	12
S P21215	J - 17	VII層	不整楕円形	68	46	11
S P21217	J - 17	VII層	不整楕円形	51	38	10
S P21219	J - 17	VII層	円形	57	52	20
S P21220	J - 17	VII層	楕円形	41	34	13
S P21221	H - 17	VII層	楕円形	44	29	11
S P21222	H - 17	VII層	楕円形	53	37	13
S P21226	H - 17	VII層	円形	33	33	13
S P21227	H - 17	VII層	隅丸方形	50	24	14
S P21228	H - 16・17	VII層	楕円形	53	30	13
S P21229	H - 17	VII層	不整楕円形	48	34	11
S P21230	H - 17	VII層	瓢箪形	62	56	14
S P21231	G - 17	VII層	不整楕円形	68	30	10
S P21232	G - 17	VII層	隅丸方形	47	42	11
S P21234	G - 17	VII層	楕円形	58	40	8
S P21237	G - 17	VII層	隅丸台形	60	48	12
S P21238	G - 17・18	VII層	隅丸台形	54	42	17
S P21241	G - 17	VII層	楕円形	65	37	16

造構名	グリッド	層位	形 状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)
S P21245	F - 17 + 18	VII層	楕円形	58	36	32
S P21257	G - 18	VII層	不整形	40	38	16
S P21259	F - 14	VII層	楕円形	50	31	16
S P21261	G - 15	VII層	不整楕円形	36	24	13
S P21263	H - 15 + 16	VII層	楕円形	52	32	15
S P21269	H - 18	VII層	楕円形	48	(36)	8
S P21270	H - 18	VII層	隅丸方形	52	48	8
S P21272	I - 17	VII層	不整形	62	34	17
S P21273	I - 17	VII層	瓢箪形	59	32	9
S P21274	I - 17	VII層	瓢箪形	55	37	14
S P21275	I - 17	VII層	円形	44	40	12
S P21279	I - 18	VII層	楕円形	64	55	10
S P21280	I - 18	VII層	楕円形	69	32	7
S P21281	I - 18	VII層	隅丸台形	50	41	7
S P21282	H - 18	VII層	楕円形	42	23	30
S P21284	H - 18	VII層	楕円形	56	40	14
S P21285	H + I - 18	VII層	円形	34	28	6
S P21286	I - 18	VII層	隅丸方形	46	36	26
S P21288	I - 18	VII層	楕円形	50	42	11
S P21289	I - 18	VII層	楕円形	48	30	12
S P21292	I - 18	VII層	円形	36	34	7
S P21293	I - 18	VII層	楕円形	43	37	6
S P21294	I - 18	VII層	不整形	59	40	10
S P21295	I - 18	VII層	楕円形	47	35	13
S P21296	H + I - 18	VII層	楕円形	55	45	18
S P21297	I - 18	VII層	楕円形	41	25	12
S P21298	I - 18	VII層	楕円形	59	36	13
S P21299	I - 18	VII層	円形	26	25	6
S P21300	I - 18	VII層	楕円形	35	28	7
S P21301	I - 18	VII層	歪んだ円形	42	40	16
S P21302	H - 18	VII層	楕円形	45	31	10
S P21303	H - 18	VII層	隅丸方形	33	28	11
S P21304	I - 18	VII層	歪んだ円形	49	45	7
S P21305	H - 18	VII層	楕円形	36	31	4
S P21306	H - 18	VII層	楕円形	44	38	12
S P21307	H - 18	VII層	楕円形	45	30	13
S P21308	H - 18	VII層	隅丸方形	65	46	13

遺構名	グリッド	層位	形 状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)
S P 21309	H - 18	VII層	隅丸方形	62	38	7
S P 21310	H - 18 + 19	VII層	不整形	59	38	20
S P 21311	H - 19	VII層	楕円形	58	52	19
S P 21314	H - 18	VII層	楕円形	58	30	10
S P 21315	H - 18	VII層	隅丸三角形	57	46	13
S P 21317	H - 18	VII層	不整方形	50	37	11
S P 21318	H - 18	VII層	楕円形	51	40	8
S P 21319	I - 18	VII層	楕円形	66	46	24
S P 21320	I - 18	VII層	楕円形	30	23	5
S P 21322	G - 18	VII層	楕円形	54	39	14
S P 21323	G - 18 + 19	VII層	円形	58	54	18
S P 21324	F - 18 + 19	VII層	隅丸方形	62	50	23
S P 21325	F - 19	VII層	込んだ円形	55	48	15
S P 21328	E - 19	VII層	楕円形	60	50	20
S P 21329	I - 19	VII層	楕円形	60	44	13
S P 21330	I - 19	VII層	隅丸五角形	48	46	15
S P 21331	I - 19	VII層	楕円形	37	35	10
S P 21332	H + I - 19	VII層	楕円形	45	30	9
S P 21333	H - 19	VII層	不整形	56	44	10
S P 21334	H - 19	VII層	円形	44	42	9
S P 21336	G - 20	VII層	隅丸方形	44	42	16
S P 21337	G - 20	VII層	半円形	(60)	53	17
S P 21339	G - 20	VII層	円形	50	50	16
S P 21340	F - 18	VII層	楕円形	56	38	18
S P 21341	H + I - 18	VII層	楕円形	45	36	12
S P 21349	G - 12 + 13	VII層	円形	60	58	8
S P 21379	F - 12	VII層	楕円形	70	(54)	4
S P 21384	H - 15	VII層	楕円形	62	39	18

第3節 2-3区の調査

1 概要

最も狭い調査区である2-3区は、水路（U字溝）によって2-1区と分かれている。近年まで水田として利用された後、芝生が植えられていた。調査区内は、西側は黄瀬川の河道跡、東側は段丘面で疊塊帶となっている。遺構はVII層上面でのみ検出された。2条の溝状遺構と5基の土坑が検出されたが、全般的に遺構・遺物の出方が薄く、層位的な年代把握は困難であった。その中でVI層は、15世紀から16世紀初頭のかわらけが3点、瀬戸・美濃系で大窯第1段階の擂鉢の小破片が2点出土しており、遺物から年代を15世紀から16世紀初頭に比定することも可能かもしれない。

2 土層の状況（第48図）

2-3区で確認された土層は、現地表面（標高74.8m付近）から約1.3m下の（標高73.5m付近）までである。このうち上層は芝生の盛土で、厚さ5~10cmを測る。盛土以下は基本土層に対応させると、I層に該当する部分は検出できず、6層に分けることができる。上位からII層~VII層とした。

II層は、粘性・縮まりとともに強い灰褐色土で、旧水田耕作土である。中近世の陶磁器片を出土しているが、混入の可能性が高いと思われる。

III層は、鉄分を多く含む部分が酸化して赤味を強く帯びる赤褐色土層である。粘性は弱く、縮まりにも欠け、小礫の混入が認められる。中近世の土器・陶磁器の細片が出土している。

IV層は、全体的に粘性・縮まりとともに弱い暗灰褐色土である。

V層は、褐色をベースにして、鉄分を多く含んで酸化したため赤味を帯びた赤褐色土層である。粘性は弱いがやや縮まりがある。

VI層は、粘性・縮まりとともに弱い暗褐色土層である。下部には黄褐色土粒子を含む。一部で黒褐色を呈する部分がある。遺物包含層である。

VII層は、粘性は普通であるが、やや縮まりのある黄褐色土層である。部分的に礫の混入が多いところがある。上面で土坑、溝状遺構を検出した。

3 遺構

(1)VII層上面検出遺構

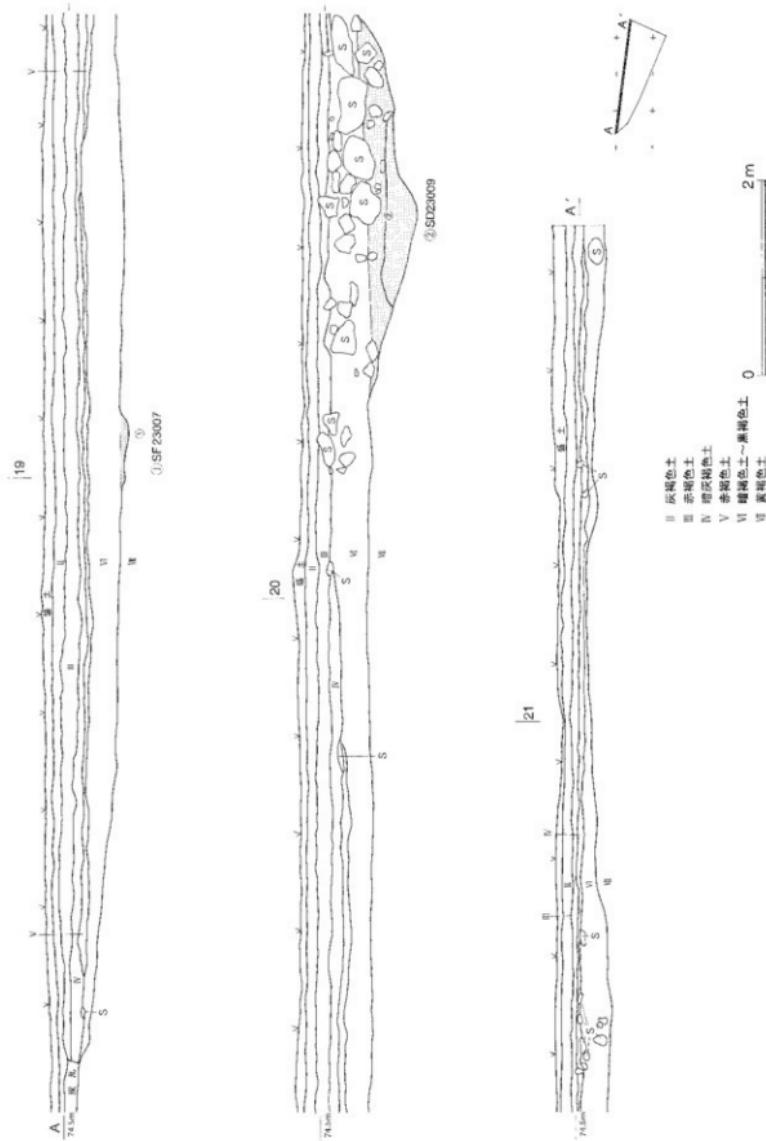
遺構は、E-19グリッドを中心に5基の土坑とE-19~21グリッドから2条の溝状遺構を検出した。七坑の規模等については、第9表を参照していただきたい。

土坑

S F 23003・23004・23005・23006・23007（第50図）

S F 23003は、E-19グリッドで検出した隅丸形を呈した土坑である。長軸113cm、短軸70cm、深さ17cmを測る。ほぼ垂直に近い掘り方をなし、底面は平らである。覆土は粘性・縮まりとともに弱い暗褐色土に黄褐色土が混入している。遺物は出土しなかった。S F 23004は、E-19グリッドで検出した不整形を呈し、長軸77cm、短軸66cm、深さ7cmを測る浅い土坑である。底面は平らで、覆土は粘性・縮まりとともに弱い暗褐色土に黄褐色土が混入している。遺物は出土しなかった。S F 23005は、E-19グリッドで検出した円形皿状土坑である。長軸98cm、短軸92cm、深さ22cmを測る。ほぼ垂直に近い掘り方をなし、底面は平らである。覆土は粘性・縮まりとともに弱い暗褐色土に黄褐色土が混入している。遺物は出土しなかった。S F 23006は、E-19グリッドで検出した円形皿状土坑である。長軸92cm、短軸88cm、深さ24cmを測る。ほぼ垂直に近い掘り方をなし、底面は平らである。覆土は粘性・縮まりとともに弱い暗褐色土に

第48圖 2—3區土層斷面圖



第9表 2-3区 土坑計測表

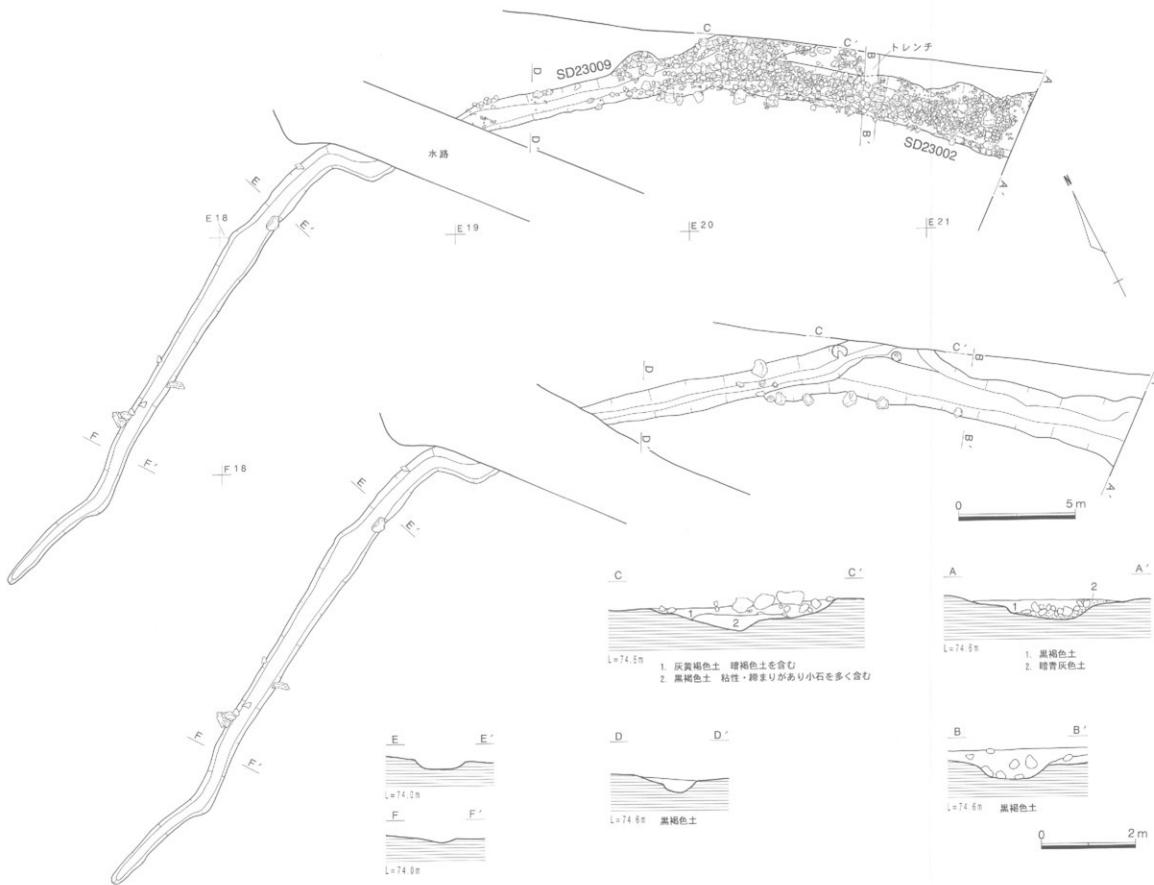
遺構名	グリッド	層位	形 状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	方 位
S F 23003	E-19	VII層	隅丸方形	113	70	17	N-75°-W
S F 23004	E-19	VII層	不整形	77	66	7	N-21°-W
S F 23005	E-19	VII層	円 形	98	92	22	-
S F 23006	E-19	VII層	円 形	92	88	24	-
S F 23007	E-18・19	VII層	半円形	80	(62)	10	-

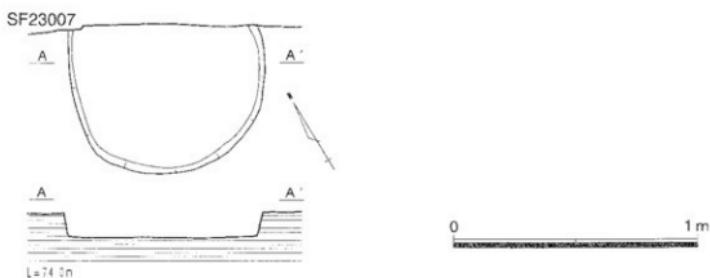
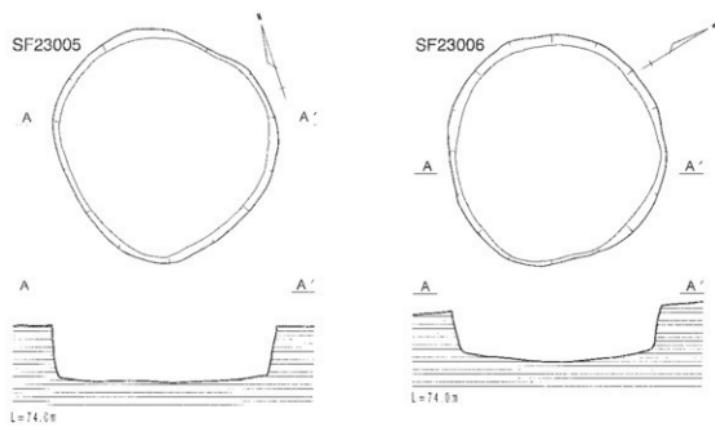
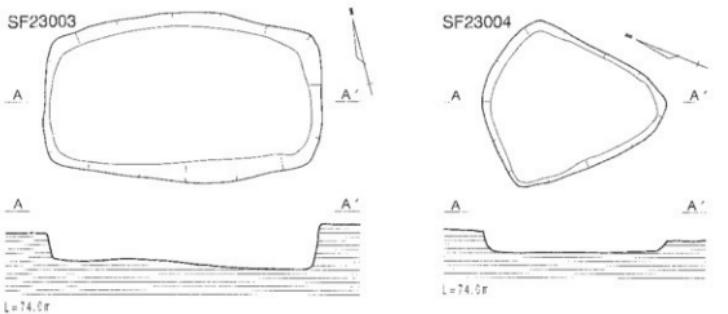
黄褐色土が混入している。遺物は出土しなかった。S F 23007は、E-18・19グリッドで検出した半円形の土坑で、北側は調査区外となっている。長軸80cm、短軸62cm、深さ10cmを測る。ほぼ垂直に近い掘り方をなし、底面は平らである。覆土は粘性・締まりとともに弱い暗褐色土に黄褐色土が混入している。遺物は出土しなかった。

溝状遺構

S D 23002・23009 (第49図 図版12-5・6)

E-20~G-17グリッドにかけて検出した溝状遺構である。検出した際には、1条の溝と考えていたが、精査した結果2条(S D 23002・S D 23009)が切り合う形で存在することが確認された。切り合からS D 23002の方がS D 23009よりも古いと思われる。S D 23002は、E-20・21グリッドで検出され、検出長12.1m、幅1.6~2.3m、深さ36~52cmを測り、N-50°-Wの方向に延びていて、東側は調査区外となっている。全面に拳大~人頭大の躰が多量に検出された。これらの躰は検出状況から考えて、意図的に配石したというよりも廃棄したものではないかと推定した。溝の流れの方向は、底面の高さから推定すると南東から北西に向かって流れていたようである。覆土は粘性・締まりとともに弱い暗褐色土である。遺物は、産地・年代ともに不明な羽釜(P112)の破片や、小破片のため図化しなかったが12世紀後半から13世紀代に位置づけられる被熱した大平鉢をはじめ、かわらけや常滑系の躰など中世の土器・陶器類が出土しているが、年代幅も広く流れ込みの可能性が高いと思われる所以、時期の特定はできなかった。S D 23009は、E-20~G-17で検出された。2-3区から後世に作られた水路(U字溝)を挟んで2-1区まで延びており、規模は2-3区で、検出長12.7m、幅1.2~1.4m、深さ36~45cmを測る。2-1区では検出長24.6m、幅0.6~1.4m、深さ7~22cmを測る。東西方向に延びるが、E-18グリッドで向きを変えており、調査区の境となっている水路によって切られているため方向は不確定だが、約40cmほど南に振れながら南西方向に延びている。E-19・20グリッドの長さ約7mにわたって、S D 23002同様に廃棄されたと思われる拳大~人頭大の躰が多量に検出された。覆土は粘性・締まりとともにややある暗褐色土である。遺物は出土しなかった。2条の溝状遺構は、検出状況等から考えると排水用に作られたのではないかと思われるが断定はできない。





第50図 土坑23003・23004・23005・23006・23007実測図

第4節 3区の調査

1 概要

3区は、今回の調査で最も標高の低いところに位置し、県道を挟んで黄瀬川と接している。黄瀬川が形成した河岸段丘の一番下の段丘面にあたり、近年まで水田として利用されていたようである。水田形成の過程において、大型の河原石の上部を削って整地が行われたようで、楔跡が残っている河原石も検出された。遺構はIV層、VI層、VII層で検出された。IV層では、18世紀代に構築されたと考えられる石敷遺構・石積み遺構、17世紀後半から18世紀前半代の常滑大甕の破片集中遺構、集石墓、がの跡とも考えられる不明遺構や小穴が検出された。遺物は中近世の土器・陶磁器の細片が出土している。VI層では中世墓が1基検出され、遺物は中近世の土器・陶磁器の細片が出土している。遺構の検出レベルは、VII層上面検出遺構とほぼ同レベルであった。VII層上面では、中世墓、火葬施設、不明遺構、土坑、小穴、溝状遺構が検出された。VI層・VII層上面で検出された中世墓は、伴出したかわらけ等から推定すると、2-1区の第1段丘面で検出された中世墓とほぼ同時期の15世紀から16世紀初頭に構築された可能性も考えられ、遺構の連続性が確認できた。また3区は中世後半から近世まで當まれた墓地の可能性も考えられる。なお3区で検出された遺構・遺物は、ほとんどがドライインよりも北側の調査区北部に集中していて、ドライインよりも南側の調査区南部では、表土直下に黄瀬川の礫塊帶が堆積していて遺構は検出されず、文化層は存在していなかったのではないかと思われる。

2 土層の状況（第51図）

3区で確認された土層は、現地表面（標高72.8m付近）から約2m下（標高70.8m付近）までである。基本土層に対応させると、I層に該当する部分はほとんど検出できず、6層に分けることができる。上位からII～VII層とした。ただし調査区の北東側（D-28グリッド）では、IV層からVI層の混土が激しく、分層は困難であったので、黒褐色土層はIV層として把握した。土層の状況を概観すると、調査区の北西側では比較的安定した土層の堆積状況が見られ、遺構も概ねその部分に集中する傾向が見られた。北西部分で確認された土層の一部には、北東側や東側に行くに従い消滅するものも見られた。また、ドライインよりも南側は黄瀬川のマサ土や礫塊帶が確認された。以下土層の概要についてII層より説明していく。

II層は、粘性の強い灰褐色土層で、部分的に黒褐色土（I層と思われる）が混入しているところがある。水田耕作土である。

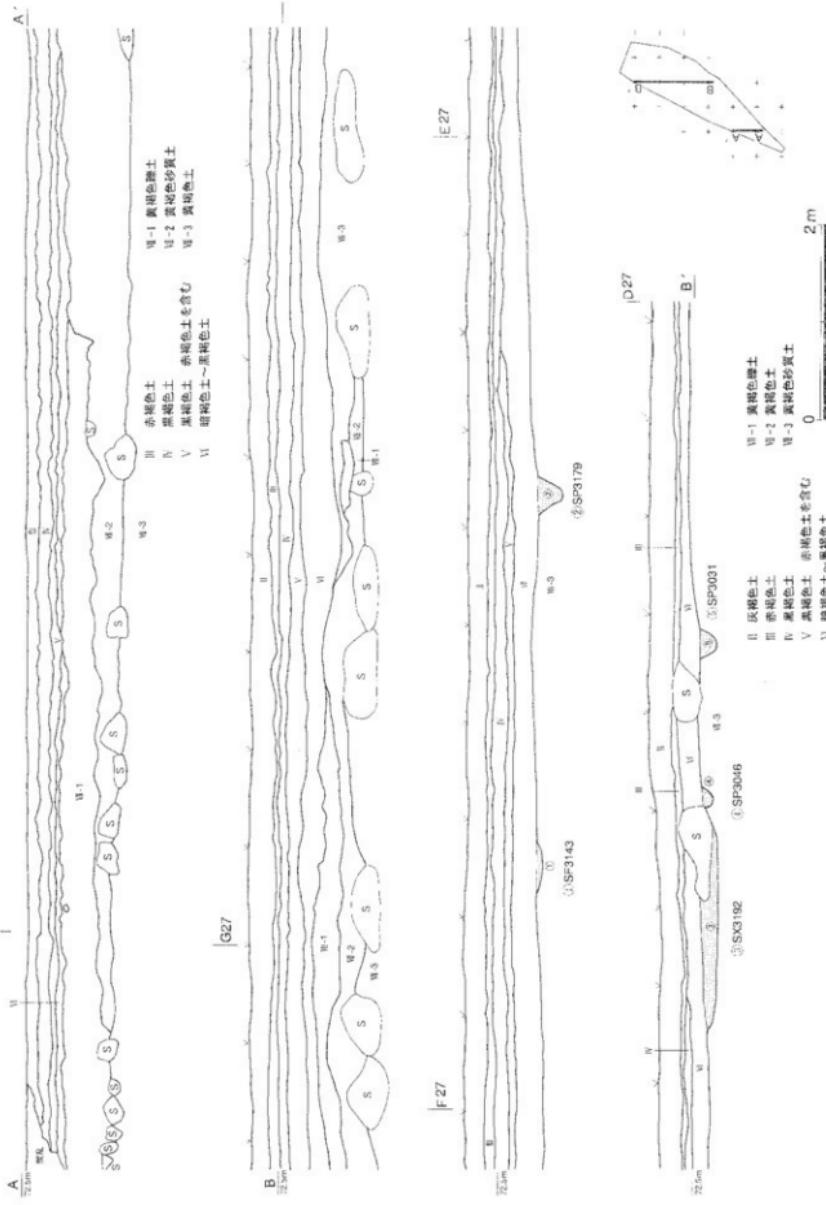
III層は、鉄分を多く含む部分が酸化して赤味を強く帯びた赤褐色土層である。粘性は弱く、縮まりにも欠け、部分的に礫の混入が認められる。

IV層は、全体的に縮まり・粘性ともに弱い黒褐色土層である。他地区に比較すると堆積が薄い。石敷遺構・石積み遺構、集石墓、陶器片集中遺構を検出した。

V層は、鉄分を含んで酸化して赤味を帯びた赤褐色土を含む黒褐色土層である。全体的に粘性は弱いが、やや縮まりのある部分がある。他地区に比べて堆積が薄い。中近世の土器・陶磁器片を出土している。

VI層は、縮まり・粘性ともに弱い暗褐色土層である。一部で黒味が強まり、黒褐色を呈する部分がある。また、下位で黄褐色土を含む部分がある。集石墓を検出し、中近世の土器・陶磁器片を出土している。

VII層は、粘性は普通であるが、やや縮まりのある黄褐色土層である。部分的に礫の混入が多いところや、砂質の部分がある。中世墓、火葬施設、不明遺構、土坑、小穴、溝状遺構を検出した。



第51图 3区土层断面图

3 遺構

(1) IV層検出遺構

石敷遺構（第53図 図版13-1・2）

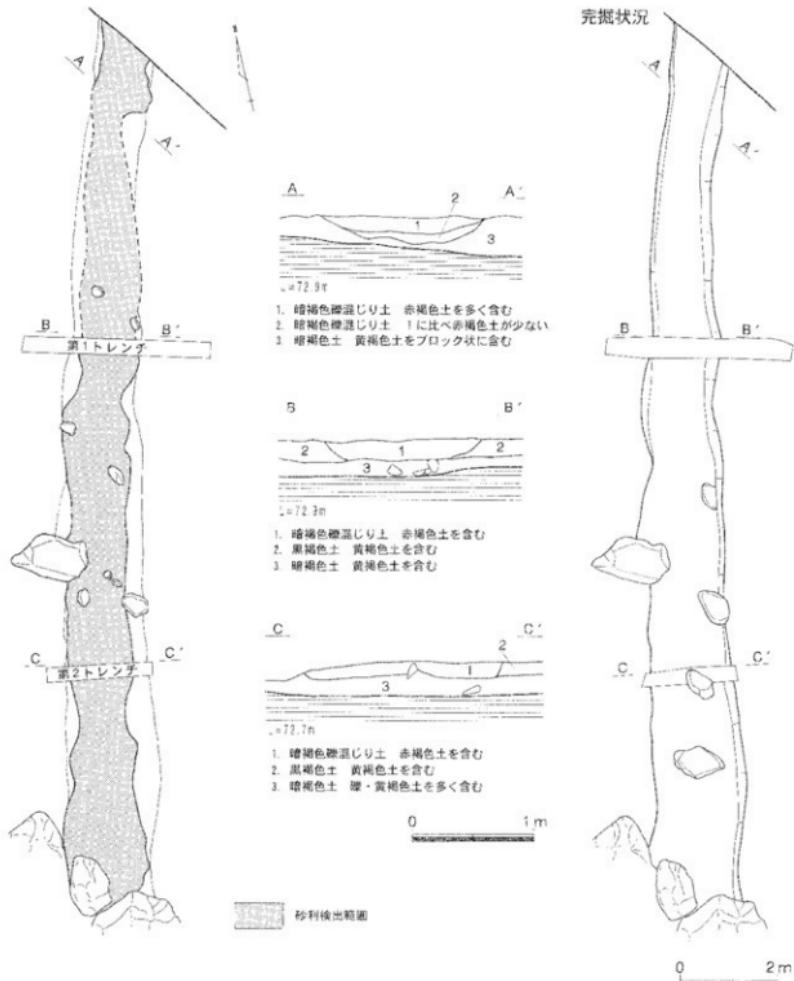
D-27グリッドからF-28グリッドにかけて検出された、N-9°-Eの方向で延びる道路状遺構と思われる。検出長17.65m、幅0.96~1.75m、厚さ15~25cmを測り、北側は調査区外となり、南側は石積み遺構に接続するように思われる。路肩部分として検出したところは、第1トレンチより北側は調査時に掘り方がわからず、長さ4.65mにわたって掘削してしまったので、北壁の断面等から推定するしかないが、II層の水田耕作土の直下で、IV層上面から緩やかに皿状に掘り窪めて、深1~10cm程度の跡をつめた暗褐色土が堆積している。上位には深1cm前後の砂利がびっしりと敷かれている。このような状況は検出面全体に均質的に広がるわけではなくて、第2トレンチのやや上方から南側部分は、路面に敷かれた砂利は密度がうすくなっている。第1トレンチの断面をみると、IV層上面から緩やかに掘り込まれ、深1~10cm程度の跡を多く含む暗褐色土が堆積している。また第2トレンチの断面をみると、路盤を形成している礫は、北壁や第1トレンチの断面と比較すると拳大程度の礫が多くなり、埋土の厚さも北壁の断面と比較するとやや薄くなっている。こうした状況から想定される路面部分は、拳大~拳大の礫を敷き詰めた基礎工事を行った後に、砂利混じりの土をのせて構築したのではないかと思われる。そして、道路の両側に側溝としての溝は構築せず、一部崩れやすい路肩部分については、30~60cm程度の礫を用いて補強していたのではないかと考える。この石敷遺構の周囲からは、中世墓や近世の集石墓と思われる遺構が検出されているので、墓道として構築された可能性も考えられる。さて構築年代であるが、検出レベルは、石積み遺構に接続する部分はほぼ同レベルのIV層中の72.4mである。また出土遺物をみると、埋土中から17世紀中葉から18世紀初頭の瀬戸・美濃系の丸皿、18世紀代の肥前系の紅皿、18世紀後半から19世紀中葉の瀬戸・美濃系灯明皿、19世紀代で产地不明の行平、15世紀末から16世紀初頭のかわらけ、その他小破片のため國化しなかったが近世の陶磁器片が若干出土している。出土遺物の年代幅が広いので断定はできないが、18世紀中葉に構築され、19世紀中葉には埋没したのではないかと思われる。

石積み遺構（第54図 図版13-3・4、14、16-2）

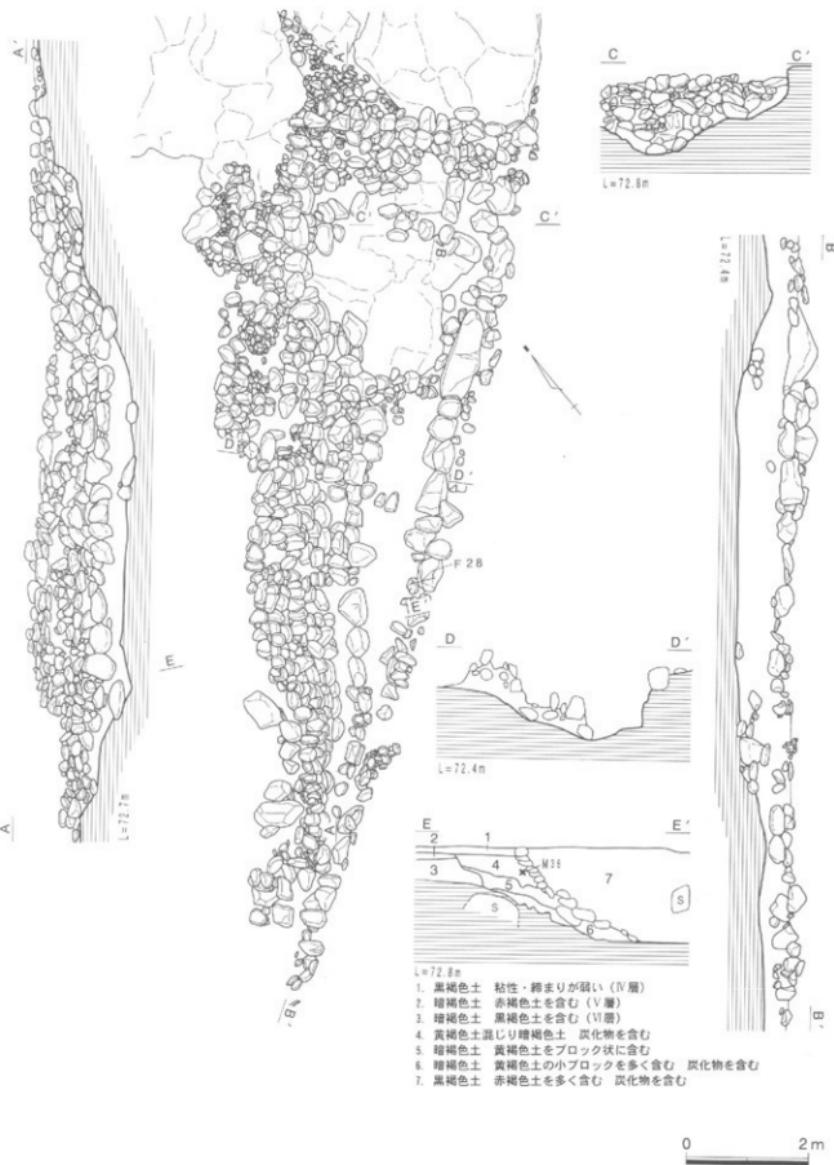
F-27・28グリッドからG-27グリッドにかけて検出された石積み遺構である。N-45°-E方向に約14m80cm程石の列が連なり、南側は調査区外へと続いているようである。石列は、拳大~人頭大のある程度形の整った黄瀬川の河原石を8~11段に積んで、護岸として斜面崩壊を防ぐとともに、石敷遺構に接続して黄瀬川河岸へ降りる道を構築したのではないかと思われる。そして、その道は石敷遺構のところでも述べたが、墓道として構築された可能性も考えられる。石が積まれている部分は、下層のV層（黄褐色土）上面まで掘り窪められて、裏込めの土を入れた後に石を積み上げたように思われる。北に位置する石敷遺構に接続する部分の検出レベルは、IV層中の72.4mである。明治9年以降の地籍図には記載がなく、明治時代にはすでに埋没していたと思われる。遺物は奥込めの土中から18世紀前半の瀬戸・美濃系片口鉢、18世紀代と思われるキセルが出土している。埋土中からは瀬戸・美濃系や志摩呂系の中近世の陶磁器片、15世紀後半から16世紀初頭と思われるかわらけの小破片が数多く出土しているほか、馬歯や人骨も検出されている。しかしこれらは、石積み遺構が埋没する過程で混入したものと思われる。それら埋土中から出土した中近世の土器・陶磁器片は、年代が確認できたものは、15世紀代のものが2点、16世紀後半~17世紀代のものが2点、18世紀代のものが6点、18世紀末~19世紀中葉のものが4点である。構築年代は断定はできないが、出土遺物から推定すると18世紀中葉に構築され、19世紀中葉には、埋没したのではないかと思われる。



第52図 3区 VI層上面遺構図



第53図 石敷遺構実測図



第54図 石積み遺構実測図

集石墓

S X3043 (第55図 図版17)

E-28グリッドで検出された不整隅丸方形を呈した集石墓田類である。長軸440cm、短軸425cm、深さ104cmを測る。隕は地山に食い込んでいる径1.6m程の河原石（上部が削られた痕があり、この石を墓標としたとも考えられる）を中心として、10~150cm程の大きさのものを不定形に組んでいて、崩れた様子はない。覆土は2層に分けられるが、ともに粘性・縮まりとともに弱い暗褐色土をベースにして黄褐色土が混入している。遺物は火葬骨の細片、馬齒、瀬戸・美濃産の18世紀代の壺鉢、陶器片、在地系のかわらけの破片が出土している。S X3043は、18世紀代に作られた集石墓の可能性が考えられる。

S X3191 (第56図 図版15-1)

D-28グリッドで検出された集石土坑である。V・VI層を掘り込んだ後、10~30cm程の礫を円形に配置して土坑上部の崩壊を防止するとともに、区画石の役割も果たしているのかもしれない。長軸70cm、短軸60cm、深さ26cmを測る。覆土は粘性・縮まりとともに低い黒褐色土である。区画石の上面と土坑内より、18世紀前半の常滑産の大甕の破片が出土した。破片はすべて火を受けているが、土坑中から炭・焼土・灰などは検出されず、土坑中の隕も被熱した様子はないので、ここで煮炊きをしたのではなくて遺棄されたものと思われる。人骨等は検出されなかつたが、検出状況等から集石墓と推定することも可能かもしれない。

不明遺構

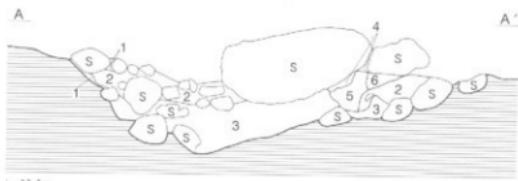
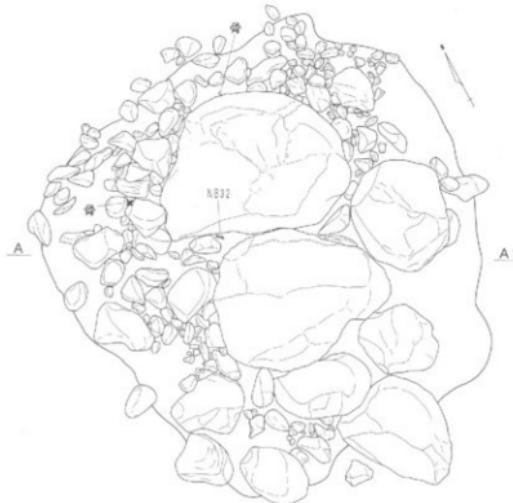
S X3002・3003 (第56図 図版16-1・3~5)

S X3002は、D-28グリッドでS X3003と隣接して検出された集石土坑である。長軸106cm、短軸84cm、深さ20cmを測る。形状はやや歪んだ円形を呈しており、断面は緩やかに立ち上がる。上面の隕は、10~40cm程の大きさのもので、崩れた様子はない。覆土は5層に分けられるが、いずれも暗褐色土をベースとして、黄褐色土を混入している。そして、炭化物が最上層と中層から広範囲に検出された。焼土は検出されなかつたので断定できないが、炭化物が検出された部分は、35×25cmにわたって焼けているようにもみえる。形状等から推測すると炉の跡のようにも思われ、ここに建物が存在したと、想定できるかもしれない。特に南東4m程のところで検出されたS P3164内から根固めに用いた可能性も考えられる石が検出されている。しかし、それ以外は建物の存在を裏付ける確たる遺物も出土していないので、建物跡の認定にまでは至らなかつた。遺物は陶化しなかつたが、古瀬戸後期腰折皿の底部破片とS X3191で検出された18世紀前半の常滑産の大甕と同一個体の破片が出土した。S X3003は、D-28グリッドでS X3002の南側で検出された集石土坑である。長軸111cm、短軸84cm、深さ15cmを測る。形状はやや歪んだ円形を呈しており、断面は緩やかに立ち上がる。上面の隕は10~60cm程の大きさのもので、崩れた様子はない。覆土は5層に分けられるが、いずれも暗褐色土をベースとして、黄褐色土を混入している。上部2層に炭化物が含まれている。S X3002と覆土も類似しており、ほぼ同時期に作られたものと思われる。遺物は15世紀末から16世紀初頭と思われる在地系のかわらけとS X3191で検出された18世紀前半の常滑産の大甕と同一個体の破片が出土した。

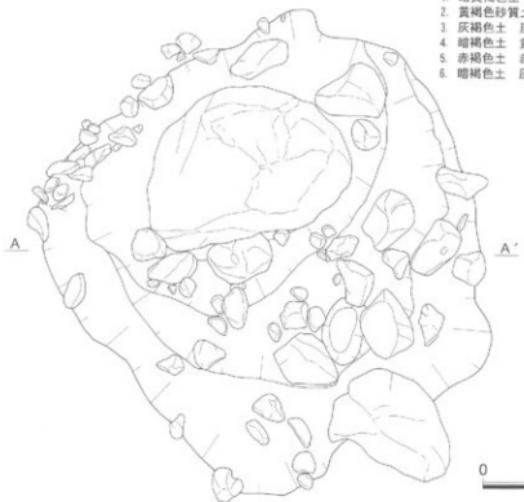
陶器片集中遺構

S X3194 (第56図 図版15-2)

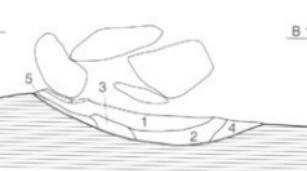
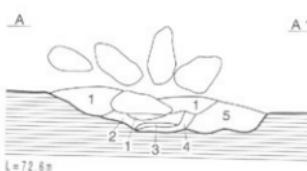
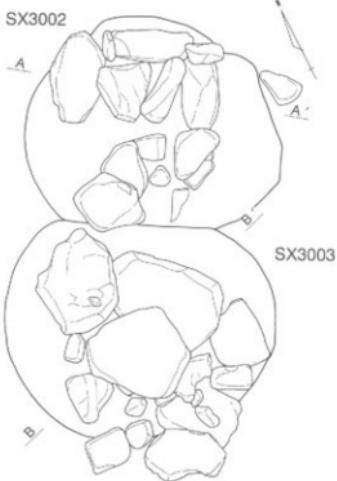
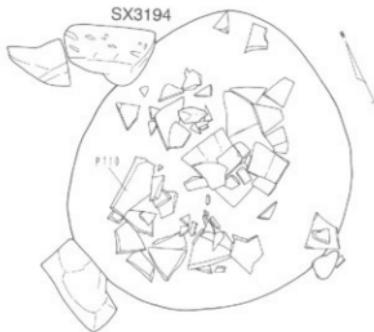
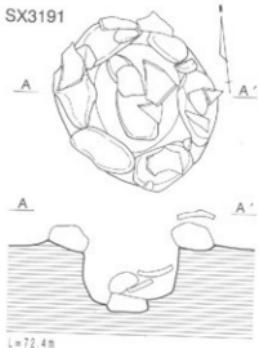
D-28グリッドから検出された陶器片集中遺構である。長さ120cm、幅110cmにわたって、17世紀後半から18世紀前半の常滑産の大甕の破片が散乱している。この破片は2個体分あるようだが、ともに外側は全体が火を受けている。炭や灰、焼土などを伴っていないことから、ここで煮炊きをしたのではなく、



- 1. 雜黃褐色土 黃褐色土を含む
- 2. 黃褐色砂質土 赤褐色土を含む
- 3. 灰褐色土 炭化物を含む。やや保水性あり
- 4. 暗褐色土 黄褐色土ブロックを少量含む
- 5. 赤褐色土 赤色スコリアを多く含む。炭化物を含む
- 6. 暗褐色土 灰色粘土ブロックを混入



第55図 集石墓 S X 3043実測図



1. 硅褐色土 岩化物を含む
2. 硅褐色土 岩化物を多く含む
3. 硅褐色土 硅褐色土を含む
4. 黒色土 硅褐色土を含む 岩化物を含む
5. 硅褐色土 黄褐色土を多く含む

1. 硅褐色土 岩化物と土器断片を含む
2. 硅黃褐色土 岩化物を少量含む
3. 硅褐色土 黄褐色土をブロック状に含む
4. 硅褐色土 3に比べ黄褐色土のブロックが大きい
5. 黄褐色土 硅褐色土を含む



第56図 陶器片集中遺構 S X3194実測図 不明遺構 S X3002・3003・3191実測図

廃棄したものと思われる。これらの破片は標高72.4mから72.6mのIV層中で確認されている。また、S X3002・3003・3191でも同一個体と思われる破片が検出された。

土坑

S F 3004・3019（第57図）

S F 3004は、D・E-28グリッドで検出された橢円形を呈した土坑である。長軸90cm、短軸77cm、深さ14cmを測る。覆土は粘性・締まりとともに弱い暗褐色土をベースにして黄褐色土を混入している。遺物は出土せず、遺構の年代や性格はわからない。S F 3019は、D-28グリッドで検出された橢円形を呈した土坑である。長軸80cm、短軸53cm、深さ17cmを測る。覆土は粘性・締まりとともに弱い暗褐色土である。遺物は出土せず、遺構の年代や性格はわからない。

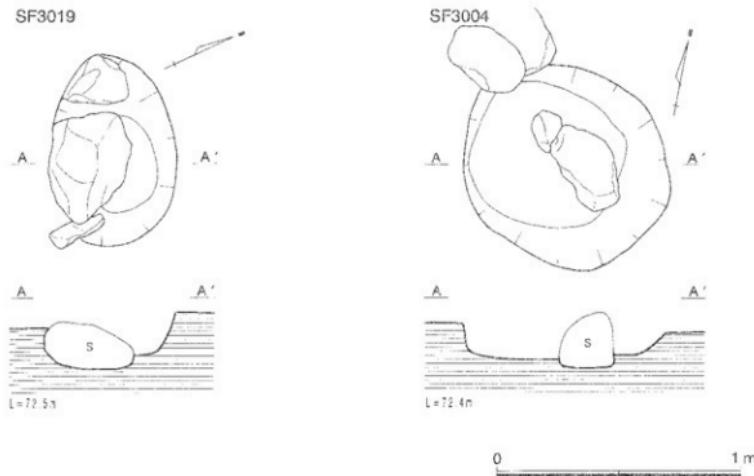
小穴（ピット）

調査区北部のD-27グリッドで1基、D・E-28グリッドで9基の合計10基検出された。規模等は第12表にみるとおりであり、平面形態は橢円形と円形に分けられる。特に建物の認定はできなかったが、直線的に並ぶものや、S P3164からは根固めに用いたと思われる石が出土していること、さらに小穴群内に位置するS X3002内からは、炉の跡の可能性も考えられる炭化物集積状況もみられたので、建物の存在が想定されるが、検出地点が調査区の隅にあたり、今回の調査ではその存在を明らかにすることはできず、小穴の性格も把握することはできなかった。

(2) VI層上面検出遺構

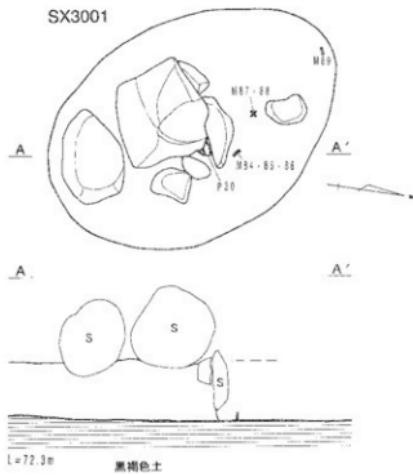
S X3001（第58図 図版20-3）

G-27グリッドから検出された集石墓III類と思われる。平面形態はほぼ橢円形を呈し、長軸126cm、短

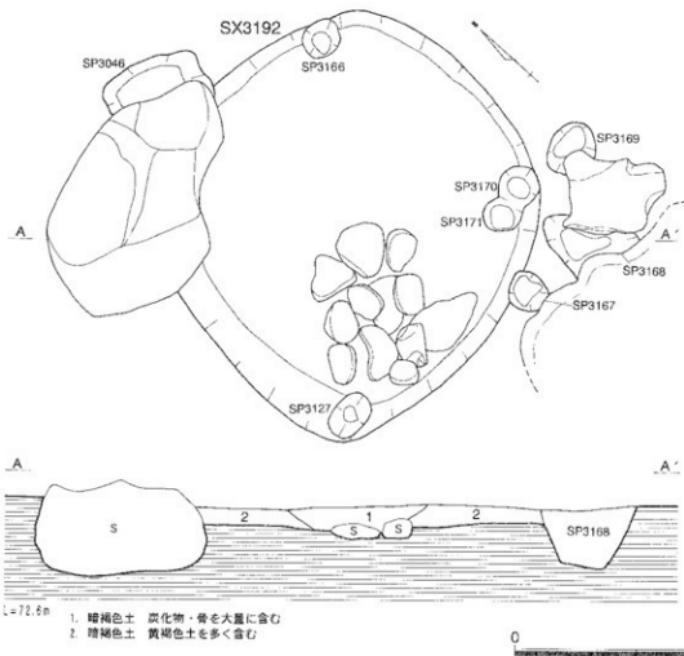


第57図 土坑 S F 3004・3019実測図

SX3001



SX3192



第58図 中世墓 SX 3001・3192実測図

軸83cm、深さ25cm程度と推定した。調査時に掘り方をみつけられず、ある程度掘り込んでから遺構と確認したので、集石はほとんど取り除いてしまって、掲載した図の平面プランはあくまで推定プランである。遺構の掘り込みレベルはよくわからないが、72.0m～72.2mぐらいで遺構が検出された。71.9mで遺物が検出されており、墓坑の切り込み面はもっと高かった可能性がある。また、集石のレベルや土器の検出された高さを考えると、VII層上面検出遺構と類似したレベルで遺構が構築された可能性が高いと思われる。残念ながら覆土が何層に分かれるかはわからないが、粘性・締まりとともに低い暗褐色土から在地系のかわらけ2点（15世紀後半から16世紀初頭）、銭貨（唐銭2枚、北宋銭4枚）、骨片、歯牙が出土した。歯牙は、20歳前後の女性と5～10歳程度の子供のものが混在している（付録2参照）ので、2個体分埋葬されている土葬墓の可能性が考えられる。

(3) VII層上面検出遺構

中世墓・火葬施設

中世墓S X3192（第58図 図版19）

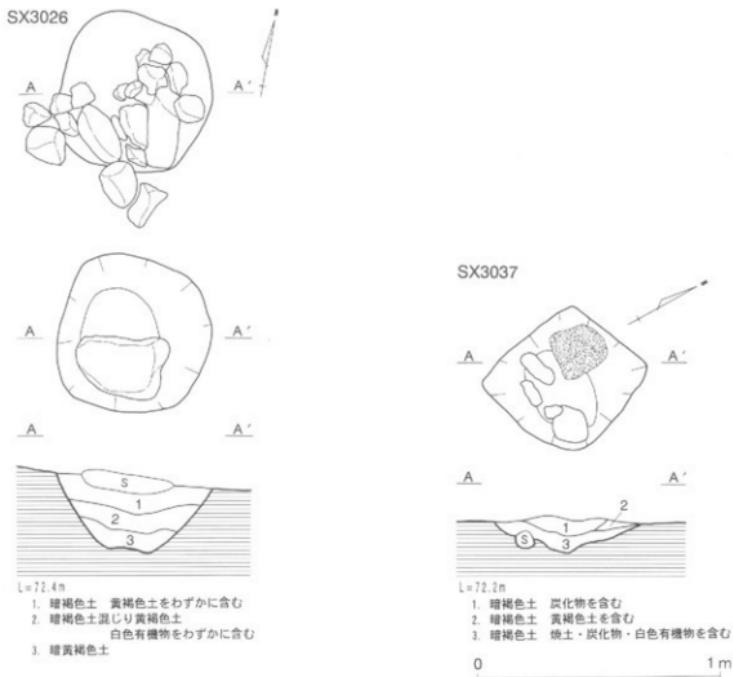
E-26・27グリッドで検出された隅丸方形を呈した集石土坑である。調査時に掘り方がわからず、上面の礫を取り除いてしまったために集石の全体像はわからない。長軸226cm、短軸220cm、深さ14cmを測る。覆土は粘性・締まりとともに低い暗褐色土をベースにして黄褐色土を混入している。土坑内からは焼痕や焼土はほとんど検出されなかつたが、床面には被熱した10～30cm程の大きさの礫を11個敷いてあり、その上下から炭化物と火葬骨片、銭貨が検出された。S X3192は、土坑床面に石を置き、座棺を持ち上げることによって熱効率を上げた土坑で遺体を荼毘し、荼毘後は火葬骨をそのまま埋葬した集石墓III類と考えることが可能かもしれない。遺物は被熱して7枚鋳造した銭貨（北宋銭6枚と明銭1枚）が出土しており、六道銭と考えられる。遺構の構築年代は、出土した洪武通寶から14世紀以降に作られたものと思われる。

中世墓S X3026・3037（第59図 図版20-1）

S X3026は、E-28グリッドで検出された隅丸方形を呈した土坑である。長軸64cm、短軸64cm、深さ40cmを測る。覆土は3層に分かれるが、3層とも粘性・締まりとともに低い暗褐色土をベースにして黄褐色土を混入している。遺物は出土しなかつたが、検出状況等から集石墓III類の可能性が考えられる。S X3037は、E-28グリッドで検出されたほぼ方形を呈する集石土坑である。調査時に掘り方がわからず、上面の礫を取り除いてしまったために集石の全体像はわからない。検出プランは長軸54cm、短軸50cm、深さ15cmを測る。覆土は3層に分けられる。上位2層は暗褐色土をベースにして、黄褐色土・炭化物を混入している。下層は暗褐色土をベースにして焼土・骨粉・炭化物が混入している。遺物は出土しなかつたが、集石墓III類の可能性が考えられる。

中世墓S X3195・火葬施設S X3188（第60図 図版20-1・2）

S X3195は、E-28グリッドで検出された不整楕円形を呈する集石墓III類である。調査時に掘り方がわからず、上面の礫の一部を取り除いてしまったために全体像はつかめないが、拳大から人頭大の礫を不整形に積んだと思われるが、断定はできない。長軸156cm、短軸120cm、深さ26cmを測る。覆土は2層に分けられる。上層は黄褐色土をベースにして暗褐色土が混入している。下層は暗褐色土をベースにして黄褐色土をブロック状に混入し、炭化物や灰も含む。遺物は火葬骨や骨粉が出土したが、細片のため年齢や性別等はわからなかった。S X3188は、E-28グリッドで検出されたほぼ楕円形を呈する火葬施設ではないかと思われる。調査時に掘り方がわからず、上面の礫を取り除いてしまったために集石の全体像はわからない。検出プランは長軸112cm、短軸80cm、深さ19cmを測る。覆土は2層に分けられる。上層は暗乳白色土をベースにして、焼土がブロック状に8ヶ所、暗褐色土と炭化物、骨粉が混入してい



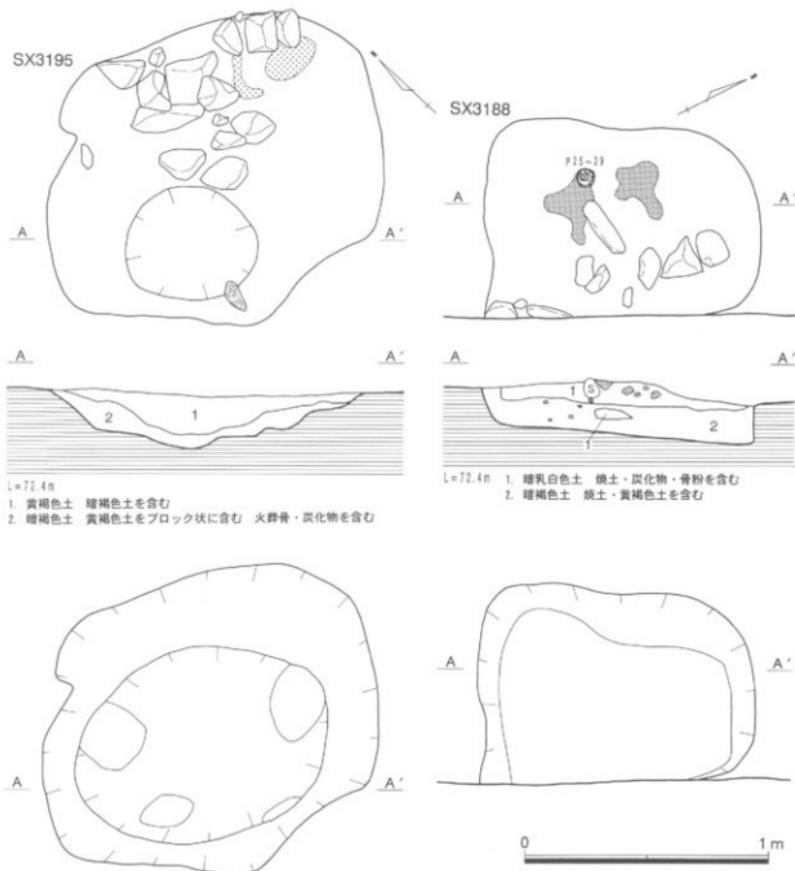
第59図 中世墓 S X 3026・3037実測図

る。下層は、暗褐色土をベースにして黄褐色土と焼土をブロック状に含んでいる。下層中にブロック状に暗乳白色土がある。断面や覆土の様子をみると、何回か荼毘を行って、その度に遺骨は拾骨して他所に埋葬し、土坑が埋まった時点で、火葬施設としての機能を終えたのではないかと思われる。遺物は、検出面直上で15世紀末～16世紀初頭と思われる在地系のかわらけが5枚重なって出土している。これは、土坑が埋まった時点で、手向けとしてこの火葬施設にかわらけを供獻したものと思われる。

不明遺構

S X 3041・3193（第61図 図版18-2）

S X 3041は、D-27グリッドで検出された不整梢円形を呈した集石土坑である。長軸200cm、短軸130cm、深さ9cmと浅い。礫は10～80cm程の大きさのもので崩れた様子はない。断面は緩やかに立ち上がり、底面は南側に向かってやや下る感じである。覆土は粘性・締まりとともに弱い暗褐色土である。遺物は覆土上面の礫中から凹石が出土した。遺構の性格や年代等は不明である。S X 3193は、F-26グリッドで検出された。不整梢円形を呈しており、長軸425cm、短軸207cm、深さ18cmを測る。覆土は2層に分けられる。上層は径2cm大程の炭化物を大量に含む黄褐色土で、黒味が非常に強い。下層は、上層に比べて炭化物の混入が少なくなり、黒味が弱くなる。南西端からS P 3149を検出した。遺物は出土せず、壁面や



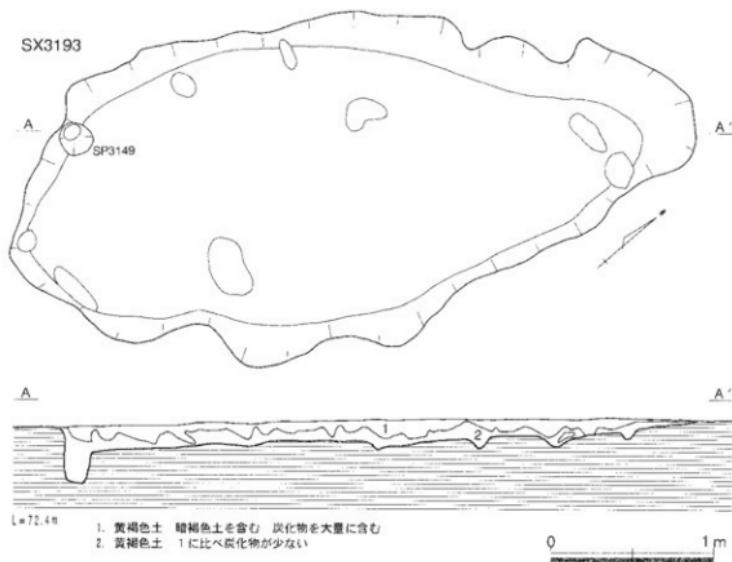
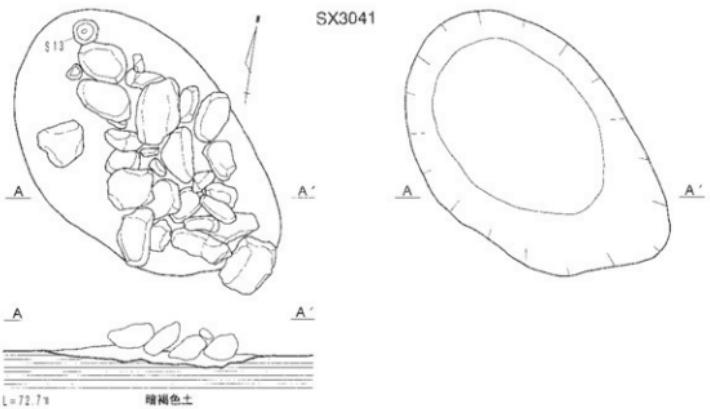
第60図 中世墓 S X3195実測図 火葬施設 S X3188実測図

底面も焼けていないので、火葬施設の可能性は低いと思われ、炭化物の廃棄場所の可能性が考えられる。構築年代は不明である。

土坑

S F 3042・3143・3145・3173・3174（第62図）

S F 3042は、F-27グリッドで検出された隅丸三角形を呈する土坑である。長軸138cm、短軸97cm、深さ30cmを測る。覆土は3層に分けられるが、3層とも粘性・締まりとともに弱い暗褐色土をベースにして黄褐色土を混入している。上位2層に深さ20cm程食い込む形で、径45cm程の礫が埋まっており、墓標に



第61図 不明遺構 SX3041・3193実測図

した可能性も考えられるが、人骨や炭化物も検出されず、遺物も出土しなかったので、土坑の性格や年代はわからない。S F 3143は、F-27グリッドで検出された円形皿状土坑である。長軸73cm、短軸66cm、深さ23cmを測る。ほぼ垂直に近い形で掘り込まれ、底面は平らである。覆土は2層に分けられるが、2層とも粘性・締まりとともに弱い暗褐色土をベースにして黄褐色土を混入している。遺物は出土しなかつたが、検出状況等から土葬墓の可能性も考えられる。S F 3145は、F-27グリッドで検出された楕円形を呈する土坑である。長軸130cm、短軸84cm、深さ13cmを測る。ほぼ垂直に近い形で掘り込まれ、底面は平らである。覆土は2層に分けられるが、2層とも粘性・締まりとともに弱い暗褐色土をベースにして黄褐色土を混入している。遺物は出土しなかつたが、検出状況等から土葬墓の可能性も考えられる。S F 3173は、F-27グリッドで検出された不整形土坑である。長軸75cm、短軸67cm、深さ47cmを測る。覆土は粘性・締まりとともに弱い暗褐色土をベースにして黄褐色土を混入している。遺物は出土しなかつた。S F 3174は、F-27グリッドで検出された不整隅丸形を呈する土坑である。長軸92cm、短軸55cm、深さ15cmを測る。覆土は粘性・締まりとともに弱い暗褐色土をベースにして黄褐色土を混入している。遺物は出土しなかつた。

S F 3016・3190・3197（第63図）

S F 3016は、F-26グリッドで検出された不整楕円形を呈する土坑である。長軸88cm、短軸74cm、深さ11cmを測る。ほぼ垂直に近い形で掘り込まれ、底面は平らである。覆土は粘性・締まりとともに弱い暗褐色土をベースにして黄褐色土を混入している。遺物は出土しなかつた。S F 3190は、D-27グリッドで検出された楕円形を呈した土坑である。長軸160cm、短軸130cm、深さ18cmを測る。覆土は粘性・締まりとともに低い暗褐色土で、疊20~50cm程度をわずかに含む。断面は緩やかに立ち上がる。底面には5つの小穴が掘り込まれていた。遺物は出土せず、土坑の性格や年代はわからない。S F 3197は、E-26グリッドで検出された不整形の土坑である。長軸150cm、短軸65cm、深さ59cmを測る。覆土は粘性・締まりとともに弱い暗褐色土で黄褐色土をわずかに混入している。遺物は出土しなかつた。

S F 3035・3044・3045（第64図）

S F 3035は、E-27グリッドでS D 3196と径1m程の礫の間で検出された楕円形を呈する土坑である。長軸86cm、短軸54cm、深さ46cmを測る。覆土は4層に分けられるが、4層とも粘性・締まりとともに弱い暗褐色土をベースにして黄褐色土を混入しており、「下位にいくほどその混入が多くなる。」遺物は出土しなかつた。S F 3044・3045は、E-27グリッドで径150cm程の礫の両側で検出された。不整方形を呈するS F 3044は、礫の東側に位置し、長軸115cm、短軸90cm、深さ25cmを測る。覆土は粘性・締まりとともに弱い暗褐色土で、遺物は出土しなかつた。楕円形を呈するS F 3045は、礫の西側に位置し、北側の一部をS D 3196で切られている。長軸140cm、短軸100cm、深さ39cmを測る。切り合いかからS D 3196の方が古いと思われる。覆土は粘性・締まりとともに弱い暗褐色土で、遺物は出土しなかつた。

溝状遺構

S D 3196（第64図）

E-27グリッドで検出したN-19°-Eの方向で延びる溝状遺構である。検出長240cm、幅28~40cm、深さ9~11cmを測る。底面は船底状を呈していて、覆土は2層に分けられる。上層が粘性・締まりとともに低い暗褐色土で、下層は暗褐色土をベースにして黄褐色土が混入している。南側はS F 3045で切られている。切り合いかからS D 3196の方が古いと思われるが、遺物は出土せず、その性格や時期はわからない。

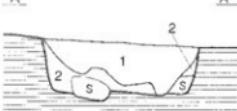
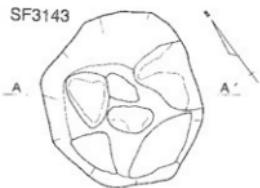
小穴（ピット）

小穴は合計97基検出された。D-27グリッドで21基、D-28グリッドで1基、E-26グリッドで20基、

E-27グリッドで19基、E-26・27グリッドで2基、E-28グリッドで2基、F-26グリッドで27基、F-27グリッドで3基、F-26・27グリッドで1基、G-26グリッドで1基というようにFラインより北側の調査区北東部に集中する傾向がみられる。規模等は第12表にみるとおりで、平面形態は、円形、梢円形、方形、隅丸方形等様々である。直線的に並ぶものもみられたが、碇石や柱根などは検出されず、建物の認定はできなかった。その中で、特徴的な3つの小穴について説明したい。

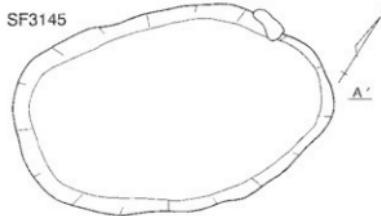
S P 3011・3018・3157（第63図 図版20-4・5）

S P 3011は、D-27グリッドで検出された梢円形を呈する小穴である。長軸42cm、短軸38cm、深さ15cmを測る。覆土は粘性。縦まりともに弱い暗褐色土に黄褐色土が混入している。覆土上面で、永楽通寶が出土している。S P 3018は、F-26グリッドで検出された円形を呈する小穴である。長軸30cm、短軸30cm、深さ18cmを測る。覆土は、黄褐色土をベースにして暗褐色土が混入している。小穴内より紹聖元寶が出土している。S P 3157は、F-26グリッドでS P 3018に近接して検出された円形を呈する小穴で、規模も長軸30cm、短軸30cm、深さ24cmを測るというように類似している。覆土は、暗褐色土をベースにして黄褐色土が混入している。覆土上面より15世紀後半代と思われるかわらけの底部破片が出土している。3基の小穴とともに人骨や焼土も検出されず、他の遺物も出土していないので、出土銭貨を地鎮のための埋納物と捉えるならば柱穴と考えることができ、六道銭として副葬されたならば填墓と判断することも可能かもしれないが、断定はできず、銭貨は単に廃棄されたものとも考えられる。しかし、近接した2基の小穴で銭貨とかわらけが出土したということは、2基の小穴の周辺で茶毬もしくは埋葬が行われた可能性も否定できないと思われる。いずれにしてもそれらを裏付ける確たる遺物が出土していないため、現段階で小穴の性格を言及することは困難である。



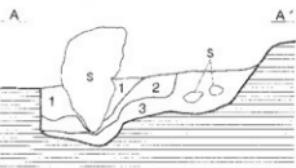
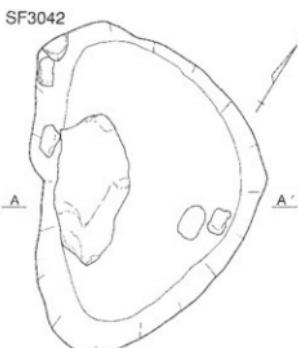
L=72.0m

1. 線褐色土 黄褐色土をわずかに含む
2. 線褐色土 黄褐色土を含む



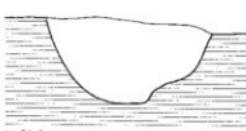
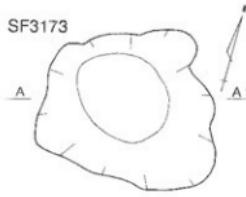
L=72.1m

1. 暗褐色土 黄褐色土を含む
2. 暗褐色土 黄褐色土を多く含む

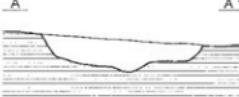


1. 線褐色土 黄褐色土をわずかに含む
2. 線褐色土 黄褐色土を多く含む
3. 線褐色土 黄褐色土をブロック状に含む

0 1 m

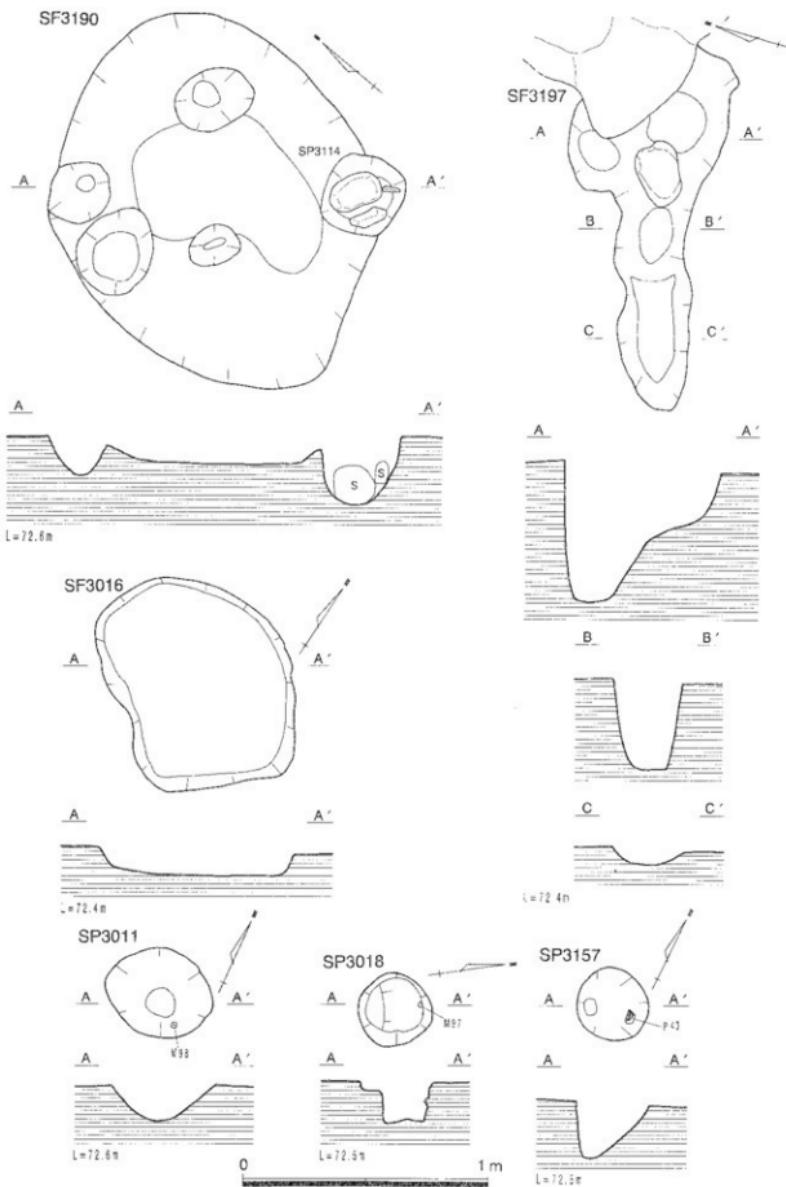


L=71.9m 線褐色土 黄褐色土を含む

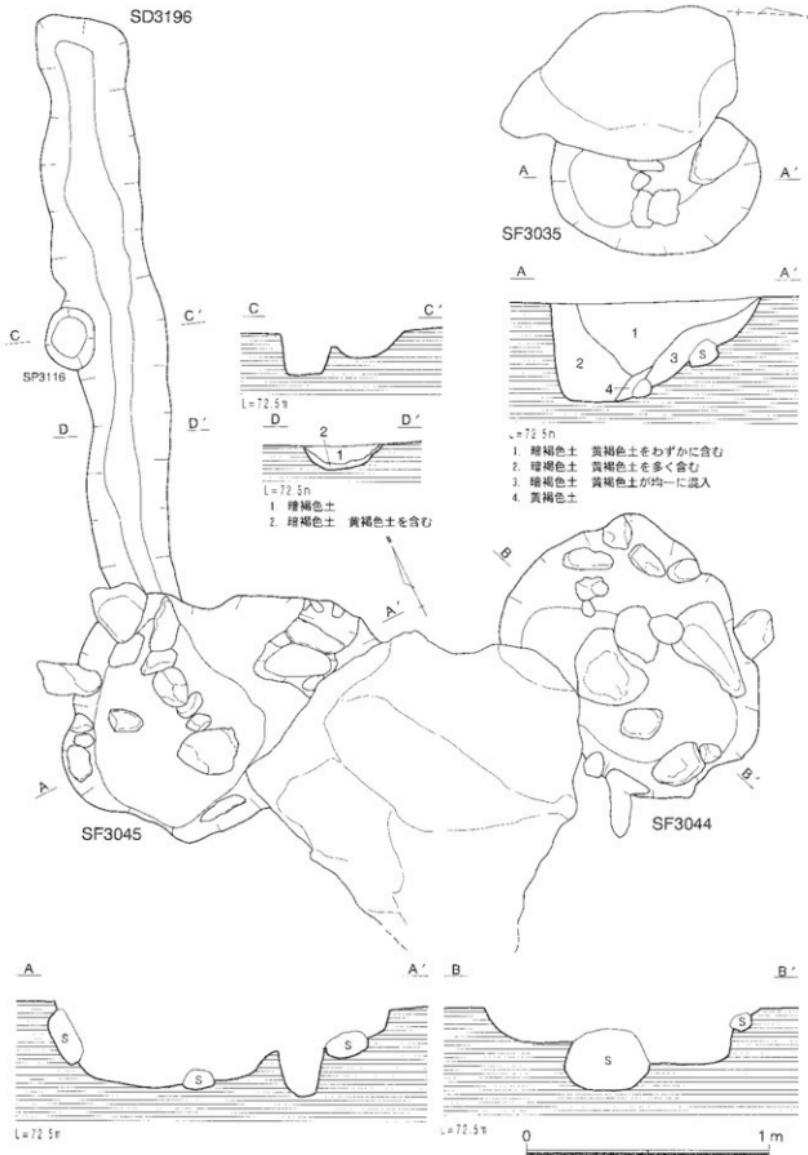


L=71.9m 線褐色土 黄褐色土を含む

第62図 土坑SF3042・3143・3145・3173・3174実測図



第63図 土坑 S F 3016・3190・3197実測図 小穴 S P 3011・3018・3157実測図



第64図 土坑SF3035・3044・3045実測図 溝状遺構SD3196実測図

第10表 3区S X計測表

遺構名	グリッド	層位	形 状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	方 位	備 考
S X3002	D - 28	IV層	やや歪んだ円形	106	84	20	N - 28° - E	常滑大甕破片、炭化物
S X3003	D - 28	IV層	やや歪んだ円形	111	84	15	N - 26° - E	常滑大甕破片、炭化物
S X3043	E - 27 • D • E - 28	IV層	不整楕丸方形	440	425	104	N - 47° - E	集石墓Ⅲ類、馬齒、陶器片、人骨
S X3191	D - 28	IV層	円形	70	60	26	N - 20° - W	常滑大甕破片、炭化物
S X3194	D - 28	IV層	—	120	110	—	—	常滑大甕破片集積
S X3081	G - 27	VII層	楕円形	(126)	(83)	(25)	N - 30° - W	集石墓Ⅲ類、齒、かわらけ、銭貨(6枚)
S X3026	E - 28	VII層	隅丸方形	64	64	40	N - 3° - E	集石墓Ⅲ類、炭化物
S X3037	E - 28	VII層	方形	54	50	15	N - 12° - W	集石墓Ⅲ類、炭化物、骨粉
S X3041	D - 27	VII層	不整楕円形	200	(130)	9	N - 47° - W	凹石
S X3188	E - 28	VII層	楕円形	112	80	19	N - 35° - E	火葬施設、かわらけ、炭化物
S X3192	E - 26 • 27	VII層	隅丸方形	226	220	14	N	集石墓Ⅲ類、銭貨(7枚)、人骨
S X3193	F - 26	VII層	不整楕円形	425	207	18	N - 32° - E	炭化物
S X3195	E - 28	VII層	不整楕円形	156	120	26	N - 88° - E	集石墓Ⅲ類、炭化物、骨粉

第11表 3区土坑計測表

遺構名	グリッド	層位	形 状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	方 位
S F 3004	D • E - 28	IV層	楕円形	90	77	14	N - 78° - W
S F 3019	D - 28	IV層	楕円形	80	53	17	N - 29° - W
S F 3016	F - 26	VII層	不整楕円形	88	74	11	N - 49° - W
S F 3035	E - 27	VII層	楕円形	86	54	46	N - 1° - W
S F 3042	F - 27	VII層	隅丸三角形	138	97	30	N - 30° - W
S F 3044	E - 27	VII層	不整方形	115	90	25	N - 11° - W
S F 3045	E - 27	VII層	楕円形	140	100	39	N - 89° - E
S F 3143	F - 27	VII層	円形	73	66	23	—
S F 3145	F - 27	VII層	楕円形	130	84	13	N - 49° - E
S F 3173	F - 27	VII層	不整形	75	67	47	—
S F 3174	F - 27	VII層	不整隅丸方形	92	55	15	N - 30° - E
S F 3190	D - 27	VII層	楕円形	160	130	18	N - 28° - E
S F 3197	E - 26	VII層	不整形	150	65	59	N - 71° - E

第12表 3区小穴計測表

遺構名	グリッド	層位	形 状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	備 考
S P 3005	E - 28	IV層	楕円形	65	(27)	12	
S P 3006	E - 28	IV層	楕円形	60	55	10	
S P 3008	D - 28	IV層	楕円形	62	50	16	
S P 3025	E - 28	IV層	円形	33	31	11	
S P 3036	D - 27	IV層	円形	21	20	13	
S P 3164	E - 28	IV層	楕円形	56	50	41	
S P 3165	E - 28	IV層	楕円形	50	38	20	
S P 3175	D - 28	IV層	円形	52	50	27	
S P 3176	D - 28	IV層	円形	36	34	21	

遺構名	グリッド	層位	形 状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	備 考
S P3177	D - 28	IV層	円 形	30	30	26	
S P3009	D - 28	VII層	円 形	37	32	14	
S P3010	D - 27	VII層	楕 圓 形	48	32	19	
S P3011	D - 27	VII層	楕 圓 形	42	38	15	永楽通寶出土
S P3012	D - 27	VII層	楕 圓 形	48	27	41	
S P3013	D - 27	VII層	楕 圓 形	(27)	(16)	(15)	
S P3014	D - 27	VII層	楕 圓 形	40	26	20	
S P3015	F - 26	VII層	楕 圓 形	48	42	39	
S P3017	F - 26	VII層	楕 圓 形	66	60	9	
S P3018	F - 26	VII層	円 形	30	30	18	紹聖元寶出土
S P3021	E - 26	VII層	楕 圓 形	30	27	33	
S P3022	E - 26	VII層	楕 圓 形	33	20	40	
S P3023	E - 26	VII層	楕 圓 形	38	29	20	
S P3024	E - 26	VII層	円 形	32	26	20	
S P3028	E - 26	VII層	円 形	21	21	13	
S P3030	E - 26	VII層	楕 圓 形	46	30	29	
S P3031	E - 26・27	VII層	円 形	45	35	26	
S P3032	E - 27	VII層	円 形	48	48	9	
S P3033	D - 27	VII層	円 形	47	40	36	
S P3034	D - 27	VII層	円 形	41	33	28	
S P3038	E - 28	VII層	円 形	38	37	6	
S P3039	E - 28	VII層	隅丸方形	56	45	15	
S P3046	E - 26・27	VII層	楕 圓 形	54	(21)	11	
S P3047	F - 26	VII層	円 形	30	27	24	
S P3048	F - 26	VII層	不整方形	42	25	26	
S P3101	D - 27	VII層	円 形	17	16	10	
S P3102	D - 27	VII層	四 角 形	26	21	33	
S P3103	D - 27	VII層	円 形	20	21	23	
S P3104	D - 27	VII層	楕 圓 形	32	23	19	
S P3105	D - 27	VII層	円 形	32	26	34	
S P3106	D - 27	VII層	円 形	27	20	13	
S P3107	D - 27	VII層	不整楕円形	23	21	37	
S P3108	D - 27	VII層	楕 圓 形	36	30	30	
S P3109	D - 27	VII層	楕 圓 形	52	46	32	
S P3110	D - 27	VII層	楕 圓 形	30	25	38	
S P3111	D - 27	VII層	円 形	29	27	14	
S P3112	D - 27	VII層	楕 圓 形	26	24	16	
S P3113	D - 27	VII層	円 形	29	21	10	
S P3114	D - 27	VII層	円 形	37	35	28	S F 3190内
S P3115	E - 27	VII層	円 形	33	31	22	
S P3116	E - 27	VII層	楕 圓 形	26	21	16	
S P3117	E - 27	VII層	円 形	26	25	16	
S P3118	E - 27	VII層	円 形	31	30	28	
S P3119	E - 27	VII層	五 角 形	27	22	33	

遺構名	グリッド	層位	形 状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	備 考
S P3120	E -27	VII層	楕 円 形	30	17	13	
S P3121	E -27	VII層	半 楕 円 形	20	16	16	
S P3123	E -26	VII層	円 形	40	35	41	
S P3124	E -26	VII層	円 形	37	35	43	
S P3125	E -26	VII層	円 形	25	22	16	
S P3126	E -26	VII層	円 形	25	24	21	
S P3127	E -27	VII層	隅 丸 方 形	30	20	29	S X3192内
S P3128	E -27	VII層	隅 丸 方 形	37	24	33	
S P3129	E -27	VII層	円 形	31	29	22	
S P3130	E -27	VII層	円 形	25	25	19	
S P3131	E -26	VII層	円 形	28	25	11	
S P3132	E -26	VII層	円 形	35	30	19	
S P3133	E -26	VII層	円 形	20	18	18	
S P3134	F -26	VII層	隅 丸 方 形	42	38	30	
S P3135	E -26	VII層	円 形	34	32	10	
S P3136	F -26	VII層	瓢 簣 形	48	30	26	
S P3137	F -26	VII層	円 形	30	26	20	
S P3138	F -26	VII層	円 形	28	25	21	
S P3139	F -26	VII層	円 形	29	28	35	
S P3140	F -26	VII層	楕 円 形	36	26	15	
S P3141	F -26	VII層	円 形	26	25	45	
S P3142	F -26	VII層	円 形	23	21	16	
S P3147	F -27	VII層	楕 円 形	24	18	18	
S P3148	F -27	VII層	円 形	23	20	12	
S P3149	F -26	VII層	円 形	22	20	34	S X3193内
S P3150	F -26	VII層	隅 丸 方 形	40	34	41	
S P3151	F -26	VII層	円 形	45	42	37	
S P3152	F -26	VII層	楕 円 形	43	38	39	
S P3153	F -26	VII層	円 形	27	25	32	
S P3154	F -26	VII層	円 形	30	28	37	
S P3155	F -26	VII層	椭 円 形	22	18	24	
S P3156	F -26	VII層	円 形	25	25	28	
S P3157	F -26	VII層	円 形	30	30	24	かわらけ出土
S P3158	F -26	VII層	円 形	28	28	20	
S P3159	F -26	VII層	四 角 形	32	22	24	
S P3160	E -26	VII層	椭 円 形	65	40	31	
S P3161	F -26	VII層	椭 円 形	33	30	11	
S P3162	F -26	VII層	椭 円 形	50	33	17	
S P3163	F -26	VII層	円 形	20	20	14	
S P3166	E -27	VII層	円 形	24	24	25	S X3192内
S P3167	E -27	VII層	円 形	25	23	17	
S P3168	E -27	VII層	三 角 形	57	33	38	
S P3169	E -27	VII層	椭 円 形	32	25	26	
S P3170	E -27	VII層	円 形	24	23	19	S X3192内

遺構名	グリッド	層位	形 状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	備 考
S P 3171	E - 27	VII層	円 形	23	22	15	S X 3192内
S P 3172	F - 27	VII層	円 形	55	50	21	
S P 3179	F - 26・27	VII層	不整円形	43	34	28	
S P 3180	F - 26	VII層	隅丸台形	32	20	15	
S P 3182	G - 26	VII層	円 形	52	51	17	
S P 3184	E - 26	VII層	円 形	33	28	29	
S P 3185	E - 26	VII層	楕 圓 形	56	44	44	
S P 3186	E - 26	VII層	円 形	22	18	5	
S P 3187	E - 26	VII層	円 形	33	25	9	
S P 3189	E - 27	VII層	楕 圓 形	38	25	39	

第Ⅳ章 遺 物

第1節 土 器・陶磁器

1 概要

大平遺跡から出土した土器・陶磁器は、縄文時代から近代にまで及んでおり、総数で711点である。この数字は、発掘調査において出土した土器・陶磁器を袋単位で取り上げ、遺物台帳に登録した際の点数であり、出土遺物の個体数に直接結びつくものではない。土器・陶磁器の出土状況は、墳墓を中心とする本遺跡であるが、墳墓からの出土点数はわずかである。しかし土器・陶磁器は墳墓の年代を推定する根拠として重要であり、また出土地点も遺構の性格を考える上で重要である。出土した土器・陶磁器は、縄文土器・須恵器・土師器・瓦質土器・かわらけの土器類・陶器類・青磁・白磁・染付などの磁器類がある。以下土器から記述を進めていきたい⁽¹⁾。

2 縄文土器（第66図 図版21）

4点出土している縄文土器は、縄文中期に属するものと考える。P 1は、深鉢形土器の把手部分で、勝板I式と考えられる。3区石積み遺構からの出土で、二次的な堆積と思われる。P 2～P 4は、2～1区の表採資料で他からの混入と思われる。胎土や焼成が類似しているので3点は同一個体と思われ、胸部にキャタピラ文の入った勝板II式に属すると考える。

3 須恵器（第66図 図版21）

P 5・P 6は、甕型土器の口縁部と胸部の破片で、同一個体である。古墳後期の7世紀代に位置づけられる⁽²⁾。1区VI層出土である。

4 土師器（第66図 図版21）

P 7は、3区VI層出土のいわゆる戦国時代の羽釜である。浅い扁球形の体部をもち、口縁部断面が体部とほぼ同一の曲線を描き、鈍がわずかに斜め上方に突出している。体部外面はハケ調整、内面はナデ調整と一部板ヶズリが施されている。また、外面全体が被熱して煤が付着している。口縁部には焼成前に開けたと思われる吊り下げのための一対の穿孔がみられる。年代的には15世紀中葉から16世紀中葉に位置づけられる可能性もあるが、羽釜は、『長久保城址』(1978) や『莊山城跡』(1997) にも出土例があり、今後出土例の増加を待って正確な位置づけを行いたいと考える。

5 瓦質土器（第66図 図版21）

P 8は、3区VI層出土の煮沸具として用いられた茶釜と思われる。残存部分が少ないため断定はできないが、鉄製の茶釜を模倣したもので、直立する口縁部に、肩の張った体部がつくタイプと思われる。外面は口縁上部がナデ調整で、口縁下部から肩部にかけてヘラミガキ、内面は板ヶズリと一部板で搔きとった痕もみられる。瓦質の茶釜は、畿内から関東にかけて分布するが、遠江以西で出土するものと関東で出土するものでは形態と年代の上で少し隔たりがあるといわれております⁽³⁾。P 8は東国産であって、関東出土のものと類似するものではないかと思われる。15世紀中葉から16世紀前半に位置づけられるかもしれないが断定はできない。

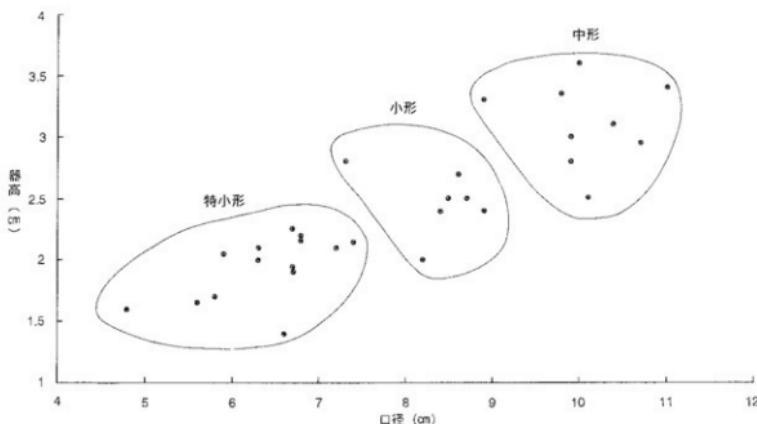
6 かわらけ（第66~67図 図版21~23・30）

① 概要

大平遺跡において出土したかわらけの総量は、コンテナにして約2箱ほどで、土器・陶磁器類の中でも最も出土量が多かった。しかし完形品は少なく、接合復元したものや図上復元したものなどを中心に40点を図示した。かわらけの用途としては、灯明皿や墓の副葬品、酒杯などが考えられる。近接する長久保城址からも大量のかわらけが出土していて、それらは伴出した陶磁器類や在城期間を示す文献等から15世紀末から16世紀末に位置づけられるのではないかと思われる。また近隣では、小田原で出土したかわらけに関しては山口剛志氏（山口剛志 1991・1994）が編年を試みており、並山では、御所之内遺跡で原茂光氏が12世紀から16世紀初頭までの編年を行っている（原茂光 1985）。本遺跡では、遺構内でかわらけと伴出した陶磁器は、S X 3002内出土の18世紀前半代と思われる常滑大甕の破片だけなので、かわらけの年代決定には決めてを欠いている。足立順司氏は『原川遺跡』IV（静文研 1991）の中で、かわらけは小規模生産が考えられ、その流通も地域的に狭いと推定され、さらに器形変化に乏しいことから、細分には注意が必要であると述べている。編年の確立していない駿河東部地域においては、編年の確立が急務であるが、残念ながら本遺跡の資料では絶対数が少なくて無理があるので、今回は分類するにとどめ、今後の類例の増加によって編年が確立されるのを望むところである。従ってかわらけの年代観は推定の域をでないが、並山町御所之内遺跡における原茂光氏の編年と長久保城址出土品および小田原の山口氏の編年を参考にして考えていただきたい。

出土したかわらけの特徴について、次の4点を全体的な傾向としてあげることができる。

- A. ほとんどのかわらけは、色調が橙色もしくは橙褐色で、胎土は密であり、焼成は良好である。
- B. 出土したかわらけのすべてがロクロ成形品であり、手づくね成形品は1点も出土していない。
- C. 底部の切り離しは、ほとんどが回転糸切りで、回転方向は右回転のみである。
- D. 内面もしくは外面に煤が付着している物が約半数の21点である、それらは灯明皿もしくは墓の副葬品として用いられた可能性が高い。



第65図 かわらけ法量図

次に出土したかわらけを口径および器高から特小形・小形・中形の3種類に分類した（第65図参照）。なお、図上復元できなかった10点は、復元口径や底径などから推定した。分類の基準は次の通りである。

特小形……口径が7.0cm未満で、器高が1.4～2.4cm

小 形……口径が7 cm～9 cm程度で、器高が2.0cm～2.5cm

中 形……口径が9 cm～12cm程度で、器高が2.5cm～4.0cm

② 特小形（P 9～P 20、P 41～P 44）

長久保城址からは特小形に該当するものは出土していない。まず御所之内遺跡のⅦ期に類似するタイプとして、P 9～P 13、P 15～P 18、P 20、P 41、P 43～P 44があげられる。いずれも底部が平底で厚手である。P 18は器壁がやや内湾しながら、口縁部をつまむようにつくり出している。P 20は、高台状の高まりをつくり、器壁はほぼ直線的に外に開いて立ち上がり、口縁部がやや外反する。底部外面の糸切り痕の上にスノコ状の圧痕が残存しており、これは干し台痕と思われる。他の11点は器壁がほぼ直線的に立ち上がるタイプと思われる。15世紀後半位に位置づけられるか。P 14は平底だがやや底部のつくりは薄くなり、器壁はほぼ直線的に立ち上がる。15世紀代のものだろう。P 19は他のかわらけと形態が異なり、非常に薄手のつくりで、器壁は開き気味に緩やかに立ち上がり、口縁部はやや外反する。焼成は硬質で良好である。他地域からの搬入品の可能性も考えられる。もし小田原産のものとするならば、山口氏の編年でいうV期（17世紀末から18世紀末）に該当するか。P 42は、口縁部のみ残存しているので断定はできないが、器壁が碗形に立ち上がる。15世紀代に位置づけられるか。さて、以上16点の中で、口縁部に煤が付着していた5点（P 13・14・17・18・20）は、灯明皿として使用されたと思われ、内外面に煤が付着していた3点（P 11・15・16）は、灯明皿か墓の副葬品であった可能性も考えられる。

③ 小 形（P 21～P 29、P 45～P 48）

P 21・P 22・P 24・P 46は、厚手の平底で、器壁がほぼ直線的に緩やかに立ち上がるタイプである。長久保城址（二の丸）からも類似品が出土しており⁴⁴⁾、御所之内遺跡のX期に類似するタイプで、15世紀末から16世紀初頭のものだろう。P 25～P 29は、S X 3188から5点重なった状態で出土しており、おそらく火葬施設の供献品と思われる。見込みの高まりを残し、器壁はやや薄手で、口唇部がやや内傾している。15世紀末から16世紀初頭に位置づけられるか。P 23はS X 21378（中世墓）出土で、御所之内遺跡のⅦ期に類似するタイプと思われる。底部は厚手で高台状の高まりをつくり、器壁はやや外反気味である。15世紀後半のものだろう。P 45・P 48は、高台状の高まりをつくり出している底部破片である。P 47は、碗形を呈する口縁部破片である。内外面に煤が付着していたのは、P 22・P 23・P 29の3点で、P 27・P 28は内面に煤が付着していた。P 22は灯明皿に用いられたのだろう。

④ 中 形（P 30～P 40）

P 30はS X 3001（中世墓）からの出土で、副葬品と思われる。平底で、器壁は直線的に外に開いて立ち上がる。15世紀代に位置づけられるか。P 31～P 33、P 37、P 39～P 40は、体下部をナデて丸味を持たせ、器壁は直線的に立ち上がりながら、中位からやや外反する。P 34～P 36は、高台状の高まりをつくり出して、器壁はほぼ直線的に立ち上がる。P 34がやや器壁が厚いか。P 36には底部外面にスノコ状の圧痕が残存している。P 38も若干高台状の高まりをつくり出しながら、器壁は緩やかに内湾しながら立ち上がる。P 31～P 40は、御所之内遺跡のX期に類似するタイプで、15世紀末から16世紀初頭のものだろう。中形品は煤が付着しているものが多く、口縁部のみ付着がP 31、内面付着がP 30・P 34・P 36・P 38の4点で、外付着がP 33・P 35の2点で、P 33はS X 21016（中世墓）出土で、P 35はS X 21378（中世墓）出土で、ともに墓の副葬品と思われる。内外面に付着しているのがP 37である。

7 国産陶磁器（第68～72図 図版24～29）

① 皿類（P49～P77）

P49は、卸目付大皿の脚部破片である。口縁部は残存しないが、口縁部のみ施釉し、注口と三脚がつくタイプと思われる。古瀬戸後期の15世紀中葉から後半に位置づけられる。P50は、灰釉の施された折縁深皿で、古瀬戸後期の14世紀後半に位置づけられる。P51は、口縁の一部が被熱して煤が付着している縁釉小皿である。古瀬戸後期の15世紀中葉から後半のものか。P52も古瀬戸後期の縁釉小皿と思われる。明るい灰釉が口縁部のみ施釉されている。削り出し高台をもつタイプと考えられる。15世紀後半に位置づけられる。P53～P57は、瀬戸・美濃系の灯明皿である。P53は灰釉が施されており、19世紀前半から中葉に位置づけられる。P54は見込みに輪トチンと呼ばれる環状痕があり、これは重ね積みの痕である。削り出し高台（基筒底作り）で、二次的に弱い火を受けたためか灰釉がかけているので、墓の副葬品の可能性もある。18世紀末から19世紀前半のものか。P55は鉄釉が施釉されており、19世紀前半から中葉に位置づけられる。P56は基筒底作りで、灰釉が施されている。18世紀末から19世紀中葉に位置づけられるか。P57は鉄釉が施されており、見込みに重ね積みの痕がある底部外面の釉を拭っている。18世紀末から19世紀前半に位置づけられる。P58は、志戸呂系の内窓皿である。基筒底作りで、鉄釉が施釉されている。16世紀末から17世紀初頭に位置づけられる。P59～P64は、瀬戸・美濃系の小皿で長石釉と灰を混ぜることによって、透明性を引き出している。いずれも17世紀中葉から末に位置づけられるか。P59は底部外面は無釉である。見込みに円錐ピンを用いて重ね積みした痕が残存している。P60は小皿で、削り出し高台である。被熱のためと思われるが、所々で釉が剥離している。P61は削り込み高台の小皿か。底部外面は無釉であり、被熱して煤が付着している。P62は削り出し高台の小皿である。見込みにトチンの痕が残存している。P63は削り出し高台の小皿か。P64は、ほぼ完形で削り出し高台の志野丸皿か、重ね焼きのため見込みの釉が剝がれている部分がある。また、弱い火を受けて口唇部に煤が付着している。墓の副葬品の可能性がある。P65は瀬戸・美濃系の摺絵皿である。貼り付け高台まで施釉されて、底部外面は無釉である。見込みに重ね焼きの痕が残存している。18世紀初頭から中葉に位置づけられる。P66は瀬戸・美濃系で、志野丸皿である。基筒底作りで、全面施釉されている。見込み及び底部外面にトチンの痕が残存している。17世紀前半に位置づけられるか。P67・68は、美濃系の菊皿である。2点とも黄瀬戸釉に縁釉が流し込まれ、口縁はヘラ状工具でカットされていて、高台は貼り付け高台である。また、見込みには円錐ピンを用いて重ね積みした痕が残存している。17世紀後半に位置づけられるか。P69は肥前系の輪窓皿である。外面は高台周辺を除いて透明釉を施釉し、内面は青緑釉を施釉して、見込みの釉を蛇ノ目状に釉剝ぎしている。17世紀後半から18世紀前半のものだろう。P70は瀬戸・美濃系の反り皿である。灰釉が施され、削り出し高台と底部外面は無釉である。見込みに円錐ピンを用いて重ね積みした痕が残存している。17世紀中葉から後半に位置づけられるか。P71は美濃系の中皿である。長石釉と灰釉を混せて全面に施釉し、高台部分は釉を拭い取っている。見込みには摺絵が施されている。18世紀中葉のものだろう。P72～P76は桟付きの灯明受皿である。P74が志戸呂系で、他の4点は瀬戸・美濃系である。P72は平底で体部は若干丸味をもって開き、桟部はほぼ直立する。全面にサビ釉が施されるが、外面の体部下半から底部の釉は拭い取られる。19世紀前半のものだろう。P73は、平底で体部は若干丸味をもって開き、桟部は立ち上がりは低い。また、全面にサビ釉が施されるが、外面の体部下半から底部の釉は拭い取られる。19世紀前半から中葉に位置づけられるか。P74は体部は直線的に開き、桟部は先端が尖り、立ち上がりは低い。全面に鉄釉が施され、外面の体部下半から底部の釉は拭い取られる。19世紀前半のものだろう。P75は、体部は全体にやや丸味を帯びる。桟部の立ち上がりは低い。体部上方から内面にかけて長石釉が施される。19世紀前半のものだろう。P76は、体部は丸味をもって開き、口縁部はやや立ち上がる。桟部はほぼ直立している。

全面にサビ釉が施釉されるが、底部周辺の釉は拭われる。19世紀前半のものだろう。P77は、肥前系の染付肌である。全面に透明釉が施釉されているが、一部で釉が変質している。17世紀後半から18世紀前半に位置づけられるだろう。

② 碗・坏類 (P78~P92)

P78~P82は瀬戸・美濃系陶器、P83~P87は肥前系陶器である。P78は灰釉の小坏で、直線的に開く体部から口縁部がやや外反する。削り出し高台で、高台周辺の釉が剥離している。17世紀代のものと思われる。P79は小碗である。内面から外面体部の上半まで船釉が施され、高台周辺は露胎である。17世紀末から18世紀中葉に位置づけられるか。P80は高台周辺を除いて透明釉が施釉された小碗である。18世紀後半から19世紀初頭に位置づけられるか。P81は柿釉丸碗である。体部下方は丸味を帯び、上方は直立する。底部は平坦で、高台は低く断面は方形である。高台周辺は露胎である。18世紀代に位置づけられるか。P82は底部が欠損しているので断定はできないが、体部下方に稜が入り、上方は直線的に開く腰鉢碗と思われる。体部中央から上方にかけて3条の櫛描き線がみられる。釉薬は、体部上方から底部にかけて鉄釉、口縁部から内面にかけて灰釉の掛け分けである。体部のやや下方1ヶ所を、指で押さえて凹ませている。18世紀前半に位置づけられるか。P83は現川焼の小碗である。鉄釉を全面に施釉したのち、白化粧土で刷毛目装飾を内外面に施している。17世紀末から18世紀前半に位置づけられるか。P84~P86はいわゆる京焼風陶器である。P84は透明釉が施釉され、欠損していくて断定はできないが、見込みと体部に色絵で装飾が施されている。高台内中央部には銳利な工具による円刻がある。18世紀前半に位置づけられるだろう。P85は見込みに鉄絵で楼閣山水文が描かれている碗と思われる。18世紀前半のものだろう。P86も見込みに鉄絵で楼閣山水文が描かれている碗と思われる。高台内中央部には銳利な工具による円刻があり、その付近に木下弥の印がある。17世紀後半のものだろう。P87は青緑釉碗と思われるが、体部上方から口縁部が欠損しているので、皿の可能性も考えられる。内面は綠釉を施釉して、見込みの釉を蛇ノ目状に釉剝ぎしている。外面は高台周辺を除いて透明釉を施釉している。17世紀後半から18世紀前半に位置づけられるか。P88~P92は肥前系磁器である。P88は伊万里染付碗であろう。18世紀中葉から後半に位置づけられるか。P89は伊万里青磁小坏であろう。脛付の釉が拭われている。17世紀代に位置づけられるか。P90は染付碗である。透明釉が全面に施釉され、脣付の種が拭われている。外面には草花文が描かれ、底裏銘は崩れた書法のため判読し難いが、「大明年製」の2行4字銘ではないかと思われる。18世紀代のものだろう。P91は伊万里染付碗と思われる。18世紀末から19世紀初頭に位置づけられるか。P92は染付丸碗で、18世紀代に位置づけられるか。

③ 鉢類 (P93~P95)

P93は瀬戸・美濃系の小型の片口鉢である。体部はクロロ目が顯著であるが全体に丸味を帯びている。高台は、太い断面方形の付高台である。高台周辺を除き船釉が施される。18世紀前半から中葉のものだろう。P94は肥前系の青緑釉鉢と思われる。外面は高台周辺を除いて透明釉を施釉し、内面は青緑釉を施釉して、見込みの釉を蛇ノ目状に釉剝ぎしている。17世紀後半から18世紀前半のものだろう。P95は志戸呂系の鉢である。内面から体部下方にかけて透明釉を施釉し、高台周辺と底部外面中央には鉄釉が施釉されて、脣付と底部中央の大部分は無釉である。19世紀代に位置づけられるだろう。

④ 捜鉢 (P96~P107)

かわらけに次いで出土点数の多かった土器・陶磁器類が捜鉢である。小破片が多く、意図的に割ったものが多かった。図化した12点はすべて瀬戸・美濃系であるが、図化しなかったものの中には志戸呂系のものもみられた。P96~P98は、古瀬戸後期の鉄釉の捜鉢で、15世紀後半に位置づけられるか。P96は体部は直線的に開き、口縁部内側に突起が形成されている。P97も体部は直線的で、口縁部はやや内傾して先端が尖り気味である。P98は捜目が11本引かれている。底部外面の糸切り痕は未調整である。

P 99は全面にサビ釉が施され、底部外面の糸切り痕は未調整である。瀬戸・美濃系で大窯Ⅱ期の16世紀中葉に位置づけられるか。P 100は体部上方の破片である。体部は直線的で全面にサビ釉が施される。瀬戸・美濃系で大窯Ⅱ期の16世紀中葉に位置づけられるか。P 101は瀬戸・美濃系で小型の擂鉢である。全面にサビ釉が施され、口縁端部が内側に折り返されて、玉縁状になっている。18世紀中葉のものだろう。P 102～P 104はサビ釉の擂鉢で18世紀前半に位置づけられる。P 102は体部上方の破片である。口縁部と体部との境に、指ナデによる凹みが一列する。P 103・P 104は、体部は直線的であるが、上端は外折し、口縁端部は折り返され縁帯が形成される。口縁内面が丸味を帯び、受け口状となっている。P 105は口縁端部が内側に折り返され、玉縁状になっている。18世紀前半のものだろう。P 106も口縁端部が内側に折り返され、玉縁状になっている。18世紀中葉に位置づけられる。P 107は口縁部が欠損しているので断定はできないが、18世紀後半のものと思われる。

⑤ 壺類（P 108～P 111）

P 108は常滑系の壺の口縁部破片である。「『中世常滑焼をとおって』資料集」1994の編年表の8型式期に該当し、14世紀後半に位置づけられる。P 109・P 110は常滑系の大壺である。粘土巻上げによる紐造り技法で成形されており、内面は指圧・押しナデ痕が残存し、外面は口縁部から腰部にかけてナデ調整される。2点とも残存破片は多かったが接合しなかったので推定の城をでないが、口径・器高とも80cm前後の容積14斗（252ℓ）を量るタイプではないかと思われる。P 109は口縁部内面に内端と呼称される張り出しが付けられ、断面Y字形を呈している。頸部の立ち上がり若干残り、胴部は丸味を帯び、胴部中央より底部に向かって内湾気味にすぼまり、最大径が胴部中央にあるタイプと考えられる。都立一橋高等学校地点出土のもの¹⁶⁾と類似しており、17世紀後半に位置づけられるか。P 110はP 109と形状等が類似するが、頸部の立ち上がりがなくなるので、P 109よりもやや新しいタイプで、18世紀前半のものと思われる。P 111は瀬戸・美濃系の水壺である。「瀬戸市歴史民族資料館研究紀要VI」1987の分類に従うと、浅形で小型のタイプであり、19世紀初頭のものと思われる。体部下方に棱があり、上方はやや外反気味に立ち上がる。口縁部は中央が凹み、端部がほぼ水平方向に張り出す。高台は付高台で、端部の幅は広い。体部には、マガリ状の器具により流水文が彫られ、さらに印花文が押印されている。釉薬は、高台周辺を除いて灰釉が施され、鉄釉と御深井釉を交互に流し掛けている。

⑥ その他の陶器（P 112～P 121）

P 112は、羽釜の破片と思われるが、産地・年代ともに不明である。P 113は瀬戸・美濃系の瓶子（梅瓶）と思われる。口縁部から頸部の一部しか残存していないので断定はできないが、頸部はほぼ直立し、中央には突帯が1周する。古瀬戸後期で14世紀後半から15世紀初頭に位置づけられるか。P 114は瀬戸・美濃系の祖母懐壺の破片と思われる。口縁部が外側に折り返されて玉縁状になっている。灰褐色で鉄分の多い胎土が使用されている。古瀬戸後期15世紀代のものと思われる。P 115は志戸呂系の徳利と思われる。底部周辺を除いて鉄釉が施釉されている。16世紀後半に位置づけられる。P 116は瀬戸・美濃系の筒形香炉である。内面と底部周辺を除いて灰釉が施されている。18世紀中葉から後半のものだろう。P 117は瀬戸・美濃系の餌猪口である。餌猪口は、鳥類飼育の際、鳥籠の中に置き、餌・水を入れる容器で、半筒形を呈している。摘みの部分は欠損している。底部周辺を除いて、灰と長石釉を混ぜて施釉している。18世紀後半から19世紀中葉のものだろう。P 118は瀬戸・美濃系の水滴である。欠損しているので断定はできないが、犬を型どったものだろうか。外面は底面周辺を除いて御深井釉が施されている。17世紀前半のものだろう。P 119は瀬戸・美濃系の仏壇器である。壇部の大部分が欠損し、脚部のみ残存している。台底は容器部の底近くまで、浅く抉り取っている。18世紀末から19世紀前半のものだろう。P 120・P 121はともに产地不明で19世紀代の行平と思われる。

⑦ その他の磁器類 (P122～P125)

P122・P123は、肥前系の紅皿（猪口）である。用途は化粧具で、頬紅や口紅を入れた容器と思われる。P122は器形は丸形を呈し、外面に文様は施されていない。2点とも18世紀代のものだろう。P124は肥前系の色絵蓋である。19世紀代のものだろう。P125は、产地不明の戸車で、19世紀代のものだろう。

8 輸入陶磁器（第72図 図版30）

大平遺跡からは總数で30点出土しており、内訳は黒釉陶（天目）1点、青磁25点、白磁3点、染付1点である。小破片が多いので、図化した10点を中心報告したい。

① 黒釉陶（P126）

P126は黒釉天目碗の体部片である。中国建窯産と考えられ、東駿河・北伊豆地方では現在のところ出土例が確認されていない。

② 青磁（P127～P131・P134）

P127～P131は、青磁碗である。P127は、大宰府分類龍泉I-5bの口縁部片で、厚めに施釉され深い黄緑色に発色する。P128は、大宰府分類龍泉I-1の口縁部片と考えられ、外反部内面に1条の沈線が配される。大宰府19S K004[6]に類例を見るが、小片のためI-2の可能性もある。P127・P128は、大宰府では第Ⅲ期第1小期及び第2小期（12世紀中葉から13世紀中葉）に編年されるが、静岡県内出土例ではやや下る時期に廃棄年代が求められるものと考えられる。P129～P131は、高台部片である。P129は、見込みに印花文をもつもので、光沢の強い淡青緑色に発色する釉は、全面に施釉後、費付から高台内は掻き取って露胎をなす。P130は比して肉薄の高い角高台で、釉調は光沢のない淡青緑色、高台内は露胎をなす。胎土中には白色の細斑が観察される。P131は、見込みに1条の沈線を配するもので、釉調は光沢の弱い青緑色、高台内は露胎をなす。P129は15世紀代の廃棄年代が考えられ、P130は同一個体と考えられる体部片1点とともに大宰府分類龍泉IV類の特徴が看取され、14世紀代の廃棄年代観を得る。またP131は小野編年E群碗で、15世紀後半から16世紀前半が考えられよう。P134は、青磁腰折れの坏で、他に5点の破片が出土している。稜花で内面に画花文を描く。光沢のある深緑色釉で、貫入が多く観察される。小野編年B群。その他小破片で図化しなかったものの中には、大宰府分類青磁碗龍泉I-5bが1点、小野編年C群青磁碗が3点、E群と考えられるものが2点、分類できない青磁碗片が3点、青磁皿と考えられるものが1点、青磁香炉1点、青磁不遊環瓶と考えられるものが1点、青磁盤と考えられるものが1点ある。

③ 白磁（P132～P133）

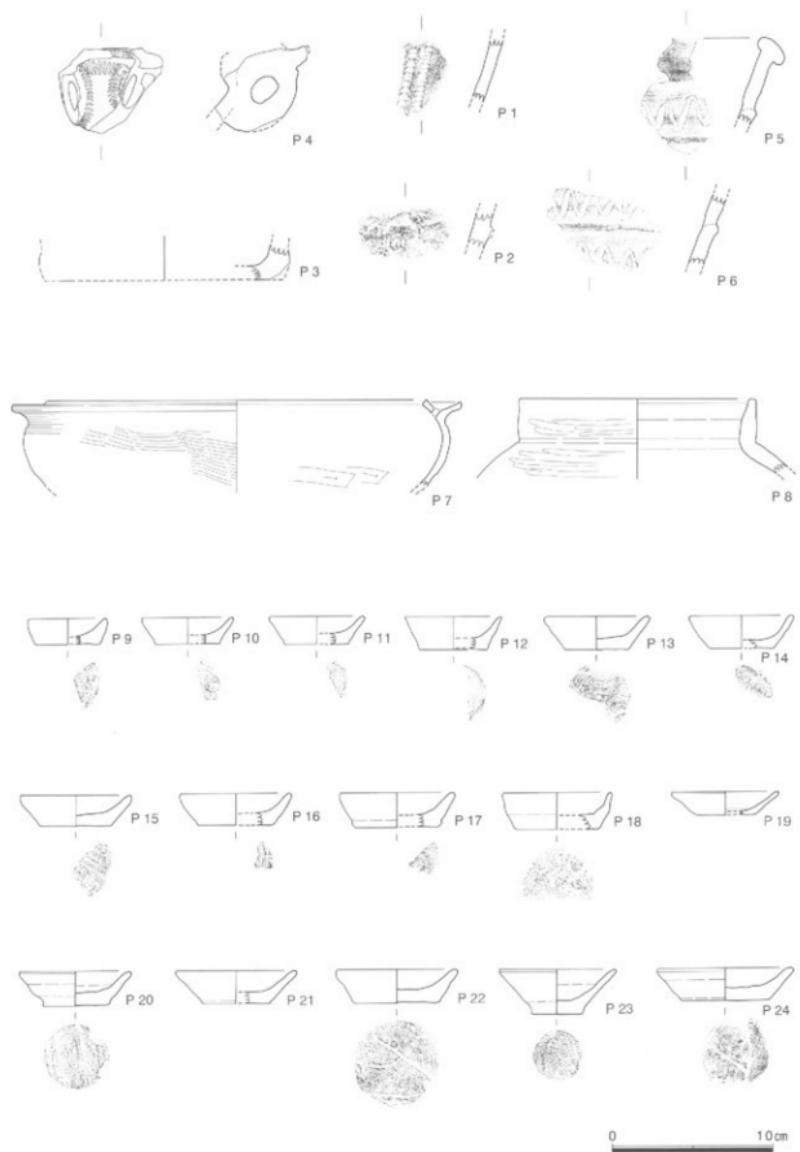
P132・P133は白磁で、P132は高台面取りの坏、P133は高台面取りの皿である。胎土は、P132が灰白色の緻密精良であるのに対し、P133はわずかに黄味を帯びた粗い胎土である。いずれも重ね焼き目跡を見込みに残す。小野編年B群で、15世紀前半から後半の年代観を得る。その他に、分類できない白磁片1点がある。

④ 染付（P135）

P135は、染付皿の端反りタイプの口縁部片で、体部外面は渦状唐草、内面はアラベスク文が観られ、口縁端部内外面には界線が配される。小野分類・編年Ⅵ類B1群で、15世紀後半から16世紀前半の年代観を得る。

註

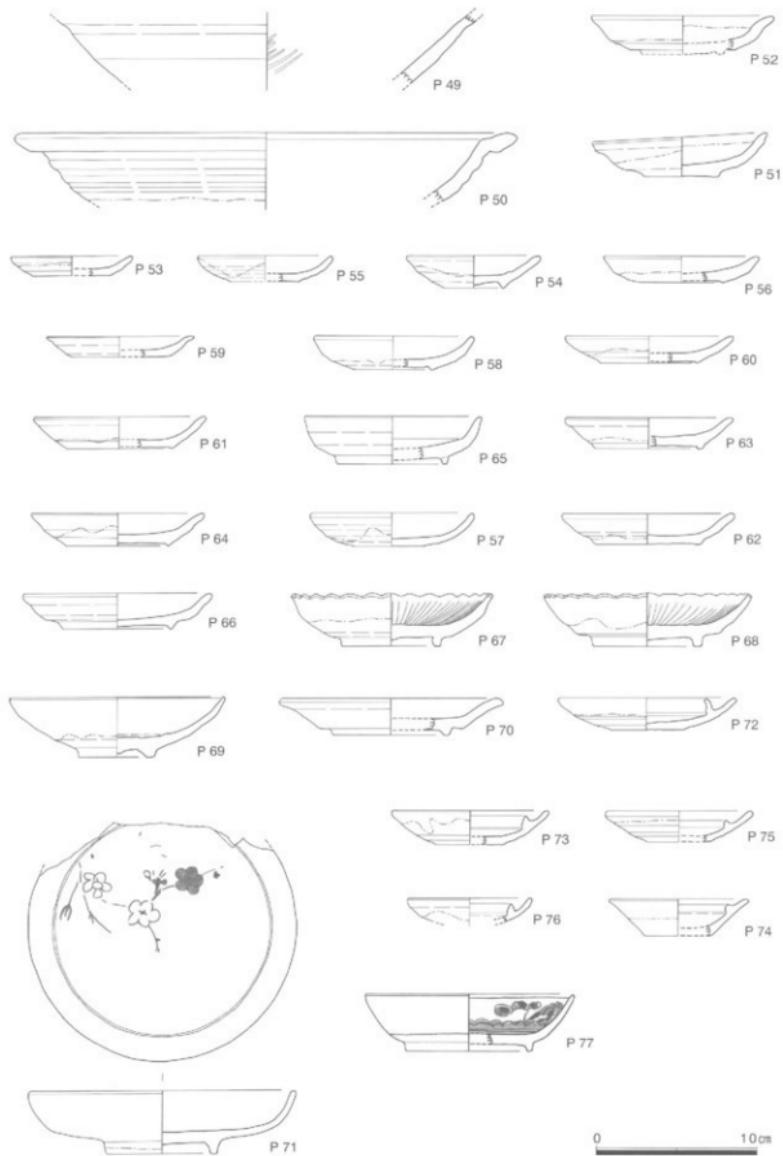
- (1) 土器・陶磁器全般について、当研究所足立順司主任調査研究員の指導を得た。また瀬戸・美濃系の陶磁器全般と肥前系陶磁器・常滑系陶磁器・志戸呂系陶器の一部について、愛知県陶磁資料館主任学芸員の井上喜久男氏と瀬戸市埋蔵文化財センターの藤澤良祐氏のご教示を賜わり、輸入陶磁器については静岡県豊田町教育委員会の清水尚氏のご教示を賜った。輸入陶磁器における分類・編年については、以下の文献によった。
- 横田賢次郎・森田勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館
- 横田賢次郎・森本朝子・山本信夫 1989 「新安沈船と大宰府・博多の貿易陶磁—森田勉氏の研究成果に寄せて—」『貿易陶磁研究』No.9 日本貿易陶磁研究会
- 小野正敏 1985 「出土陶磁よりみた15・16世紀における画期の素描」『MUSEUM』No.416 東京国立博物館
- (2) 当研究所中嶋郁夫主任調査研究員の指導を得た。
- (3) 浅野晴樹 1991 「東国における中世在地系土器について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第31集 国立歴史民俗博物館
- (4) 長泉町他編 1978 「西願寺遺跡（A遺跡） 長久保城址（二の丸）』P237第62図の42
- (5) 都立一橋高校内遺跡調査団 1976 『江戸都立一橋高校地点発掘調査報告』P242第102図
- (6) 太宰府市教育委員会 1984 『大宰府条防跡III 太宰府市の文化財』第8集



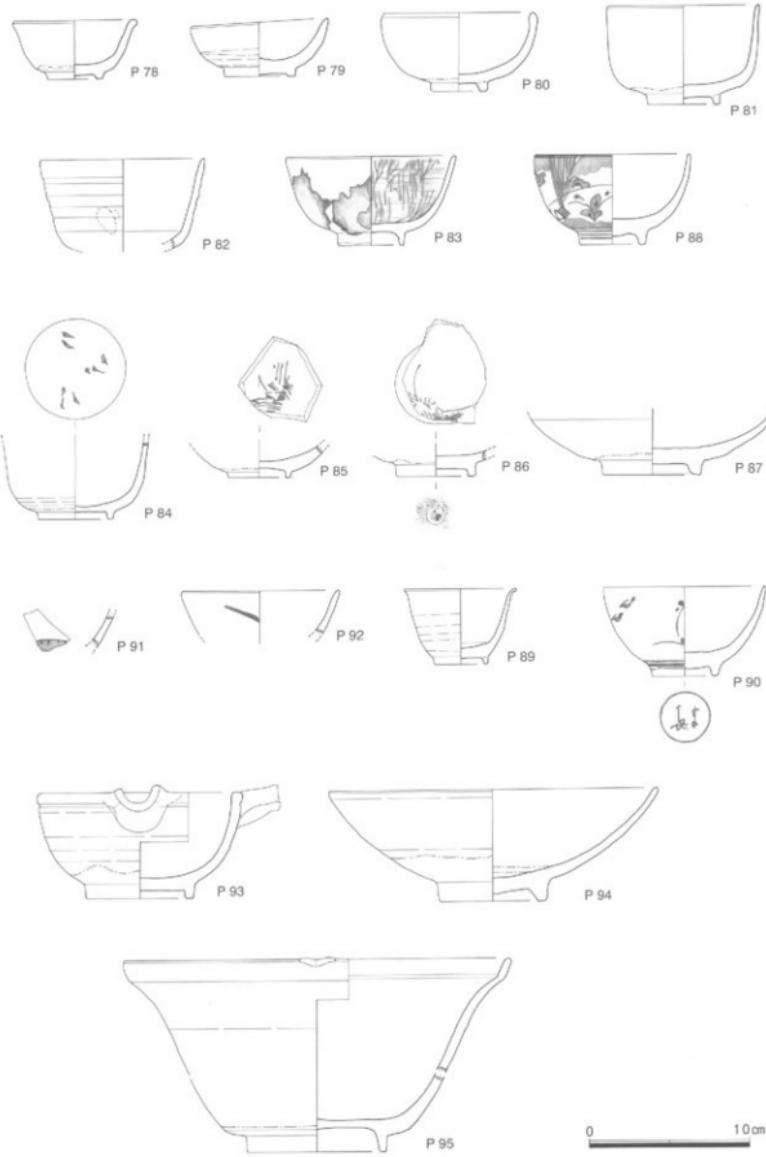
第66図 土器実測図1



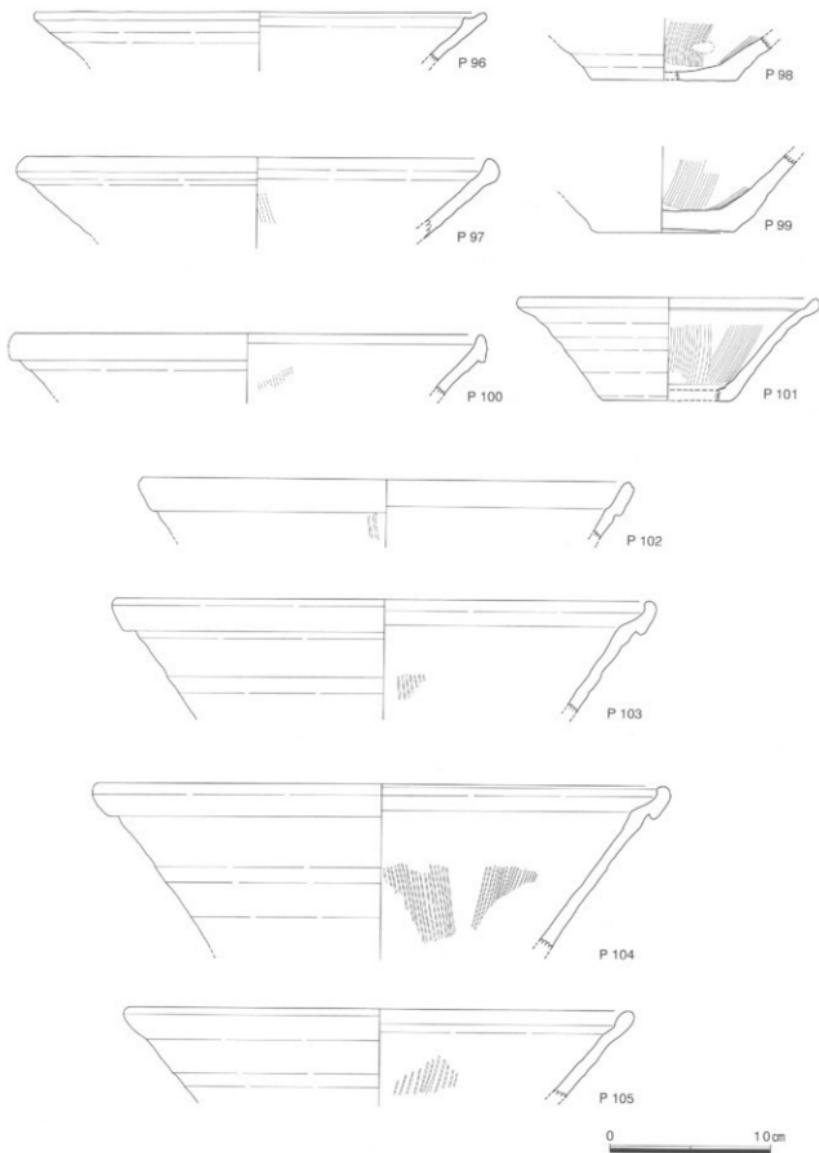
第67図 土器実測図2



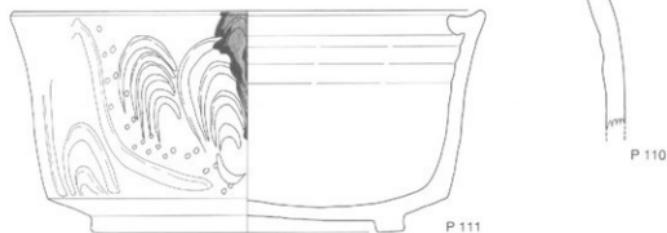
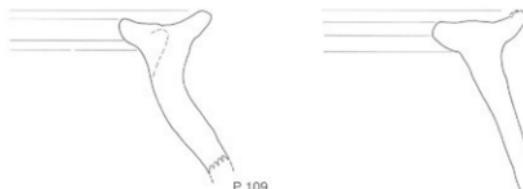
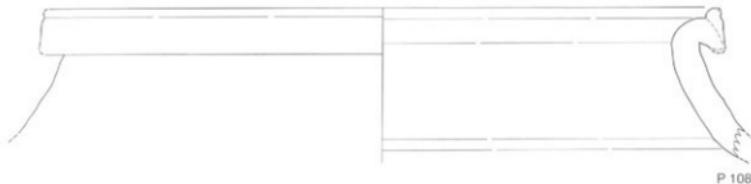
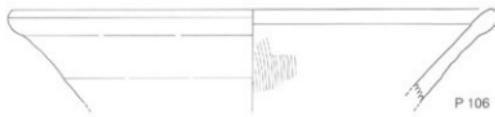
第68図 土器実測図3



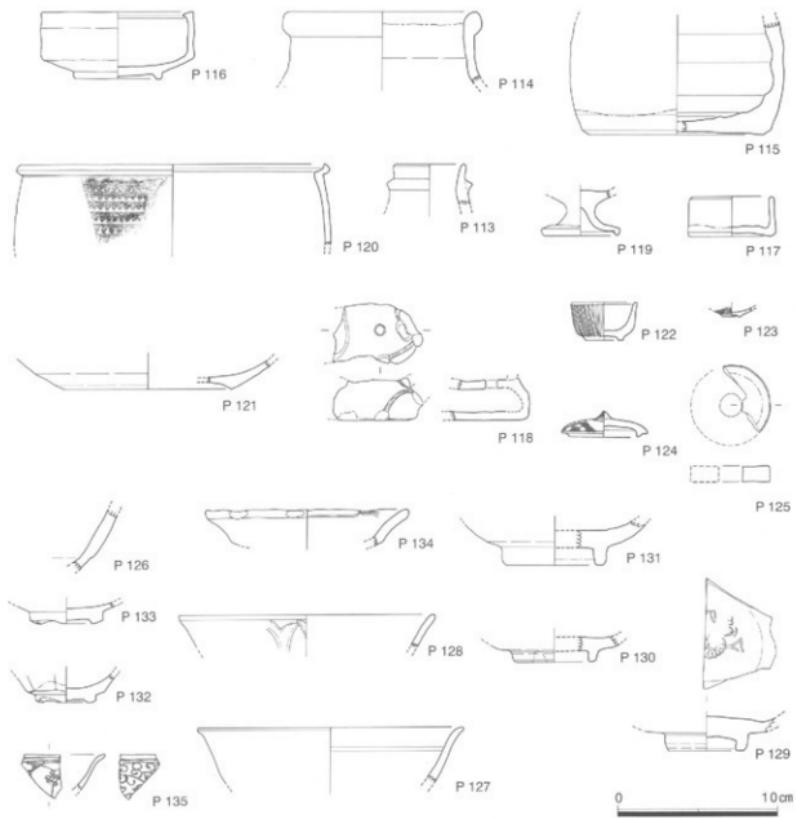
第69図 土器実測図 4



第70図 土器実測図5



第71図 土器実測図 6



第72図 土器実測図7

第13表 土器一覧表

番号	種別	器種	調査区・グリッド	層位・遺構	法 葉 (cm)		残存	色 調	特徴等	博蔵回数	写真回数
					口 径	器 高	底 径				
P 1	施文土器	?	2-1区・I-13	表探				陶器破片	にぶい褐色	P 2・P 3と同一個体	66 21
P 2	"	?	2-1区・I-13	表探				陶器破片	にぶい褐色	P 1・P 3と同一個体	22
P 3	"	?	2-1区・I-13	表探				瓦器破片	にぶい褐色	P 1・P 2と同一個体	22
P 4	"	鉢	3 区・F-27	石積み遺構				把手部分	にぶい赤褐色	織文中期(縦板I式)	22
P 5	須恵器	壺型土器	1 区・E-9	V1層				口縁部破片	灰白色	古墳後期(7世紀代)	22
P 6	"	"	1 区・E-9	V1層				陶器破片	灰白色	古墳後期(7世紀代)	22
P 7	土師器	羽釜	3 区・D-27	V1層 (22.7)				口縁1/3	にぶい褐色	22	22
P 8	瓦質土器	茶釜	3 区・E-28	V1層 (14.0)				口縁1/5	濃青灰褐色	22	22
P 9	土器質土器	小わらけ	3 区・G-27	V1層 (4.0)	1.6	(4.0)	約1/5	にぶい褐色	22	22	
P 10	"	"	2-1区・I-13	V1層 (5.6)	1.65	(4.0)	約1/8	にぶい褐色	22	22	
P 11	"	"	2-1区・E-16	V1層 (5.6)	1.7	(4.0)	約1/6	褐色	22	22	

番号	種別	器種	調査区・グリッド	層位・遺構	法面 (m)			成存	色調	特徴等	地質回収率	写真回収率
					口	基	高					
P12	土	土	1 区・E-9	VII層	-5.9	2.05	(4.2)	弱1.7	灰褐色	66	22	
P13	土	土	1 区・G-26	VII層	(6.3)	2.1	(4.0)	弱1.2	褐色	0	0	
P14	土	土	3 区・D-28	S X3002	(6.3)	2.0	(4.1)	弱1.6	褐色	0	0	
P15	土	土	3 区・G-27	VII層	(6.7)	1.95	(4.2)	弱1.5	灰色	0	0	
P16	土	土	3 区・G-27	S X3001	(6.7)	1.9	(4.4)	弱1.4	褐色	0	0	
P17	土	土	2-3区・E-19	VII層	(6.8)	2.15	(5.1)	弱1.6	灰褐色	0	0	
P18	土	土	1 区・E-20	VII層	(6.7)	2.25	(5.0)	弱1.4	褐色	0	0	
P19	土	土	3 区・F-27	VII層	(6.6)	1.4	(3.5)	弱1.6	褐色	0	0	
P20	土	土	3 区・F-28	VII層	6.8	2.2	4.7	弱1.8	灰褐色	0	0	
P21	土	土	2-3区・E-20	断面	(7.4)	2.15	(4.2)	弱1.4	褐色	0	0	
P22	土	土	3 区・E-27	断面壁	(7.0)	2.1	5.2	弱1.8	褐色	0	0	
P23	土	土	2-1区・E-11	S X3107	7.3	2.8	3.0	強1.5	灰褐色	0	0	
P24	土	土	3 区・E-28	VII層	(8.2)	2.0	(5.0)	弱1.4	褐色	0	0	
P25	土	土	3 区・E-28	S X3108	8.5	2.5	5.1	灰褐色	87	0		
P26	土	土	3 区・E-28	S X3108	8.6	2.7	5.5	灰褐色	0	0		
P27	土	土	3 区・E-28	S X3108	8.9	1.4	5.2	弱1.6	褐色	0	93	
P28	土	土	3 区・E-28	S X3108	8.7	2.5	5.2	強1.5	褐色	0	0	
P29	土	土	3 区・E-28	S X3108	(8.4)	2.4	5.0	弱1.4	灰褐色	0	0	
P30	土	土	3 区・G-27	S X3108	10.1	7.5	6.2	弱1.6	褐色	0	0	
P31	土	土	2-3区・G-27	VII層	(7.3)	1.05	5.5	強1.5	灰褐色	0	0	
P32	土	土	2-1区・F-17	VII層	(9.9)	2.8	(5.2)	弱1.7	白色	0	0	
P33	土	土	2-1区・E-11	S X2106	9.9	2.0	3.7	強1.5	黄褐色	0	0	
P34	土	土	3 区・D-27	VII層	(8.9)	3.2	(6.9)	弱1.6	褐色	0	0	
P35	土	土	2-1区・E-11	S X2105	(9.8)	3.35	1.6	弱1.3	灰褐色	0	0	
P36	土	土	3 区・G-27	VII層	10.0	3.6	6.2	弱1.2	褐色	0	0	
P37	土	土	3 区・J-25	VII層	(10.4)	3.1	(5.7)	弱1.4	褐色	0	0	
P38	土	土	3 区・E-27	VII層	(10.7)	2.95	5.4	弱2.0	灰褐色	0	0	
P39	土	土	2-3区・E-19	VII層	11.6	3.1	6.2	弱1.8	褐色	0	0	
P40	土	土	2-3区・E-19	VII層	(6.0)	1.0	1.8	弱1.6	褐色	0	30	
P41	土	土	3 区・G-27	VII層	(4.4)	0.5	1.6	弱1.6	褐色	0	0	
P42	土	土	3 区・F-27	VII層	(6.6)	0.5	1.8	弱1.6	褐色	0	0	
P43	土	土	2-1区・E-16	VII層	(3.5)	0.5	1.8	弱1.6	褐色	0	0	
P44	土	土	1 区	表土	(3.0)	0.5	1.8	弱1.6	褐色	0	0	
P45	土	土	3 区・G-27	VII層	(5.3)	0.5	1.8	弱1.6	褐色	0	0	
P46	土	土	3 区・F-26	S P3137	(6.4)	0.5	1.5	弱1.6	褐色	0	0	
P47	土	土	3 区・E-27	VII層	(7.4)	0.5	1.5	弱1.6	褐色	0	0	
P48	土	土	3 区・G-26	VII層	(5.2)	0.5	1.5	弱1.6	褐色	0	0	

第14表 陶磁器一覧表

番号	種別	器種	調査区・グリッド	層位・遺構	法面 (m)			残存	色調	产地等	地質回収率	写真回収率
					口	基	高					
P49	陶器	印加人頭	1 区・E-9	VII層					灰白色	南ア・美酒	66	28
P50	陶器	深瀬皿	1 区・E-9	VII層	(30.6)				淡褐色、灰白色	南ア・美酒	0	0
P51	陶器	輪輪小豆	2-1区・E-17	VII層	(10.9)	2.75	4.6	弱1.3	灰褐色	南ア・美酒	0	21
P52	陶器	輪輪小豆	3 区・G-27	VII層	(9.8)	2.1	(8.9)	弱1.6	灰白色、灰褐色	南ア・美酒	0	0
P53	陶器	碗	3 区・F-27	石器堆遺跡	(7.0)	1.2	(4.8)	弱1.4	灰褐色	南ア・美酒	0	0
P54	陶器	碗	3 区・F-27	VII層	9.1	2.0	(3.5)	弱1.7	灰褐色	南ア・美酒	0	0
P55	陶器	碗	3 区・F-26	VII層	(8.1)	1.6	(4.2)	弱1.5	灰褐色	南ア・美酒	0	0
P56	陶器	碗	3 区・F-28	石器堆遺跡	(9.5)	1.6	(6.1)	弱1.6	灰褐色	南ア・美酒	0	0
P57	陶器	碗	3 区・F-28	石器堆遺跡	10.0	2.05	4.4	強1.5	灰褐色	南ア・美酒	0	0
P58	陶器	小皿	3 区・H-27	VII層	(9.6)	2.1	(4.8)	弱1.6	暗灰褐色、灰褐色	南ア・美酒	0	0
P59	陶器	小皿	3 区・F-28	VII層	(8.9)	1.3	(6.1)	弱1.2	灰白色	南ア・美酒	0	0
P60	陶器	小皿	3 区・D-28	VII層	(10.6)	1.65	6.1	弱1.5	灰白色	南ア・美酒	0	0
P61	陶器	小皿	1 区・E-9	VII層	(10.5)	2.0	6.0	弱1.6	灰白色	南ア・美酒	0	0
P62	陶器	小皿	3 区・E-27	VII層	(10.6)	1.9	6.4	弱1.4	暗褐色、灰白色	南ア・美酒	0	0
P63	陶器	皿	3 区・E-27	石器堆遺跡	(10.2)	1.4	7.8	弱1.6	灰白色	南ア・美酒	0	0
P64	陶器	皿	3 区・D-28	VII層	10.7	2.0	6.3	強1.5	灰白色	南ア・美酒	0	0
P65	陶器	輪輪	3 区・G-26	VII層	(11.0)	5.0	(6.8)	弱1.5	灰白色	東ア・美酒	0	23
P66	陶器	輪輪	2-1区・D-16	VII層	(11.0)	2.2	6.8	弱2.3	灰白色	南ア・美酒	0	0
P67	陶器	剪刀	3 区・G-26	VII層	(12.1)	3.28	6.2	弱3.4	淡褐色、灰白色	南ア・美酒	0	0
P68	陶器	剪刀	3 区・G-27	VII層	(12.5)	3.2	6.7	弱1.2	淡褐色、灰白色	南ア・美酒	0	0
P69	陶器	剪刀	3 区・F-27	VII層	13.3	3.75	4.8	弱1.3	淡褐色、灰白色	南ア・美酒	0	0
P70	陶器	油皿	3 区・F-26	VII層	(13.0)	2.3	7.2	弱1.5	灰褐色、灰白色	南ア・美酒	0	0
P71	陶器	油皿	3 区・G-27	VII層	16.4	3.6	6.8	弱1.8	弱灰褐色	南ア・美酒	0	0
P72	陶器	灯明受皿	3 区・G-26	VII層	(10.8)	2.0	4.5	弱1.4	灰褐色、灰白色	南ア・美酒	0	0
P73	陶器	灯明受皿	3 区・H-25	VII層	(9.6)	2.1	(4.2)	弱1.3	灰褐色、灰白色	南ア・美酒	0	0
P74	陶器	灯明受皿	1 区・H-9	VII層	(8.4)	2.3	(4.2)	弱1.3	灰褐色	南ア・美酒	0	0
P75	陶器	灯明受皿	3 区・E-26	B層	(8.8)	1.95	(3.8)	灰褐色、灰白色	南ア・美酒	0	28	
P76	陶器	灯明受皿	1 × G-12	VII層	(7.5)				褐色	南ア・美酒	0	0

番号	種別	部	種	種類名・タリット	層位	遺構	法 異 (cm)			残存	色 調	産地等	測定部	算出面積
							口	後	器	裏	底	高	台	
P27	碗形	小	白	3 △ × E - 28	VII層	(12.8)	3.55	7.8	約1.2		米白色	鹿児島、枕崎	68	26
P28	鉢形	小	白	3 △ × E - 27	VII層	7.5	3.65	約1.2		淡黄色、灰白色	鹿児島、美濃	69	9	
P29	△	小	白	3 △ × F - 27	VII層	8.4	3.6	約1.2		米白色、米白色	鹿児島、美濃	70	9	
P30	△	小	白	3 △ × F - 27	石縫み遺構	(9.2)	4.9	(3.5)	約2.3	米白色	鹿児島、美濃	71	9	
P31	△	大	白	3 △ × E - 27	VII層	(9.5)	6.15	4.6	約1.6	米白色、灰白色	鹿児島、美濃	72	9	
P32	△	小	白	3 △ × F - 28	石縫み遺構	(10.2)				灰白色、深灰色	鹿児島、美濃	73	9	
P33	△	小	白	3 △ × E - 28	VII層	10.5	5.55	4.1	約1.2	米白色、暗灰褐色	肥前	74	9	
P34	△	小	白	3 △ × E - 28	VII層			(4.6)		淡黄色	鹿児島(伊集院)	75	9	
P35	△	小	白	3 △ × E - 27	VII層			(3.9)		米白色	鹿児島(伊集院)	76	28	
P36	△	小	白	3 △ × G - 27	VII層			5.9		米白色	鹿児島(伊集院)	77	9	
P37	△	大	白	3 △ × E - 27	VII層			(6.6)		オーラーイグ色、灰白色	肥前	78	9	
P38	挖掘	浅	3	△ × E - 28	VII層	(9.6)	3.6	1.0	約1.4	淡蓝色	肥前	79	26	
P39	△	小	白	3 △ × F - 28	VII層	6.9	4.6	3.4	約4.5	明黄色	肥前(伊万里)	80	27	
P40	△	小	白	3 △ × F - 28	II層	(10.0)	5.65	4.1	約1.3	灰白色	肥前(伊万里)	81	9	
P41	△	小	白	3 △ × D - 28	II層	(10.0)	5.65	4.1	約1.3	灰白色	肥前(伊万里)	82	28	
P42	△	小	白	3 △ × G - 9	VII層					灰白色	肥前(伊万里)	83	9	
P43	△	小	白	3 △ × D - 28	VII層					灰白色	肥前(伊万里)	84	9	
P44	△	中	白	3 △ × F - 27	石縫み遺構	(17.8)	6.6	6.6	約1.2	青褐色、灰白色	鹿児島、美濃	85	27	
P45	△	中	白	3 △ × F - 27	VII層	(20.4)	6.95	6.7	約1.5	オーラーイグ色、米白色	肥前	86	9	
P46	△	中	白	3 △ × E - 28	石縫み遺構	(24.0)	(12.0)	(8.6)	約1.4	灰オーラーイグ色、灰白色	鹿児島、美濃	87	9	
P47	△	中	白	3 △ × G - 15	S D21198	(28.0)				暗灰褐色、浅黄色	鹿児島、美濃	88	29	
P48	曲	鈎	3	△ × F - 28	VII層	(28.6)				赤灰褐色、灰白色	鹿児島、美濃	89	9	
P49	△	中	白	3 △ × F - 27	石縫み遺構	(29.0)				赤灰褐色、灰白色	鹿児島、美濃	90	27	
P50	△	中	白	3 △ × F - 27	VII層			9.0		褐色灰白色、灰白色	鹿児島、美濃	91	9	
P51	△	中	白	3 △ × G - 27	VII層	(29.0)				褐色灰白色、浅黄色	鹿児島、美濃	92	29	
P52	△	中	白	3 △ × F - 28	VII層	(18.6)	6.4	(8.0)	約1.8	にぶい赤褐色	鹿児島、美濃	93	27	
P53	△	中	白	3 △ × E - 28	S X3643	(30.4)				にぶい赤褐色、灰白色	鹿児島、美濃	94	29	
P54	△	中	白	3 △ × F - 27	石縫み遺構	(33.4)				にぶい赤褐色、灰白色	鹿児島、美濃	95	9	
P55	△	中	白	3 △ × D - 27	VII層	(35.3)				にぶい赤褐色、浅黄色	鹿児島、美濃	96	9	
P56	△	中	白	3 △ × F - 27	石縫み遺構	(30.8)				にぶい赤褐色、灰白色	鹿児島、美濃	97	9	
P57	△	中	白	3 △ × E - 28	II層	(30.0)				にぶい赤褐色、灰白色	鹿児島、美濃	98	9	
P58	△	中	白	3 △ × F - 28	VII層					褐色灰白色、浅黄色	鹿児島、美濃	99	9	
P59	△	中	白	3 △ × D - 27	VII層	(41.6)				褐色灰白色、浅黄色	鹿児島、美濃	100	9	
P60	△	大	白	2 △ × D - 28	VII層					にぶい赤褐色	鹿児島、美濃	101	9	
P61	△	大	白	3 △ × D - 28	S X3194					にぶい赤褐色	鹿児島、美濃	102	9	
P62	△	水	碧	3 △ × F - 27	石縫み遺構	(29.0)	13.85	(19.6)	約1.3	灰白色	鹿児島、美濃	103	27	
P63	△	羽	美	2 △ × E - 21	S D23002					灰褐色	鹿児島(伊集院)	104	29	
P64	△	羽	美	1 △ × G - 9	VII層	(4.2)				オーラーイグ色、灰白色	鹿児島、美濃	105	27	
P65	△	羽	美	1 △ × F - 10	VII層	(11.6)				にぶい赤褐色、灰白色	鹿児島、美濃	106	29	
P66	△	透	利	3 △ × F - 27	石縫み遺構	(11.0)				開口部、灰白色	鹿児島、美濃	107	28	
P67	△	透	利	3 △ × F - 28	石縫み遺構	(9.4)	4.15	5.3	約1.4	灰白色	鹿児島、美濃	108	27	
P68	△	透	利	3 △ × F - 28	VII層	5.0	2.5	5.6	約3.4	青褐色灰白色、灰白色	鹿児島、美濃	109	27	
P69	△	透	利	3 △ × D - 27	VII層					灰白色	鹿児島、美濃	110	27	
P70	△	透	利	3 △ × E - 28	VII層					灰白色	鹿児島、美濃	111	27	
P71	△	透	利	3 △ × F - 28	VII層					灰白色	鹿児島、美濃	112	27	
P72	△	透	利	3 △ × D - 27	VII層					灰白色	鹿児島(伊集院)	113	27	
P73	△	透	利	3 △ × E - 28	VII層					灰白色	鹿児島(伊集院)	114	27	
P74	△	透	利	3 △ × F - 28	VII層					灰白色	鹿児島(伊集院)	115	27	
P75	△	透	利	3 △ × D - 27	S X31557	(16.6)				灰白色	鹿児島(伊集院)	116	27	
P76	△	透	利	3 △ × E - 28	S X31557	(16.6)				灰白色	鹿児島(伊集院)	117	27	
P77	△	透	利	3 △ × F - 28	S X31557	(16.6)				灰白色	鹿児島(伊集院)	118	27	
P78	△	透	利	3 △ × D - 27	VII層					灰白色	鹿児島(伊集院)	119	27	
P79	△	透	利	3 △ × E - 28	VII層					灰白色	鹿児島(伊集院)	120	27	
P80	△	透	利	3 △ × F - 28	VII層					灰白色	鹿児島(伊集院)	121	27	
P81	△	透	利	3 △ × D - 27	VII層					灰白色	鹿児島(伊集院)	122	27	
P82	△	透	利	3 △ × E - 28	VII層					灰白色	鹿児島(伊集院)	123	27	
P83	△	透	利	3 △ × F - 28	VII層					灰白色	鹿児島(伊集院)	124	27	
P84	△	透	利	3 △ × D - 27	VII層					灰白色	鹿児島(伊集院)	125	27	
P85	△	透	利	3 △ × E - 28	VII層					灰白色	鹿児島(伊集院)	126	27	
P86	△	透	利	3 △ × F - 28	VII層					灰白色	鹿児島(伊集院)	127	27	
P87	△	透	利	3 △ × D - 27	VII層					灰白色	鹿児島(伊集院)	128	27	
P88	△	透	利	3 △ × E - 28	VII層					灰白色	鹿児島(伊集院)	129	27	
P89	△	透	利	3 △ × F - 28	VII層					灰白色	鹿児島(伊集院)	130	27	
P90	△	透	利	3 △ × D - 27	VII層					灰白色	鹿児島(伊集院)	131	27	
P91	△	透	利	3 △ × E - 28	VII層					灰白色	鹿児島(伊集院)	132	27	
P92	△	透	利	3 △ × F - 28	VII層					灰白色	鹿児島(伊集院)	133	27	
P93	△	透	利	3 △ × D - 27	VII層					灰白色	鹿児島(伊集院)	134	27	
P94	△	透	利	3 △ × E - 28	VII層					灰白色	鹿児島(伊集院)	135	27	
P95	△	透	利	3 △ × F - 28	VII層					灰白色	鹿児島(伊集院)	136	27	
P96	△	透	利	3 △ × D - 27	VII層					灰白色	鹿児島(伊集院)	137	27	
P97	△	透	利	3 △ × E - 28	VII層					灰白色	鹿児島(伊集院)	138	27	
P98	△	透	利	3 △ × F - 28	VII層					灰白色	鹿児島(伊集院)	139	27	
P99	△	透	利	3 △ × D - 27	VII層					灰白色	鹿児島(伊集院)	140	27	
P100	△	透	利	3 △ × E - 28	VII層					灰白色	鹿児島(伊集院)	141	27	
P101	△	透	利	3 △ × F - 28	VII層					灰白色	鹿児島(伊集院)	142	27	
P102	△	透	利	3 △ × D - 27	VII層					灰白色	鹿児島(伊集院)	143	27	
P103	△	透	利	3 △ × E - 28	VII層					灰白色	鹿児島(伊集院)	144	27	
P104	△	透	利	3 △ × F - 28	VII層					灰白色	鹿児島(伊集院)	145	27	
P105	△	透	利	3 △ × D - 27	VII層					灰白色	鹿児島(伊集院)	146	27	
P106	△	透	利	3 △ × E - 28	VII層					灰白色	鹿児島(伊集院)	147	27	
P107	△	透	利	3 △ × F - 28	VII層					灰白色	鹿児島(伊集院)	148	27	
P108	△	透	利	3 △ × D - 27	VII層					灰白色	鹿児島(伊集院)	149	27	
P109	△	透	利	3 △ × E - 28	VII層					灰白色	鹿児島(伊集院)	150	27	
P110	△	透	利	3 △ × F - 28	VII層					灰白色	鹿児島(伊集院)	151	27	
P111	△	透	利	3 △ × D - 27	VII層					灰白色	鹿児島(伊集院)	152	27	
P112	△	透	利	3 △ × E - 28	VII層					灰白色	鹿児島(伊集院)	153	27	
P113	△	透	利	3 △ × F - 27	VII層					灰褐色	鹿児島(伊集院)	154	27	
P114	△	透	利	3 △ × G - 10	VII層					灰褐色	鹿児島(伊集院)	155	29	
P115	△	透	利	3 △ × F - 27	石縫み遺構	(11.0)				開口部、褐褐色	鹿児島(伊集院)	156	29	
P116	△	透	利	3 △ × E - 28	石縫み遺構	(9.4)	4.15	5.3	約1.4	灰白色	鹿児島(伊集院)	157	29	
P117	△	透	利	3 △ × F - 28	石縫み遺構	(19.0)				灰白色	鹿児島(伊集院)	158	29	
P118	△	透	利	3 △ × D - 27	VII層					灰白色	鹿児島(伊集院)	159	29	
P119	△	透	利	3 △ × E - 28	VII層					灰白色	鹿児島(伊集院)	160	29	
P120	△	透	利	3 △ × F - 28	VII層					灰白色	鹿児島(伊集院)	161	29	
P121	△	透	利	3 △ × D - 27	VII層					灰白色	鹿児島(伊集院)	162	29	
P122	△	透	利	3 △ × E - 28	VII層					灰白色	鹿児島(伊集院)	163	29	
P123	△	透	利	3 △ × F - 27	VII層					灰白色	鹿児島(伊集院)	164	29	
P124	△	透	利	3 △ × G - 11	VII層					灰白色	鹿児島(伊集院)	165	29	
P125	△	透	利	3 △ × E - 27	VII層	4.3	1.6	5.4	約1.2	灰白色	鹿児島(伊集院)	166	29	
P126	△	透	利	3 △ × F - 27	VII層	5.0	1.0			灰白色	鹿児島(伊集院)	167	29	
P127	△	透	利	3 △ × E - 28	VII層					黑色、黒灰色	山口(雄略)	168	30	
P128	△	透	利	3 △ × F - 27	VII層	(16.6)				オーラーイグ色、灰白色	山口(雄略)	169	9	
P129	△	透	利	3 △ × G - 9	VII層	(16.0)				オーラーイグ色、灰白色	山口(雄略)	170	9	
P130	△	透	利	3 △ × F - 27	VII層					緑色	山口(雄略)	171	9	
P131	△	透	利	3 △ × E - 20	VII層					緑色	山口(雄略)	172	9	
P132	△	透	利	3 △ × C - 20	VII層					緑色	山口(雄略)	173	9	
P133	△	透	利	3 △ × G - 27	VII層					緑色	山口(雄略)	174	9	
P134	△	透	利	3 △ × F - 27	VII層					緑色	山口(雄略)	175	9	
P135	△	透	利	3 △ × D - 27	VII層					緑色	山口(雄略)	176	9	

3.1cmを測る。1区IV層出土である。

2 泥面子（第73図 図版30）

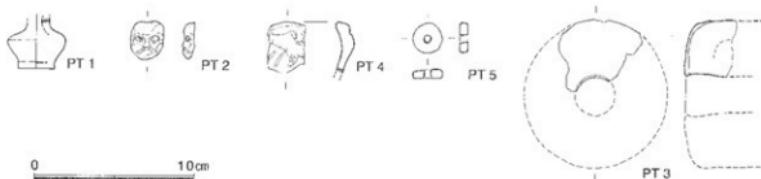
P T 2は、粘土を型抜きにした泥面子である。泥面子は、円盤状を呈する「面打」と、人面や動物などの形を呈する「芥子面」に分けられるが、P T 2は、人面をモチーフにした「芥子面」で、18世紀後半以降に位置づけられるか。泥面子は「穴一（二人あるいは三人が錢を出し合って、互いにかわるがわかるこの錢を撃つ。）」と呼ばれる遊戯に用いられていたようであるが、1806年に遊戯としての「穴一」は賭博であると幕府から禁止され、さらに、1832年に泥面子の使用も禁止されたが、泥面子の製作はその後も続いたようである⁽¹⁾。

3 羽口（第73図 図版30）

P T 3は、鞴の羽口と思われる。鞴は、製鉄や鍛冶などを行う時に、火力を強化するため人工的に強い風を送る装置で、羽口は鞴から炉の中に風を送り込むために設けられる風道の先端部分に直接接触するものである。そのため先端は、二次焼成を受け、原形をとどめないほど溶解しているものが多い。P T 3も円筒状タイプと思われるが、欠損が激しく、二次焼成も著しいため使用前の原形・色調などは不明である。

4 用途不明品（第73図 図版30）

P T 4は土師質の土製品で、外面に魚が型取られている。内面に指頭痕もあるので、土器の体部の一部とも考えられるが、断定はできない。P T 5は、環状の土製品で、表裏面ともに孔の周辺に煤が付着している。



第73図 土製品実測図

第15表 土製品一覧表

番号	種別	調査区・グリッド	層位・遺構	法 量	残 存	色 調	備 考	持因図版	写真図版
P T 1	ミニチュア	1区・G-8	IV層	残存器高(3.1)cm, 直径2.3cm	口縁部欠損	淡青褐色	春をモチーフ	73	30
P T 2	泥面子	1区・H-10	堀 掘	長径2.4cm, 細径2.1cm, 厚さ0.7cm	ほぼ完形	褐色	人面をモチーフ	〃	〃
P T 3	羽口	3区・F-28	石積み遺構	破片	黄褐色	破片等付着	〃	〃	〃
P T 4	用途不明品	3区・F-28	石積み遺構	破片	褐色	角をモチーフ	〃	〃	〃
P T 5	用途不明品	1区・G-10	IV層	最大径1.8cm, 最大厚0.55cm	ほぼ完形	褐色	孫・面付着	〃	—

註

(1) 東京都建設局新宿区内藤町遺跡調査会 1992 『内藤町遺跡』

第3節 金属製品

鉄製品（第74～75図 国版31）

馬 具

嚙が3点出土している。嚙は、馬の口の中に入れてかます喰（銜）と、喰の先に取り付けられて手綱を連結するための引手と、喰の両端に取り付けられて喰の脱落を防ぎ、かつ面繫に連結する鏡板とによって構成されている。さらにその鏡板には面繫と連結するための立間が付く。大平遺跡から出土した3点は、立間と引手の部分が欠損している。M1は、二連式の喰で、両端を環にした長さ8.5cmと7.4cmの円棒を2本組み合わせている。外側の環には素環の鏡板が組み合わせられている。M2とM3は、近接した同一層で出土しており、形状等も類似しているので同一個体の可能性が高いと考える。二連式の喰で、両端を環にした長さ8.3cmと7.4cmの円棒を2本組み合わせ、外側の環には素環の鏡板が組み合わせられていると思われる。3点とも1区IV層出土である。

鐵 鏈

M4は、腐蝕が激しく、頸部や脇抉が欠損しているので断定はできないが、後藤守一氏の分類（後藤守一 1942）によると、有頭柳葉式の鎌身部分で、鎌身断面は平に近いと思われる。形状等から古墳時代に位置づけられると思われるが、2～3区S D23002出土なので、近接して存在した石行塚古墳からの流入とも考えられる。

火打金

M6は、全体の形状が二等辺三角形を呈し、両端に突起が作られた携帯用の火打金である。火打金は、質のよい鋼で作られた製品で、火打石に打ちつけて火花を出して発火させる道具である。青森県の碇ヶ関村古館遺跡 1979年の分類でいうII A類にあたり、全国的にも一番出土例の多いタイプである。2-1区表探資料である。

鉄鎌

M7とM8は、ともに鎌状の鉄製品で、3区VI層出土である。

用途不明品

M5は、現存長7.7cmを測る棒状のものである。断面方形を呈し、鉄鎌の頸部とも考えられるが、腐蝕が激しく、範被部等も確認できないので、断定はできない。もしM5を鉄鎌の頸部とするならば、2-3区VI層で、M4と近接して出土していることから、同一個体の可能性も考えられる。M9は、瓢箪形を呈した厚さ0.15cmの鉄板である。2-3区S D23002出土である。

釘類

M10～M29は形状等から釘として分類したが、腐蝕が激しく、欠損も多いので、釘に分類するには多少無理があるものも含まれる。以下金箱文夫氏の分類（金箱文夫 1984）に従って説明していく。金箱文夫氏は、釘を頭の形態を中心として折釘類（釘の基部と同じ太さに頭の曲がった釘）、切釘類（頭のつくり出しの無い釘）、頭つくり出し類に3大別に分類し、それらをさらに16種に区分している。大平遺跡の出土品は、欠損部分が多く、3大別の分類を中心に記述を進めていく。まず折釘類に含まれるもののが3点（M14、M22、M28）、頭つくり出し類に含まれるもののが3点（M18、M20、M24）、切釘類に含まれるもののが6点（M10、M12、M13、M15、M16、M21）、欠損が多くて分類できなかつたものが8点（M11、M17、M19、M23、M25、M26、M27、M29）である。M14は、腐蝕が激しいので断定できないが、X線撮影の結果、推定長約3.0cm（1寸）の折釘もしくはさっぽ釘の可能性が高い。M22とM28は、それぞれ推定長約4.5cm（1寸5分）と推定長約6.0cm（2寸）の折釘と思われる。M18、M20、M24は、3点とも角釘の頭を扁平に鍛き卷いた頭巻と思われるが断定はできない。切釘類に含めた6点は、頭つ

くり出しが確認できなかつたので、切釘類に分類したが、単純に切断したものか、面とりが行われたどうかは、腐蝕が激しくて断定できない。

銅製品（第75図 図版32）

キセル

7点出土しており、7点とも銅製品と思われるが、M34は他の6点に比べて鉄が多く検出された⁽¹⁾。ラウのついた完形品はなく、M30～M33が雁首で、M34～M36が吸口である。以下古泉弘氏の分類・編年（古泉弘 1985）に従つて説明していきたい。

M30は脂返しが湾曲する河骨形と呼ばれるものである。火皿は椀形を呈するもので、首部の湾曲は小さい。火皿と首部の接合部に補強帯は巡っていないIV類と思われる。M31も脂返しが湾曲する河骨形と呼ばれるものでIV類と思われ、18世紀前半に位置づけられる。火皿は椀形を呈すが、一部欠損している。補強帯は巡っていない。M32は脂返しの欠損が激しく断定できないが、火皿は椀形を呈し、脂返しが緩やかに湾曲する河骨形で、補強帯が巡らないIV類と思われる。18世紀前半に位置づけられる。M33は火皿も小型化し、脂返しの湾曲がほとんどなくなり、火皿の下に直角に取り付いている。補強帯の巡らないVI類と思われ、19世紀代に位置づけられる。M34はラウに取り付く部分が一段太く巻かれた「肩付」と呼ばれるタイプで、II類かIII類と思われ、17世紀代に位置づけられる。M35・M36はともに1本の管で作られており、IV～VII類のいずれかに属すると思われる。18世紀前半～19世紀前半に位置づけられるか。

銅鈴

M37は、形状は球体を呈し、欠損していて断定はできないが、頂部には方形板状の紐を付けていたと考えられる。また、下半部に一文字の孔が穿たれ、腹部には一段凹帯が横走する。体内にあったと思われる石ないし鉄の丸は遺存していなかった。最大径2.0cmを測る小型の鈴で、馬鈴とも考えられる。1区IV層出土である。

銅劍

M38は、形状等から考えると装飾具として用いられた銅劍と思われる。外径4.8～4.85cm、内径4.0～4.05cmを測り、断面は径0.4cmで丸である。金貼を施した痕跡は認められない。1区IV層出土である。

3 鉛製品（第75～76図 図版32）

鉄砲玉

大平遺跡からは15個の鉄砲玉が出土しており、ほとんどが表面（外見）が白色を呈している。蛍光X線分析の結果、15個すべてが鉛玉であることが判明した⁽²⁾。鉛は融点が327°Cと低く、また硬度も小さいので、球状の玉を製作するのに容易な金属であったといわれる。しかし、玉が体に当たった時、皮下脂肪に触れると、瞬時に運動方向を変える性質があるので、体に当たっても直進する鉄玉や鉛青銅玉に比べて、殺傷能力が劣るともいわれる。形態的にはほとんど球形を呈しているが、中に片側や一方向がつぶれたり、歪んだ球形を呈するものがある。これらは鉄砲玉発射後の他への打撃の痕跡をとどめるものと思われる。さて、出土した鉄砲玉の中に、錫張りの痕跡が認められるものが7個ある。前述したように鉛は融点が低いので、各自が簡単に溶かして自分の鉄砲玉を製造し、それぞれ鉄砲にあった玉型（弾丸模）を持っていたといわれる。また、湯注ぎに伴う痕跡と考えられるハソがM45で確認でき、当時の鉄砲玉製造の方法を教えてくれる⁽³⁾。

砲術の秘密条項といわれるものに玉割と称されるものがある。つまり、鉄砲玉の径と鉄砲の口径との割合である。各流派によって少しずつ違いはあるが、「井上流近要流」による玉割表は第16表のようになっている⁽⁴⁾。出土した鉄砲玉は、酸化が進み、変形をしているものもあるので、本来の形状の計測値を求めるのは不可能であるが、現状での直径を最大径として計測したのが第20表である。これを「井上流近

要流」による玉割表にあてはめてみると、二匁玉5個、二匁五分玉3個、三匁玉5個、三匁五分玉1個、五匁五分玉1個である。火縄銃の弾丸は、鉛玉をもって通常「実弾」と称した。したがってこの鉛弾の直径が銃の口径となる。大平遺跡で使用された可能性がある火縄銃は、口径10.94mmと11.79mmのものと思われる。近接して存在した長久保城との関連を伺うことができよう。

船錨

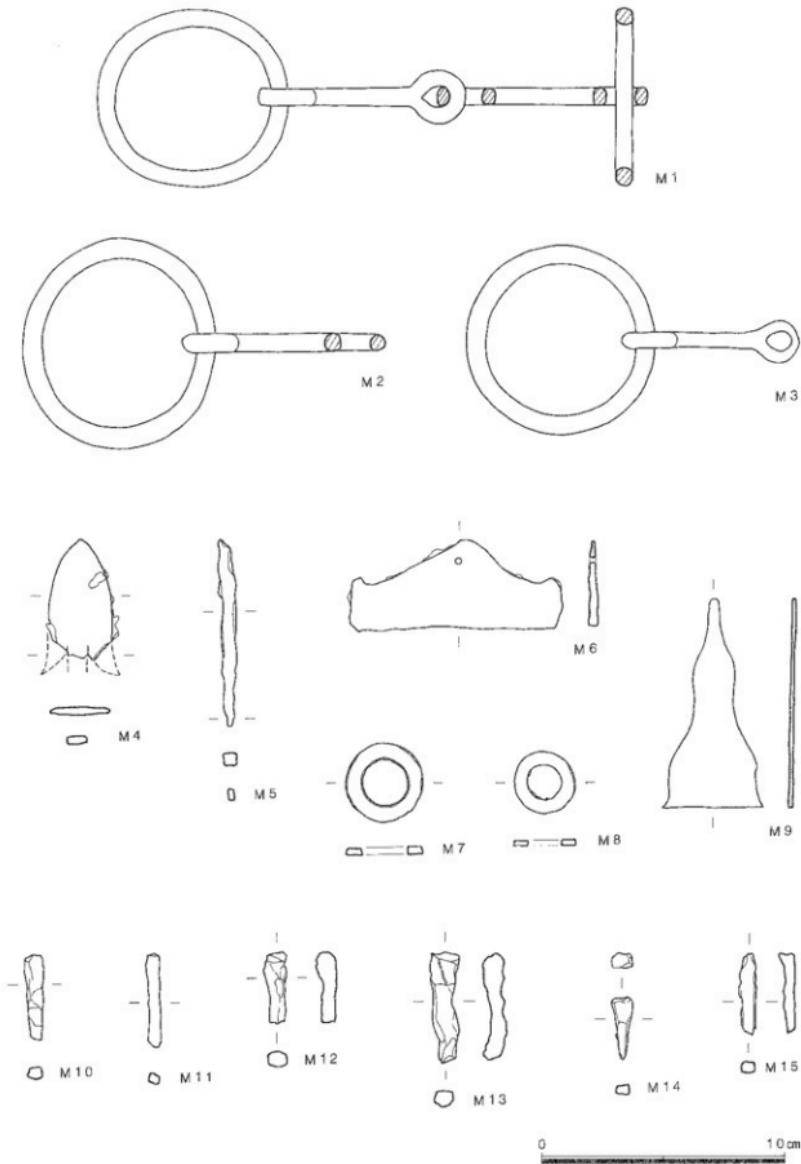
M39は、鉛製の鍤ではないかと思われる。しかし類例がないので、釣り用の鍤か投網用の鍤かは断定できず、投網用とするならば複数必要と思われる⁽¹⁵⁾。2-3区II層出土で明治時代以降に位置づけられるか。

第16表 井上流玉割一覽表

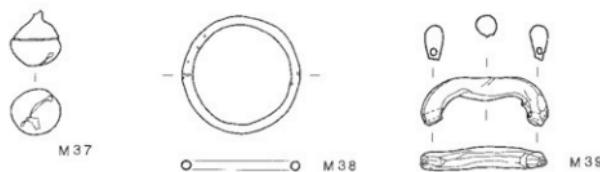
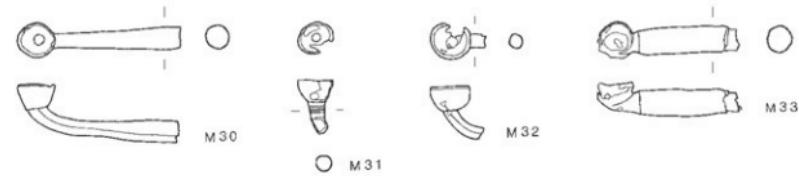
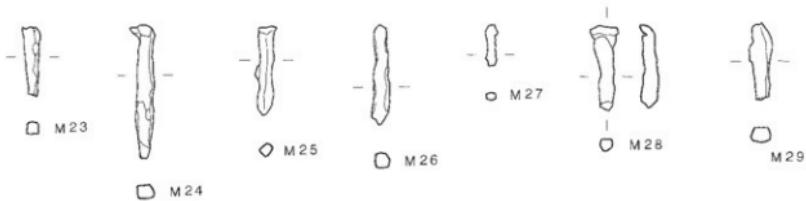
五 目	一分玉	二分玉	三分玉	四・九四	三・九四
一〇匁玉	一匁五分玉	二匁玉	八分玉	六・七六〇	四・九八一
九匁玉	一匁玉	一匁玉	一匁玉	七・九〇五	五・〇七八
八匁玉	一匁五分玉	二匁玉	二匁玉	八・五一七	六・八九三
七匁玉	三匁玉	三匁玉	三匁玉	九・七五	八・〇六三
六匁玉	三匁五分玉	三匁玉	三匁玉	一〇・七三	九・九四〇
五匁玉	四匁玉	四匁玉	四匁玉	十一・五五九	一〇・九四
四匁玉	四匁五分玉	四匁玉	四匁玉	十二・二八四	十一・七九〇
三匁玉	五匁玉	五匁玉	五匁玉	十二・九三	十二・五二九
二匁玉	五匁五分玉	六匁玉	六匁玉	十三・五二〇	十三・八九〇
一匁玉	七匁玉	七匁玉	七匁玉	十四・〇六二	十四・一二六
一〇匁玉	八匁玉	八匁玉	八匁玉	十四・五六五	十四・三四一
九匁玉	八匁五分玉	九匁玉	九匁玉	十五・〇三五	十四・八五六
八匁玉	九匁玉	十匁玉	十匁玉	十五・四七七	十五・三三五
七匁玉	九匁五分玉	十一・七三五	十一・九四	十五・八九五	十五・七八六
六匁玉	八匁玉	十二・六七四	十六・六二〇	十六・二一二	十六・二一二
五匁玉	七匁玉	十七・〇三五	十七・〇七	十七・三七四	十七・三七四
四匁玉	六匁玉	十七・三八三	十七・七二九	十八・〇七一	十八・〇七一
三匁玉	五匁玉	十七・七一九	十八・〇四一	十八・〇四一	十八・〇四一
二匁玉	四匁玉	十八・三五三	十八・三五三	十八・三五三	十八・三五三

註

- (1) 沼津工業高等専門学校望月明彦先生の蛍光X線分析による。
 - (2) 同 上
 - (3) 三島市教育委員会 1985 「山中城址出土の鉄砲玉について」 『史跡 山中城跡』
 - (4) 所莊吉 1969 「火縄錠」 雄山閣
 - (5) 当研究所池谷和三郎所長の指導を得た。

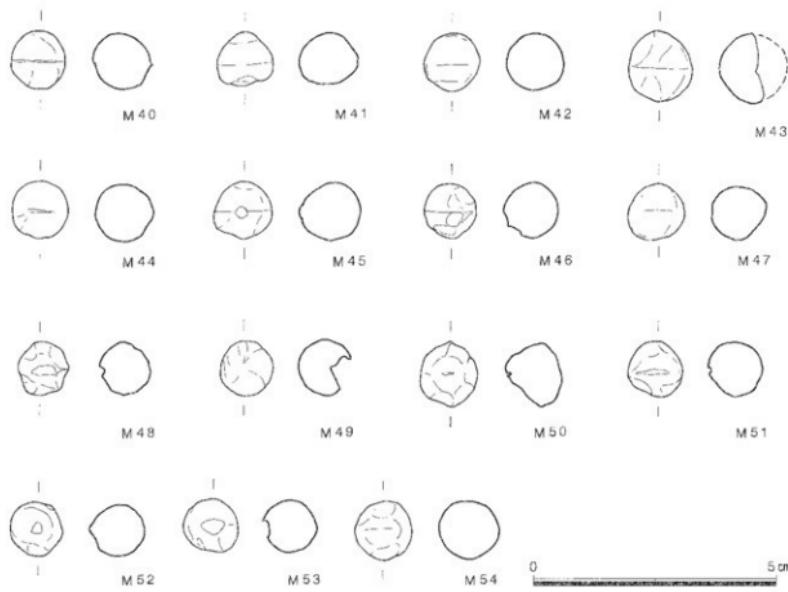


第74図 金属製品実測図 1



0 10 cm

第75図 金属製品実測図2



第76図 金属製品実測図3

第17表 鉄製品一覧表

番号	器種	調査区・グリッド	遺構・層位	法量			挿図版	写真図版
M1	鉢	1 区・F 10	IV層	復元残存長22.5cm、厚さ0.7cm、重さ158.6g			74	31
M2	鉢	1 区・G -11	IV層	復元残存長14.9cm、厚さ0.8cm、重さ82.6g			〃	〃
M3	鉢	1 区・G 11	IV層	残存長13.7cm、厚さ0.7cm、重さ62.4g			〃	〃
M4	鉄 球	2-3区・E -20	S D 23002	残存長4.8cm、幅2.6cm、厚さ0.3cm、重さ8.1g			〃	〃
M5	用途不明品	2 3区・E -21	IV層	残存長7.7cm、幅0.55cm、厚さ0.5cm、重さ4.8g			〃	〃
M6	火打金	2-1区	IV層	長さ8.7cm、幅3.6cm、厚さ0.35cm、重さ30.7g			〃	〃
M7	鉄 壺	3 区・G 27	IV層	外径3.1cm、内径1.9cm、厚さ0.3cm、重さ8.9g			〃	〃
M8	鉄 壺	3 区・G -27	IV層	外径2.5cm、内径1.4cm、厚さ0.25cm、重さ5.2g			〃	〃
M9	用途不明品	2 3区・E -20	IV層	長さ8.6cm、幅4.2cm、厚さ0.15cm、重さ14.8g			〃	〃

第18表 釘類一覧表

番号	種別	調査区・グリッド	遺構・層位	残存長(cm)	頭部幅(cm)	中央幅(cm)	重さ g	備 考	挿図版	写真図版
M10	釘	1 区・J - 9	IV層	3.5	0.75	0.6	3.1	先端部欠損	74	31
M11	釘	1 区・F - 9	IV層	3.35		0.5	2.0	頭部・先端部欠損	〃	〃
M12	釘	1 区・F - 9	IV層	2.9	0.75	0.8	3.9	先端部欠損	〃	〃
M13	釘	1 区・F - 9	IV層	4.5		0.8	6.9	頭部・先端部欠損	〃	〃
M14	釘	1 区・F 10	IV層	2.6	0.9	0.85	1.7	ほぼ完形?	〃	〃
M15	釘	1 区・F -11	IV層	3.35	0.45	0.55	2.9	先端部欠損	〃	〃
M16	釘	1 区・G -10	IV層	3.55	0.55	0.5	2.4	先端部欠損	75	〃
M17	釘	1 区・G -10	IV層	3.7		0.55	2.7	頭部・先端部欠損	〃	〃
M18	釘	1 区・I -10	IV層	2.7	0.8	0.4	1.1	ほぼ完形?	〃	〃
M19	釘	1 区・I -10	IV層	2.9		0.4	0.6	頭部・先端部欠損	〃	〃
M20	釘	2-1区・D -12	VI層	3.0	0.55	0.35	0.9	先端部欠損	〃	〃
M21	釘	2-1区・E -11	VI層	3.45	0.8	0.7	2.0	頭部欠損	〃	〃
M22	釘	2-1区・E -12	VI層	3.4	0.9	0.5	2.0	先端部欠損	〃	〃
M23	釘	2-1区・F -17	VI層	2.8		0.5	1.9	頭部・先端部欠損	〃	〃
M24	釘	2-1区・H -14	VI層	5.4	0.9	0.55	5.2	先端部欠損	〃	〃
M25	釘	2-3区・E -18	II層	3.65		0.55	2.2	頭部欠損	〃	〃
M26	釘	2-3区・E -19	II層	4.1		0.55	4.2	頭部欠損	〃	〃
M27	釘	2-3区・E -19	II層	1.7		0.4	0.4	頭部・先端部欠損	〃	〃
M28	釘	2 3区・E -20	III層	3.45	1.15	0.55	3.3	先端部欠損	〃	〃
M29	釘	3 区・G -27	VI層	3.1		0.8	3.2	頭部・先端部欠損	〃	〃

第19表 キセル一覧表

番号	種別	調査区・グリッド	遺構・層位	法量 (cm)					備 考	挿図版	写真図版
				長さ	高さ	火口径	吸口径	重さ(g)			
M30	キセル(縦首)	1 区・E - 9	III層	(66)	23	14		7.9		75	33
M31	キセル(縦片)	1 区・E - 8	III層	(22)		13		1.6	火口1/5欠損	〃	〃
M32	キセル(縦首)	1 区・F - 9	IV層	(22)	(22)	15.5		2.8	火口1/5欠損	〃	〃
M33	キセル(縦首)	2-3区・E - 20	II層	(59)	14	11		9.4	火口1/5欠損	〃	〃
M34	キセル(吸口)	2-3区・E - 20	IV層	(113.5)			5	13.7	ラウ一部残存	〃	〃
M35	キセル(吸口)	3 区・H - 25	VI層	(53)				4.1		〃	〃
M36	キセル(吸口)	3 区・G - 27	石積み遺構	(35.5)				1.7		〃	〃

第20表 その他の金属製品一覧表

番号	器種	調査区・グリッド	遺構・層位	法 量	挿図版	写真図版
M37	銅 鉢	1区・I-11	IV層	最大径2.0cm、厚さ0.5~0.7cm、重さ4.2g	75	33
M38	銅 鉢	1区・F-10	IV層	外径4.85cm、内径4.05cm、厚さ0.4cm、重さ11.2g	〃	〃
M39	銅 鉢	2-3区・E-20	II層	長さ5.2cm、幅2.0cm、厚さ0.9cm、重さ33.1g	〃	〃

第21表 鉄砲玉一覧表

番号	種別	調査区・グリッド	遺構・層位	直徑	重さ g	鋲張り	備考	挿図版	写真図版
M40	鉛 玉	1 区・E-10	V層	12.0	9.5	有り		76	33
M41	鉛 玉	1 区・F-11	IV層	12.0	8.9	無し		〃	〃
M42	鉛 玉	1 区・F-11	IV層	12.0	9.9	有り		〃	〃
M43	鉛 玉	1 区・G-8	IV層	15.0	9.7	無し	1/2欠損	〃	〃
M44	鉛 玉	1 区・F-11	IV層	11.5	10.3	有り		〃	〃
M45	鉛 玉	1 区・H-10	IV層	12.0	9.5	有り		〃	〃
M46	鉛 玉	1 区・I-10	IV層	11.5	7.9	無し		〃	〃
M47	鉛 玉	2-1区・I-11	V層	11.5	7.1	有り	1/5欠損	〃	〃
M48	鉛 玉	2-3区・E-20	II層	11.0	7.0	無し		〃	〃
M49	鉛 玉	2-3区・E-21	III層	11.0	7.4	有り		〃	〃
M50	鉛 玉	2-3区・E-20	III層	13.0	10.4	無し		〃	〃
M51	鉛 玉	2-3区・E-19	III層	11.0	8.9	有り		〃	〃
M52	鉛 玉	2-3区・E-18	III層	11.0	8.0	無し		〃	〃
M53	鉛 玉	2-3区・E-21	VI層	11.0	9.3	無し		〃	〃
M54	鉛 玉	3 区・E-28	VI層	12.0	11.0	無し		〃	〃

第4節 錢 貨

1 概要

大平遺跡からは61枚の銭貨が出土した。一般に出土銭貨は、大量埋蔵鏡や墓の副葬品としての六道鏡、地鎮等の祭祀のほかに、当時の遺失物がある(1)。大平遺跡の場合、墳墓が多数検出されているので、六道鏡が多数を占めると思われ、可能性のあるものまで含めると35枚(57%)にのぼる。六道鏡とは、俗に三途の川の渡し貨といわれており、本来は棺内あるいは基坑内に収められた銭貨のことをいうが、遺体の荼毘後、捨骨して骨を他の場所に埋葬して、銭貨を荼毘場にそのまま遺棄するか、周囲に遺棄したとも考えられる。鈴木公雄氏は、六道鏡の習俗は、淨土教信仰が受容される中で、いわゆる六道絵(獄草子、餓鬼草子)の普及に伴って民間に広まって行った習俗と考えられ、室町時代後半以降に確立したのではないかと報告している(2)。六道鏡の枚数は、全国的にも6枚が一般的であるが、これは仏教の六道思想の六に関連すると考えられている。また前述の鈴木公雄氏は、全国出土六道鏡の集計で6枚一組ものが、総墓数1588基の約42.1%を占め、次に10枚以上が約11.3%、1枚が約9.6%と報告している(3)。

6枚一組で副葬されている事例が一番多いが、必ずしも6枚一組で副葬するとは限らないようである。

さて、大平遺跡の出土銭の内訳をみると、渡来銭が49枚(80%)、日本銭が12枚(20%)である(4)。渡来銭を銭種別にみると、紹聖元寶と熙寧元寶が5枚ずつ、開元通寶、皇宋通寶、祥符元寶、洪武通寶、永樂通寶が4枚ずつ、天聖元寶と元豐通寶が3枚ずつ、嘉祐通寶と至道元寶が2枚ずつで、他は1枚の出土で、祥符通寶か祥符元寶が不明のものが1枚である。年代でみると北宋時代のものが37枚と多く、

明時代のものが8枚、唐時代のものが4枚である。次に日本銭を銭種別にみると、古寛永通寶が3枚、文銭の寛永通寶が1枚、新寛永通寶が6枚、明治時代の銭貨が2枚である。出土位置からみると、遺構から出土したもののが19枚(30%)、包含層からの出土が42枚(70%)である。後者は遺失物が多いと思われるが、被熱して出土したものは、六道銭の可能性もあると考えた。

2 1区出土銭貨（第77図 図版33）

M55～74が1区出土の銭貨で、いずれも包含層から出土し、被熱をしているものは1枚もない。M55～59は、5枚銹着して出土しており、六道銭の可能性もある。M62は破片であるが、本銭の太平通寶と思われる。M63は本銭の至道元寶である。M68は紹聖元寶と判読した。M71は本銭の洪武通寶で、背に福の文字が鋳られていることから、福州が铸造地であることを示している。

3 2-1区・2-3区出土銭貨（第77～78図 図版33）

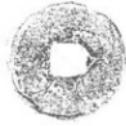
M75～M83は2-1区からの出土である。M75～77はS X21344の、火葬骨が散在しているやや上部から、3枚銹着して検出された。3枚とも被熱しており、六道銭と思われる。M78はS X21016から出土の熙寧元寶で、15世紀後半のかわらけや火葬骨とともに出土しており、六道銭と思われる。M79は破片だが、嘉祐通寶と思われる。M80は本銭の洪武通寶である。M81はス寶の古寛永通寶である。M82は拓影図には掲載しなかったが、明治時代铸造の半銭である。M83は2-3区で、包含層出土のス寶の古寛永通寶である。

4 3区出土銭貨（第78～79図 図版33）

M84～115は3区からの出土で、渡来銭が26枚、新寛通寶が6枚である。そのうちM84～98は遺構からの出土で、M99～115は包含層からの出土である。M84～89はS X3001からの出土で、M84～86とM87～88はそれぞれ銹着して出土し、M89のみ単独で出土した。6枚とも被熱していないが、六道銭と思われる。M84は無背の開元通寶である。M90～96はS X3192からの出土で、7枚が被熱・銹着して出土しており、六道銭として遺体と共に茶毬に付されたと思われる。M97はS P3018出土の紹聖元寶、M98はS P3011出土の永楽通寶である。M99～104は包含層からの出土であるが、6枚銹着して出土しているので、六道銭の可能性がある。M105は開元通寶で、背に京の文字と下月が鋳られている。この京とは京兆府の意味で、西安が铸造地であることを示している。M109は、被熱した永楽通寶である。M110～111は、被熱していないが銹着して出土した新寛永通寶である。M113～115は、被熱した新寛永通寶と思われるが、M115は変形が激しく断定できない。

註

- (1) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996 『水井遺跡・清水遺跡』
- (2) 鈴木公雄 1988 「出土六道銭の組合せからみた江戸時代の銅錢流通」『社会経済史学』 第53巻 第6号
- (3) 鈴木公雄 1993 「多数の銭貨を有する六道銭について」 『史学』 第62巻 第3号
- (4) 銭貨全般について、当研究所足立順司主任調査研究員と岩名健太郎調査研究員の指導を得た。



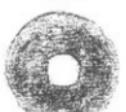
M 55

M 56

M 57

M 58

M 59



M 60

M 61

M 62

M 63

M 64



M 65

M 66

M 67

M 68

M 69



M 70

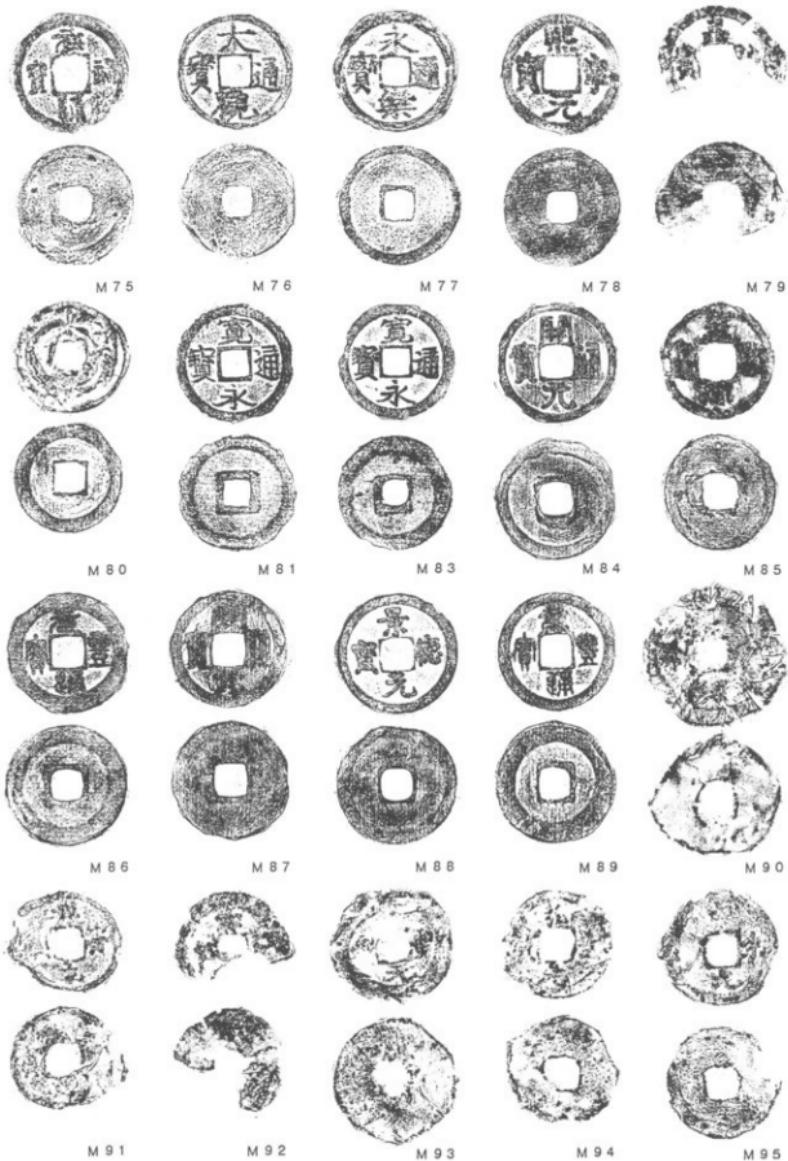
M 71

M 72

M 73

M 74

第77図 錢貨拓影図1



第78図 錢貨拓影図2



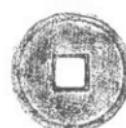
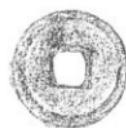
M 96

M 97

M 98

M 99

M 100



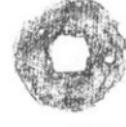
M 101

M 102

M 103

M 104

M 105



M 106

M 107

M 108

M 109

M 110



M 111

M 112

M 113

M 114

M 115

第79図 錢貨拓影図3

第22表 錢貨一覧表

番号	名 称	調査区	遺構・層位	グリッド	直径(mm)	重量(g)	孔径(mm)	書体	初鋳年代	鑄 者	押抜印版	写真図版
M55	開元通寶	1区	IV層	F - 8	24.0	2.9	7.0	篆書	621年	77	32	
M56	天聖元寶	1区	IV層	F - 8	24.0	3.2	6.0	篆書	1023年	II	II	
M57	天聖元寶	1区	IV層	F - 8	23.5	1.6	7.5	篆書	1023年	II	II	
M58	皇宋通寶	1区	IV層	F - 8	24.0	2.8	7.5	篆書	1038年	II	II	
M59	嘉祐通寶	1区	IV層	F - 8	24.0	2.5	7.5	篆書	1056年	II	II	
M60	祥符通寶	1区	IV層	F - 10	24.0	1.2	7.0	篆書	1069年	II	II	
M61	熙寧元寶	1区	IV層	F - 10	—	1.6	—	篆書	1068年	II	II	
M62	太平通寶	1区	IV層	G - 8	—	0.4	—	篆書	976年	本	II	
M63	淳化元宝	1区	V層	I - 11	23.0	2.6	6.0	篆書	995年	本	II	
M64	祥符元宝	1区	IV層	G - 10	25.0	2.1	6.0	篆書	1009年	II	II	
M65	熙寧元宝	1区	IV層	D - 9	23.0	1.5	6.0	篆書	1068年	II	II	
M66	熙寧元宝	1区	IV層	F - 10	—	1.6	—	篆書	1068年	II	II	
M67	熙寧元宝	1区	V層	F - 9	23.0	2.4	7.0	篆書	1068年	II	II	
M68	紹聖元宝	1区	III層	D - 10	23.0	1.1	7.5	篆書	1094年	II	II	
M69	紹聖元宝	1区	IV層	H - 11	22.0	1.3	7.5	篆書	1094年	II	II	
M70	紹聖元宝	1区	VI層	J - 10	23.5	2.4	6.5	行書	1094年	II	II	
M71	洪武通寶	1区	VI層	J - 11	23.0	1.9	5.5	真書	1368年	本(背福)	II	
M72	寛永通寶	1区	III層	E - 10	24.0	1.3	6.0	篆書	1636年	古寛永	II	
M73	寛永通寶	1区	IV層	G - 10	25.0	1.8	6.0	篆書	1668年	新寛永(文鏡)	II	
M74	一錢	1区	III層	G - 8	—	27.5	6.2	—	明治17年	II	II	
M75	元祐通寶	2-1区	S X21344	D - 11	24.0	2.8	7.0	篆書	1086年	被熱	78	
M76	大觀通寶	2-1区	S X21344	D - 11	23.5	2.1	6.0	真書	1107年	被熱	II	
M77	水樂通寶	2-1区	S X21344	D - 11	25.0	4.7	5.0	真書	1408年	被熱	II	
M78	熙寧元寶	2-1区	S X21016	E - 11	24.5	2.8	6.5	篆書	1068年	II	II	
M79	熙祐通寶	2-1区	IV層	E - 11	—	1.2	—	篆書	1056年	II	II	
M80	紹祐通寶	2-1区	V層	E - 16	22.5	3.8	6.0	真書	1368年	本	II	
M81	寛永通寶	2-1区	VI層	E - 12	24.0	2.1	5.5	篆書	1636年	古寛永	II	
M82	半錢	2-1区	表様	不明	21.0	2.3	—	—	明治時代	II	II	
M83	寛永通寶	2-3区	III層	E - 20	23.5	1.5	5.0	篆書	1636年	古寛永	78	
M84	開元通寶	3区	S X3001	G - 27	24.5	2.6	6.0	真書	621年	無背	II	
M85	皇宋通寶	3区	S X3001	G - 27	23.5	2.9	7.5	篆書	1038年	II	II	
M86	元祐通寶	3区	S X3001	G - 27	25.0	2.9	6.5	篆書	1078年	II	II	
M87	熙寧通寶	3区	S X3001	G - 27	24.0	2.5	6.5	篆書	621年	II	II	
M88	慶曇元寶	3区	S X3001	G - 27	25.0	2.6	6.5	篆書	1004年	II	II	
M89	元豐通寶	3区	S X3001	G - 27	24.0	2.6	6.5	篆書	1078年	II	II	
M90	祥符元寶	3区	S X3192	E - 26	(26.5)	3.0	(8.5)	篆書	1009年	被熱	II	
M91	祥符元寶	3区	S X3192	E - 26	(21.5)	1.4	(8.0)	行書	1009年	被熱	II	
M92	祥符口寶	3区	S X3192	E - 26	(23.5)	1.2	—	真書	1009年	被熱	II	
M93	大聖元寶	3区	S X3192	E - 26	(26.0)	2.8	(7.5)	真書	1023年	被熱	II	
M94	熙聖元寶	3区	S X3192	E - 26	(23.0)	1.2	(8.0)	行書	1004年	被熱	II	
M95	聖宋元寶	3区	S X3192	E - 26	(24.0)	2.8	(8.0)	行書	1101年	被熱	II	
M96	洪武通寶	3区	S X3192	E - 26	(24.0)	3.1	(8.0)	真書	1368年	II	II	
M97	紹聖元寶	3区	S P3018	E - 26	(24.0)	2.5	6.5	行書	1094年	II	II	
M98	永樂通寶	3区	S P3011	D - 26	25.0	2.6	5.5	篆書	1408年	II	II	
M99	至道通寶	3区	VI層	H - 23	24.0	3.2	6.0	行書	995年	II	II	
M100	祥符元寶	3区	VI層	H - 25	25.0	2.9	6.0	篆書	1009年	II	II	
M101	聖宋通寶	3区	VI層	H - 25	24.0	2.9	7.0	真書	1038年	II	II	
M102	聖宋通寶	3区	VI層	H - 25	24.0	3.4	6.5	篆書	1038年	II	II	
M103	大定通寶	3区	VI層	H - 25	25.0	3.2	5.0	真書	1178年	II	II	
M104	永樂通寶	3区	VI層	H - 25	24.5	3.2	5.5	真書	1408年	II	II	
M105	開元通寶	3区	VI層	H - 26	23.0	2.6	7.0	—	845年	背京・下月	II	
M106	元祐通寶	3区	VI層	D - 27	23.5	2.6	7.0	行書	1078年	II	II	
M107	政和通寶	3区	VI層	D - 28	24.0	1.5	6.0	分模	1111年	II	II	
M108	洪武通寶	3区	VI層	D - 27	—	1.3	—	—	1368年	II	II	
M109	水樂通寶	3区	VI層	E - 27	21.5	1.1	6.5	—	1408年	被熱	II	
M110	寛永通寶	3区	VI層	E - 28	23.0	2.3	6.5	—	1697年	新寛永	II	
M111	寛永通寶	3区	VI層	E - 28	22.5	2.1	6.5	—	1697年	新寛永	II	
M112	寛永通寶	3区	VI層	E - 28	22.5	2.2	6.0	—	1697年	新寛永	II	
M113	寛永通寶	3区	VI層	E - 28	23.0	1.9	6.0	—	1697年	新寛永(被熱)	II	
M114	寛永通寶	3区	VI層	D - 28	23.0	1.9	6.5	—	1697年	新寛永(被熱)	II	
M115	寛永通寶	3区	VI層	D - 28	(21.5)	0.7	—	—	1697年	新寛永(被熱)	II	

第5節 石器・石製品

打製石器（第80図 図版34）

①ナイフ形石器

S 1は、縦長剥片の打面を石器の基部とした片縁調整ナイフ形石器であるが、上下端が欠損していて、刃部には二次的加工が施されている。裏面の一部が二酸化マンガンで汚染されている。石材は凝灰岩質泥岩と思われるが、断定はできない。2-3区S D23002出土で流れ込みの可能性が高い。

②打製石鎌

S 2は、1区、肩から出土した小型の打製石鎌である。石材は透明度の高い黒耀石（産地不明）を使用している。凹基式有茎鎌で、平面形態はほぼ三角形を呈す。脚部と茎部の一部が欠損している。S 3は、3区、IV層からの出土の小型の打製石鎌である。石材は透明度の高い神津島産の黒耀石が使用されている可能性がある。凹基式無茎鎌と思われるが、基部の抉りが浅くて平基に近いタイプである。平面形態はほぼ三角形を呈すが、脚部の一部が欠損している。2点とも二次的堆積の可能性が高い。

③石錐

骨角器などを穿孔するための工具で、基部（つまみ部）と錐部（刃部）とからなる。S 4は錐部の大部分が欠損したもので、3区VI層からの出土で、二次的堆積の可能性が高い。石材は伊豆の柏崎産の黒耀石と思われる。

④打製石斧

S 5は、器厚が薄手で小型の撥型打製石斧と思われるが、未完成品である。石材は、凝灰岩質粘板岩を使用している。3区II層からの出土で二次的堆積の可能性が高い。

⑤剥片石器

スクレーパー、刃器等と細分・呼称されるものだが、本報告では剥片石器として取り上げた。器面の一方に自然面を残す一次剥片を用い、銛く抜け落ちたエッジの部分を刃器として使用した可能性を考えられる。S 6は刃部をもつ剥片である。剥片の一部分を明らかに刃部を研磨して使用したと思われる鋭いエッジをもつ。石材は玄武岩と思われるが、断定はできない。1区III層出土で、二次的堆積の可能性が高い。

磨製石器（第80図 図版34）

磨製石鎌

S 7は、凹基式無茎鎌の磨製石鎌である。平面形態は二等辺三角形を呈し、側縁部中位で外湾するタイプであると思われるが、穿孔部から脚部にかけて欠損しており、断定はできない。穿孔部は両面穿孔と思われ、穿孔近くに石材を試した跡が残存している。石材は、良質の粘板岩を使用している。1区VI層からの出土で、二次的堆積の可能性が高い。

3 凹石（第81図 図版35）

凹石は円形状の磨石の一部を凹めたものが多く、用途としては堅果類の果皮取り（木の実取り）や石器の製作などが考えられている。大平遺跡からは7点出土している。S 9は、1区IV層からの出土で、ほぼ中央部に凹みが一つ観察されるほか、敲打部が側縁部に3ヶ所観察できるので、凹石だけではなくて敲石としても使用していたと思われる。扁平でやや歪んだ円形の自然縞を用い、石材は輝石安山岩である。S 10～S 12は、3区の石積み遺構から出土した。これらは、二次的な堆積をした後、石積み構築時に再利用されたものと思われる。S 10は、中央部に凹みが一つ観察される。断面が梢円形で平面が円

形を呈した自然縫を用い、石材は多孔質の玄武岩である。S 11は、中央部やや上に浅い凹みが一つ観察される。やや扁平で歪んだ円形を呈した自然縫を用い、石材はやや多孔質の玄武岩である。S 12は、中央部に凹みが一つ観察される。扁平で円形に近い形を呈した自然縫を用いている。石材は玄武岩質安山岩である。S 13は3区S X 3041からの出土で、ほぼ中央部に凹みが一つ観察される。扁平で楕円形を呈した自然縫を用い、石材は多孔質の玄武岩である。S 14は3区VI層から出土で、中央部とその右下に一つづつ凹みが観察される。扁平で楕円形の自然縫を用い、石材はやや多孔質の玄武岩である。S 15は1/2欠損しているが、表裏面ともに凹みが観察できる。表面の凹みは大きく、形状から石皿と推定することも可能かもしれない。扁平で円形の自然縫を用い、石材は輝石安山岩である。3区II層出土で、二次的堆積の可能性が高い。

4 敲石（第82図 図版35）

敲石は、比較的手頃な自然縫をそのまま用い、溝状の打痕（使用痕）をもつ場合が多く、凹痕のほか、打痕を合わせても例も多く認められている。大平遺跡からは3点出土している。S 16は2-3区II層出土で、楕円球状縫の端部に1カ所敲打痕をもつ。石材は輝石安山岩である。S 17は3区の石積み遺構から出土した典型的な球状タイプの敲石で、3面に敲打痕が観察できる。石材は輝石安山岩である。S 18は3区の表採資料で、扁平縫の端部に敲打痕をもつ。石材は細粒輝石安山岩である。

5 石皿（第82図 図版35）

石皿は中央を凹めた皿形の石器で、目の粗い石が多用される。植物の粉砕・製粉や土器混和材としての石を粉末化したものと考えられている。S 19は3区の石積み遺構から出土した。1/6程度しか残存せず、皿部はほとんど欠損している。扁平で円形の自然縫を用いたと思われる。石材はやや多孔質の玄武岩である。

6 砧石（第83~86図 図版36）

砧石は、石器・骨角器・刃物など生活上で必要な道具を製作もしくは再加工する際に、研磨するための道具である。片手で持つことができる軽量なタイプ（持ち砥石=携帯型）、地面に据え置くタイプ（置き砥石=据え置き型）や敲打するための台としての機能を共有しているタイプなどがある。基本的に人為的に砥がれた面（砥面）と思われる面が観察されたものは、すべて砥石と認定した。大平遺跡では、完形で出土している資料が少ないため、『川合遺跡 遺物編 2 1992』に準じて重量値から分類を行うと、出土した29点すべてが500g未満の持ち砥石になる。使用している石材は、29点中22点と流紋岩質凝灰岩が多い。これは流紋岩質凝灰岩が、自然縫ではやや薄く扁平な状態で採取されることが多く、持ち砥石としては最適の石材であったからだと思われる。他には流紋岩や凝灰質粘板岩等があるが、軽石製のものはなかった。また29点の砥石は、石材の砥粒等から観察すると「荒砥」ではなく、大半が「仕上砥」ではないかと思われるが、断定はできない。S 20~S 23は1区の包含層からの出土で、4点とも石材は流紋岩質凝灰岩である。S 20は、板状の小型品で下半を欠損している。表裏面と左側面と上面の4面使用と思われる。S 21は板状の小型品で被熱していて、下半欠損している。表面、両側面と上面の4面使用である。S 22は板状の小型品で、上半欠損している。表面はよく使い込まれており、粗い刃痕も認められる。左側面にもわずかだが刃痕が認められる。表面と両側面の4面使用である。S 23は欠損が激しく残存部分が少ないが、表裏面と左側面の3面を使用している。S 24は2-1区のVI層出土で、板状の小型品である。上下端とともに欠損している。表面と両側面の4面使用である。石材は流紋岩質凝灰岩である。S 25は2-3区S D 23002出土の板状の小型品である。表面と両側面と上面の5面使用してい

る。石材は流紋岩質凝灰岩である。3区からは23点出土している。S26～S29は江戸時代に構築された石積み遺構から出土した。石材はS28が流紋岩と思われるが、他の3点は流紋岩質凝灰岩である。S26は柱状の小型品で、上下ともに欠損している。表裏面と両側面の4面使用である。S27も柱状の小型品で、上部が欠損している。表裏面と左側面の3面使用である。S28は板状の小型品で、下部が欠損している。表裏面と両側面と上面の5面使用している。表面は使用が頗著である。S29は柱状の小型品で、左側面の一部と下部を欠損している。表裏面と両側面と上面の5面使用である。表面に刃痕が認められる。S30～S48は包含層出土のものである。石材は、S31・S34・S48が凝灰岩質粘板岩、S36が細粒凝灰岩、S43が玄武岩、S37が凝灰岩質細粒砂岩で、他は流紋岩質凝灰岩である。S30は柱状の小型品で、下部欠損である。表裏面と両側面と上面の5面使用である。S31は板状の小型品で、両側面と下部が欠損している。表裏面と上面の3面使用である。S32は柱状の小型品で、下部欠損である。表裏面と両側面と上面の5面使用である。両側面には線状刃痕が認められる。S33は柱状の小型品で、上部欠損である。表裏面と両側面の4面使用である。表面の上端近くにV字状の刃痕がみられる。S34は板状の小型品で被熱していて、下部が欠損している。表裏面と両側面と上面の5面使用している。5面とともにうっすらと線状刃痕がみられる。S35は板状の小型品で、上部と下部の一部が欠損している。表裏面と右側面の3面使用と思われるが、右側面の使用頻度は低いと思われる。S36は板状の小型品で、表裏面と両側面と上面の5面使用である。表面の使用が特に頗著である。S37は板状の小型品で、上下欠損である。表裏面と両側面の4面使用である。表面の中央から下端に向かって使用が頗著である。S38は柱状の小型品で、下部欠損である。表裏面と両側面と上面の5面使用で、裏面の使用が頗著である。S39は板状の小型品で、下部が欠損している。表面と両側面と上面の4面使用である。表面の使用が特に頗著で、中央から下端に向かって抉れています。S40は柱状の小型品で、下端が欠損している。表面と両側面と上面の4面使用である。S41は柱状の小型品で、上下欠損している。表面と左側面の2面使用である。2面とも使い込みが頗著である。S42は上下欠損している。表裏面と両側面の4面使用である。S43は形態は不明であるが、表面のみ使用している。S44は柱状で上下欠損している。表面と両側面の4面使用で、表面はよく使い込まれている。S45は欠損が激しく形態はわからないが、表面と左側面と下面の3面使用である。表面にはうっすらと線状刃痕がみられる。S46は柱状の小型品で、上下と右部が欠損している。表裏面と左側面の3面使用である。S47は柱状の小型品で、上下左右ともに欠損している。表裏面の2面使用である。S48は、板状で上部が欠損している。形状等から硯と推定することも可能なので、硯として製作した後、砥石に転用されたかもしれない。硯とするならば、表面は全面欠損の平面形が長方形の「長方硯」で、小型の持ち運びが便利なタイプと思われるが、墨等が全く付着していないので、断定はできない。砥石としては、表裏面と両側面および下面の5面使用である。3区VI層出土である。

7 火打ち石（第82図 図版34）

S49は瑪瑙の破片で、火打ち石と思われる。火打ち石は磨耗が進むと火花が出にくくなるため、磨耗する面を再度割る必要がある。各方向からの剥離痕がみられる。1区IV層出土である。

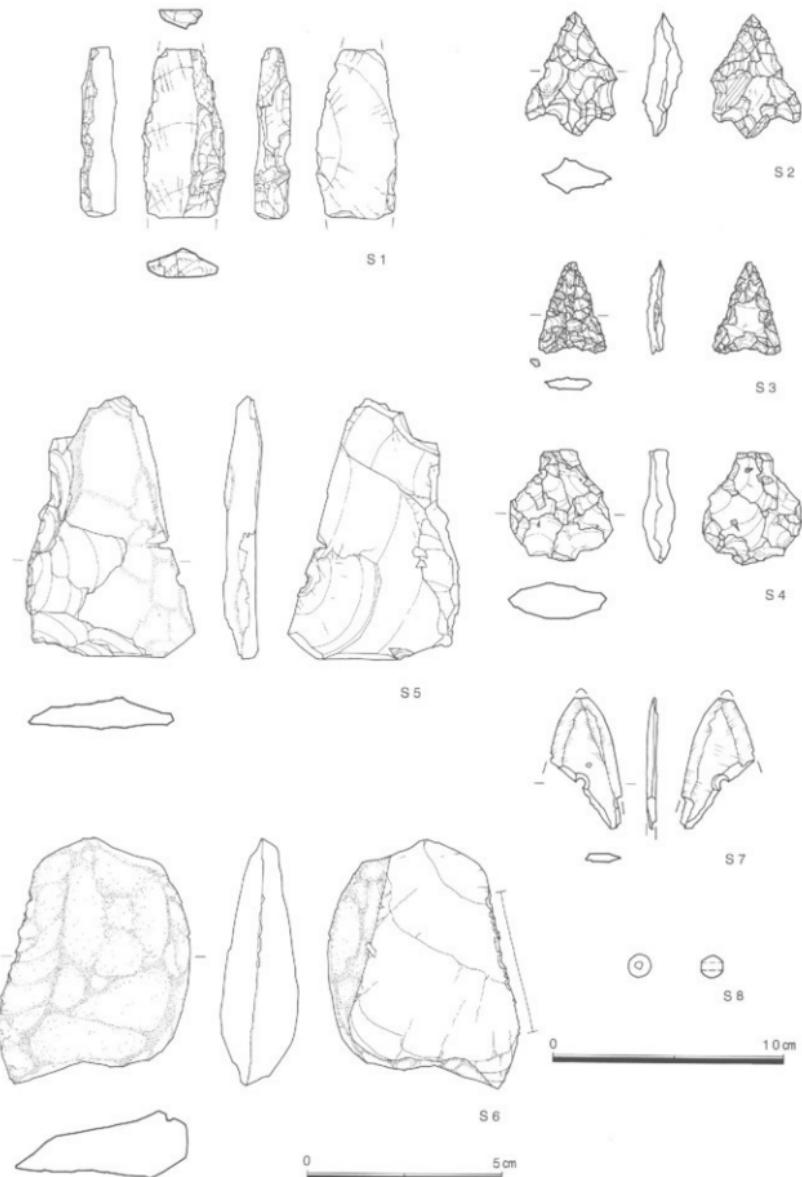
8 用途不明品（第80・82図 図版34）

S8は直径4.5mmの縁玉髓の中央に、径1.5mmの孔を両面穿孔しているようである。形状等から数珠の一部分と推定することも可能だが、断定はできない。2～3区 S D23002出土である。S50は、輝石安山岩を球状に加工し、さらに下端の一部を平らにして、径6mm、長さ17mmの孔をあけているが、貫通させていない。この孔の部分に何かを差し込んで使用したものと思われる。形状からはこけしの顔の部分に相当

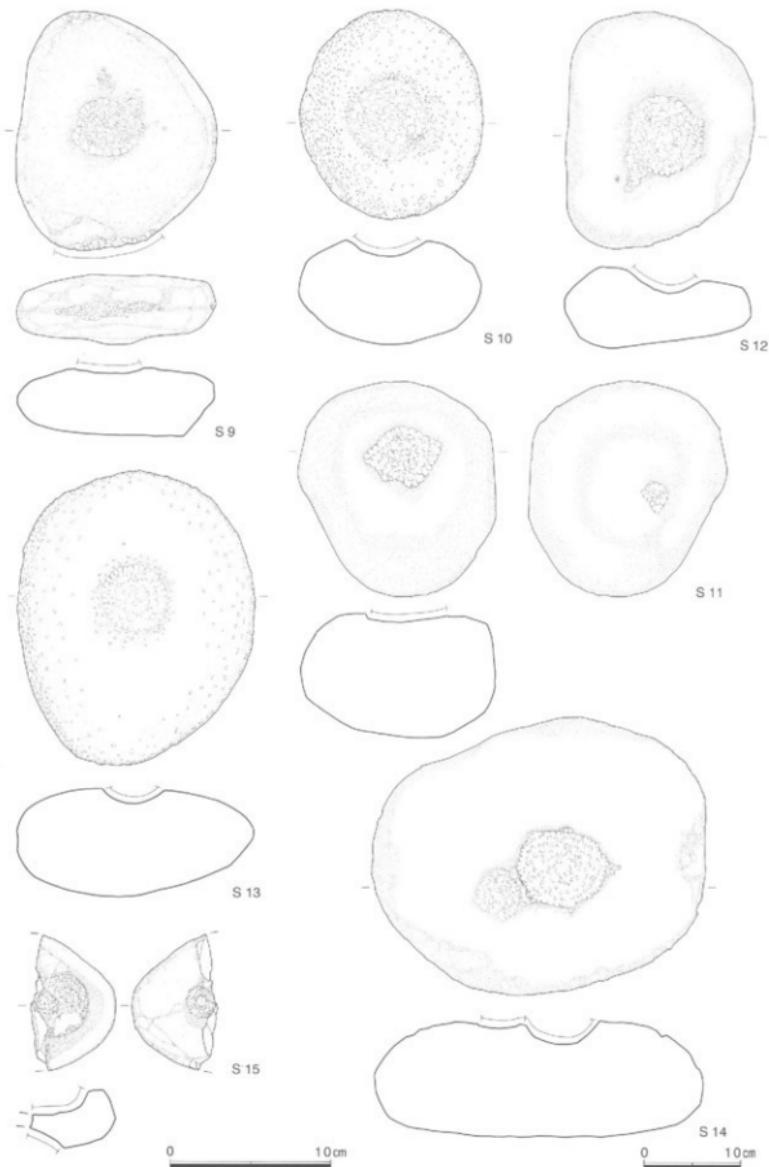
するよりも見える。外面は全面が被熱しているようである。S51は有孔状の用途不明品である。表面の中央部やや上に径3.5mmの孔をあけているが、貫通させていない。裏面にも穿孔痕と思われるものが、中央部にみられる。石材は滑石である。

註

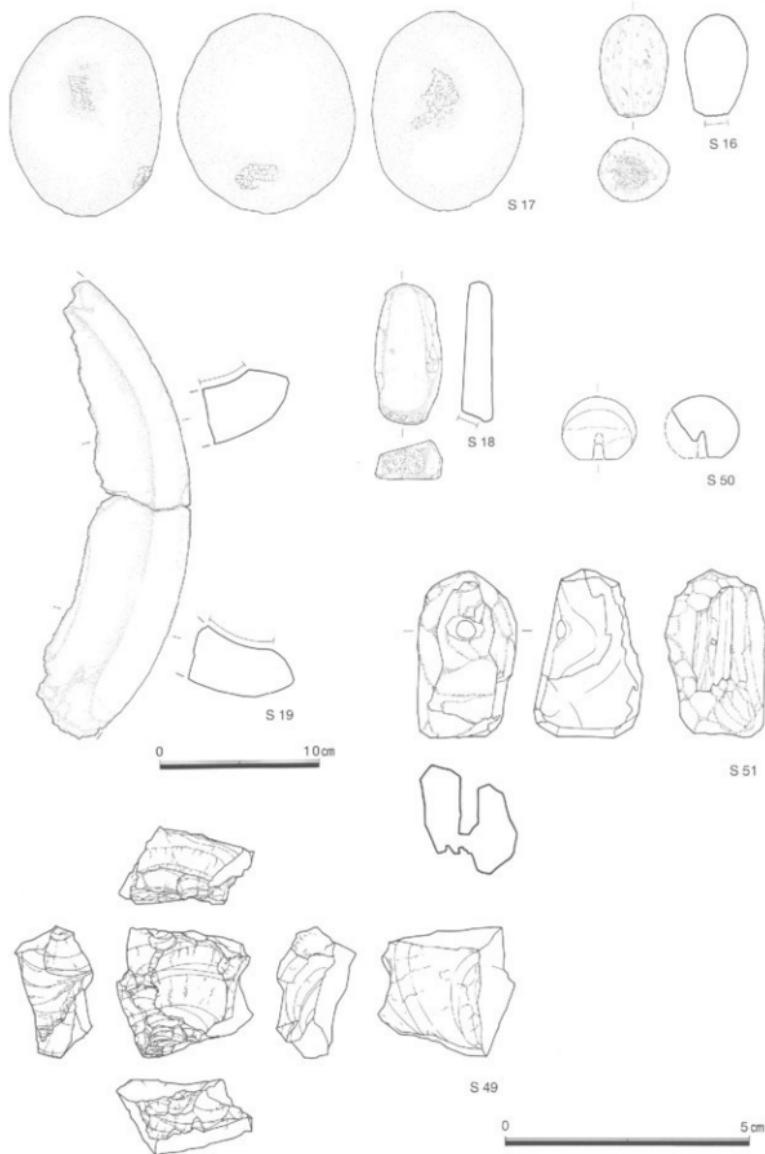
- (1) 石器・石製品全般について、当研究所富樫孝志調査研究員の指導を得た。
- (2) 石材鑑定は、S1～S7、S9～S49、S51については、静岡大学伊藤通玄名譽教授の御教示によるもので、S8とS50は、当研究所森嶋富士夫氏による。



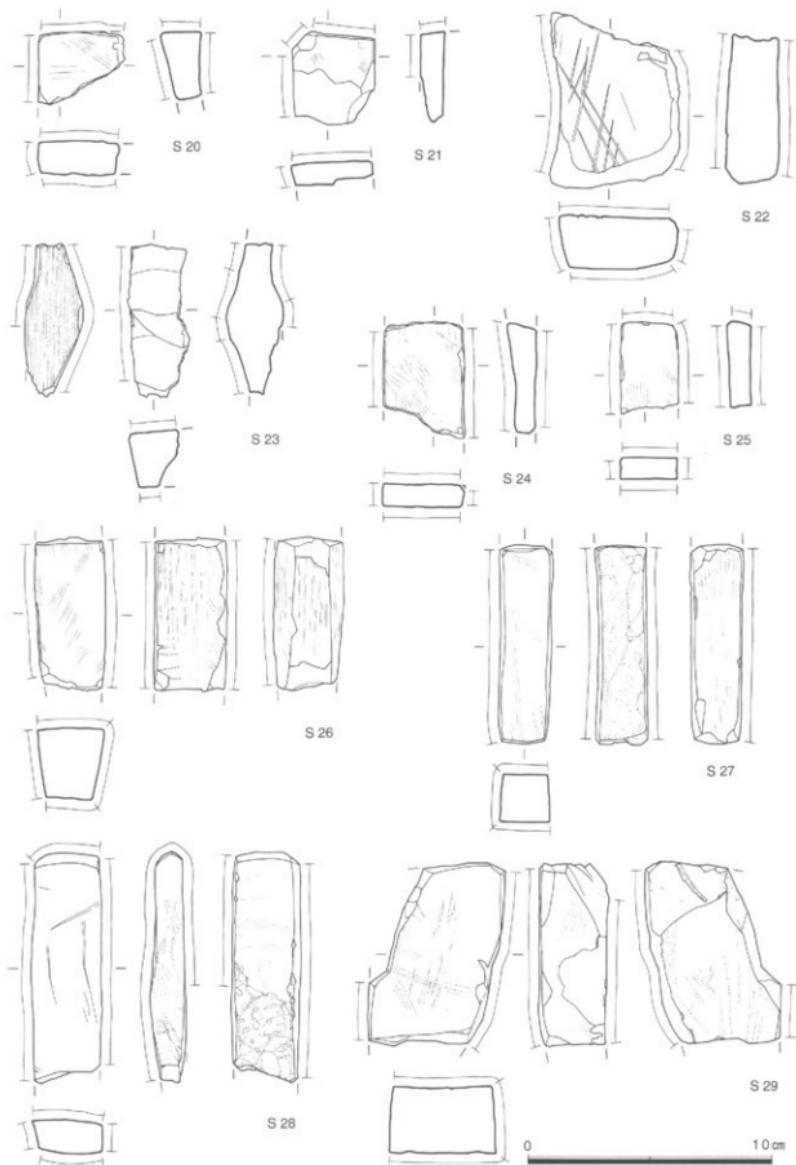
第80図 石器・石製品実測図1



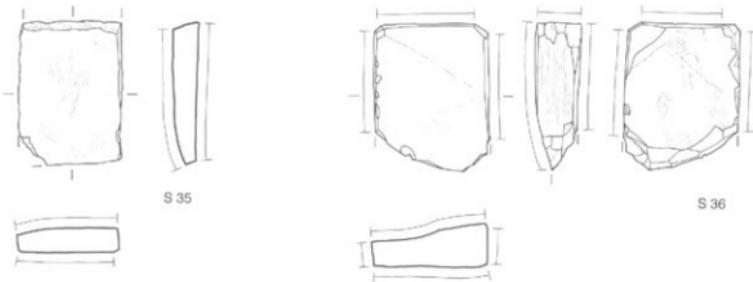
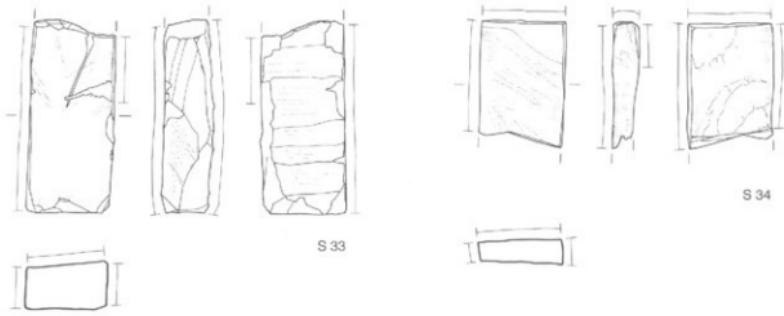
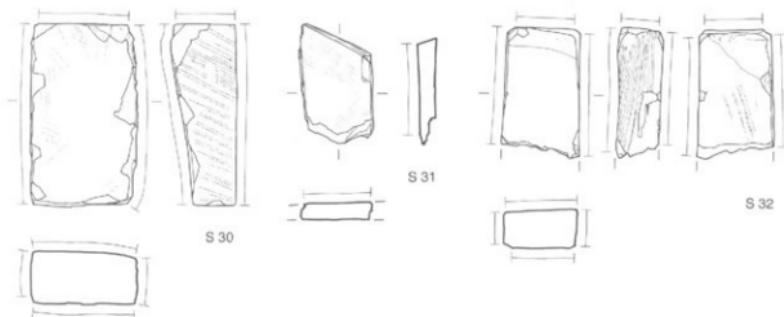
第81図 石器・石製品実測図2



第82図 石器・石製品実測図3

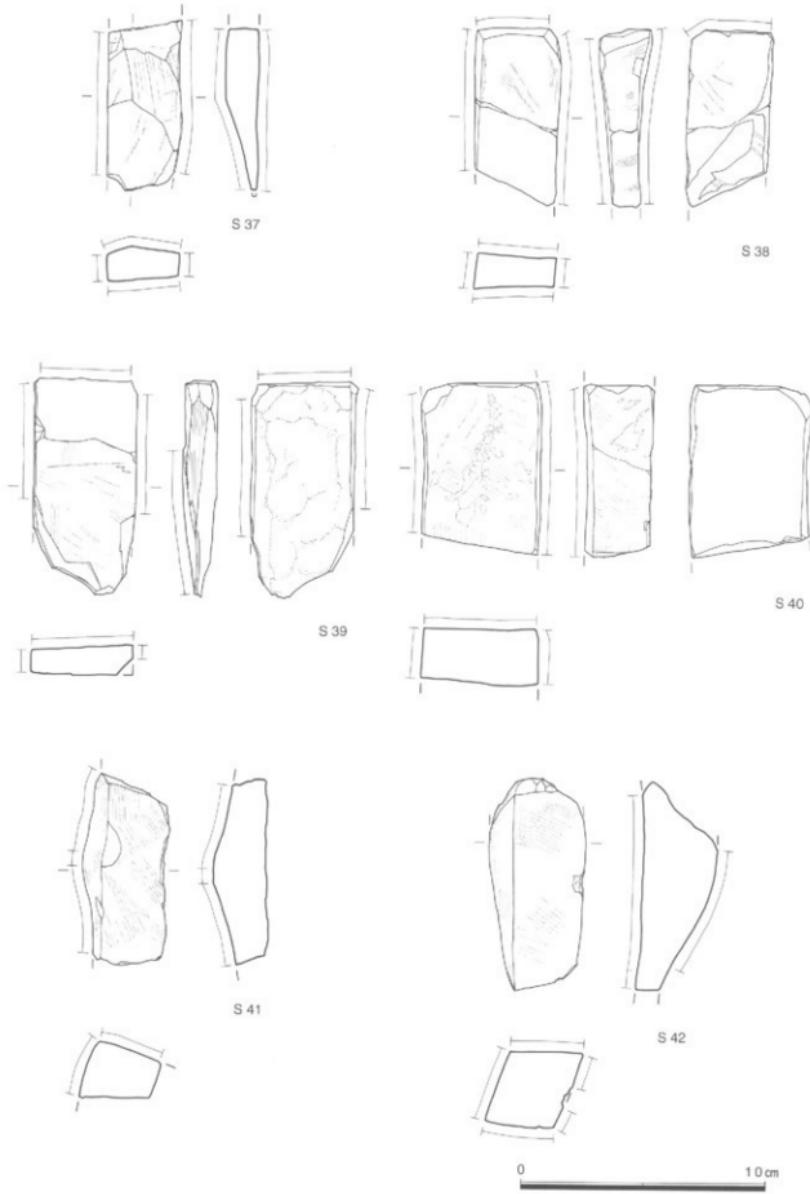


第83図 石器・石製品実測図4

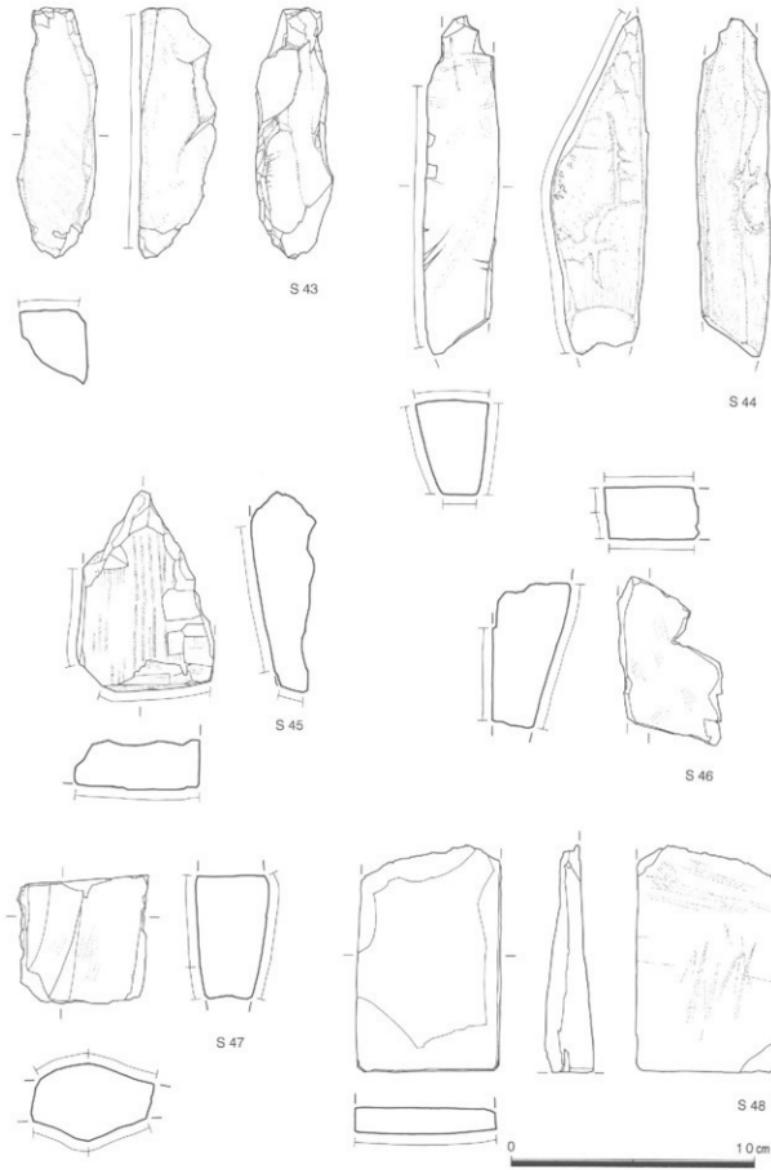


0 10 cm

第84図 石器・石製品実測図5



第85図 石器・石製品実測図6



第86図 石器・石製品実測図7

第23表 石器・石製品一覧表

番号	器種	調査区・グリッド	遺構・位置	最大長[m]	最大幅[m]	最大厚[m]	重量(t)	色調	材質	備考	博物館版	写真版
S1	ナイフ形石器	2 - 3 区・E - 20	S D23002	2.3	2.6	0.7	10.1	灰色	凝灰岩青泥片	二酸化マンガンで汚染	80	34
S2	打製石斧	1 区・E - 9	IV層	2.5	1.9	0.8	1.8	暗灰色	黒耀石	産地不明	II	II
S3	打製石斧	3 区・E - 27	IV層	1.9	1.4	0.4	0.6	暗オリーブ灰色	黒耀石	津津島産?	II	II
S4	打製石錐	3 区・G - 27	VI層	2.3	2.0	0.7	2.9	暗オリーブ灰色	黒耀石	柏崎産	II	II
S5	打製石斧	3 区・E - 28	II層	6.7	3.8	0.8	26.2	明黄色	凝灰岩青粘板岩	細粒	II	II
S6	削片	1 区・H - 9	Ⅲ層	6.3	4.5	2.0	63.6	灰黄色	玄武岩?		II	II
S7	磨製石斧	1 区・G - 10	VI層	2.7	1.5	0.2	0.8	灰色	粘板岩	良質	II	II
S8	用途不明品	2 - 3 区・E - 20	S D23002	0.5	0.5	0.5	0.3		綠玉髓		II	II
S9	閃石	1 区・F - 10	IV層	14.9	12.5	4.3	1021.1	灰白色	輝石安山岩		81	35
S10	閃石	3 区・F - 27	石積み遺構	13.1	11.4	6.4	1141.0	灰色	玄武岩	多孔質	II	II
S11	閃石	3 区・F - 27	石積み遺構	13.4	12.5	7.8	1989.2	灰色	玄武岩	やや多孔質	II	II
S12	閃石	3 区・F - 27	石積み遺構	14.8	11.9	5.0	1299.3	灰色	玄武岩黄安山岩		II	II
S13	閃石	3 区・D - 27	S X3041	18.3	14.8	6.7	2444.5	灰色	玄武岩	多孔質	II	II
S14	閃石	3 区・D - 27	Ⅲ層	34.8	28.8	12.0	15430.7	灰色	玄武岩	やや多孔質	II	II
S15	閃石	3 区・E - 28	Ⅲ層	8.4	5.3	3.1	166.9	灰色	輝石安山岩		II	II
S16	顯石	2 - 3 区・E - 20	II層	6.3	4.4	4.0	134.4	黃灰色	輝石安山岩		82	II
S17	顯石	3 区・F - 27	石積み遺構	12.5	11.2	9.5	1868.8	灰色	輝石安山岩		II	II
S18	顯石	3 区・F - 27	表表	8.6	4.2	2.4	135.6	灰色	細粒輝石安山岩		II	II
S19	石核	1 区・F - 27	石積み遺構	28.5	9.7	5.5	964.7	灰黄色	玄武岩	やや多孔質	II	II
S20	砾石	1 区・I - 12	IV層	3.0	3.5	1.7	21.5	灰黃褐色	流紋岩質凝灰岩		83	36
S21	砾石	1 区・G - 10	V層	3.8	3.4	1.0	17.2	にぼい褐色	流紋岩質凝灰岩	火を受ける	II	II
S22	砾石	1 区・G - 10	Ⅳ層	7.2	5.8	2.3	117.9	にぼい黄褐色	流紋岩質凝灰岩		II	II
S23	砾石	1 区・G - 12	IV層	6.3	2.4	2.4	34.3	褐色	流紋岩質凝灰岩		II	II
S24	砾石	2 - 1 区・E - 14	VI層	4.7	3.4	1.2	24.3	淡黄色	流紋岩質凝灰岩		II	II
S25	砾石	2 - 3 区・E - 21	S D23002	3.8	2.4	1.0	15.6	浅黄色	流紋岩質凝灰岩		II	II
S26	砾石	3 区・F - 28	石積み遺構	6.3	2.1	3.0	90.0	黃灰色	流紋岩質凝灰岩		II	II
S27	砾石	3 区・F - 28	石積み遺構	8.2	2.2	2.2	66.8	淡黃褐色	流紋岩質凝灰岩		II	II
S28	砾石	3 区・F - 27	石積み遺構	9.5	2.9	1.6	61.8	灰白色	流紋岩質凝灰岩		II	II
S29	砾石	3 区・G - 27	石積み遺構	7.5	5.1	2.8	182.2	にぼい黃褐色	流紋岩質凝灰岩		II	II
S30	砾石	3 区・D - 27	II層	7.5	4.4	2.7	145.7	明黄色	流紋岩質凝灰岩		84	II
S31	砾石	3 区・E - 28	II層	4.3	3.6	0.8	15.4	灰黄色	凝灰岩質粘板岩		II	II
S32	砾石	3 区・F - 28	VI層	5.3	3.2	1.9	54.6	にぼい褐色	流紋岩質凝灰岩		II	II
S33	砾石	3 区・F - 28	VI層	7.9	3.6	2.2	102.0	にぼい黃褐色	流紋岩質凝灰岩		II	II
S34	砾石	3 区・E - 27	VI層	5.2	3.5	1.1	30.8	にぼい黃褐色	凝灰岩質粘板岩		II	II
S35	砾石	3 区・E - 28	VI層	6.0	4.2	1.1	42.1	灰白色	流紋岩質凝灰岩	風化が少ない	II	II
S36	砾石	3 区・E - 28	VI層	6.1	5.2	2.0	89.8	にぼい黃褐色	細粒凝灰岩		II	II
S37	砾石	3 区・H - 25	VI層	7.1	3.1	1.4	39.2	にぼい黃褐色	赤色岩質凝灰岩		85	II
S38	砾石	3 区・G - 27	VI層	7.3	3.1	2.2	70.0	にぼい黃褐色	流紋岩質凝灰岩		II	II
S39	砾石	3 区・D - 28	VI層	8.9	4.2	1.4	65.9	灰黄色	流紋岩質凝灰岩		II	II
S40	砾石	3 区・D - 28	VI層	6.1	5.0	2.9	153.5	にぼい黃褐色	流紋岩質凝灰岩		II	II
S41	砾石	3 区・F - 27	VI層	7.9	3.3	2.3	69.3	にぼい褐色	流紋岩質凝灰岩	やや多孔質	II	II
S42	砾石	3 区・E - 26	VI層	8.8	3.0	3.2	106.8	灰白色	流紋岩質凝灰岩		II	II
S43	砾石	3 区・E - 28	VI層	10.3	3.2	3.2	124.9	灰色	玄武岩		86	II
S44	砾石	3 区・I - 25	VI層	13.9	3.1	3.9	190.4	煙色	流紋岩質凝灰岩		II	II
S45	砾石	3 区・F - 28	VI層	8.2	5.6	2.7	106.3	灰白色	流紋岩質凝灰岩		II	II
S46	砾石	3 区・G - 27	VI層	6.9	5.1	2.8	83.3	浅黃褐色	流紋岩質凝灰岩		II	II
S47	砾石	3 区・G - 27	VI層	5.3	5.4	3.2	110.3	灰白色	流紋岩質凝灰岩		II	II
S48	砾石	3 区・G - 27	VI層	9.2	5.9	2.0	118.6	灰色	凝灰岩質粘板岩		II	II
S49	火打ち石	1 区・F - 9	IV層	2.7	2.8	1.6	11.3	明黄色	瑪瑙		82	34
S50	用途不明品	3 区・F - 27	VI層	4.7	3.9		75.3	灰色	輝石安山岩	火を受ける	II	II
S51	用途不明品	1 区・G - 11	IV層	3.4	2.0	2.2	22.0	灰黃褐色	滑石		II	II

第V章 まとめ

1 はじめに

大平地区は、南端近くで水神平系の条痕文式の壺と弥生前期の遠賀川式の壺がセットで出土していて、弥生時代遺物包含地として「静岡県遺跡地名表」にも掲載されているが、本遺跡より北200m程の所で行われた昭和55年の国道246号線裾野バイパス建設時の調査においては、弥生時代の遺構は検出されず、弥生式土器が僅かに出土したのみで、遺跡からは、主に中近世の遺構・遺物が検出された。本遺跡においても、弥生時代の遺構は検出されず、弥生式土器の小破片が1点表採資料として検出されただけで、弥生時代の遺跡という性格は否定され、裾野バイパス建設時の調査結果と類似した中近世の遺構・遺物が検出された。その中で中世においては、中世墓・火葬施設が、近世においては、石敷遺構・石積み遺構・埴輪の可能性がある土坑が検出された。調査報告の最後にあたり、改めて遺跡を時代別に整理し、若干の考察を加えることでまとめとしたい。

2 中世の様相

当該期の様相は、調査区全域のIV層上面でみられた。集石墓、土坑、小穴、溝状遺構などの遺構群がそれであり、その中で2-1区を中心として展開している集石墓群（中世墓）は、本遺跡の主体をなすものである。中世墓は、2-1区より21基、3区より6基の合計27基が検出された。形態はすべて上部に集石を伴うものであると思われるが、一部集石が流失したものや調査時に除去してしまったものもあり、集石がそれほど元位置を留めていないことも考えられる。集石の下部構造は、土坑をもつものと小穴をもつものの2つがある。集石の平面形態は円形、橢円形、隅丸方形、不整形と様々であった。用いられた礫は、黄瀬川の河原石で、大きさは数cm～150cm前後で、20cm程度のものが中心である。径100cm以上の礫は、墓標として用いられた可能性も考えられる。縁石をもつと認めたものではなく、礫を方形あるいは長方形に全面に敷き詰めたものもない。礫は全面に敷き詰めるというよりも、数cmの間隔を開けて並べたような状況のもののが多かった。なお集石墓の分類基準については、P42を参照されたい。調査区全域で、集石墓III類が21基、集石墓V類が6基検出された。

埋葬については、1基から複数が認められたのは2-1区SX21011と3区SX3001の2基であった。SX21011は、集石下の土坑から検出された歯牙と火葬骨の鑑定結果（付録1・2参照）によると、火葬と土葬の両方が行われたようである。SX3001は、土葬による2遺体が埋葬されたようであるが、調査時に遺構を削平してしまって、全体のプランを把握できなかったので、断定はできない。中世墓と認定した他の25基は、火葬で、1基につき1ヶ所の埋葬と思われる。主体部の形態については、集石の下部に土坑を穿ち、火葬骨を納めたと思われるものが21基、集石の下部に小穴を穿ち、集石中もしくは小穴中に火葬骨を納めたものが3基である。

骨蔵器は、中世墓内および周辺からも使用したと思われる陶器の破片も出土しておらず、有機質の骨蔵器を使用した可能性も、土坑内や小穴内から出土した火葬骨が散乱して出土しているので低いと思われる。

次に中世墓の平面的配置や位置関係をみてみると、2-1区の第1段丘面に21基、第2段丘面に1基、3区に5基というように大きく3つにグルーピングできると思われる（第3図参照）。第1段丘面の20基はさくらに遺構の配置から2ヶ所に分けられる。まずD・E-11～13グリッドの17基のグループであるが、この中に人骨が遺存していた9基がD・E-11グリッドに集中している。ここは、調査区の北端にあたり、隣接する水田や町道部分にも中世墓が展開している可能性が高いように思われる。この地域では中

世の集石墓の検出例は少ないので、今後の町道部分の調査によって、新たな発見が確認できるかもしれない。もう一グループはF～H-12グリッドの4基で、すべて集石墓Ⅲ類であった。第2段丘面で検出された中世墓は、S X21375の1基のみで、やや中世墓として認定するには疑問が残る遺構である。3区で検出された5基は、遺構の配置から3区分できる。まず、E-28グリッドのS X3026・3037・3195の3基である。3基とも近接して検出された集石墓Ⅲ類である。他の2基はそれぞれ単独で検出された集石墓Ⅲ類である。

また、中世墓に関連する遺構として、3区で火葬施設と思われるS X3188が検出された。周囲に3基の集石墓も検出されており、この遺構で茶毬に付した後、遺骨を埋葬したのではないかと考えた。S X3188からは通風孔らしき痕跡は検出せず、深さも19cmと浅いので、棺や薪をある程度地表に露出させることによって火力を得る方法¹⁾をとっていたと考えられる。検出面直上で出土した5枚セットのかわらけは、15世紀後半から16世紀初頭のものと考えられ、手向けとして火葬施設としての機能を終えた段階で供献されたと思われる。他に2-1区で3基、3区で1基検出状況から火葬施設の可能性が考えられるものもあったが、それを裏付ける確たる遺物も出土せず、壁面も焼けていなかったので、不明遺構とした。

一方、横野バイパス建設時の調査や平野遺跡で土壤（土葬）墓として検出されたものと類似する土坑が30基検出されている。内訳は、座棺を埋葬したと考えられる円形もしくは不整円形のものが19基、隅丸方形のものが1基、土葬による屈葬が考えられる梢円形のものが10基である。しかし、すべての土坑で遺物の出土がなく、人骨も遺存していないことなど、土坑を墳墓として位置づける確たるものがないため、今回は性格の言及はできなかった。もし、この30基の土坑を墳墓とするならば、上記の集石墓と合わせると、黄瀬川河岸から河岸段丘上まで、一大墓地群が展開していたとも考えられる。

中世墓群の年代は、共作する土器・陶磁器が少なく、石塔も出土していないので、年代決定の決めてを欠く状況であるが、S X21016・S X21378・S X21382・S X3001から出土したかわらけが15世紀後半から16世紀初頭のものと考えられることや、S X21344で六道錢として副葬された永樂通寶（初鑄年代1408年）から、15世紀から16世紀初頭と考えた。

被葬者については、副葬品が少ないため推定の域をでないが、中世墓から出土した副葬品は、六道錢の他は若干のかわらけだけであるので、上層階級の墳墓とは考えられず、松井一明氏の指摘した在地の有力者層の中でも下位の者が²⁾、当該期の庶民の可能性が高いと思われる。

3 近世の様相について

当該期の様相は、1区と3区でみられた。1区ではIV・V層上面検出の遺構群が、江戸時代のものと思われるが、遺構から遺物が出土していないので、断定はできない。遺構は土坑、小穴、溝状遺構が主たるものである。残念ながら小穴の配列から建物の存在を認定するまでは至らなかった。3区では、IV層上面検出の遺構群が、江戸時代のものと思われる。出土遺物は15世紀代から19世紀代と年代幅が広いが、18世紀代のものが比較的多く、江戸時代中期に構築時期を求めることができるかもしれない。遺構は石敷遺構、石積み遺構、集石墓、土坑、小穴、溝状遺構が主たるものである。特に石敷遺構、石積み遺構は、墓域中に構築された墓道の可能性も考えられる。

また本遺跡からは、1区で1点、2-1区で1点、2-3区で2点、3区で10点の合計14点の馬齒が出土している。他の部位は検出されず、遺存状態も悪いもののが多かった。また、火葬されているものもなく、近世の包含層から検出されたものである。詳しい内容については付録1の鑑定結果を参照していただきたいが、検出された14点中若い馬（4才馬ぐらい）と思われるものが2点、老齢馬のものと思われるものが4点検出されていて、他の8点は小破片のため年齢等はわからなかった。

江戸時代の南一色における馬に関する記述は、例えば保有数については、「長泉町史上巻」によれば安永6（1777）年の村明細帳の中にあるとし、一色村では本百姓47人に対して馬保有が5頭というように少なく、さらに長泉地域の村々をみてても下土狩村の35頭を除けば、他村も10頭以下であり、一般普通農家では家畜を養うところまで及ばなかったのではないかと考えられるとしている。

その一方で馬に関する興味深い史料が江川文庫の中にあるので紹介したい。

乍今以書付奉願上候

駿州駿東郡木瀬川村名主仁右衛門并小前惣代源吉外老人、奉申上候私共村方之儀者、御料私領共高合三百廿三石余二而、木瀬川橋場より川上ニ堰場有之、字城ヶ坂与申其處ニ芝切場与、相唱候場所有之。近年木品盛木いたし、同所ニ馬繕場捨場等も有之、右者新田開発之節より被御差置候地ニ而近年右堰本田新田共用水ニ而、木瀬川筋之儀者御存与為在候通、川幅広ク堰場難渋ニ而出水之度々及破損候得者、御料私領ニ不抱百姓一伺欠付、右場所ニ而木品控木枝葉芝切取破損取繕方先前より仕入り候廻、……………奉申上候以上、

嘉永二酉年二月

駿州駿東郡木瀬川村 小前惣代源吉 同正 名主仁右衛門
並山御役所

これによれば、木瀬川村（現沼津市）の用水堰の芝切り場で土地争いが起こり、嘉永二（1849）年にその土地争いの証文が出された。この中に、木瀬川橋場から川上に堰場の字城ヶ坂という所が、馬繕場・馬捨場であったという記載がみられる。木瀬川橋は、旧東海道（現在の県道沼津・三島線）に架けられた橋で、旧大岡村と旧清水村を結ぶ架橋であった。沼津市内地域別小字名入略図⁽³⁾によると、大岡村側の小字は木瀬川橋の北が北川端で南が南川端である。そこから黄瀬川の西岸沿いに上流に遡っていくと、旧長泉村との境界に牧原という小字がみられる。しかし大岡村内に城ヶ坂という小字は確認できず、黄瀬川沿いをさらに北上し、旧長泉村の下長窪地区においては明治20年代作成の村絵図から、一色地区においては嘉永六年の検地帳から小字名を探しても、城ヶ坂という小字を確認することはできなかった。ただ下長窪地区的長久保城が位置したところが字城山とあるので、推定の域をでないが、城ヶ坂と関連があるかもしれない。しかし、もし城ヶ坂の地が本遺跡が立地している所とするならば、14点出土した馬齒は、処分（埋葬？）された馬のものと考えることも可能かもしれない。

おわりに

今回の調査は調査範囲も広く、一部層位的に複雑な箇所が見られたことや、検出された遺構からの遺物の出土が少ないとなどに起因して、遺構によっては、その年代や性格の解明に決め手を欠き、余り踏み込んで実像をつかむことができなかった。そんな中で、河岸段丘上に展開する中世墓群を検出できたことは特筆すべき点であり、今回の調査における最たる収穫の一つと言えよう。今後未賃收地域や隣接する町道部分の調査が進めば、本地域における中世墓群の全容が解明され、村落墓としての位置づけが可能となることを期待するところである。

註

- (1) 濱戸市埋蔵文化財センター 1997 『品野西遺跡』
- (2) 松井一明 1996 「副葬品のくみあわせ」『静岡県における中世墓』 静岡県考古学会
- (3) 沼津市教育委員会 1958～1961年 『沼津市内地域別小字名入略図』

引用・参考文献

- 長泉町教育委員会 1965 「長泉郷土誌」
- 長泉町・長泉町教育委員会 1992 「長泉町史 上・下巻」
- 裾野町教育委員会 1965 「裾野」
- 静岡県 1990 「静岡県史 考古編 I」
- 静岡県 1990 「静岡県史 考古編 II」
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1985 「茶木畠遺跡」
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1995 「下原遺跡 I」
- 長泉町他 1976 「陣場上・平畦遺跡」
- 長泉町他 1978 「西願寺遺跡（A地区） 長久保城址（二の丸）」
- 長泉町他 1982 「長久保城址（八幡曲輪・上野南・大水濠） 大平遺跡」
- 小野真一 1970 「駿東郡長泉町南一色出土の弥生式土器」『駿豆考古』第10号 駿豆考古学会
- 静岡同好通信社編 1973 「ふるさとの古城ものがたり（後編）」
- 静岡県教育委員会 1981 「静岡県の中世城館跡」
- 静岡県教育委員会 1987 「静岡県文化財地名表 I ~静岡市以東~」
- 佐藤久・町田洋編 1990 「総概地理学講座 6 地形学」 朝倉書店
- 武光誠 1996 「地名の由来を知る事典」 東京堂出版
- 静岡県考古学会 1996 「静岡県における中世墓」
- 磐田市教育委員会 1993 「一の谷中世墳墓群遺跡」
- 瀬戸市埋蔵文化財センター 1994 「東海の中世墓」
- 瀬戸市埋蔵文化財センター 1997 「品野西遺跡」
- 石井進・萩原三雄編 1993 「中世社会と墳墓」 名著出版
- 江戸遺跡研究会 1996 「江戸時代の墓と葬制」
- 山梨県教育委員会・山梨県土木部 1992 「塩川遺跡」
- 富士宮市教育委員会 1994 「猪之頭養鴨場内遺跡」
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1995 「石成遺跡」
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996 「保跡ヶ谷遺跡」
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996 「川田・藤藏沢遺跡」
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1997 「箕山城跡・箕山城内遺跡」
- 奈良県立橿原考古学研究所 1993 「鶴神遺跡 - 第2次～第4次調査 -」
- 辻真人 1989 「羽釜の変遷とその性質について」『文化財の保護』第21号 東京都教育委員会
- 中世土器研究会編 1995 「概説 中世の土器・陶磁器」 真陽社
- 浅野晴樹 1991 「東国における中世在地系土器について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第31集 国立歴史民俗博物館
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1991 「原川遺跡」 IV
- 莊山町教育委員会 1985 「御所之内遺跡発掘調査報告書 予備調査～第3次調査」
- 山口剛志 1991 「小田原城とその城下出土のかわらけについて」『小田原市郷土文化館研究報告』 No.27 小田原市郷土文化館
- 諏訪問順 1996 「小田原出土の中・近世陶磁器」『貿易陶磁研究』No.16 日本貿易陶磁研究会

- 東京都建設局新宿区内藤町遺跡調査会 1992 「内藤町遺跡」
- 日本福祉大学知多半島総合研究所 1994 「中世常滑焼をおとつ。資料集」
- 瀬戸市埋蔵文化財センター 1996 「古瀬戸をめぐる中世陶器の世界～その生産と流通～」
- 瀬戸市埋蔵文化財センター 1997 「瀬戸・美濃系大窯とその周辺～大窯生産の成立と展開～」
- 井上喜久男 1990 「尾張陶磁？－近世初期の瀬戸物生産－」『愛知県陶磁資料館研究紀要』 9
愛知県陶磁資料館
- 瀬戸市歴史民俗資料館 1987 「研究紀要」 VI
- 瀬戸市歴史民俗資料館 1988 「研究紀要」 VII
- 瀬戸市歴史民俗資料館 1989 「研究紀要」 VIII
- 足立順司 1994 「消費地出土の初山・志山・呂焼」『地域と考古学』
- 大橋康二 1988 「考古学ライブラリー55 肥前陶磁」 ニューサイエンス社
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1984 「国内出土の肥前陶磁」
- 中野晴久 1986 「近世常滑焼における壺の編年的研究ノート」『常滑市民俗資料館研究紀要』 II
常滑市教育委員会
- 扇浦正義 1987 「常滑大臺灣の編年的研究」『自證院遺跡』 東京都新宿区教育委員会
- 江戸遺跡研究会 1992 「江戸の食文化」 吉川弘文館
- 横田賢二郎・森田勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について 一型式分類と編年を中心としてー」
『九州歴史資料館研究論集』 4 九州歴史資料館
- 森田勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と年代」『貿易陶磁研究』 No.2 日本貿易陶磁研究会
- 横田賢二郎・森本朝子・山本信夫 1989 「新安沈船と太宰府・博多の貿易陶磁器 一森田勉氏の研究
成果に寄せてー」『貿易陶磁研究』 No.9 日本貿易陶磁研究会
- 小野正敏 1982 「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』 No.2 日本貿易陶磁研究会
- 小野正敏 1985 「出土陶磁よりみた15・16世紀における画期の素描」『MUSEUM』 No.416
東京国立博物館
- 太宰府市教育委員会 1984 「太宰府条防跡III 太宰府市の文化財」第8集
- 窪田藏郎 1983 「考古学ライブラリー15 製鉄遺跡」 ニューサイエンス社
- 坂本美夫 1985 「考古学ライブラリー34 馬具」 ニューサイエンス社
- 後藤守一 1941 「上古時代鐵鎌の年代研究」『日本古代文化研究』 河出書房
- 飯塚武司 1987 「後期古墳出土の鐵鎌について」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』 V
東京都埋蔵文化財センター
- 金箱文夫 1984 「近世の釘」『物質文化』43号 物質文化研究会
- 青森県教育委員会 1979 「碇ヶ関村古館遺跡」
- 古泉弘 1985 「江戸の街の出土遺物—その展望—」『季刊考古学』第13号 雄山閣出版
- 都立一橋高校内遺跡調査団 1976 「江戸・都立一橋高校地点発掘調査報告」
- 三島市教育委員会 1985 「史跡 山中城跡」
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990 「鉄砲玉の化学的分析を通じた一視点 一県内出土鉄砲玉の諸相ー」
『研究紀要』 - 7 -
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996 「水井遺跡・清水遺跡」
- 鈴木公雄 1988 「出土六道錢の組合せからみた江戸時代の銅錢流通」『社会経済史学』第53卷第6号
- 鈴木公雄 1993 「多数の錢貨を有する六道錢について」『史学』第62卷第3号

- 足立順司 1997 「東海道－宿場と問宿の出土銭」『近世の出土銭Ⅰ』 兵庫県埋蔵銭調査会
- 加藤晋平・鶴丸俊明 1980 「図録石器の基礎知識Ⅰ 先土器（上）」 柏書房
- 町田勝則 1996 「石器の研究法－報告文作成に伴う観察・記録法①－」『長野県埋蔵文化財センター研究論集Ⅰ』 長野県埋蔵文化財センター
- 野村一敏 1987 「研究ノート・凹石研究のために(1)－学史－」『長野県埋蔵文化財センター紀要1』 長野県埋蔵文化財センター
- 鈴木道之助 1981 「図録石器の基礎知識Ⅲ 縄文」 柏書房
- 平井勝 1991 「考古学ライブライマーク64 弥生時代の石器」 ニューサイエンス社
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1992 「川合遺跡 遺物編2」
- 若林淳之・小和田哲男・杉山元衛編 1987 「静岡県地名大辞典」 角川書店
- 沼津市教育委員会 1958～1961 「沼津市内地域別小字名入略図」『沼津市誌』

付編1 大平遺跡出土の動物遺体について

金子浩昌

1 動物遺体種名表

脊椎動物門 Phylum VERTEBRATA
哺乳綱 Class Mammalia
靈長目 Order Primates
ヒト科 Family Hominidae
ヒト Homo sapiens
奇蹄目 Order Perissodactyla
ウマ科 Family Equidae
ウマ Equus caballus
偶蹄目 Order Artiodactyla
ウシ科 Family Bovidae
ウシ Bos taurus

2 出土動物遺体の概要

① ヒト Homo sapiens

大平遺跡出土の人骨は、ほとんどが細かく碎かれた状態での出土なので、性別・年齢・死因等を判別するのは困難であり、個々の所見もあくまで可能性であることをお断りしておきたい。

NB-28……2-1区S X21011から出土した青年と思われる火葬骨の頭骨片(頭頂骨片を含む)である。

NB-88……2-1区S X21016から出土した火葬骨である。肩甲骨、上腕骨、頭骨などを含んでいる。

NB-90……2-1区S X21345から出土した火葬骨である。四肢骨を中心とした破片で、わずかに肋骨片を含む。

NB-101……2-1区S X21361から出土した火葬骨である。焼けて小さくなっているかと思われるが、非常にきゃしゃなので、女性の橈骨片と思われる。

NB-23①……2-1区E-12グリッドVI層で検出した火葬骨片である。部位は不明である。

NB-8……3区S X3192から出土した火葬骨である。頭骨を中心とした骨で、一部四肢骨が混じる。

成人のものと思われるが、あまり年はとっていないと思われる。

NB-31……3区S X3043から出土した火葬骨で、四肢骨片の可能性が高い。

② ウマ Equus caballus

NB-16……1区D-10グリッドのIV層で検出した上顎臼歯である。2個分位有ると思われるが、破損している部位などは不明である。おそらく後臼歯と思われる。歯冠高70mmのやや若い個体である。

NB-23②……2-1区E-12グリッドのVI層で検出した上顎臼歯片である。歯冠高は不明である。

NB-20……2-3区E-20グリッドで検出した頬側の一部を残す破片である。歯冠はなお高かったことが予想される若い個体であったろう。M₂の可能性がある。

NB-21……2-3区F-20グリッドで検出した2ないし3個の下顎臼歯と上顎歯が混在する。保存が

同程度であるので、同一個体の歯ではないかと思われる。歯冠は30mm程度残すのみである。

NB-1……3区E-27グリッドの石敷遺構から検出した上顎臼歯片と思われる。頬側の一部を残し、咬面が欠けるが歯冠は高かったように思われる。

NB-2……3区F-27グリッドのIV層から検出した、破損した上顎臼歯片である。歯冠高30mm位と思われ、老齢馬である。

NB-3……3区F-27グリッドのIV層から検出した下顎臼歯片と思われるが、破損がひどくて断定はできない。ただし歯冠は高くない老齢馬と思われる。

NB-4……3区E-28グリッドのIV層から検出した上顎臼歯片である。

LM₃の頬側を残す破片で、歯冠現高30.0mmであり、かなり咬耗した歯で老齢馬である。

NB-6……3区E-28グリッドのIV層から検出した小さく割れた臼歯片である。

NB-7……3区E-28グリッドのIV層から検出した細かく割れた臼歯片である。

NB-11……3区G-27グリッドのVI層から検出した小さく割れた臼歯片である。

NB-14……3区G-27グリッドの石積み遺構から検出した上顎臼歯片(LP₂)である。左側最前部の臼歯で、歯冠はすでに20.0mmという低さなので、老齢馬である。

NB-17……3区F-27グリッドの石積み遺構から検出した下顎臼歯片である。歯冠は現高で30mm足らずである。破損して、咬面の様子が明らかでないが、原状が残されているとすれば老齢馬である。

NB-32……3区E-28グリッドのSX3043から検出した下顎RM₂である。頬側の一部を欠損するが、現存高が75.0mmで、若い個体といえよう。

③ ウシ *Bos taurus*

NB-19……1区I-9グリッドのIV層から検出した上顎臼歯片である。部位等は不明である。

3 大平遺跡の人と牛馬の遺体

① 人骨

鑑定した人骨は火葬されたもので、強い火力によって焼かれ灰白色を呈していた。それぞれの地点で出土した骨は、骨のごく一部で、火葬にされた後に、頭骨、四肢骨のうちごく一部が運ばれたものと思われる。当時の火葬骨の扱い方を知る資料といえよう。ただし、火葬骨が出土したSX21011から検出された11個の歯は、土葬骨の可能性が高いと思われる。

② ウマヒウシ

歯が残されていたが、ウマの歯が大部分であった。歯から推定される年齢は7~8才位が多いが、中にはそれ以上の年齢の個体もみられた。

ウマがウシに比べて多いのは、東日本の特徴のようである。これまで知られたこの地方の遺跡からの出土例も同様であった。

付編2 大平遺跡出土の歯牙について

浜松医科大学法医学教室

1 概要

大平遺跡で検出された歯牙は、2～1区SX21011と3区SX3001の中世墓と思われる2基の遺構から出土したものである。検出された歯牙88点は、損壊が著しく、判定が困難なものが多かったが、NB33～NB43の11個の歯は遺存状態が比較的よかつた。歯牙の推定箇所、推定年齢、推定性別等は表1～表4に示した。なお2基の遺構とも複数個体が埋葬された可能性が高いが、検出した墓における埋葬型式や埋葬の順序および歯牙相互の血縁的関係などは不明である。

2 検査結果

表1 NB-12群の歯牙 (SX3001)

	歯の推定箇所	推定年齢	推定性別	参考
①	左上第1大臼歯	20歳前後の可能性大	女性の可能性大	咬耗が比較的少ない
②	右下第3大臼歯	〃	〃	〃
③	右上第1大臼歯	〃	〃	①と③は左右対象の可能性大
④	損壊著しく判定困難	損壊著しく判定困難	損壊著しく判定困難	
⑤	〃	〃	〃	
⑥	〃	〃	〃	
⑦	右下側切歯	5～10歳の子供の可能性大	不 明	咬耗が比較的少ない
⑧	右下中切歯	〃	〃	〃

58片ある歯牙中、判定可能なものは5片であった。少なくとも内3片は20歳前後の女性の可能性が高く、2片は5～10歳程の子供の可能性が高いので、SX3001は2個体が埋葬された土葬墓と考えられる。

表2 NB-12'群の歯牙 (SX3001)

	歯の推定箇所	推定年齢	推定性別	参考
①	大臼歯	不 明	不 明	損壊高度のため判定不可能
②	右下犬歯	不 明	不 明	咬耗が比較的少ない

2片の歯牙は、大臼歯と右下犬歯と推定されるが、年齢、性別等は判別できない。

表3 NB-30群の歯牙 (S X 21011)

	歯の推定箇所	推定年齢	推定性別
①	左下第2大臼歯	成人の可能性大	男性の可能性大
②	左下第1大臼歯	〃	〃
③	右上第1または第2大臼歯	〃	〃
④	左上第1または第2小臼歯	〃	〃
⑤	左下第1または第2小白歯	〃	〃
⑥	右上側切歯	〃	〃

N B-30群は18片の歯牙からなり、このうち判別可能なものが6点あった。この6点は咬耗が同様に高度で、歯冠の丸味が少なく、成人男子の同一個体のものである可能性が高い。

表4 NB33～NB43の歯 (S X 21011)

番号	歯の推定箇所	推定年齢	推定性別	参考
N B-33	左上第3大臼歯	成人の可能性大	不明	現代人にこの形はあまりない。咬耗が少ないため、萌出したばかりか、萌出前である。
N B-34	右下第1, 第2, 第3大臼歯のどれか	青年の可能性大	不明	咬耗が少ない
N B-35	右上犬歯	少年～青年の可能性大	男性の可能性	咬耗が少ないので、萌出したばかりか、萌出前の可能性大。
N B-36	左上第1小白歯	成人の比較的若い方	不明	咬耗が比較的みられる。
N B-37	左上第2小白歯	〃	不明	咬耗がほんの少しみられる。N B-36と同一人物の可能性大。
N B-38	右上第1大臼歯	成人	男性の可能性	咬耗が強いため、第1大臼歯の可能性が強い。
N B-39	右上第2大臼歯	〃	〃	全体的に咬耗がみられる。N B-38と同一人物の可能性大。
N B-40	右上第3大臼歯	〃	〃	咬耗が少ない。発達隆起がN B-33と似ていて左右対象の可能性大。
N B-41	右下第1大臼歯	〃	〃	全体的に咬耗がみられる。N B-38, N B-39と同一人物の可能性大。歯冠の舌側にう歯があった可能性が大で、そのため損壊していると思われる。
N B-42	右下第2大臼歯	〃	〃	N B-41より咬耗度は弱いが、全体的に咬耗している。N B-38, N B-39, N B-41と同一人物の可能性大。
N B-43	右下第3大臼歯	〃	〃	咬耗が比較的少ない。

N B-33～N B-43の11個の歯は、同一個体のものと思われるものが多々認められ、15～20歳程度の性別不明の青年と成人の男性が含まれている可能性が高く、S X 21011は少なくとも2個体埋葬された土葬墓と思われる。

付編3 大平遺跡出土炭化材の樹種同定

株式会社 古環境研究所

1. 試料

樹種同定の試料は、中世の火葬墓、土葬墓に関する炭化材8点である（表1）。

表1 大平遺跡出土炭化材

試 料	遺物番号	遺構番号
試 料 1	N-10	S X21123
試 料 2	N-17	S X21123
試 料 3	N-7	S X21016
試 料 4	N-9 (2)	S X21011
試 料 5	N-15	S X21196
試 料 6	N-21	S X21344
試 料 7	N-18	S X21361
試 料 8	N-3	石積み遺構

2. 方法

試料を割折して、新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、落射顕微鏡によって75~750倍で観察した。樹種同定は、試料標本をその解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

3. 結果

8点の炭化材より、6の種類と散孔材1点が同定された。同定の結果を表2に示し、巻末に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定の根本となった特徴を記す。

表2 大平遺跡出土炭化材の樹種同定結果一覧表

試 料	樹 樹 (和 名 / 学 名)
試 料 1	コナラ属クヌギ節 <i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>
試 料 2	コナラ属クヌギ節 <i>Quercus</i> sect. <i>Aegilops</i>
試 料 3	グミ属 <i>Elaeagnus</i>
試 料 4	散孔材 diffuse-porous wood
試 料 5	コナラ属アカガシ亜属 <i>Quersus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>
試 料 6	クマシデ属イヌシデ節 <i>Carpinus</i> sect. <i>Carpinus</i>
試 料 7	スギ <i>Cryptomeria japonica</i> D.Don
試 料 8	マツ属複維管束亞属 <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxyion</i>

a. マツ属複維管束亞属 *Pinus* subgen. *Diploxyion* マツ科

図版1

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り扱むエビセリウ細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急で、垂直樹脂道が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸齒状肥厚が存在する。
接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。
以上の形質より、マツ属複維管束亞属に同定される。マツ属複維管束亞属にはクロマツとアカマツがあり、放射仮道管内壁の鋸齒状肥厚の程度で同定できるが、本試料は炭化により鋸齒状肥厚がはく落している部分が多く、十分な観察ができなかつた為、マツ属複維管束亞属とした。

b. スギ *Cryptomeria japonica* D.Don スギ科

図版2

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。
接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高以下のものが多い。樹脂細胞が存在する。以上の形質より、スギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ40cm、径2cmに達する。材は軽軟であるが強韌で、広く用いられる。

c. クマシデ属イヌシデ節 *Carpinus* sect *Carpinus* カバノキ科

図版3

横断面：小型で丸い道管が、単独あるいは数個放射方向に複合し、全体として放射方向に配列する放射孔材である。集合放射組織が見られる。

放射断面：道管の穿孔は、單穿孔である。放射組織は同性である。

接線断面：放射組織は、同性で1～3細胞幅のものと、集合放射組織からなる。

以上の形質より、クマシデ属イヌシデ節に同定される。クマシデ属イヌシデ節は落葉の中高木で、北海道、本州、四国、九州の山野に分布する。

d. コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen *Cyclobalanopsis* ブナ科

図版4

横断面：中型から大型の道管が、1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質より、コナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30cm、径1.5cmに達する。材は堅硬で強韌、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

e. コナラ属クヌギ節 *Quercus* sect *Aegilops* ブナ科

図版5

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1～数列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管が、単独およそ放射方向に配列する。早材から晩材にかけて道管の直径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は平伏細胞である。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質より、コナラ属クヌギ節に同定される。コナラ属クヌギ節にはクヌギ、アベマキなどがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15cm、径60cmに達する。材は強韌で弾力に富み、器具、農具などに用いられる。

f. グミ属 *Elaeagnus* グミ科

図版 6

横断面：年輪のはじめにやや小形でまるい道管が1列に並ぶ環孔材である。晩材部では小型でまるい道管が散在する。早材から晩材にかけて道管の径はやや減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で放射組織は同性に近い異性である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、6~8細胞幅である。

以上の形質より、グミ属に同定される。グミ属にはアキグミ、ハコネグミ、ナツグミなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉または常緑の小高木である。

g. 散孔材 diffuse-porous wood

横断面：小型の道管が散在する。

放射断面：道管と放射組織が存在することが確認できた。

接線断面：放射組織が存在することが確認できた。

以上の形質より、散孔材に同定される。なお本試料は、保存状態が悪く広範囲の観察が困難な為、散孔材の同定にとどまる。

4. 所見

同定された樹種は、マツ属複維管束亞属、スギ、クマシデ属イヌシデ節、コナラ属クヌギ節、コナラ属アカガシ亜属、グミ属であった。いずれも温帯域に生育する大木で、高木から中低木まであり、周囲に生育していた樹木に起源する炭化材と考えられる。

参考文献

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p 20-48

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p 49-100

大平遺跡出土炭化材の顕微鏡写真 I



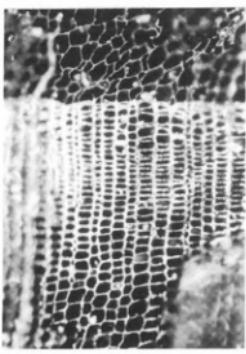
横断面 : 0.4mm
1. 試料 8 マツ属複雑管束亞属



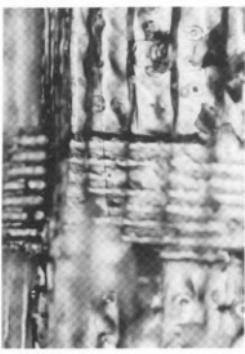
放射断面 : 0.04mm



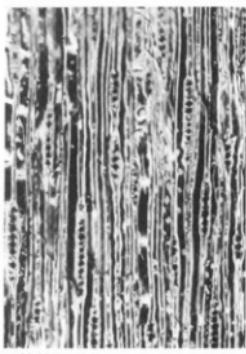
接線断面 : 0.2mm



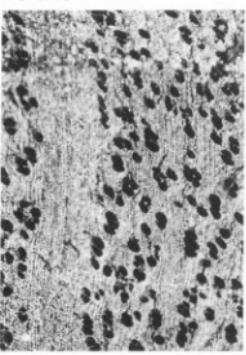
横断面 : 0.2mm
2. 試料 7 スギ



放射断面 : 0.1mm



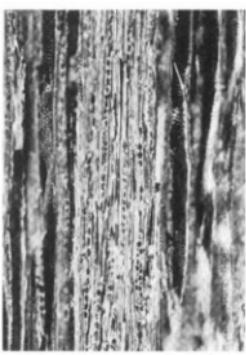
接線断面 : 0.2mm



横断面 : 0.4mm
3. 試料 6 クマシデ属イヌシデ節

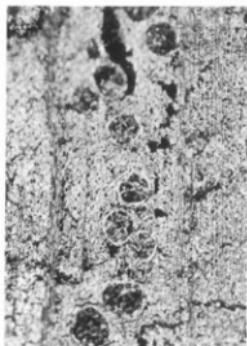


放射断面 : 0.1mm



接線断面 : 0.2mm

大平遺跡出土炭化材の顕微鏡写真 II



横断面—— : 0.4mm

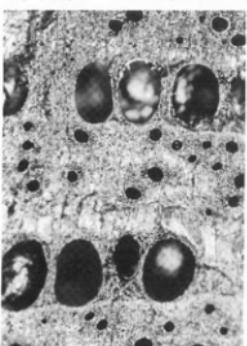


放射断面—— : 0.2mm



接線断面—— : 0.2mm

4. 試料 5 コナラ属アカガシ亜属



横断面—— : 0.4mm

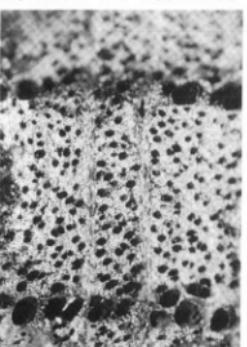


放射断面—— : 0.2mm



接線断面—— : 0.2mm

5. 試料 2 コナラ属クヌギ節



横断面—— : 0.4mm



放射断面—— : 0.2mm



接線断面—— : 0.2mm

6. 試料 3 グミ属

写真図版



1. 2-1区 調査前風景（東から）



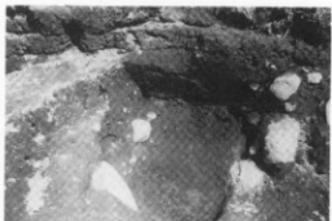
2. 3区 調査前風景（南から）

図版 2



1. 1区 IV層上面土坑群（北から）

2. 1区 IV層出土状況



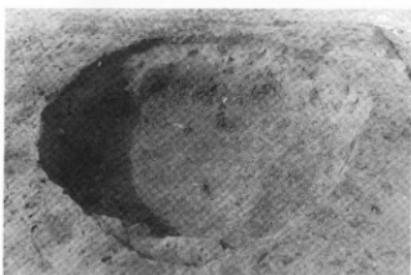
3. 土坑SF1012完掘状況（北西から）



4. 土坑SF1008検出状況（北から）



5. 土坑SF1008完掘状況（北東から）



6. 土坑SF1024完掘状況（南から）



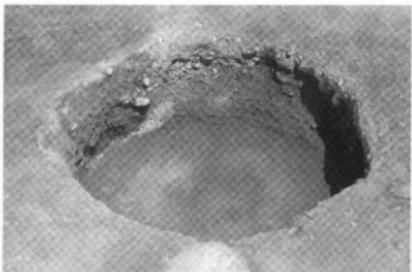
7. 土坑SF1079完掘状況（南から）



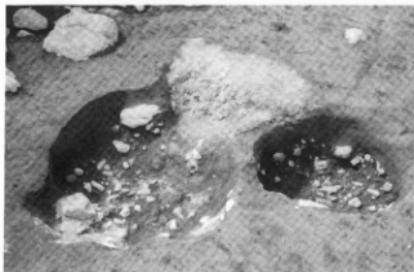
1. 1区 V層上面全景（南西から）



2. 土坑SF1047完掘状況（南西から）



3. 土坑SF1082完掘状況（北西から）



4. 土坑SF1044・1092完掘状況（北から）



5. 土坑SF1087完掘状況（東から）

図版 4



1. 溝状遺構SD1065完掘状況



2. 溝状遺構SD1102完掘状況



1. 1区 VII層上面全景（南西から）



2. 1区 VII層上面（南東部）

図版 6



1. 2-1区 VII層上面全景（南東から）



2. 2-1区 第1段丘面（北から）



1. 中世墓SX21011検出状況（東から）



2. 中世墓SX21011内 齒出土状況

図版 8



1. 中世墓SX21016・21378・21382検出状況（北東から）



2. 中世墓SX21016・21378・21382完掘状況（東から）



1. 中世墓SX21016内 人骨出土状況



2. 中世墓SX21361検出状況（東から）



3. 中世墓SX2136内 人骨出土状況



4. 中世墓SX21361完掘状況（西から）



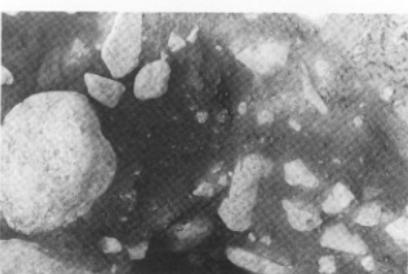
5. 中世墓SX21344検出状況（東から）



6. 中世墓SX21344内 銭貨出土状況



7. 中世墓SX21344内 人骨出土状況

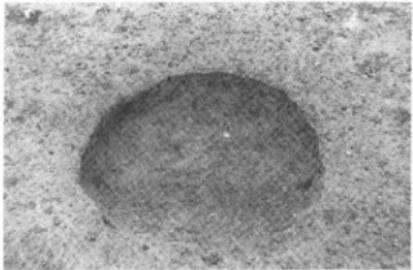


8. 中世墓SX21385内 人骨出土状況

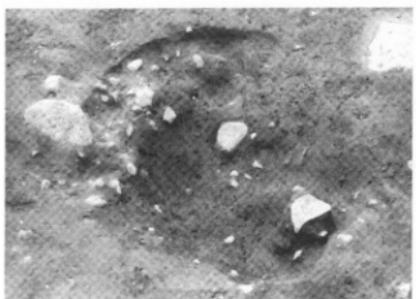
図版10



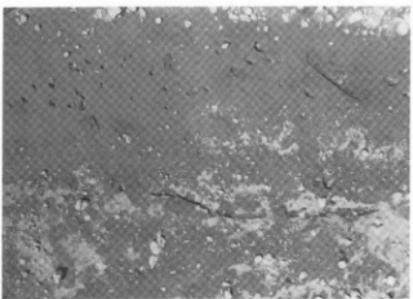
1. SX21022完掘状況（北東から）



2. SF21104完掘状況（東から）



3. SX21059完掘状況（北東から）



4. 第1河道跡土坑・小穴群（空中写真）



5. 不明遺構SX21123検出状況（南西から）



6. 不明遺構SX21123完掘状況（西から）



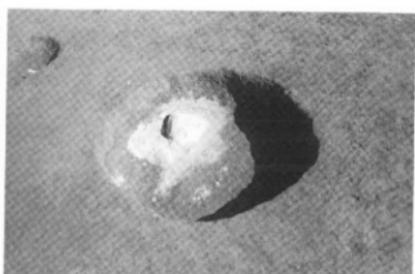
1. 不明遺構SX21196完掘状況（東から）



2. SX21190完掘状況（南東から）



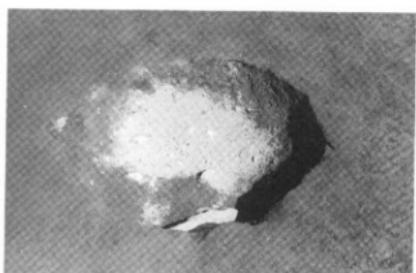
3. SF21223完掘状況（南から）



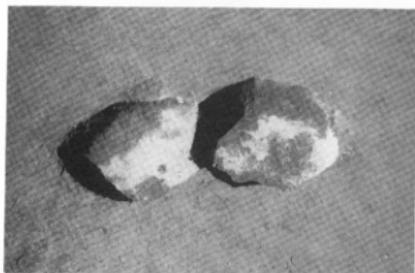
4. SF21235完掘状況（南東から）



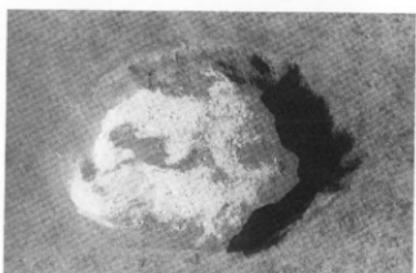
5. SF21271完掘状況（南東から）



6. SF21248完掘状況（南東から）

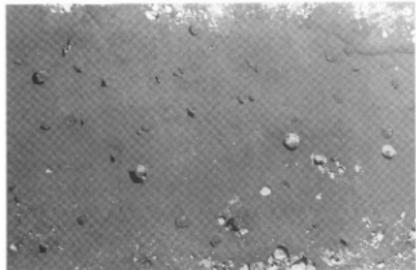


7. SF21246・21247完掘状況（東から）

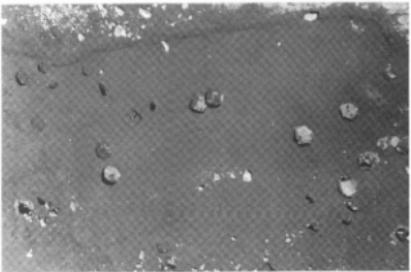


8. SF21249完掘状況（南から）

図版12



1. 第2河道跡土坑群 その1（空中写真）



2. 第2河道跡土坑群 その2（空中写真）



3. 不明遺構SX21381検出状況（北西から）



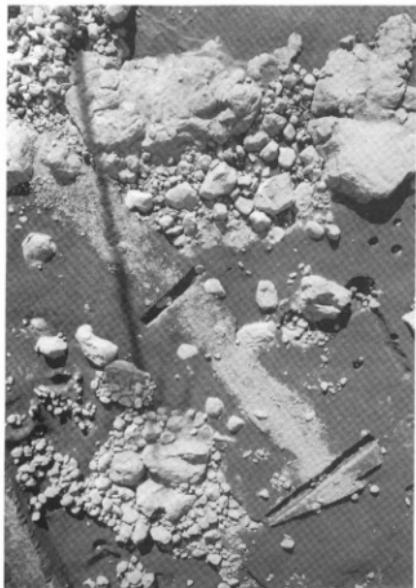
4. 不明遺構SX21381完掘状況（北西から）



5. 溝状遺構SD23002完掘状況（西から）



6. 溝状遺構SD23009完掘状況（東から）



1. 石敷遺構検出状況（空中写真）



2. 石敷遺構完掘状況（南から）



3. 石積み遺構検出状況 その1（空中写真）



4. 石積み遺構検出状況 その2（南から）

図版14



1. 石積み遺構検出状況 その3（南から）



2. 石積み遺構検出状況 その4（南から）



3. 石積み遺構完掘状況 その1（南から）



4. 石積み遺構完掘状況 その2（北から）



1. 集石墓SX3191検出状況（東から）



2. 陶器片集中遺構SX3194検出状況（南から）

図版16



1. 不明遺構SX3002・3003検出状況（北から）



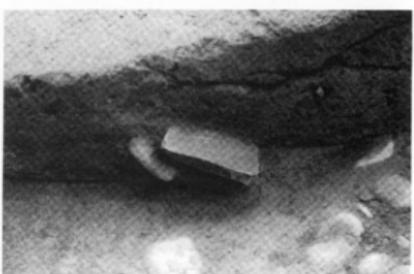
2. 石積み遺構内 陶器出土状況



3. 不明遺構SX3002内 土器・陶器出土状況



4. 不明遺構SX3002内 炭化物検出状況



5. 不明遺構SX3002内 陶器出土状況



1. 集石墓SX3043検出状況（北から）



2. 集石墓SX3043完掘状況（南東から）

図版18



1. 3区 VII層上面全景（北から）



2. 不明遺構SX3041検出状況（南西から）



1. 中世墓SX3192完掘状況（石除去前）



2. 中世墓SX3192完掘状況（石除去後）

図版20



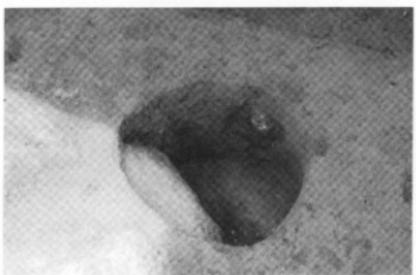
1. 中世墓SX3026・3037・3195 火葬施設 SX3188検出状況（東から）



2. SX3188内 土器出土状況



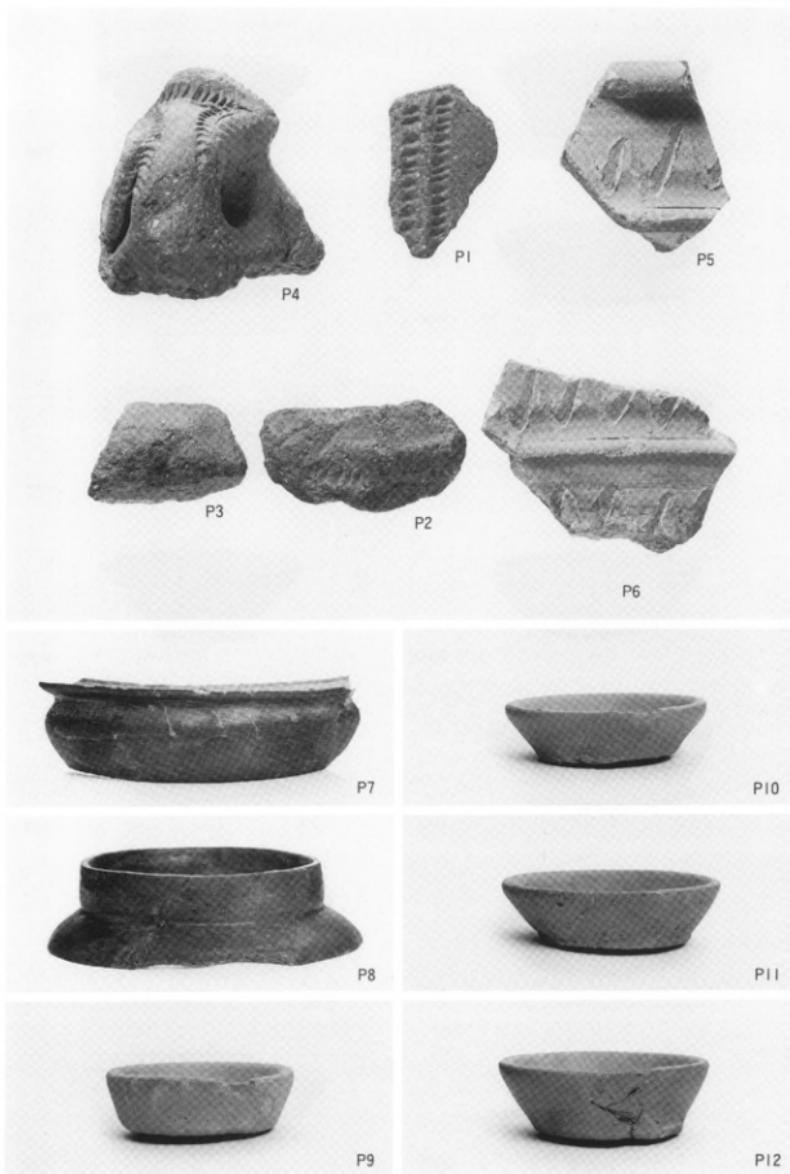
3. 中世墓SX3001内土器出土状況



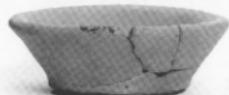
4. 小穴SP3018内 銭貨出土状況



5. 小穴SP3011内 銭貨出土状況



出土土器(1)



P13



P20



P14



P21



P15



P22



P16



P23



P17



P24



P18



P25



P19



P26



P27



P34



P28



P35



P29



P36



P30



P37



P31



P32



P38



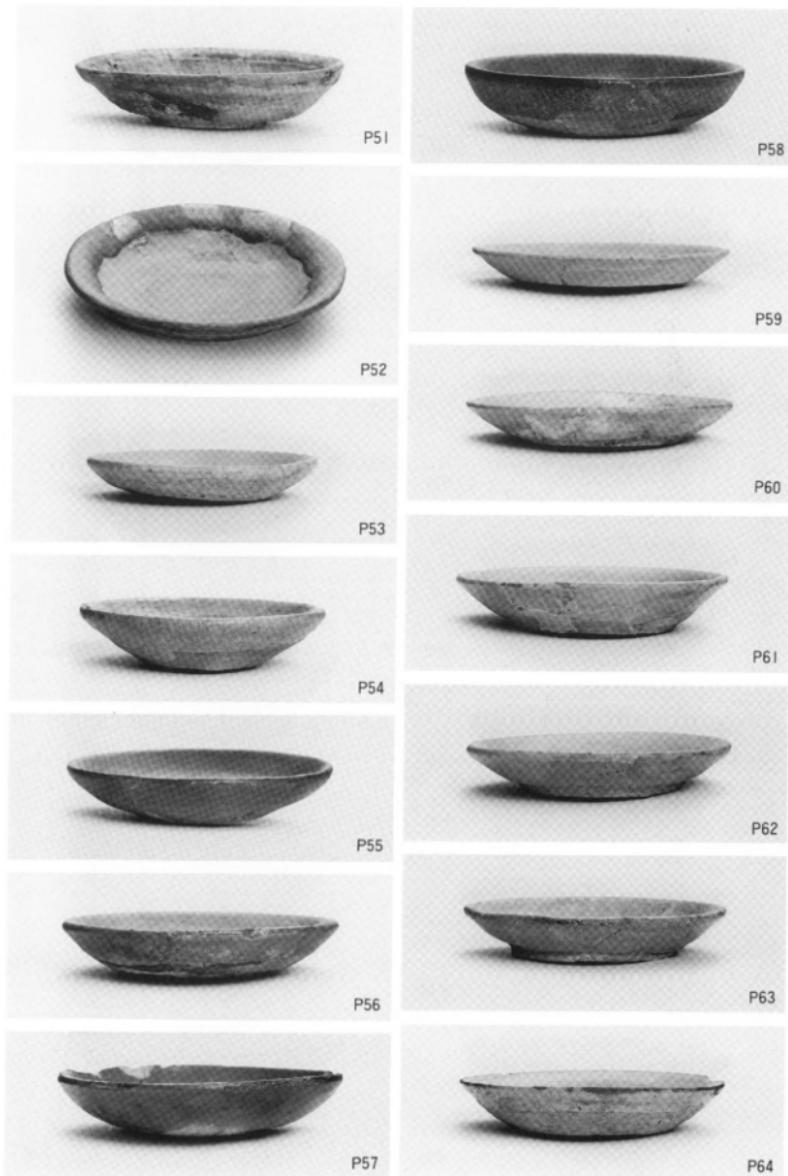
P33



P39

出土土器(3)

图版24



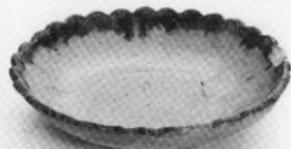
出土陶磁器(1)



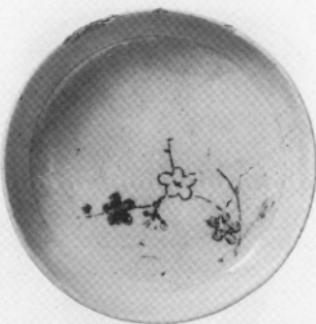
P65



P66



P67



P71



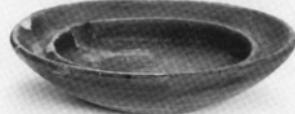
P68



P72



P69



P73



P70



P74



P77



P82



P78



P83



P79



P84



P80



P81



P88



P89



P95



P90



P98



P99



P93



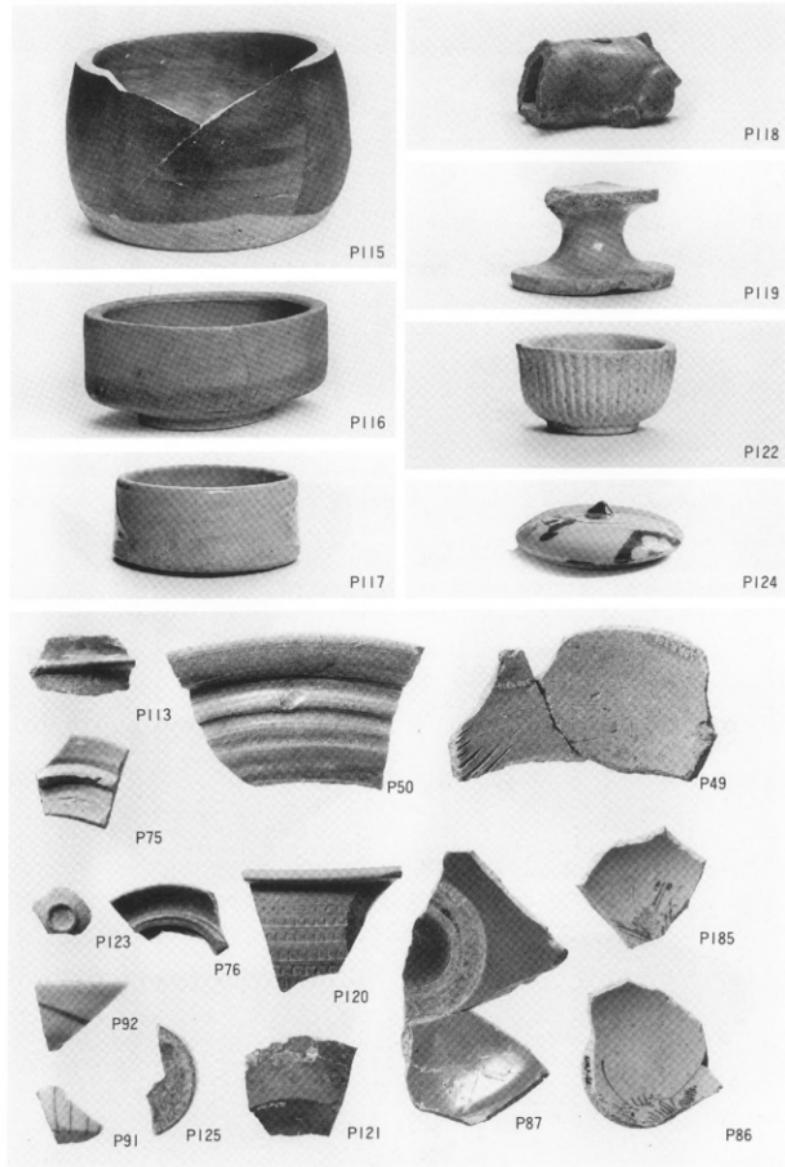
P101



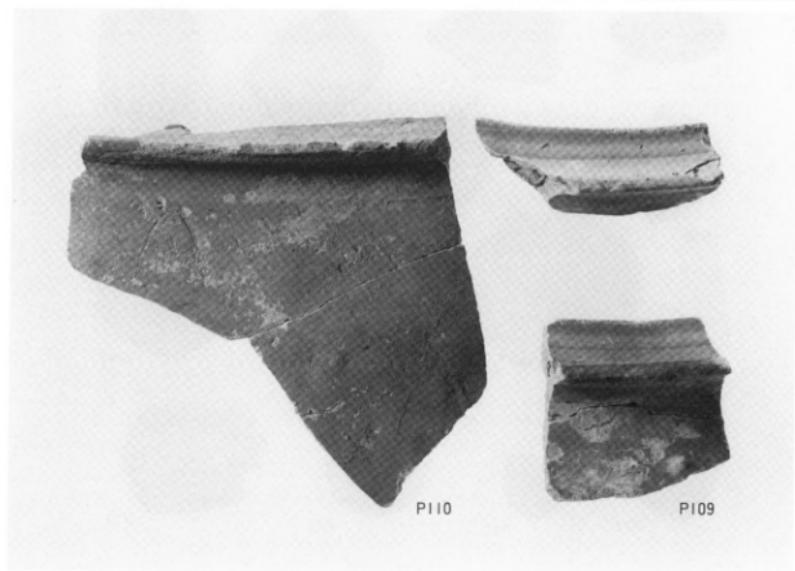
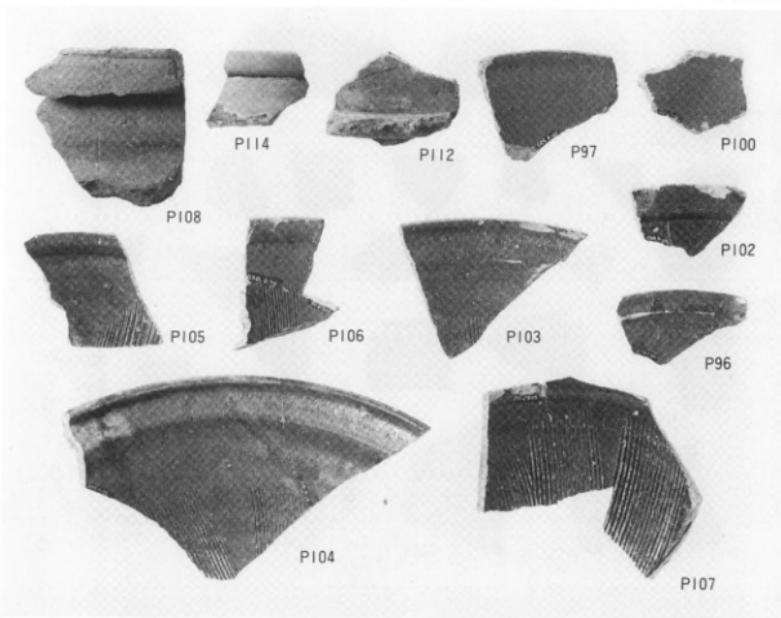
P94



P111

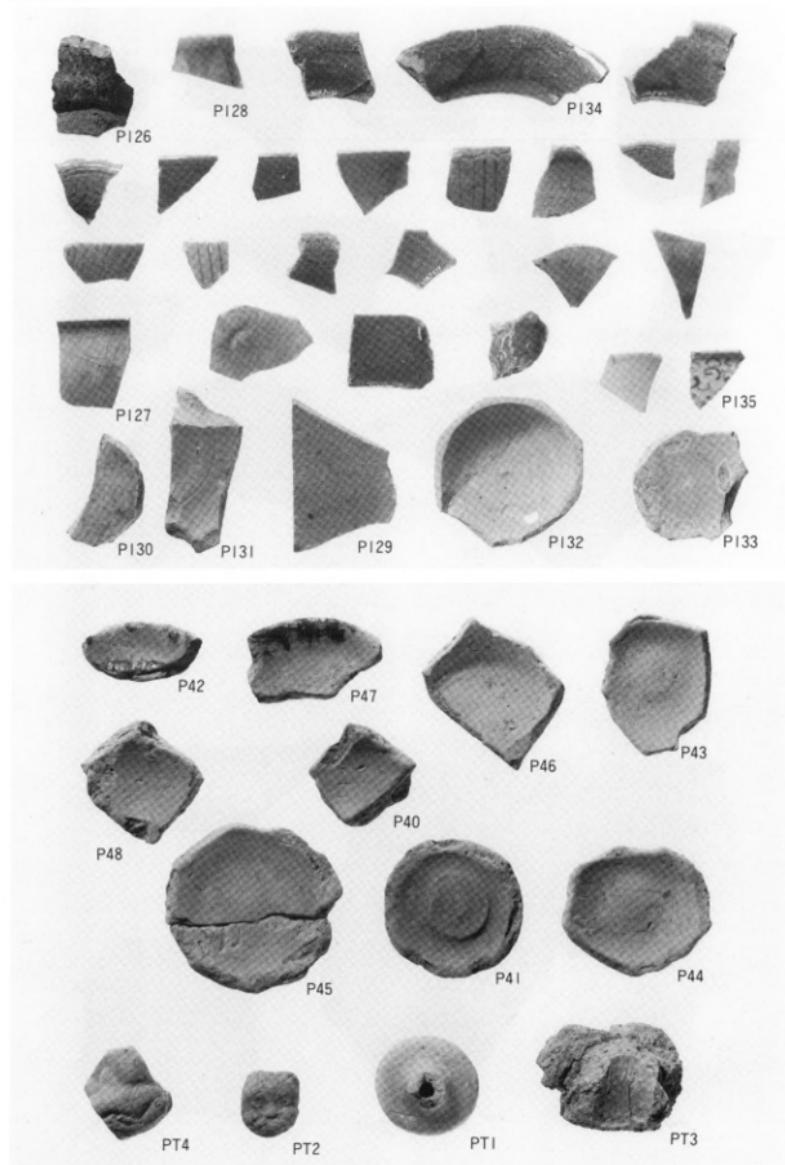


出土陶磁器(5)

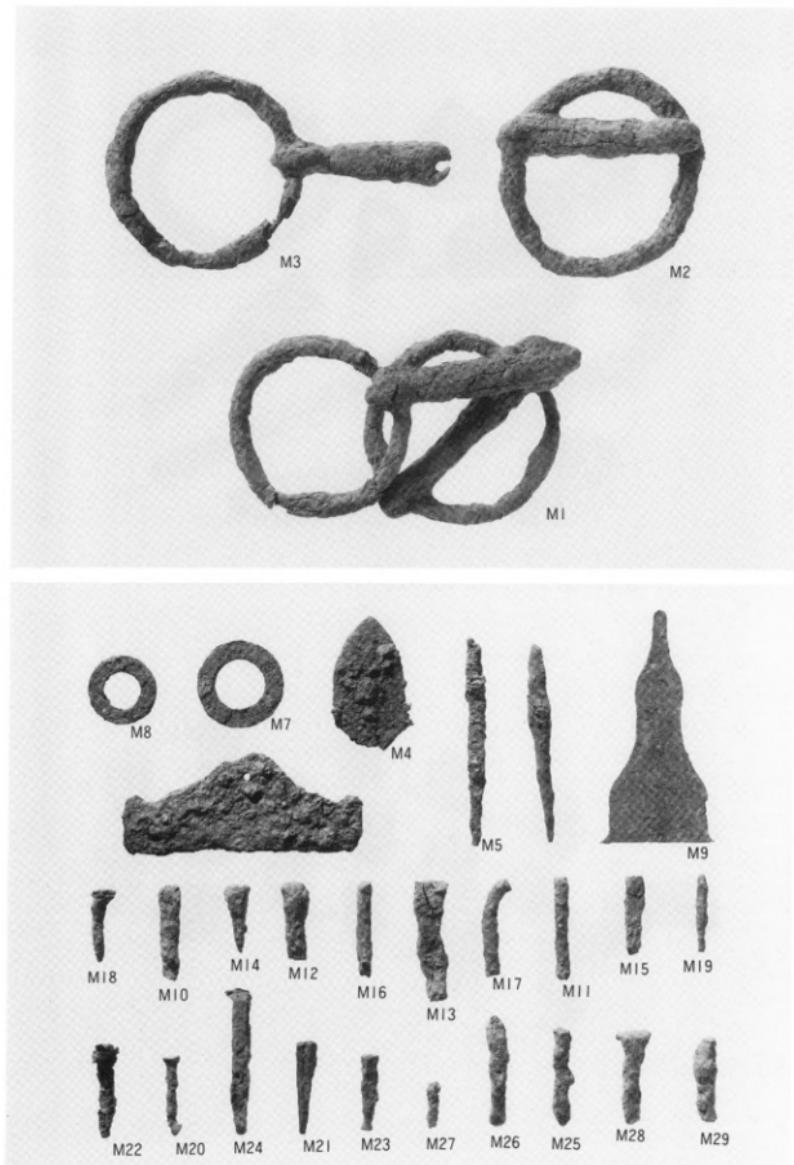


出土陶磁器(6)

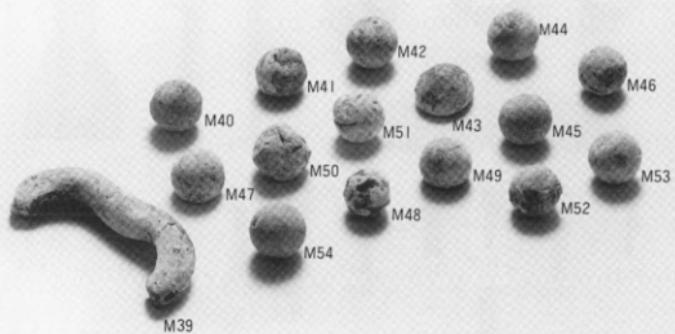
図版30



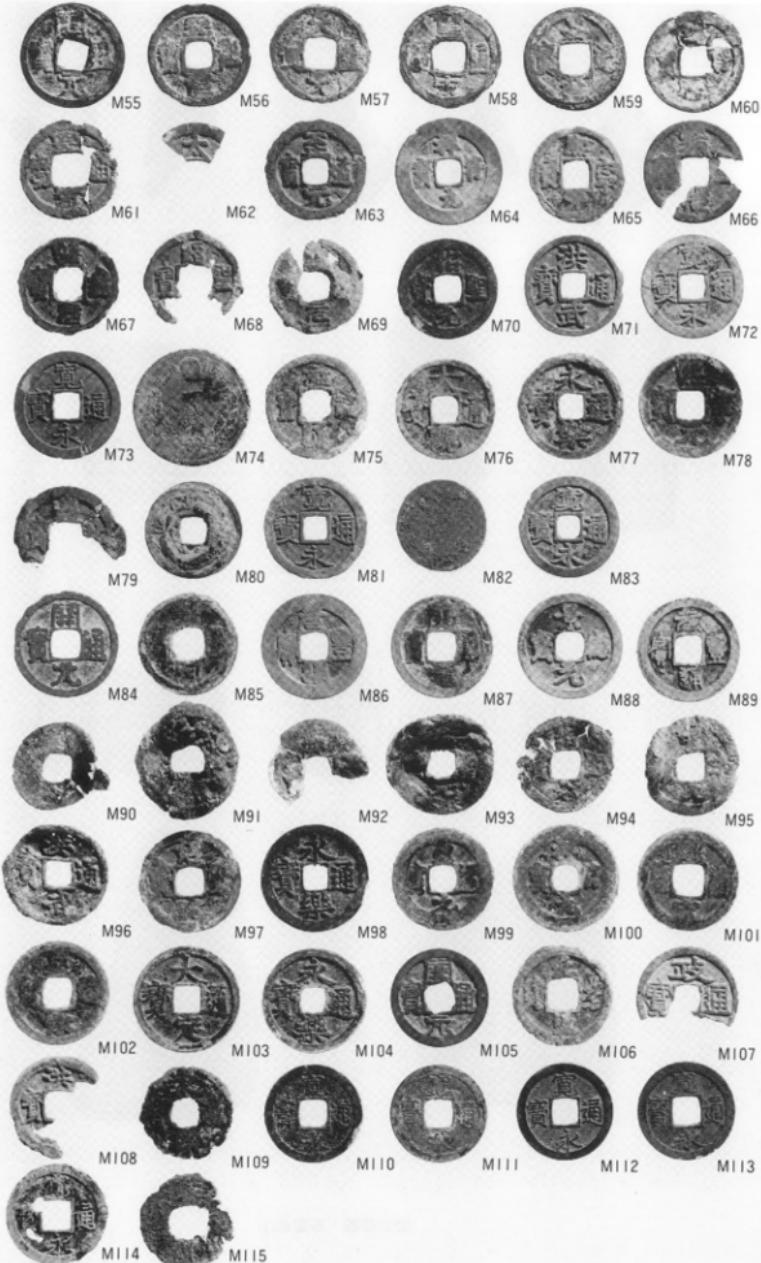
出土陶磁器(7) 出土土器(4) 出土土製品



出土鉄製品

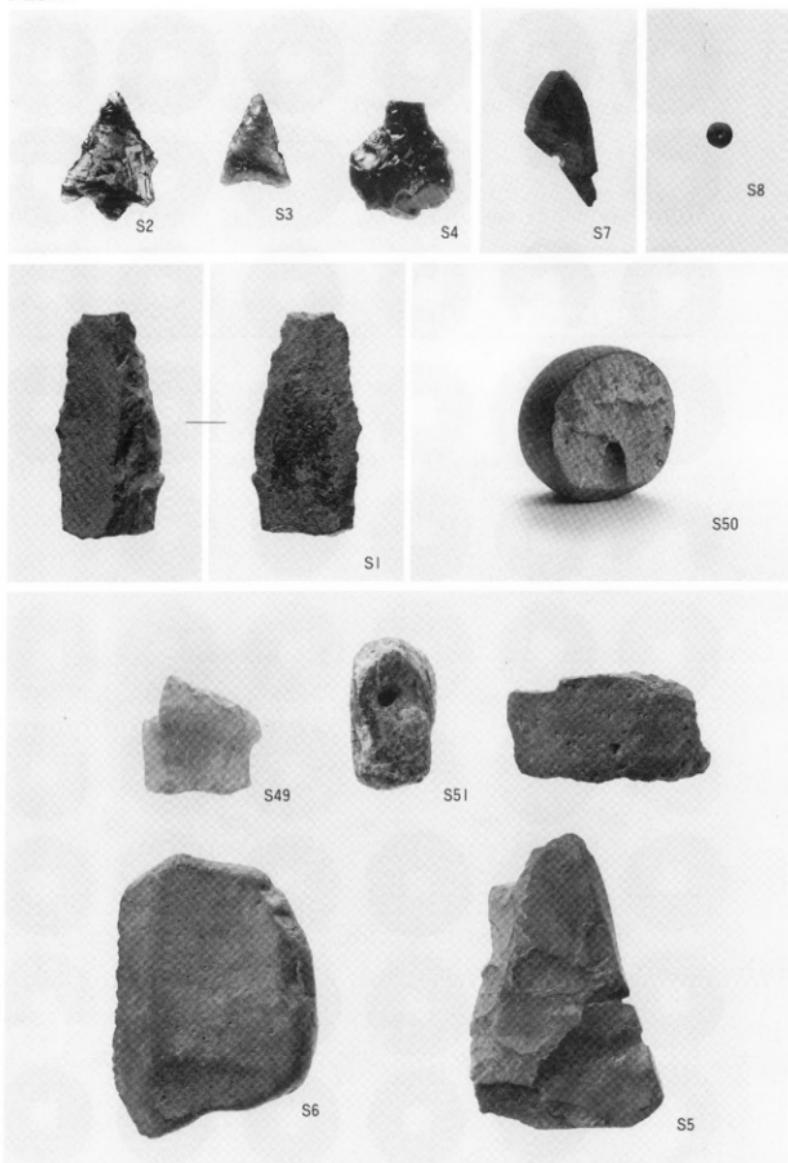


出土銅製品・鉛製品

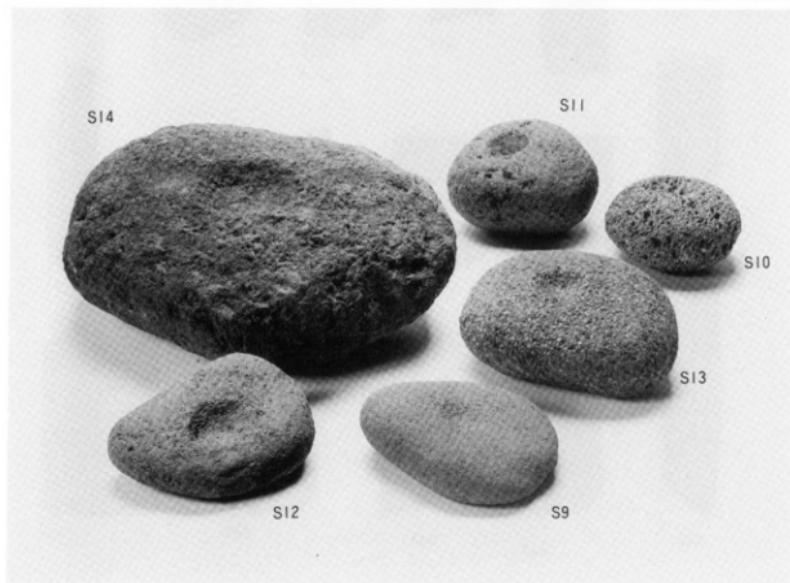
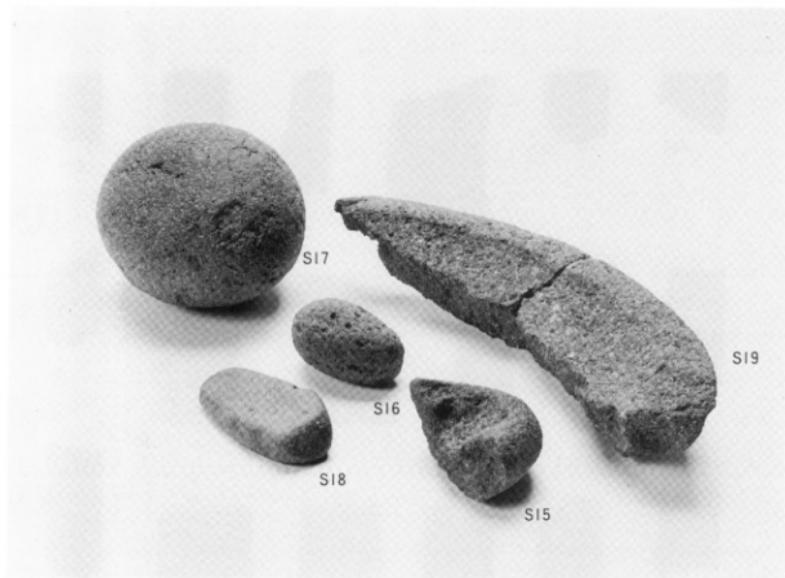


出土錢貨

図版34

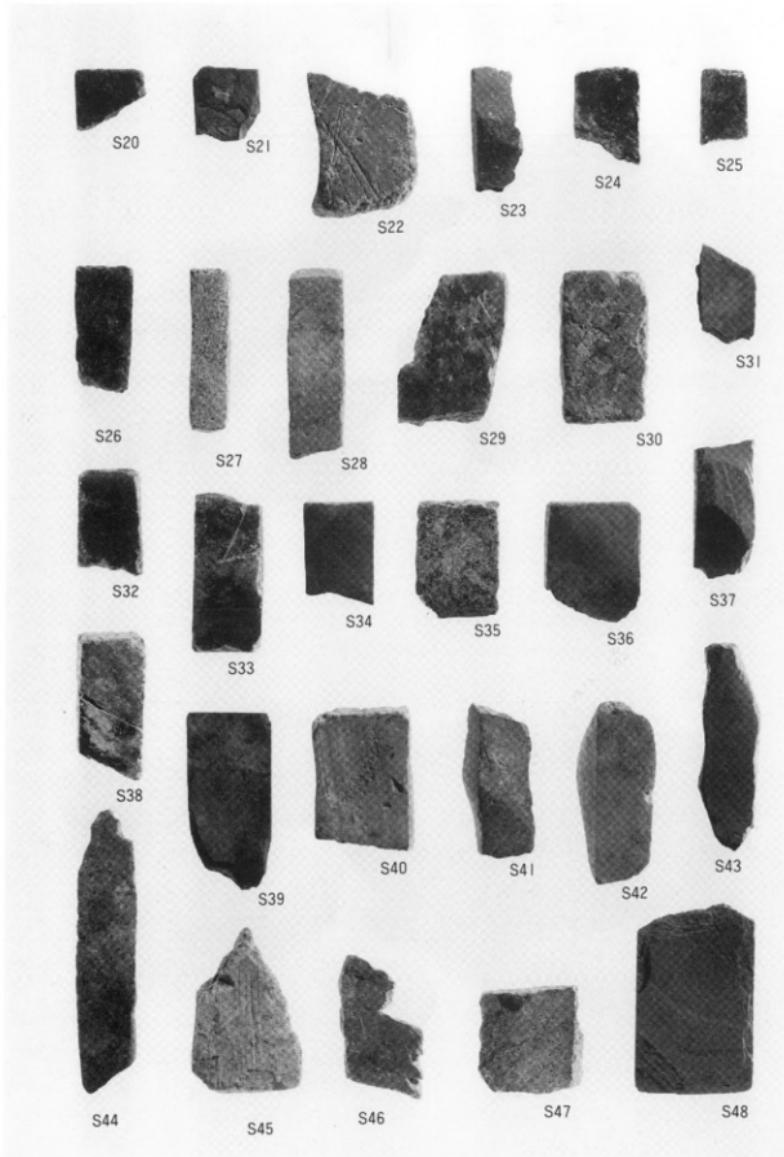


出土石器・石製品(1)

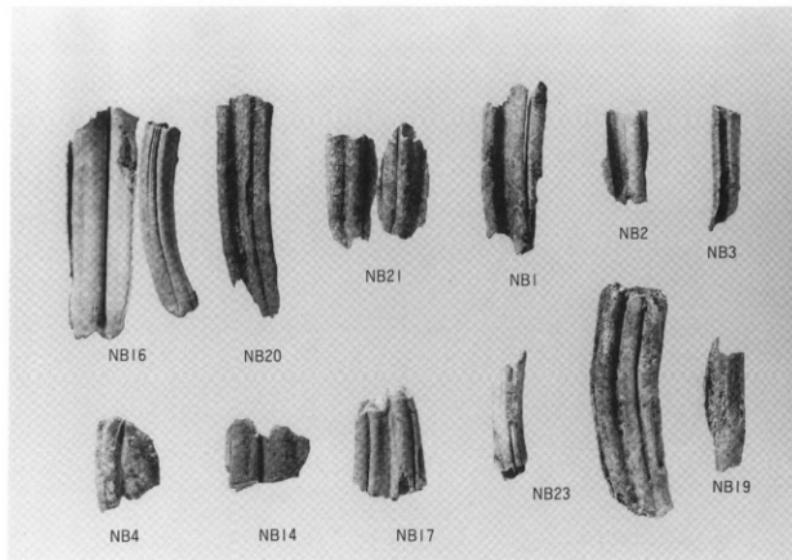


出土石器・石製品(2)

図版36

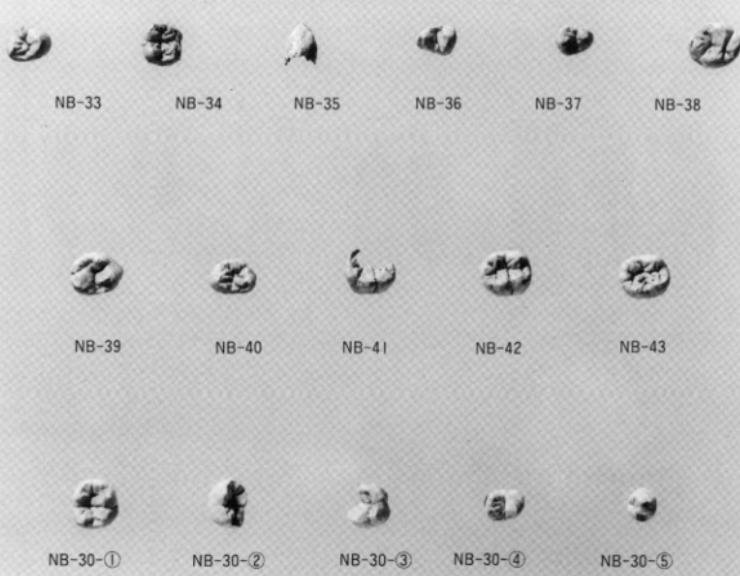
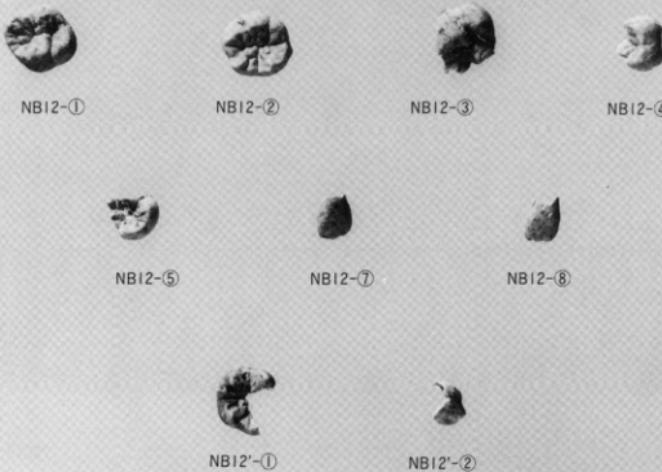


出土石器・石製品(3)



出土動物遺存体

図版38



出土歯牙

調査に御助言・御協力をいただいた方々（敬称略）

静岡県教育委員会 関野 哲夫 中鉢 賢治 長泉町教育委員会 平川 昭夫 廣瀬 高文
豊田町教育委員会 清水 尚 沼津市文化財センター 上野 尚美
愛知県陶磁資料館 井上喜久夫 潤沢市埋蔵文化財センター 藤澤 良祐 岡本 直久

発掘調査参加者

岩田 義和 萩山市太郎 川口 勇 岸本 義明 栗木 崇 斎藤 聰 杉山 貴裕
杉山 佳久 鈴木 八郎 濑戸 茂 高木 龍雄 高山 亀治 土屋 福宣 三浦 勇一
水口 祐幸 三輪 建吾 渡邊喜久夫 渡邊 美行
天野由紀子 石井 明良 石井千栄子 石井 美香 岡林八重子 関沼美代子 柴田英佐子
杉山よ志恵 清水 光子 高橋 敏子 高橋 教江 永坂 松江 中村 里枝 中村むつみ
原 麗子 原 裕子 横島 幸子 吉田こはる 吉満みさ江 渡邊 三貴

整理作業参加者

栗木 崇 夏目不比等 跡部麻由子 石井千栄子 海野ひとみ 笠井 昌枝 河西 淑乃
神田 綾美 劍持 富枝 柴田美佐子 清水 光子 鈴木 里枝 鈴木 博美 鈴木由美子
高橋 教江 早瀬 容子 原 裕子 望月 節子 吉田こはる

報告書抄録

ふりがな	おおだいらいせき						
書名	大平遺跡						
副書名	平成7・8年度東駿河湾環状道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告書						
シリーズ番号	第98集						
編著者名	鈴木 謙						
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所						
所在地	〒422-8002 静岡県静岡市谷田23-20 TEL054-262-4261						
発行年月日	西暦1998年3月31日						
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 度分秒	東経 度分秒	調査期間	調査面積	調査原因
おおだいら 大平遺跡	しづおかけん 静岡県 すんとうぐん 駿東郡 ながいづみちょう 長泉町 みなみいっしき 南一色	22342	35度 8分 48秒	138度 53分 58秒	1995年 11月1日 ～ 1996年 12月5日	10,700m ²	東駿河湾環状道路 建設に伴う事前調査
所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項
大平遺跡	墓	近世	石敷遺構 石積み遺構 集石墓 土坑・小穴 溝状遺構	瀬戸美濃系陶磁器・常滑系陶器・ 肥前系陶磁器・志戸呂系陶器・櫛・ 釘・キセル・錢貨・火打ち金・ 火打ち石			
			中世	集石墓 火葬施設 土坑・小穴 溝状遺構	かわらけ・羽釜・瓦質土器・古瀬戸陶器・中国製陶磁器・鉄砲玉・ 錢貨		

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第98集

大平遺跡

平成7・8年度東駿河湾環状道路工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

1998年3月31日

編集発行 財団法人
静岡県埋蔵文化財調査研究所

印刷所 図書印刷株式会社
静岡県沼津市大塚15

12

13

14

15

16

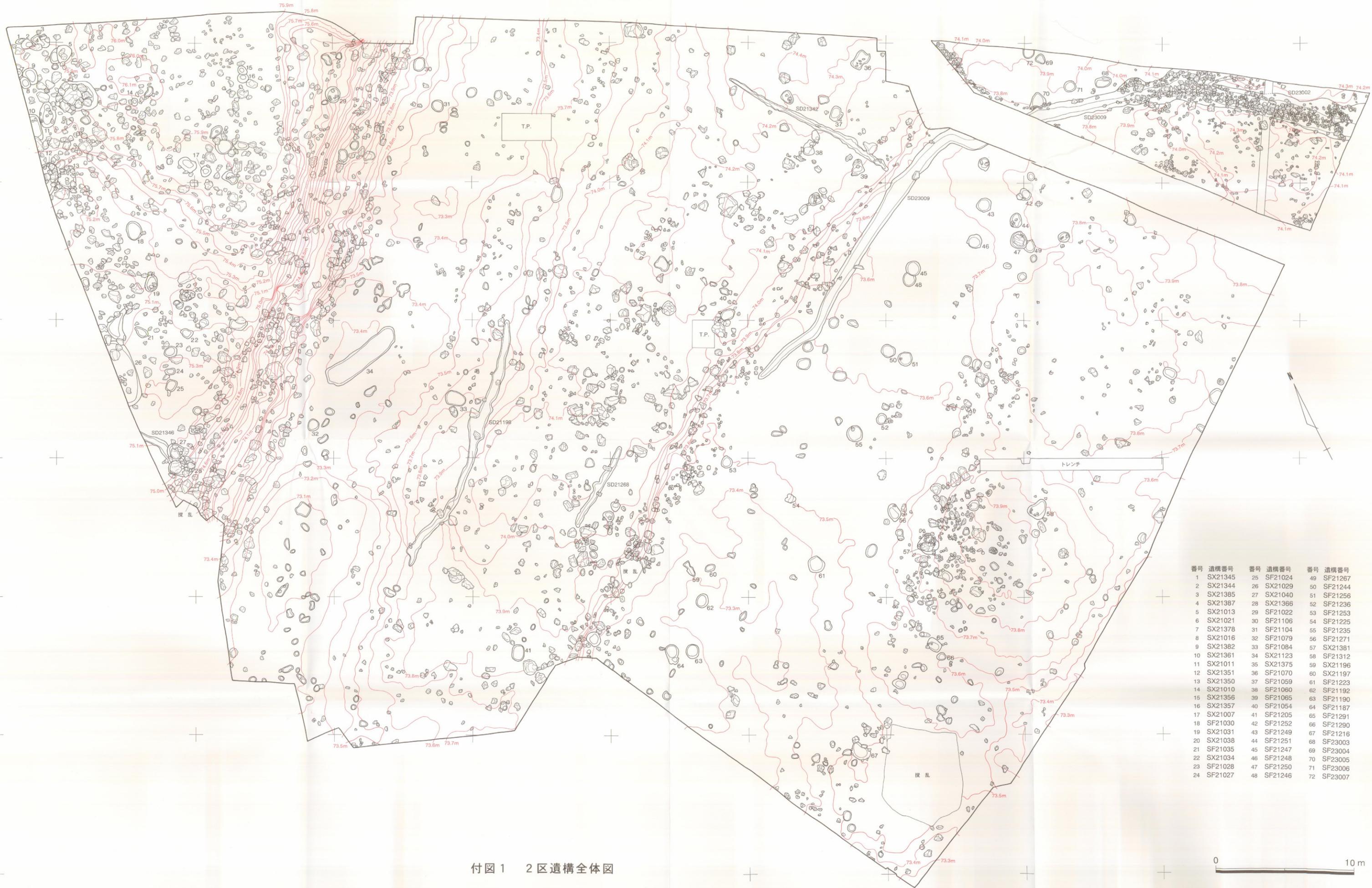
17

18

19

20

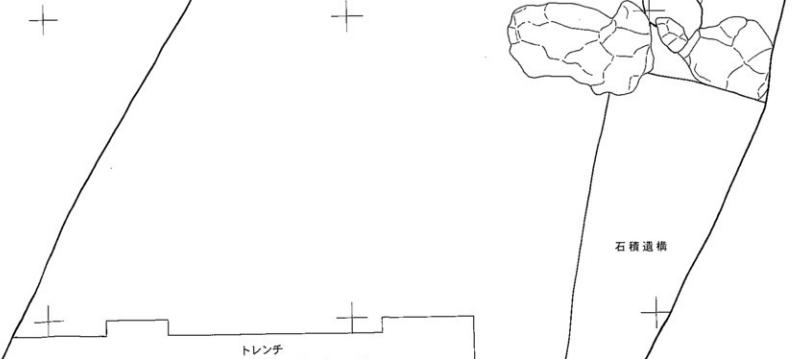
21



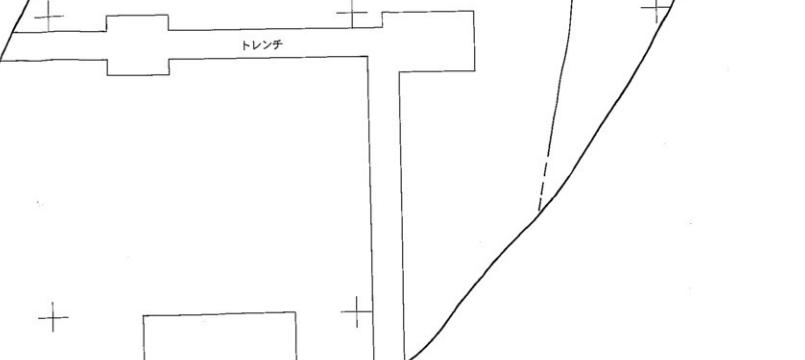
D



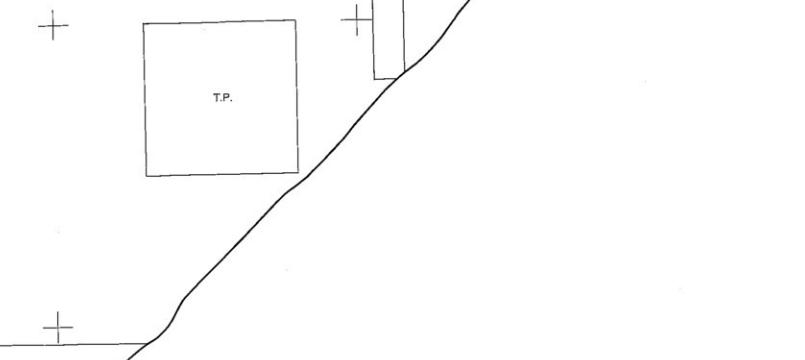
E



F



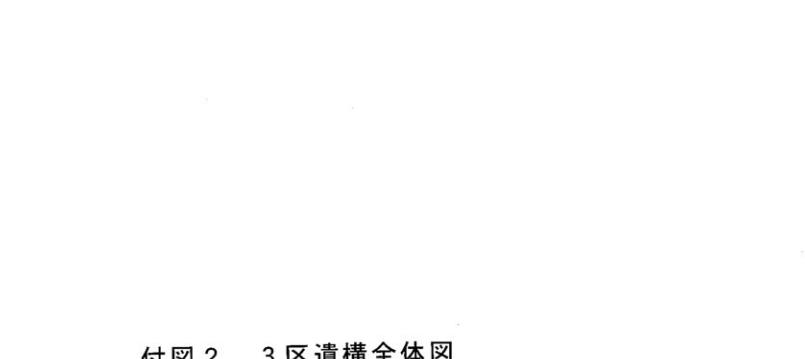
G



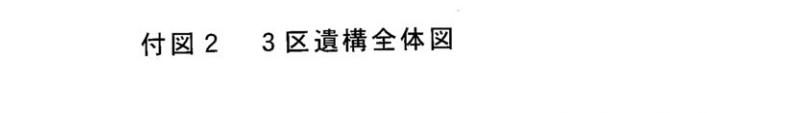
H



I



J



付図2 3区遺構全体図

